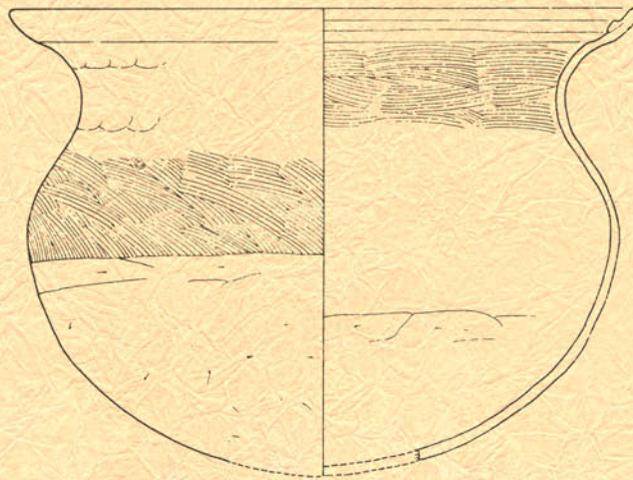


近畿自動車道(勢和～伊勢)

埋蔵文化財発掘調査報告

—— 第 3 分 冊 ——

楠ノ木遺跡



1991・10

三重県教育委員会
三重県埋蔵文化財センター

近畿自動車道(勢和～伊勢)

埋蔵文化財発掘調査報告

————— 第 3 分 冊 —————



南方上空から



西方上空から

序

近畿自動車道関・伊勢線にかかる現地の埋蔵文化財発掘調査は第8次区間（久居～勢和）が昭和63年度に終了し、その年度後半から第9次区間（勢和～伊勢）が開始され現在に至っております。第9次区間は多気町・玉城町・伊勢市に所在する30遺跡の調査を対象とし、昭和63年度から調査を行ってまいりました。

第9次区間については平成5年に予定されている伊勢神宮式年遷宮、及び翌年の祝祭博開催を臨んだ県行政の大幹に関連した道路建設でもあり、当事業にかかる埋蔵文化財の保護とその円滑な調整については鋭意努力いたしている処であります。

第9次区間の路線となる前述の市町が所在する地域は、古来から伊勢神宮との関連が深いことが分かっております。この地域に考古学的なメスを入れることは、当該地域の歴史を考えていくうえで、重要な資料を提供することとなりましょう。またこの調査によって得た資料を基に、当該地域の歴史を考えていくことも発掘調査を行った我々の大きな責務のひとつであり、ここに公刊する楠ノ木遺跡についても同様であります。開発と文化財の保存との接点を学術的な方面に求めることも重要なことといえましょう。

調査に際しては日本道路公団、三重県土地開発公社、多気町・玉城町・伊勢市の各関係機関、県土木部近畿道対策室、及び地元各位の多大なるご理解とご協力を得ることができました。文末となりましたが、ここに心からの御礼を申し上げます。

1991年10月

三重県埋蔵文化財センター

所 長 中 林 昭 一

例 言

1. 本書は、平成3年度に三重県教育委員会が日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した、近畿自動車道関・伊勢線第9次区間（勢和～伊勢）建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査（整理・報告書作成業務）にかかる報告書（第1～5分冊）のうち、楠ノ木遺跡（第3分冊）の報告書である。
2. 当遺跡は度会郡玉城町勝田字楠ノ木・下山・ヤケ山・二ノ谷・三ノ谷を中心として所在し、発掘調査は平成元年5月から同年11月にかけて実施した。調査にかかる費用は日本道路公団の全額負担による。
3. 調査は次の体制で行った。

調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター

(平成元年度)

(平成3年度)

主幹兼調査第2課長 山澤義貴・主査 新田 洋
主事 田村陽一・主事 河北秀実
主事 小坂宜広・主事 山崎恒哉
主事 江尻 健・主事 伊藤裕偉
主事 角谷泰弘（伊勢市教育委員会から派遣）
主事 稲本賢治（多気町教育委員会から派遣）
主事 前川嘉宏（玉城町教育委員会から派遣）

調査第2課長 新田 洋
主事 河瀬信幸・主事 河北秀実
主事 角谷泰弘（伊勢市教育委員会から派遣）
主事 稲本賢治（多気町教育委員会から派遣）
主事 前川嘉宏（玉城町教育委員会から派遣）

(室内整理員)

(室内整理員)

谷久保美知代 采野妙子 山分孝子 吉村道子
白石みよ子 反町瑩子 竹内由美 田中智子 反町有子

谷久保美知代 采野妙子 反町瑩子 田中ゆかり

現地調査については第1次調査を田村陽一が、第2次調査を伊藤裕偉が担当した。

4. 本書作成にあたっては菅原正明（和歌山県文化財センター）、西山要一（奈良大学）、千葉豊（京都大学埋蔵文化財研究センター）、中野晴久（常滑市歴史民俗資料館）、奥義次（三重県立松阪高等学校）、広瀬和久・原正之（三重県農業技術センター）の各氏をはじめ多くの方々の助言を頂いた。
5. 本書の執筆者は目次に示した。航空写真以外の写真撮影および本書の編集は伊藤裕偉が担当した。
6. 当遺跡については、すでに『きんき道調査ニュース』No.24（1989）、および『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報』VI（1990）を公表しているが、当報告をもって正式報告とする。
7. 本書で報告した記録および出土遺物は三重県埋蔵文化財センターにて保管している。
8. 当遺跡群の位置は国土座標第IV系に属している。挿図の方位は全て座標北で示している。真北は座標北のN0°21′W、磁北は座標北のN6°41′Wである。
9. 当報告書での用語は以下のように統一した。
どこう……………用語としては「土壙」あるいは「土坑」があるが、「土坑」とした。なお、墓と考えられるものについては「墓壙」を用いた。
つ き……………用語としては「坏」があるが、「杯」とした。
わ ん……………用語としては「碗」あるいは「椀」があるが、「椀」とした。
尺 ……………一尺は30.3cmとして考えた。
10. 遺構表現については、切り合い関係を重視した表現を用いている。したがって重複する遺構間の相対的な深さを示す表現は、原則的には用いていない。

11. スキャニングによるデータ取り込みのため、若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

本文目次

I. 前 言	1
1. 近畿自動車道第9次区間の調査経過	新 田 1
2. 楠ノ木遺跡の調査経過と調査方法	伊 藤 4
II. 地理的・歴史的環境—問題の所在	伊 藤 9
III. 調査の成果—層位と遺構	伊 藤 14
1. A地区の層位と遺構	14
2. B地区の層位と遺構	37
3. C地区の層位と遺構	48
IV. 調査の成果—出土遺物	伊 藤 53
1. 中世集落形成以前の遺物	53
2. 中世の遺物	53
3. 近世以降の遺物	59
4. 出土遺物の観察	76
V. 調査試料の化学分析	116
1. 分析の目的	伊 藤 116
2. 土壌分析結果報告	三重県農業技術センター 117
3. 鉄滓に関する分析調査	パリノ・サーヴェイ株式会社 119
4. 中・近世土師器胎土分析調査	パリノ・サーヴェイ株式会社 123
VI. 調査のまとめと検討	伊 藤 131

図 版 目 次

- P L. 1 A地区全景
- P L. 2 A・B地区航空写真
- P L. 3 A地区土層(1)
- P L. 4 A地区土層(2)
- P L. 5 A地区建物跡集中部分(1)
- P L. 6 A地区建物跡集中部分(2)
- P L. 7 A地区掘立柱建物 1
- P L. 8 A地区掘立柱建物 2・3
- P L. 9 A地区掘立柱建物 2・4・9 および土坑 S K 7
- P L. 10 A地区土坑 S K 17
- P L. 11 A地区土坑 S K 20・38
- P L. 12 A地区土坑 S K 36・37付近
- P L. 13 A地区土坑 S K 36
- P L. 14 A地区土坑 S K 36・37
- P L. 15 A地区土坑 S X 9・S K 63
- P L. 16 A地区土坑 S K 61およびその周辺
- P L. 17 A地区井戸 S E 2
- P L. 18 A地区溝 S D 1・2・3
- P L. 19 B地区調査前および作業風景
- P L. 20 B地区全景
- P L. 21 B地区土層
- P L. 22 B地区近景
- P L. 23 B地区掘立柱建物 1・2
- P L. 24 B地区中世墓 S K 25
- P L. 25 B地区中世墓 S K 33・43・44
- P L. 26 B地区中世墓 S X 3
- P L. 27 B地区落ち込み S K 1、土坑 S K 2・32
- P L. 28 B地区土坑 S K 31および井戸 S K 30
- P L. 29 C地区調査前全景
- P L. 30 C地区全景
- P L. 31 C地区土層
- P L. 32 C地区掘立柱建物 1・2 付近
- P L. 33 C地区焼土坑 S K 11・土坑 S K 8
- P L. 34 C地区土坑 S K 4・13
- P L. 35 C地区井戸 S K 7・溝 S D 5
- P L. 36 出土縄文土器
- P L. 37 出土石器・建物根石
- P L. 38 出土鉄・銅製品
- P L. 39 出土鉄製品
- P L. 40 出土鞆の羽口・貨幣
- P L. 41 各地区出土土器 土師器類
- P L. 42 各地区出土土器 土師器・陶器類
- P L. 43 A地区出土土器(1)
- P L. 44 A地区出土土器(2)
- P L. 45 A地区出土土器(3)
- P L. 46 A地区出土土器(4)
- P L. 47 A地区出土土器(5)
- P L. 48 A地区出土土器(6)
- P L. 49 A地区出土土器(7)
- P L. 50 A地区出土土器(8)
- P L. 51 A地区出土土器(9)
- P L. 52 A地区出土土器(10)
- P L. 53 A地区出土土器(11)・各地区出土羽釜
- P L. 54 A地区出土土器(12)
- P L. 55 B地区出土土器(1)
- P L. 56 B地区出土土器(2)
- P L. 57 B地区出土土器(3)
- P L. 58 B地区出土土器(4)
- P L. 59 B地区出土土器(5)
- P L. 60 B地区出土土器(6)
- P L. 61 C地区出土土器(1)
- P L. 62 C地区出土土器(2)
- P L. 63 C地区出土土器(3)

挿 図 目 次

- fig. 1 近畿自動車道第9次区間（勢和～伊勢）
内遺跡遺跡位置図
- fig. 2 事業地および第1次・第2次調査区位置
図
- fig. 3 国土座標第IV系と調査区の関係
- fig. 4 本線部分小地区設定図
- fig. 5 遺跡位置図
- fig. 6 19世紀末頃の勝田地区周辺地形図
- fig. 7 調査区周辺採集遺物
- fig. 8 調査区周辺の現小字割り図
- fig. 9 A地区平面図
- fig. 10 A地区東・北壁土層断面図
- fig. 11 A地区建物跡集中部分平面図
- fig. 12 A地区建物1付近平面・土層断面図
- fig. 13 A地区建物2・3付近平面図
- fig. 14 A地区建物4平面図
- fig. 15 A地区建物5・6平面図
- fig. 16 A地区土坑SK7他平面・土層断面図
- fig. 17 A地区建物8付近平面図
- fig. 18 A地区建物9付近平面図
- fig. 19 A地区建物10平面図
- fig. 20 A地区土坑SK5土層断面図
- fig. 21 A地区土坑SK17（w・e）平面・土層
断面図
- fig. 22 A地区土坑SK20平面・土層断面図
- fig. 23 A地区土坑SK36平面・土層断面図
- fig. 24 A地区土坑SK37他土層断面図
- fig. 25 A地区拡張部土坑群・ピット集中部分・
建物13平面図
- fig. 26 A地区土坑SK63平面・土層断面図
- fig. 27 A地区井戸SE2・SK21土層断面図
- fig. 28 A地区井戸SE1・SK3・22土層断面
図
- fig. 29 A地区土坑SK61付近平面および遺物出
土地点位置図
- fig. 30 A地区近世以降の遺構平面および等高線
図
- fig. 31 B地区平面図
- fig. 32 B地区西・南・北壁土層断面図
- fig. 33 B地区建物1平面・断面図
- fig. 34 B地区建物2付近平面・断面図
- fig. 35 B地区建物3・4付近平面・断面図
- fig. 36 B地区中世墓SX3平面・立面図
- fig. 37 B地区中世墓SK4・土坑SK2平面・
立面図
- fig. 38 B地区中世墓SK25・SK33・43・44平
面・立面・土層断面図
- fig. 39 B地区落ち込みSK1土器・礫群出土状
況平面図
- fig. 40 B地区土坑SK31土層断面図
- fig. 41 B地区土坑SK32土器出土状況平面図
- fig. 42 B地区井戸SK30断面図
- fig. 43 C地区平面図
- fig. 44 C地区西・北壁土
断面図
- fig. 45 C地区建物1・2付近平面・断面図
- fig. 46 C地区焼土坑SK11平面・断面図
- fig. 47 C地区井戸SK7土層断面図
- fig. 48 出土縄文・弥生・奈良時代土器および石
器
- fig. 49 出土金属製品・鞆羽口実測図および貨幣
拓影
- fig. 50 出土砥石実側図
- fig. 51 楠ノ木遺跡出土羽釜形土器分類図
- fig. 52 A地区土坑SK20・65他出土土器
- fig. 53 A地区井戸SE1・土坑SK17他出土土
器
- fig. 54 A地区土坑SK5・7他出土土器
- fig. 55 A地区土坑SK55他出土土器
- fig. 56 A地区土坑SK37・SX9他出土土器
- fig. 57 A地区井戸SK3・SE2他出土土器
- fig. 58 A地区溝SD1・2・3出土土器
- fig. 59 A地区掘立柱建物・近世以降出土土器お
よびA・B地区出土土器拓影

- fig. 60 B地区落ち込みS K 1、土坑S K 18他出土土器
- fig. 61 B地区中世墓S K 25・43他出土土器
- fig. 62 B地区土坑S K 5他出土土器
- fig. 63 B地区井戸S E 30溝S D 2・3他出土土器
- fig. 64 C地区土坑S K 10・11・12他出土土器
- fig. 65 C地区土坑S K 4・5他出土土器

- fig. 66 C地区井戸S K 7他出土土器
- fig. 67 土壤サンプル採集地点
- fig. 68 胎土分析試料実測図(1) (楠ノ木遺跡を除く)
- fig. 69 胎土分析試料実測図(2) (楠ノ木遺跡を除く)
- fig. 70 A地区I・II期主要遺構配置図
- fig. 71 A地区III期主要遺構配置図

写真目次

- pho. 1 第1次調査風景
- pho. 2 A地点遠景
- pho. 3 鉾滓の電子顕微鏡写真(1)
- pho. 4 鉾滓の電子顕微鏡写真(2)
- pho. 5 土器胎土中の重鉍物顕微鏡写真

表目次

- tab. 1 近畿自動車道第9次区間(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査計画
- tab. 2 A地区遺構一覧表(1)
- tab. 3 A地区遺構一覧表(2)
- tab. 4 A地区掘立柱建物一覧表
- tab. 5 B地区遺構一覧表
- tab. 6 B地区掘立柱建物一覧表
- tab. 7 C地区遺構一覧表
- tab. 8 C地区掘立柱建物一覧表
- tab. 9 石製品類観察表
- tab. 10 金属製品類観察表
- tab. 11 出土土器観察表
- tab. 12 土壤分析結果表
- tab. 13 鉄滓中の繊維の観察結果
- tab. 14 鉄滓中の繊維の同定結果
- tab. 15 鉄滓の成分定性分析結果表
- tab. 16 胎土分析試料一覧表
- tab. 17 土器胎土重鉍物組成
- tab. 18 土器胎土重鉍物組成ダイアグラム
- tab. 19 土器胎土重鉍物組成ダイアグラム(時期別)

I. 前 言

1. 近畿自動車道第9次区間の調査経過

近畿自動車道関・伊勢線（伊勢自動車道）の第9次区間（勢和～伊勢）の建設計画については昭和47年に基本計画、57年に整備計画が、そして昭和60年2月に建設大臣から日本道路公団に施行命令が出されている。また、翌月の3月には実施計画認可と路線発表がなされている。

この第9区間は第8次区間（久居～勢和）の延長路線として、勢和、多気インターチェンジから仮称伊勢インターチェンジまでの延長21.5kmの建設計画であり、行政区画としては、勢和村、多気町、玉城町、伊勢市をほぼ東西に横断する形をとっている。

そして、この路線は、三重県の中・南伊勢と近畿、及び中部経済圏を結ぶ幹線道路として、一般国道23・42号の交通緩和とともに、伊勢湾岸と内陸部の産業、あるいは伊勢志摩・紀州への観光ルートとしての大きな使命をもつものといわれている。

そのうち、第8次区間（久居～勢和）については、平成2年12月に供用開始されている。

さて、この第9次区間（勢和～伊勢）建設にかかる埋蔵文化財の保護、調査協議については昭和50年段階に建設省名阪国道工事事務所、県道路建設課と県教育委員会文化課との協議と現地立会い調査という形で開始された。また、事業地内にかかる埋蔵文化財の分布調査については昭和53・55・56年度の3次にわたって県教育委員会が県文化財調査員等の協力を得て実施し、昭和56年3月14日付、教文第429号で道路建設課あてに「近畿自動車道伊勢線関係遺跡分布調査結果報告について」として文書通知をし

ている。その後については、第8次区間（久居～勢和）の埋蔵文化財発掘調査の体制と諸準備に追われた形となり、昭和59年度末には第8次区間の現地発掘調査を実施するに至った。そして、この8次区間の現地発掘調査には59年度を皮きり開始され、昭和63年度前半までの足かけ5年余の期間が費やされた。

さて、第9次区間の遺跡取り扱いについては、昭和61年度になって具体的に浮上し、試掘計画等について、日本道路公団松阪工事事務所と調整・協議するに至った。また、62年度初めには再度、第9次区間（勢和～伊勢）建設予定地についての遺跡確認と分布調査を実施した。この段階で公団あてに提示した遺跡は計26件、面積にして114,200㎡である。

なお、この第9次区間については、その後の新発見等の協議を経て、玉城町で1件（泉貢窯跡）、多気町で1件（佐奈水銀鉱山跡）、伊勢市内で2件（大谷古墳、古市・中之地蔵町遺跡）の遺跡が追加されている。

以上のような経過を経て、第9次区間の現地における埋蔵文化財発掘調査は昭和63年度の後半期から開始することとなった（tab.1 参照）。

また、最後となりますが、調査の円滑推進にあたっては、日本道路公団松阪工事事務所、県土木部近畿道対策室、伊勢市近畿道対策室他、伊勢市・多気町・玉城町の各教育委員会に、現地にあつては各地元自治会長をはじめ、多くの方々のご理解とご援助を得ました。加えて、発掘業務については三重県土地開発公社のご協力をいただきました。文末ながらここに記して厚くお礼申し上げます。（新田 洋）

№	遺跡名	所在地	確認面積 (㎡)	昭和63年度		平成元年度		平成2年度		平成3年度		合計
				試掘	本調査	試掘	本調査	試掘	本調査	試掘	本調査	
1	王子谷遺跡	多気町前村字王子谷	1,000	48	144							192
2	桃谷古墳	〃 前村字桃谷、五桂字ツツジ	100		27							27
3	ツツジ古墳	〃 五桂字ツツジ	100		20							20
4	牛ハサマA遺跡	〃 野中字牛ハサマ・字定越	1,500	304		3,000						3,304
5	牛ハサマB遺跡	〃 野中字牛ハサマ・字ナルコ	4,700	336	(1,200)	5,500						5,836
6	ヒジヤ口遺跡	玉城町原字ヒジヤ口・国東河内	5,600	288								288
7	のせんじ遺跡	〃 積良字のせんじ・泉貢	1,000	96								96
8	浦の内遺跡	〃 積良字浦の内	2,800	192	(2,000)	2,500						2,692
9	上ノ垣内遺跡	〃 山神字上ノ垣内・坂ノ辻	3,400	196								196
10	富ヶ城跡	〃 山神字西老谷・老谷	2,000					286	2,180			2,466
11	山神東城跡	〃 山神字東老谷	2,700					441	3,922			4,363
12	里山古墳	〃 山神字里山・東岡谷・仲山	100		30							30
13	桶ノ木遺跡	〃 勝田字桶ノ木・二ノ谷・ヤケ山他	39,000		2,032	6,890						8,922
14	矢倉前古墳	〃 宮古字細谷	100		20							20
15	敷山遺跡	〃 岩出字塚名・左郡	10,000	587		11,500						12,087
16	宮地遺跡	〃 岩出字塚名・所り垣	2,300	144		3,200						3,344
17	中ノ垣外遺跡	伊勢市佐八町字中之垣外	4,400		400	2,100						2,500
18	寺原B遺跡	〃 佐八町字寺原	2,400		224	500						724
19	ハノカ遺跡	〃 佐八町字向口、津村町字ハノカ他	10,000		792			147	2,800			3,739
20	落合古墳群	〃 津村町字口山田	1,200		151				3,165			3,316
21	井戸谷遺跡	〃 前山町字井戸谷	400		336							336
22	河原谷遺跡	〃 前山町字河原谷	100						100			100
23	世養寺跡	〃 前山町字亀谷郡	3,500		312				2,195			2,507
24	中起遺跡	〃 勢田町字中起	3,500					257				257
25	頓尾遺跡	〃 久世戸町字頓尾	520							32	520	552
26	奥遺跡	〃 桶部町字奥	11,800					494				494
27	泉貢窯跡	玉城町積良字泉貢・向山丑岡	4,500		330	400			2,556			2,886
28	佐奈水銀鉱山跡	多気町前村字井戸谷	400									400
29	大谷古墳	伊勢市佐八町字大谷	120					120				120
30	古市・中之地蔵町遺跡	伊勢市中之町・桜木町	5,000									120
計			124,520	2,191	(3,200)	4,818	35,590	1,745	16,918	144	3,020	2,612
合計				2,191+	(3,200)	40,408		18,663		3,164		64,426

tab. 1 近畿自動車道第9次区間(勢和～伊勢) 埋蔵文化財発掘調査計画



fig. 1. 近畿自動車道第9次区間（勢和～伊勢）内遺跡位置図（scale= $\frac{1}{100000}$ ）※番号はtab. 1と対応する。

2. 楠ノ木遺跡の調査経過と調査方法

調査の経過

楠ノ木遺跡が確認されたのは1979年のことであった。当時は近畿自動車道建設予定地内の分布調査を行っており、それに際して確認されたものである。事業地内確認面積は3,900㎡であった。

近畿自動車道の建設が進捗し玉城町内に至った1989年5月に、主事田村陽一を担当として第1次調査(試掘)を行った。調査面積は2,032㎡である。その結果、遺構が確認されたところを中心とした3か所の地区(A・B・C地区)に調査区を集約することとなった。本調査(第2次調査)は主事伊藤裕偉を担当とし、1990年6月29日から同年11月17日にかけて行った。なお、調査途中の1時期に主事江尻健の補助があった。最終調査面積は、A地区が4,700㎡、B地区が1,420㎡、C地区が770㎡であり、全体で6,890㎡である。

当遺跡は、第1次調査(試掘)によって遺物包含層が薄く、そこに包含されている遺物も極めて希薄であることが確認されていた。そのため第2次調査では、表土直下から約20cmの堆積が認められる灰褐色系砂質土を、遺構検出面である淡黄灰色系砂質土の直上までバックフォーにて掘削した。遺構の検出・掘削は全て人力である。なお調査区壁面の土層観察を行うため、調査終了直前にバックフォーにて危険が伴わない程度の掘削を行った。

調査にあたっては、三重県土地開発公社、工事受託の(株)桜井組(第1次調査)、(株)森組(第2次調査)、度会町上久具・棚橋地区の方々、および地元勝田地区の方々に多大なご援助とご協力を得ました。記して感謝の意を表します。

調査の方法

調査区内の小地区について

調査区は近畿自動車道本線部分(B・C地区)と玉城インターチェンジ部分(A地区)とに分かれており、さらにA地区とB地区との間には植林地が残る。このために3地区を通して小地区設定することは困難であった。したがって、B・C地区とA地区とに分けて小地区設定を行った。

B・C地区は自動車道工事センター杭STA573+80とSTA575+00とを結んだラインを軸線(hライン)とした。そしてSTA573+80を0とし、4m単位で1,2,3,4,5……と区切っていった。STA575+00はh30となる。このhラインを基準として同様に4m単位で勢和方向に向かって左側にg,f,e,d,c……とし、右側にi,j,k,l,m……としていった。

A地区はインター進入路のセンターラインであるAランプを基準(kライン)とし、KA.1を7とし、本線から離れるにしたがって4m単位で8,9,10,11,12……とした。同様に4m単位で、本線に向かって左側にj,i,h,g,f……とし、右側にl,m,n,o,p……とした。なお、左側は拡張のために一部aラインを越えるところが生じた。そのため、それより左側はア,イ,ウ,エ,オ……と続けることとした。

調査区内の遺構および遺物の取上げはこのメッシュが交差する4m×4mを1小地区とし、B・C地区については勢和方向を向いて左上の交点を示すものとしている。A地区についても本線に向かって同様のものとしている。また、大きめの遺構はこの小地区内では収まらないものがある。この場合、完結している遺構(土坑やピットなど)は、支障のない限りはどちらかの小地区を用いて記述している。完結しない遺構(溝など)の場合は、特に遺物取上げの際に各小地区単位で行っている。

なお、改めて述べるまでもないが、この小地区割りには座標軸とは無関係であるので注意されたい。

遺構の名称・実測について

遺構は検出時の状態によって土坑(SK)、井戸(SE)、溝(SD)、その他(SX)を便宜的に分け、最終的に確定した名称を記号の頭に付けている。土坑、落ち込み、墓、建物などの遺構はA・B・C地区毎で通し番号とし、ピットは各小地区毎で番号を付けた。したがって、各地区にSK1はひとつしかないが、SE1,SX1など末尾の数字が同一なのは存在するということになり、Pit1は各小地区にはひとつしかないが、同一地区の別な小地区には存在する、ということになる。

また、土坑などで出土状況を実測した遺物は土器はp (pottery)、鉄製品はi(iron)、石はs (stone)で採り上げを行っている(木製品はない)。遺構の実測はA地区のみ航空測量で他は1/20の手書きである。遺構の詳図として1/10を作成したのもあり、その大部分を今回掲載している。

整理方法について

近畿自動車道9次区間内にある遺跡の通し番号では、楠ノ木遺跡は「13」である。遺構に関連した実測図面は13-0001から13-0106までが存在する。これらの図面はA2版のファイルに収納し、図面番号・内容・縮尺を記入した表を作成している。全ての図面をマイクロ撮影し、別途保存している。

遺物は遺構の登録と同様全て通し番号とし、番号の頭に「13」をつけている。実測図は13-0001から13-0600まで存在するが、手違いによって同一の番号を付加してしまったものもある。それについては番号の後に「a.b」を付けることによって補っている。遺構図と同様、これらの図面はA2版のファイルに収納し、番号・種類・名称・出土地などを記入した表を作成している。全ての図面をマイクロ撮影し、別途保存している。

遺構写真はスライド・モノクロおよびデーター写真としてカラーを撮影した。また、6×7のカラーズライドを撮影した遺構もある。遺物写真は6×7のモノクロを用いた。遺構写真のスライドは地区・遺構・方向を記入した台帳を作成している。

調査日誌抄

(第1次調査)

- 1989年5月16日 調査工事部門を(株)桜井組が落札。重機・作業員の手配を行う。
- 5月18日 調査坑の設定。雑木の清掃。
- 5月19日 調査の開始。
- 5月23日 B地区付近の調査。
- 5月25日 A地区付近の調査。
- 5月26日 C地区付近の調査。
- 5月29日 A地区にて掘立柱建物検出。
- 5月31日～6月2日 写真・略測。
- 6月5日 A・B・C地区の設定。

(第2次調査)

- 6月26日 調査工事部門を(株)森組が落札。重機・作業員の手配を行う。
- 6月下旬 調査区の確認。
- 6月29日 調査の開始。C地区より行う。
- 6月30日 C地区の概況が出る。溝、土坑など。
- 7月4日 B地区の表土掘削。C地区の遺構検出。C地区の遺物に室町時代のものを確認。
- 7月5日 C地区建物1検出。B地区の包含層掘削中、大甕片が集中している箇所にあたる。後で中世墓(SK25)と判明。
- 7月6日 C地区建物2検出。
- 7月7日 C地区SK7はオーバーハングしたものとわかる。
- 7月11日 C地区SK11の掘削。底面には焼土はなく、遺物は皿類が多い。SK7から出土した常滑産の甕はSK8から出土したものと接合した。
- 7月12日 B地区の遺構検出。南側は遺構密度が薄い。C地区SK7の断ち割り。
- 7月13日 A地区の一部について表土を掘削。
- 7月14日 C地区の清掃・写真。
- 7月17日 B地区の遺構掘削。SX3から鉄刀・土師器小皿が出土。中世墓と考えられる。また、埋土からは爪型文のある縄文土器が出土した。
- 7月18日 C地区遺構平面図作成。B地区の遺構検出・掘削。日照り続きで検出困難極める。
- 7月21日 B地区の遺構掘削。SD2に石鏃が混入していた。



pho.1 第1次調査風景(A地区)

7月26日 台風にもかかわらず作業するが、全くはかどらず。

7月28日 B地区の遺構検出全て終了。C地区建物のピット断ち割り。

7月29日 C地区壁面の断ち割り。

7月31日～8月2日 日照り続きのあと雨ばかりで全く作業進展せず。

8月3日 B地区SK25の掘削。建物2を検出。

8月5日 B地区SK43から渥美産と思われる完形の壺出土。今まで完形品が少なかったの
で、作業員の人々色めき立つ。

8月9日 SK43・44の遺物取上げ。

8月10日 B地区の清掃・写真。

8月17日 盆休み後、調査を再開する。A地区の表土掘削。

8月21日 A地区の遺構検出と掘削。B地区の実測のための段取り。

8月22日 B地区の遺構平面図作成。

8月28日 A地区の遺構掘削。SK20から瓦器片出土。

8月30日 A地区SD11から三筋壺出土。

8月31日 A地区建物1の写真撮影。

9月5日～8日 長雨で中止。

9月11日 調査区を東側に拡張。鉄滓が大量に認め

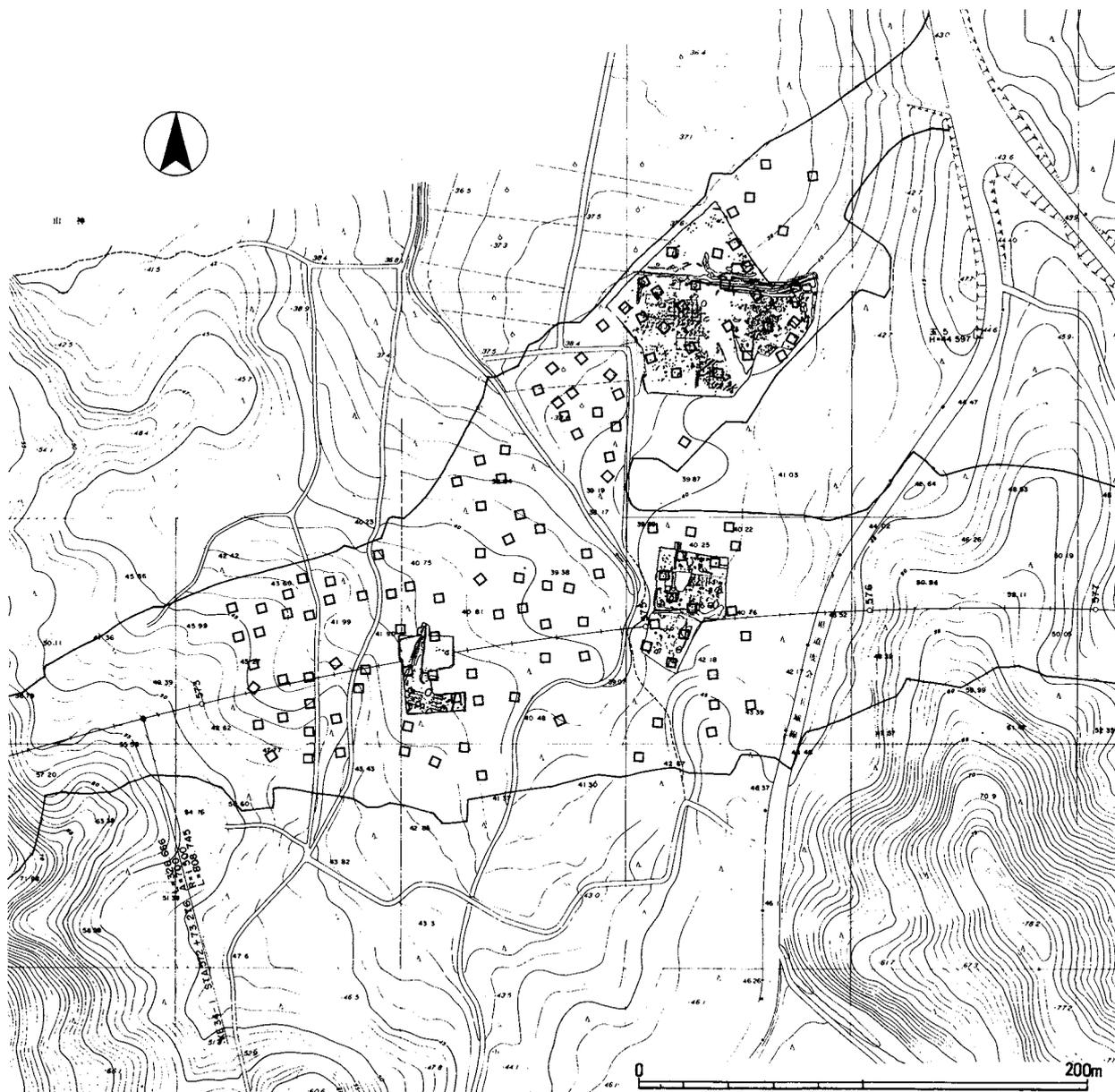


fig. 2. 事業地および第1次・第2次調査区位置図 (scale=1/3,000)

- られるところあり。
- 9月14日 A地区SK36からは土嚢袋で4袋の鉄滓が出土した。
 - 9月18日 SK36・37の掘削。底面にはピット多い。
 - 9月21日 A地区建物9が見つかる。
 - 9月25日 A地区SK49から古銭4枚以上出土するが、腐敗がひどい。A地区の航空測量のための現地説明会を行う。
 - 9月26日 SK37の続きを確認するため、再度東側へ拡張する。その南寄りで見つかった完形の陶器平茶碗が出土するも割ってしまった。作業員の非難多し。
 - 9月27日 A地区の調査終了部分の清掃を開始する。先日拡張したところから、陶器卸皿の完

- 形品出土。作業員の反応多大。
- 9月29日 拡張部分の遺構検出・掘削。
- 10月2日～5日 現地説明会のための清掃をA・B地区について行う。
- 10月6日 リフト車にてA地区の写真撮影。玉野総合コンサルタントによる航空測量のための杭打ち。
- 10月7日 現地説明会。雨であったが、約30人の参加があった。
- 10月9日 伊藤所用のため、江尻健が代理をする（～17日）。航空測量のための清掃。拡張部分の遺構掘削。現地説明会の後片付け。
- 10月13日 A地区の航空測量。

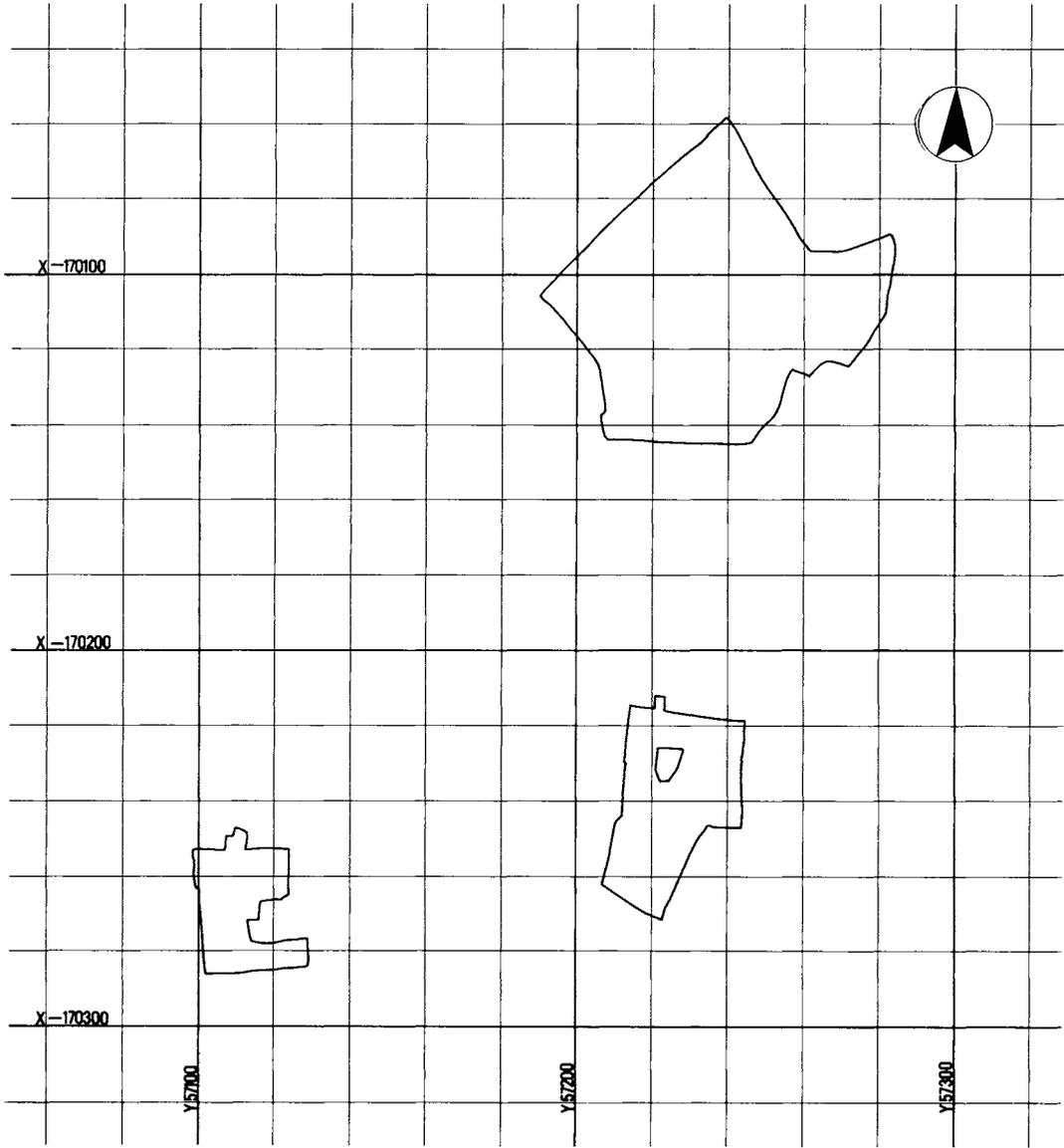


fig. 3. 国土座標第IV系と調査区の関係 (scale = 1/2,000)

- 10月16日 B地区壁際の断ち割り。
- 10月18日 現場日和であるが、斎宮歴史博物館がオープンのため、作業中止。
- 10月20日 A地区SE2、B地区SK30・SE1の断ち割り。
- 10月24日 A地区SE2を-3mまで下げる。岩盤に当たる。下層から韃の羽口の良い出土する。
- 10月25日 A地区SE2が掘り上がる。北寄りで一段下がり、可能な限り掘削するが、湧水のために途中で断念する。
- 10月26日 A地区拡張部分の写真。
- 10月30日 拡張部分遺構平面図のための段取り。
- 11月1日～7日 拡張部分の遺構平面図作成。
- 11月9日 A地区壁際の断ち割り。ピット（根石）を持つものの掘削。
- 11月10日 A地区SE1の断ち割り。底付近から完形のねり鉢出土。SK22も井戸と判明した。
- 11月11日 断ち割りした遺構の埋め戻し。本日に掘削作業は終了した。
- 11月12日～17日 土層図その他の作成。

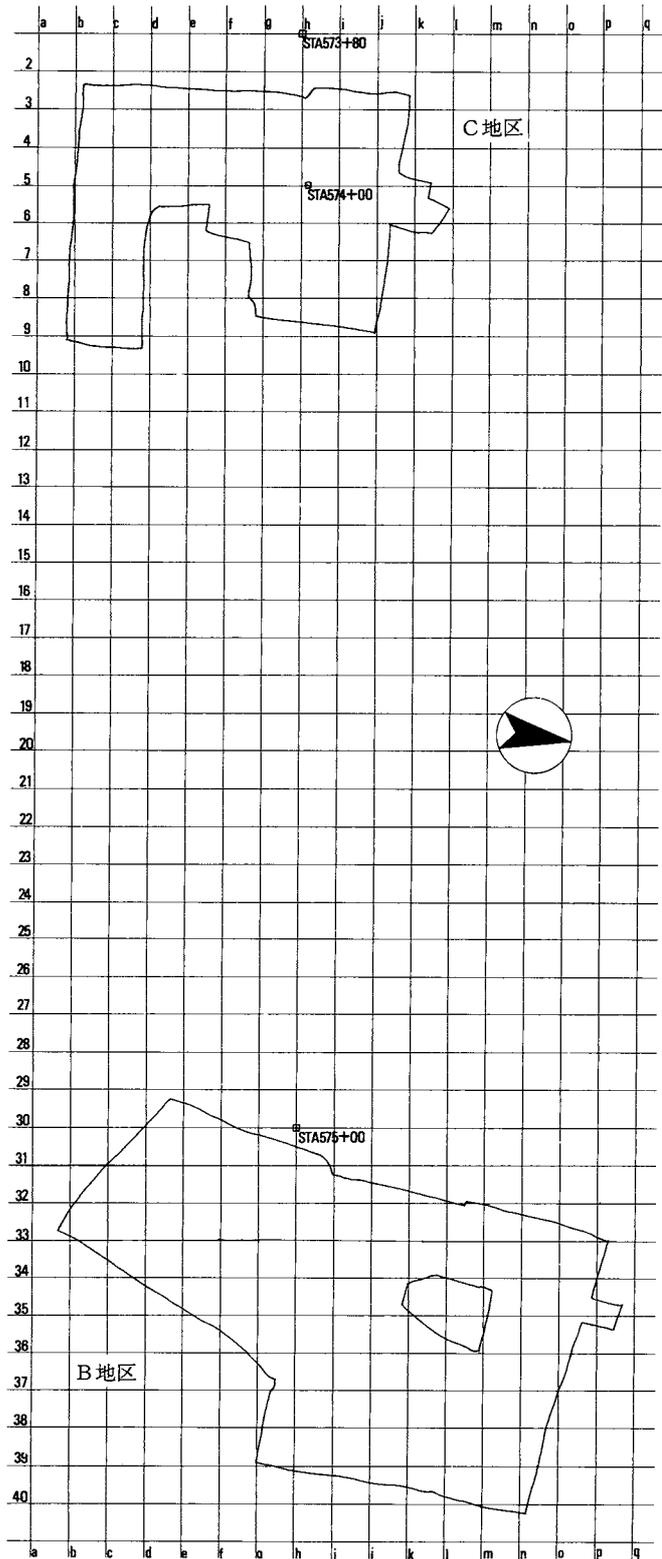


fig. 4. 本線部分小地区設定図 (scale = 1/800)

Ⅱ. 地理的・歴史的環境—問題の所在—

楠ノ木遺跡周辺の環境

楠ノ木遺跡は、巨視的に見れば宮川の中流左岸にそびえる大日山山塊から北へ派生する数条の尾根に囲まれたところに位置している。大日山から流れ出た水のうち、宮川とは反対方向の外城田川に向かって流れる側にこの遺跡は所在している。遺跡から北方を望むとちょうど正面に田丸城跡があり、さらに北には土器製作遺構を多く検出している明和町有爾中・箕村地区に続く丘陵が望める。

この遺跡の立地を微視的に見ると、地理的には谷底平野に相当するところを中心に立地している。丘陵が平坦地へと移ったところにA地区が、丘陵斜面の先端に相当するところにB・C地区が位置している。現在はぶどう畑や植林地として利用されており、人間の居住を示すようなものは全く見られない。遺

跡の北側には江戸時代に造成されたという大池と通称する貯水池がある。

街道から見た楠ノ木遺跡

この遺跡の地域的な立地状況を見るために、旧大日本帝国陸地測量部作成の地形図 (fig.6) を見てみよう。当該地域は圃場整備以前には条里地割りが良好に残存していたところである。今回の楠ノ木遺跡調査区付近、特にA地区周辺は方面地割りが認められるところであり、条里がこの付近まで及んでいた可能性を推定させる。当該地域の条里には道との関係や集落立地のことなど多くの興味深い事実が隠されているようであるが、主題から外れるしその検討を行う力量はないのでここでは触れない。

さて、fig.6の地図では、道の表示に4種類認め



fig. 5. 遺跡位置図 (scale = 1/50,000) (国土地理院 1/25,000 『国東山』『伊勢』から)

注. 中世に限る。トーンは集落推定地及び城館跡。

□は延喜式内社 (神宮撰・末社を含) 1. 御船神社 2. 棒原神宮 3. 朽羅神社 4. 津布良神社 5. 蚊野神社 6. 田乃家神社
7. 鴨神社 8. 坂手国生神社 9. 鴨下神社 10. 奈良波良神社 11. 狭田国生神社 12. 小社神社 13. 園内神社
単独数字は城館跡 1. 笠木館跡 2. 坊主山館跡 3. 山神城跡 4. 田丸城跡 5. 岩出城跡 6. 寺山城跡
※矢野地区には小ばし遺跡、野篠地区には仲垣内・赤垣内遺跡、小社・山岡・曾根地区には中ノ切遺跡、岩出地区には岩山遺跡、
津村地区には中新田・中ノ垣外遺跡、佐八地区には佐八藤波遺跡をそれぞれ含む。

られる。2本の実線・実線と破線・2本の破線・1本の破線、である。これらは当時の街道が2本の実線で表現されていることから、この順序で重要な道路を示したものであると考えられる。注意すべきことは山神集落から楠ノ木遺跡に至る山裾の道があり、実線と破線で表現された2級道路として存在していることである。この道（以下、集落間道）は先述の方面地割りに制限され、「権八」「大グルワ」「ヤケ山」と「のま垣外」「小清水」のあいだを直線的に走っている。現在この道は幅2mに満たない、丘陵部分では切り通し状を呈するものである。細かく見ると丘陵を縦断するようなかたちで存在していることが判る。現在ではほとんど機能していないようで、笹が生い茂っている状態にある。現在山神集落から東へ行く場合には、集落から北上して田宮寺集落から大池へと通じる道を利用している。

さて、この集落間道は楠ノ木遺跡の東で度会町棚橋へ通じる熊野脇街道（現県道度会・玉城線⁽¹⁾）と交差している。この道以外にも楠ノ木遺跡付近には多くの道が交錯している状況が看過される。要するに楠ノ木遺跡は交通の要所に位置しているのである。この集落間道がかつて街道に準ずるものとして機能し、そして廃絶していった背景を考えるには、楠ノ木遺跡の動向が無視できないであろう。

楠ノ木遺跡の規模

このような立地条件にある楠ノ木遺跡は、遺跡の広がりについてもかなり広範囲であることが想定できる。まず、先述した大池南岸の「小清水」では陶器碗（fig.7-3）を、「土山口」でも陶器碗（fig.7-4）を、A地区に隣接する「ヤケ山」の丘陵部斜面では土師器皿（fig.6-1~2）をそれぞれ採集している。また、現県道度会・玉城線の東に位置する通称サニロードの拡幅に伴って「下山」で遺構かと思われるものを確認した（A地点 pic.2）。さらに小字の名称には、調査区の北側や西側に「のま垣内」・「大グルワ」などの、人間の居住を想定させる地名⁽²⁾が存在している（fig.8）。「のま垣外」とはあるいは「沼垣外」の転訛したものかと思われるが、もしもそうであれば大池の前身として沼状地が存在していたのかも知れない。

これらのことから、当遺跡は東端は「下山」の丘陵部分、西端は「土山口」から「三ノ谷」付近、南端は「車谷口」「三ノ谷」付近、北端は大池付近という、調査区の位置する谷状地はかなり大規模に広がっているものと考えることが出来よう。したがって現在複数の小字にわたっているこの谷に一定の集落が存在していたものと考えられることから、この谷の集落跡の総称として「楠ノ木遺跡」の呼称を用いたい。このような状況であるために開発に際しては細心の注意が必要かと思われる。

なお地元の伝承では当遺跡付近は「下山千軒」と呼ばれている。この伝承がどこまで事実かは分からないが、何らかの意味合いがある可能性は充分にあり、注意を要する。これが中世における状況を描写したものとすれば、当遺跡は質的にもかなり大規模であった可能性がある。

楠ノ木遺跡周辺の遺跡

つぎに楠ノ木遺跡の中心である中世の当該地域の状況を概観してみよう。当該地域の通史的な遺跡分布については東浩成氏によって詳述されている⁽³⁾ので、そちらを参照されたい。

中世の文献史料中に地名あるいは村名として存在の確認できるものと、現在遺跡として確認できるものを集落想定地とし、さらに延喜式内社（神宮撰末社）と城館跡を示した（fig.5）。古代以降、当該地域は伊勢神宮の所領である「神三郡」内に位置しており、神宮関連の文献には「原」、「積良」、「山上（山神）」、「矢野」、「野篠」、「狩田（刈田、苅田、勝田とも）」、「田邊（上田辺・下田辺）」、「玉丸」、「宮子（宮古）」などの地名のほか、「田宮寺」などの名称も散見される。また中世では上記の地名のほか「田宮」という現田宮寺集落に相当するかと考えられるものも認められる。これらの地名は現在の大字に相当する旧村と見て大過ないものである。このことから、現在確認されている遺跡の他に、現在の集落と重複するかたちで集落跡が存在する可能性が十分に想定できるのである。この想定をもとに楠ノ木遺跡周辺の中世遺跡想定地を、既に確認されている遺跡に迷わされずに図示してみるとこのようになる（fig.5）。

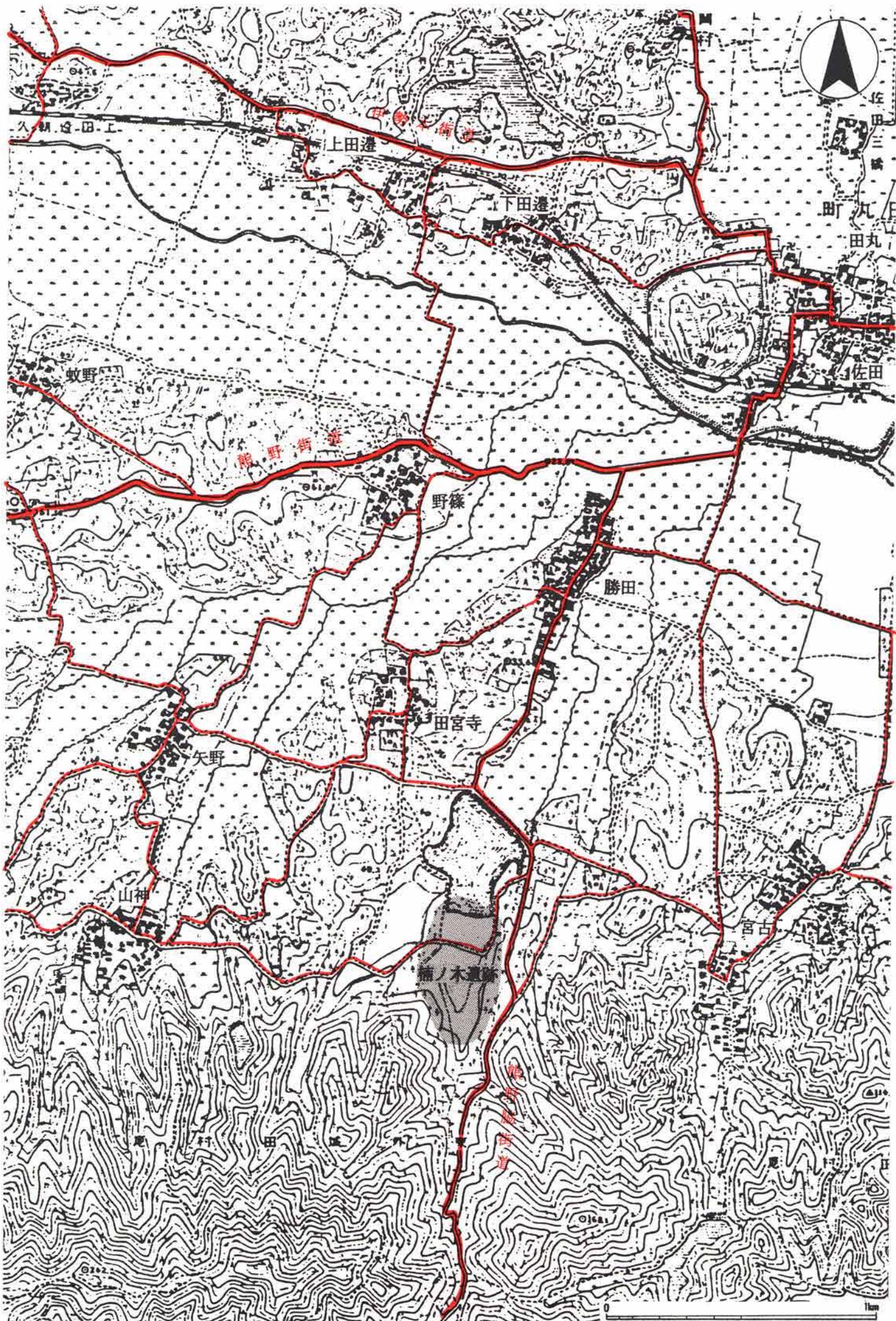


fig. 6. 19世紀末頃の勝田地区周辺地形図 (scale = $\frac{1}{20,000}$) (大日本帝国陸地測量部作成地形図から)
 赤太線は主要幹道(街道) 赤細線はそれに準じるもの。

中世の城館跡以外の遺跡立地に関しては大きく2者に分類できることが分かる。すなわち、丘陵部を利用して集落を営むもの（原・野篠・田邊・狩田など）と、丘陵に挟まれた谷部に集落を営むもの（積良・山神・宮子など）である。楠ノ木遺跡は後者の部類に属する。

これらのことを考え合わせると、楠ノ木遺跡は近辺の村と比較しても遜色なく、そして規模も大きいことが判明する。それにもかかわらず、楠ノ木遺跡は現在まで集落として存続することなく廃絶しているのである。このことは、当地の歴史的背景のなかで、当遺跡がどのように位置付けられるのかということの問題を示していると考えられるのである。

当該地域の村は古代以来、神宮との関わりのなかで発展してきた可能性が極めて高いことが文献史料から想定されるのであるが、神宮以外の勢力が15世紀中葉以降、新たに進出してくる。戦国大名として成長しつつある北畠氏である。北畠氏関連の遺跡はfig. 5に示すように主に城館跡であるが、文献史料からは当該地域に北畠氏関係の所領が存在していたことは明白である。ただし集落は以前のもをそのまま継承することが自然であり、この時期の当該地域の画期は城館の築造が増加することに求められるにしても新たな集落の発生を想定することは困難であろう。

さて北畠氏の中心となるのは田丸城跡(4)である。これは南北朝時代から室町時代にかけて利用されたものである。また北畠氏によって楠ノ木遺跡に隣接する山神地域が攻撃された事実も認められ、山神城(3)はその時期の城館跡であろうとされている。当遺跡の西方には多気町・笠木館跡(1)や玉城町・坊主山館跡(2)が所在し、東方には岩出城跡(5)が存在している。これらは北畠氏関連の城館跡と想定されており、笠木館跡からは鍋第3段階以降の遺物が採集されている⁽⁵⁾ことから、その可能性は高いと思われる。

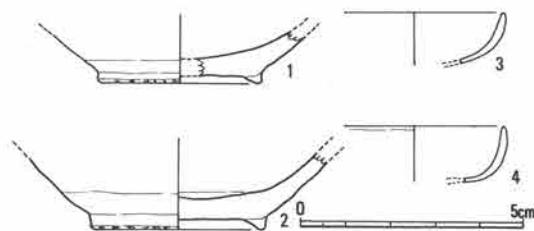


fig. 7. 調査区周辺採集遺物 (scale = 1/4)

このように中世の当該地域は中世前期においては伊勢神宮と、中世後期においては神宮および北畠氏と、多分に係わっていることは確実であり、楠ノ木遺跡の考察には両者を避けて通ることはできないのである。⁽⁷⁾

(註)

- (1) 三重県教育委員会『歴史の道調査報告書Ⅰ 熊野街道』(1981)
- (2) 「垣内」については、全国的に見れば厳密には居住地を示すものと断定することはできない(水野章二「平安期の垣内一開発と領有」『史林』65巻3号 1982)。しかし三重県内では「垣内・垣外」などの地名が認められる付近に中世の集落遺跡が存在する場合は多いことは事実である。
- (3) 東浩成・倉田直純『勝田遺跡発掘調査報告』(三重県教育委員会 1988)
- (4) 『氏経神事記』(『神宮年中行事大成』前篇 大神宮叢書 臨川書店 1976)、『氏経脚引付』(『日本塩業大系』2巻 古代・中世史料篇)、『光明寺古文書』(神宮文庫所蔵氏経直筆本写真版)など。なお、文献史料の詳細は小林秀氏の御教示を得た。
- (5) 大橋紀元・安室正彦「笠木館址測量調査報告」(『ふびと』34 三重大学歴史研究会 1978)
- (6) 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Miehistory』vol.1 1990)
- (7) fig.5の作成にあたっては、以下の文献を参考とした。
 『角川日本地名大辞典』24三重県(角川書店 1983)
 皇学館大学考古学研究会『玉城町南部の遺跡』(1982)
 三重県教育委員会・三重県文化財連盟『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(1979)
 三重県教育委員会『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(1982)
 三重県教育委員会『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』(1984)
 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査概報』VI・VII(1990 1991)
 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』5・11・14・16・17(1975 1981 1984 1986 1987)
 岩中淳之『佐八藤波遺跡発掘調査報告』(伊勢市教育委員会 1990)



pho. 2 A地点遠景(南から)



fig. 8. 調査区周辺の現小字割り図 (1/6,000)

Ⅲ. 調査の成果—層位と遺構—

ここでは調査区の層位的状況と検出した遺構について報告を行う。遺構の時期についてはIV章での分類にしたがっているため、参照して頂きたい。

1. A地区の層位と遺構

層位 (fig.10)

A地区は東および南側に派生する低丘陵の裾部分に相当し、標高約39mの平坦地である。層位は表土直下の灰褐色系砂質土および赤褐色系砂質土が遺物包含層となり、その下の黄灰色系土層が中世の遺構基盤層に相当する。黄灰色系土層は部分的に砂質土層と粘質土層に分けられ、粘質土層の方が上部に堆積する。このうち砂質土層の部分には縄文土器片が混入している。この層が縄文時代の遺物包含層に相当するものと考えられるがその含有度は極めて薄いものの、調査区土層図 (fig.10) にみるように、この層を切り込んでいる、中世よりは確実に古いといえる遺構状のものがある。しかし、これらからはまったく遺物が出土しなかった。

黄灰色系土層の下には順に黒色系土・暗褐色系土が堆積し、地山である明黄～明黄赤色系粘土に達する。中世の遺構検出面から地山までの深さは、調査区南東隅では約0.6mと浅いが井戸SE2付近で約3mとなり、調査区の北側ほどレベルが下がっているものと考えられる。このことから当遺跡は山側から流出してきた土砂が堆積した土壌の上に遺跡が形成されたものとする事ができる。

遺構

A地区の遺構は中世のものを中心としている。確認できた遺構は、掘立柱建物13棟の他、ピット群、土坑多数、井戸5基、溝20数条である。時期的に大きくみると、おおよそ平安時代末から室町時代前半のもので、一部江戸時代以降のものを含む。

中世(平安時代末～室町時代)の遺構

掘立柱建物およびピット

建物はおもに調査区中央付近に集中して認められる。この部分に確認できた建物の大部分があり、東側の空白地を挟んでさらに多くのピットが認められ

る部分がある。便宜上、前者を「建物集中部分」、後者を「ピット集中部分」とする。A地区の建物跡はこの2か所にほぼ集約出来る。

ピット集中部分のピットには根石を持つものもあるため、建物が存在していたことは確実に考えられる。この部分は隣接する鉄滓を大量に出土した土坑SK36との関係上、工房に相当する建物を想定したのであるが、明瞭な建物はほとんど確認することができなかった。ピットの並びが不整然であることや工房跡であることを想定すれば、現在我々のイメージしている建物とは違ったものが存在することも考えなければならないであろう。このことからあまり無理をして建物を復元することは差し控えた。

建物集中部分 (fig.11) では、特に建物4・5・6・10などは柱通りがほとんど揃っており、建物のひとつひとつを特定するのは極めて困難な状況にある。そのために、これらの建物の確認は一案を示しているものと考えて頂きたい。これらの建物群は建物8を除いて柱通りをほぼ真北に向けている。

建物1 (fig.12) は建物集中部分の南側に相当する。東西棟で、桁行5間(約10m、約33尺)、梁間4間(約6.7m、約22尺)の主屋部分の北東に東西2間(約3.5m、約11.5尺)、南北2間(約3.5m、約12尺)ないしは3間の付属施設(以下、「施設」と呼称)が取りつくものと考えられる。施設は独立した建物の可能性も否定しきれないが、建物1と遺構的に重複する状況は見出せない。それよりも南端の桁行を建物1の北端の桁行と重複していることと、柱通りも比較的良く通っていることから、建物1に付随して造られたものと見做すのが妥当であろう。主屋部分には部分的ではあるが根石が認められるため、本来は全てに根石が存在していた可能性が高い。主屋部分は、桁行の5間がそれぞれ全て等間に設定されているのに対し、梁間は南から6・5.5・5.5・5尺に設定されている。また、南西端の2間×3間の部分は中央部に柱が認められず、「土間」的な機能を想定し得る。さらに、南東隅の1間×2間の部分は土坑(SK27)が認められ、所謂「南東隅土坑」

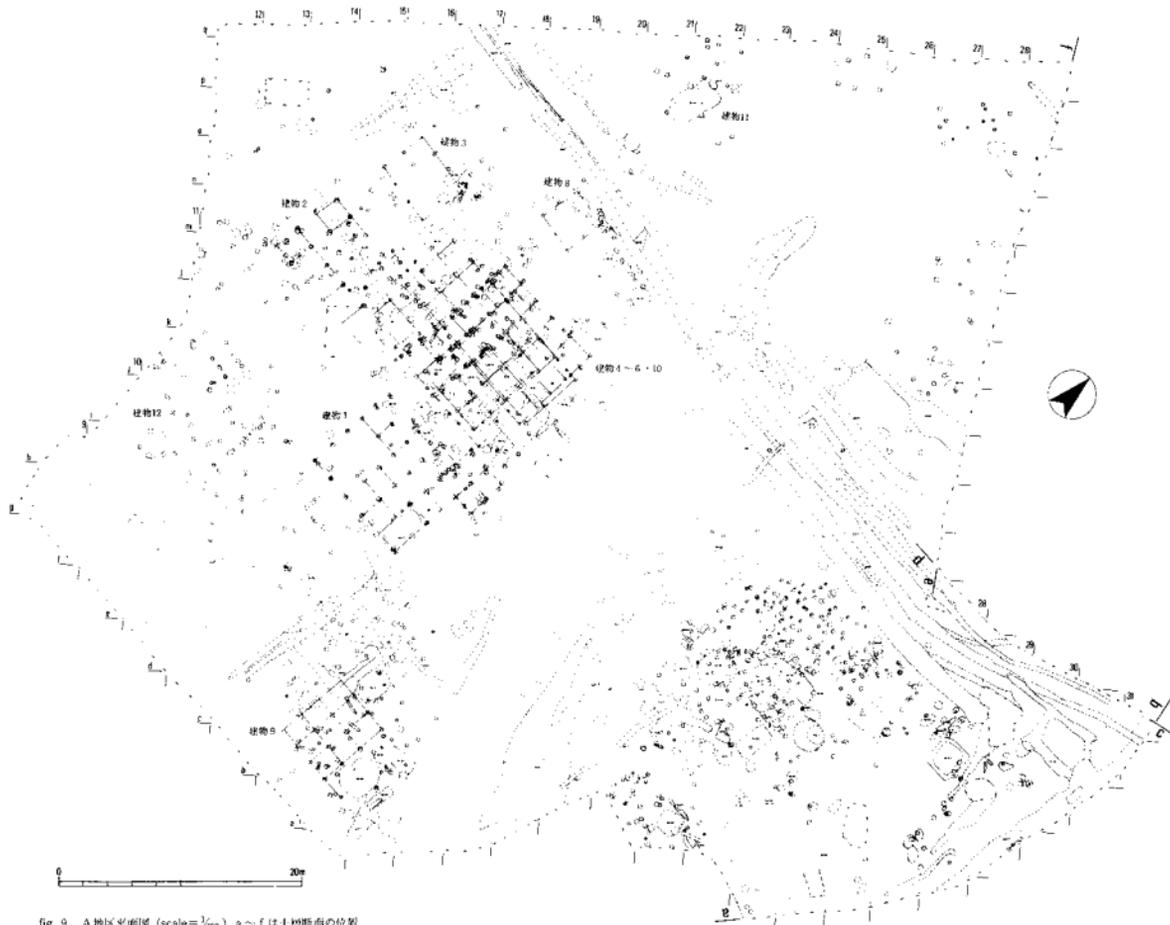


fig. 9. A地区平面図 (scale=1/300) a~fは1.4層断面の位置

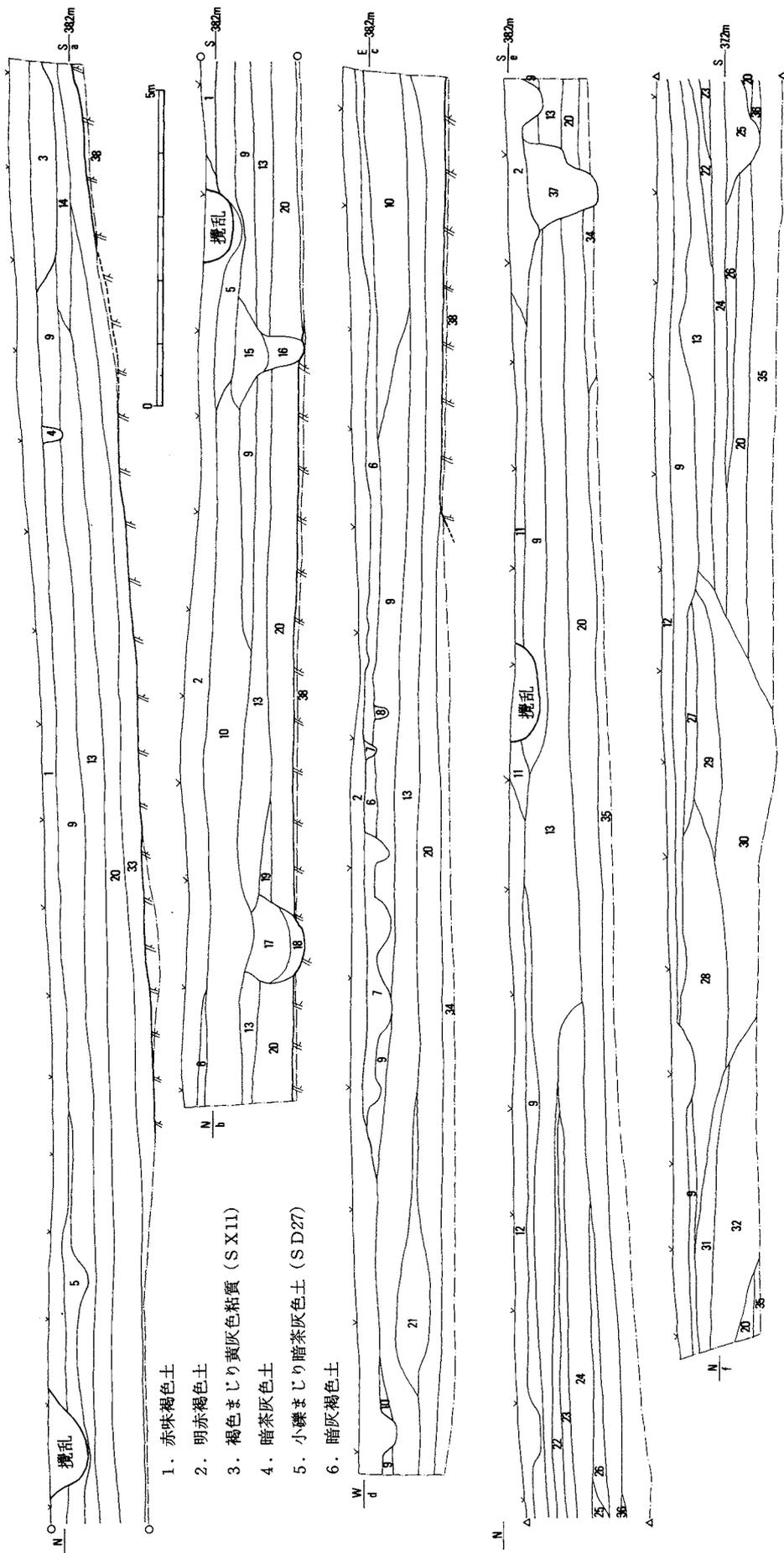


fig.10. A地区北・東礫土層断面図 (scale = 1/100)

- | | | | | |
|----------------------|-------------------------|------------------|----------------------|-------------------------|
| 1. 赤味褐色土 | 7. 小礫まじり明赤褐色土 | 15. 赤灰色土 | 23. 淡茶灰色砂質シルト | 31. 記入ナン (32に類似) |
| 2. 明赤褐色土 | 8. 黒色まじり暗赤褐色土 | 16. 黒色まじり暗灰褐色土 | 24. 暗灰色砂質土 | 32. 淡黄灰色砂質シルト |
| 3. 褐色まじり黄灰色粘質 (SX11) | 9. 黄灰色粘質土 (中世遺構面ベース) | 17. 明赤褐色まじり暗赤褐色土 | 25. 淡灰砂・礫層 | 33. 暗褐色粘質土 (20と同質) |
| 4. 暗茶灰色土 | 10. 黄色まじり明赤褐色土 | 18. 赤色まじり暗灰褐色土 | 26. 褐色砂質シルト | 34. 礫多く含む黄灰色粘土 (岩盤?) |
| 5. 小礫まじり暗茶灰色土 (SD27) | 11. 暗赤灰色土 | 19. 黒色含む黄灰色礫層 | 27. 黄灰色礫層 | 35. 黄灰色粘土 (34と同一) (岩盤?) |
| 6. 暗灰褐色土 | 12. 暗灰褐色土 | 20. 黒灰色粘質土 | 28. 淡灰~黄灰色砂・礫層 | 36. 褐色砂・礫層 |
| | 13. 礫多い黄灰色土 (鼻梁の縄文土器含む) | 21. 淡黄灰~赤褐色礫層 | 29. 淡黄灰色砂質シルト | 37. 礫多い明黄色土 |
| | 14. 記入ナン (20と類似した層) | 22. 黄灰色礫層 | 30. 黄灰色砂・礫 (~80mm) 層 | 38. 明黄色粘土 (岩盤) |

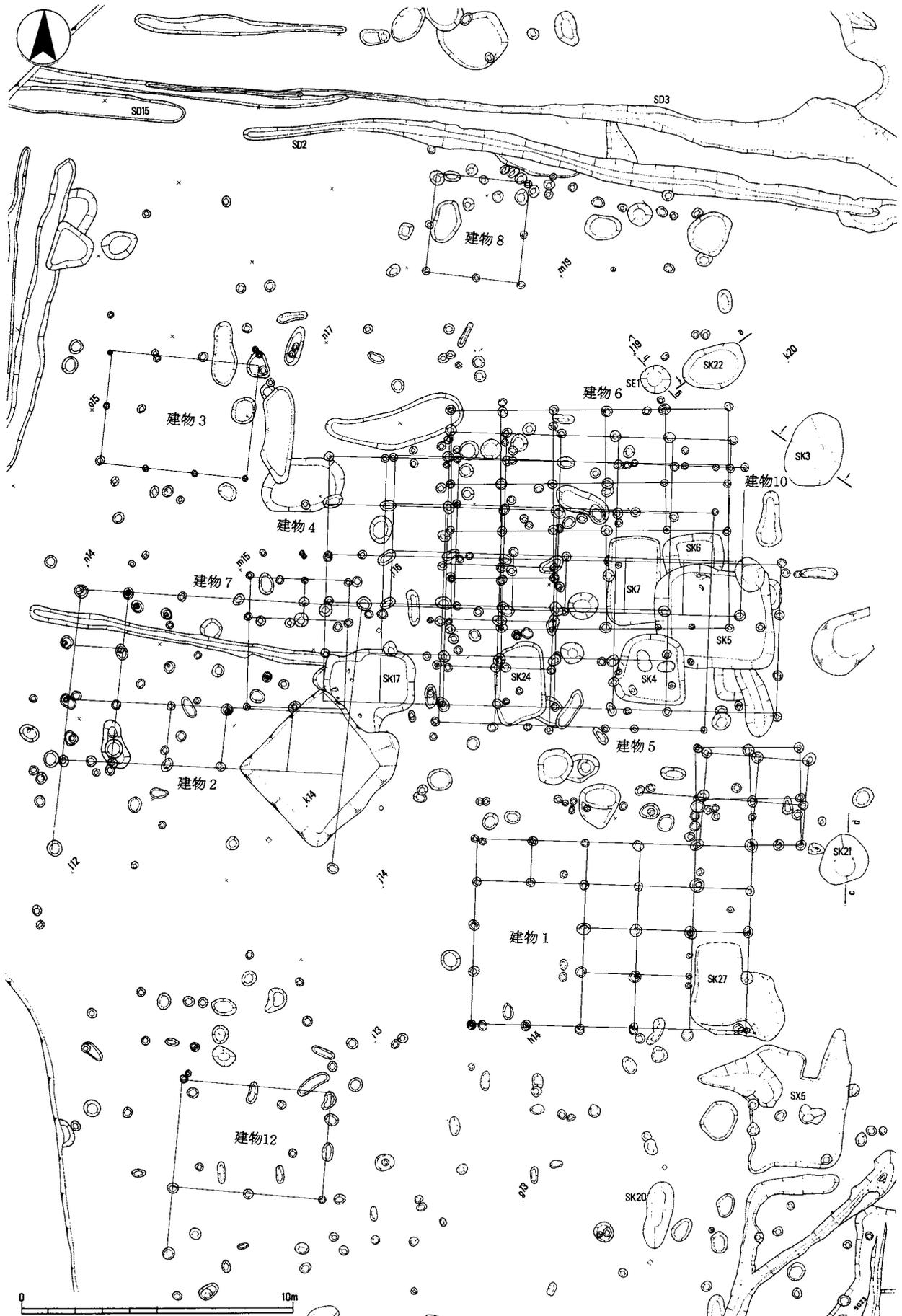


fig.11. A地区建物跡集中部分平面図 (scale=1/200) ※SE 1、SK 3・21・22の断面はfig. に対応する。

に相当するものと考えられる。この土坑は柱間内に収まるものではなく、一部が建物の東側に突出している。

なおこの建物内の土坑SK27出土の土器は、近接している井戸SK21およびやや離れる井戸SK3から出土した土器と接合している (fig.57-12)。これらは時期的に近接したものと考えられ、位置的にも井戸SK21が建物1に伴う井戸である可能性は極めて高いであろう。g15Pit1からは轡の羽口の破片 (PL.54) が出土している。建物1は後述するSK36などと時期的に並行し、鍛冶に従事した人々が居住

していた可能性も考えられる。建物1の時期はピット内から出土した土器やSK27から出土した土器、さらに轡の羽口の存在から、南北朝時代頃 (Ⅱ期後半~Ⅲ期) 以降と考えられる。

建物2 (fig.13) は建物集中部分の西に近接している。東西棟で桁行5間 (約10.4m、約34尺)、梁間3間 (約6.3m、約21尺) を中心の建物としている。この南には東西端の梁間の延長11尺 (約3.3m) のところにもピット (j13pit1) があるので何らかの施設が存在していた可能性がある。建物の南東隅は試掘時の土層確認のために残っていない。各柱通り

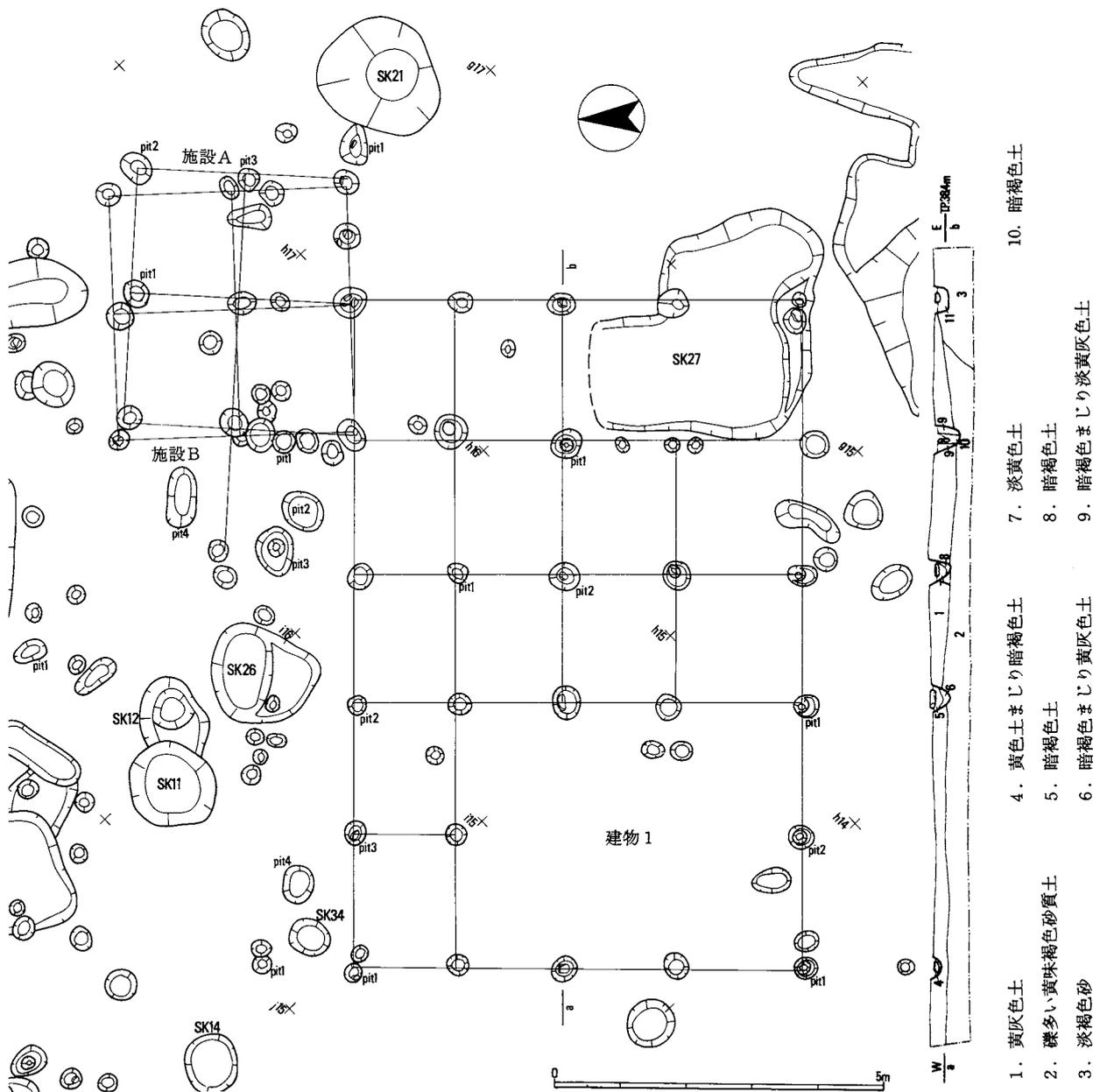


fig.12. A地区建物1付近平面・断面図 (scale=1/100)

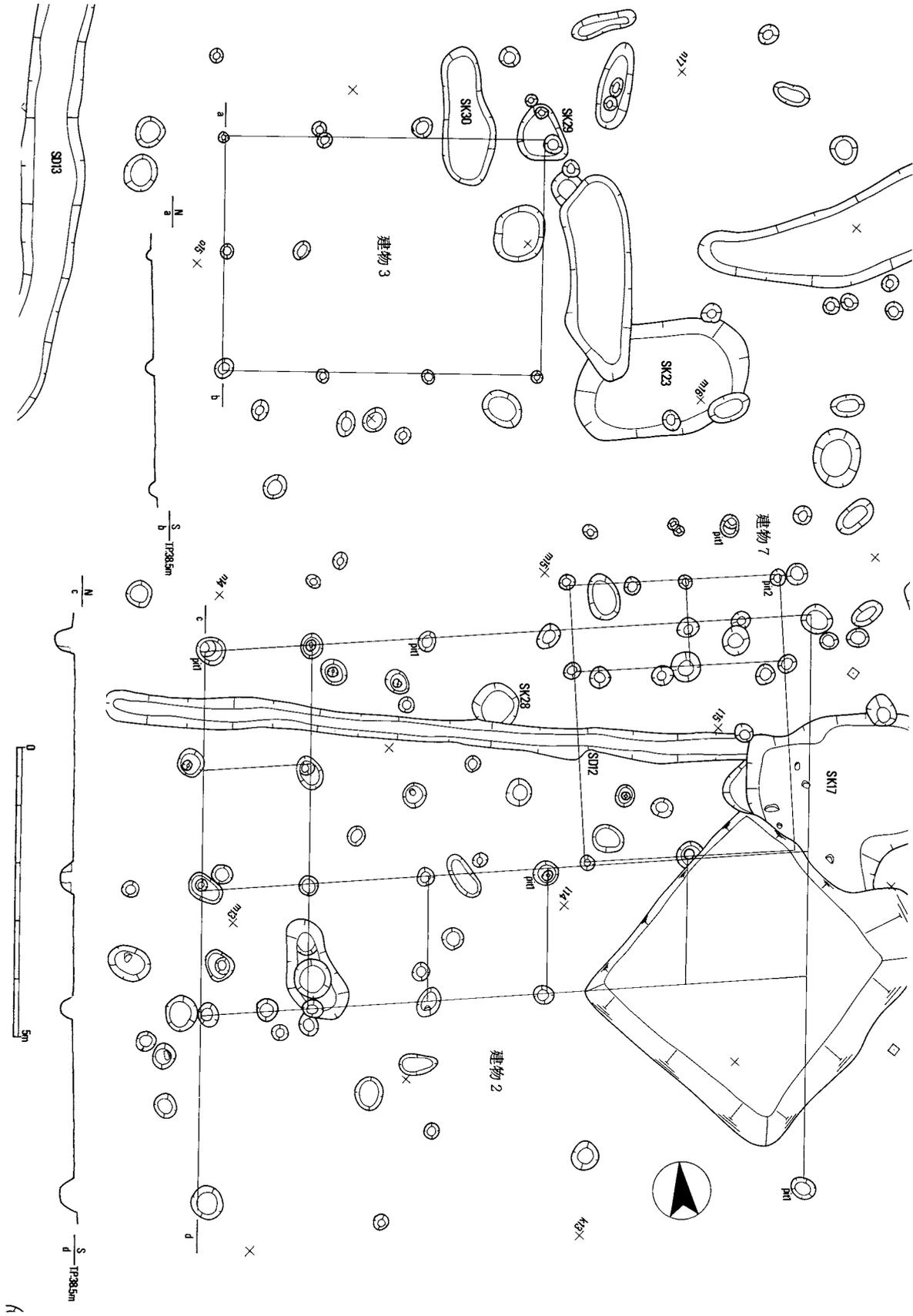


fig.13. A地区建物2・3・7付近平面・断面図 (scale=1/100)

は良く揃っているが、そのまま復元すると全体の形態はやや平行四辺形となる。これは建物設計時の間違いと考えられるが、ここでは現状の状態を提示している。建物3と並列するものと見做してよいであろう。建物の中央から南と西の1間を除く広い部分(4間×2間分)はその中央部分に柱列が存在しないものである。柱掘形は径0.3 m内外の比較的大きいものであるが、根石は全く認められなかった。

建物2の時期は出土土器から平安時代末(I期)と考えられる。なお、この建物内にある土坑SK28出土土器は当建物のピットのm14 Pit 1出土の土器と同一個体と考えられ、建物の廃棄時に同一土器をそのピット内に投棄していることも考えられる。

建物3 (fig.13) は建物集中部分の西にあり、建物2の北に相当する。東西棟で桁行3間(約5.7m、約18尺)、梁間2間(約4.2m、約14尺)である。西端の梁間の北4尺(約1.2m)のところにピットがあり、建物2と同様、何らかの施設が付随するのかも知れない。東端の柱列は土坑等の存在により明確には確認されなかったが、これ以上東に伸びることはないと考えられる。柱掘形は径0.2m内外のもので、根石は認められなかった。出土土器が全くなく時期の特定は困難であるが、建物2の北15尺の位置にそれと平行して造られているので、建物2と同時期と見做してよいであろう。

建物4 (fig.14) は建物集中部分にあり、中でもその西寄りに存在する。東

西棟で桁行8間(約12.7m、約55尺) 梁間5間(約9 m、約30尺)で、北端には5間(33尺)×1間(3尺)の廂かと思われるものが付く。この部分については概報で「建物7」として取り扱っていたが、当報告では建物4に伴うものとして扱うこととした。建物4は調査区内では最も大きいものである。部分的に根石が認められる。建物の南西隅に相当する部分には土坑SK17(W)があり、当建物に付属する土坑の可能性も想定できるが、建物の敷地を越えて存在していることやこの土坑に伴うと考えられる溝

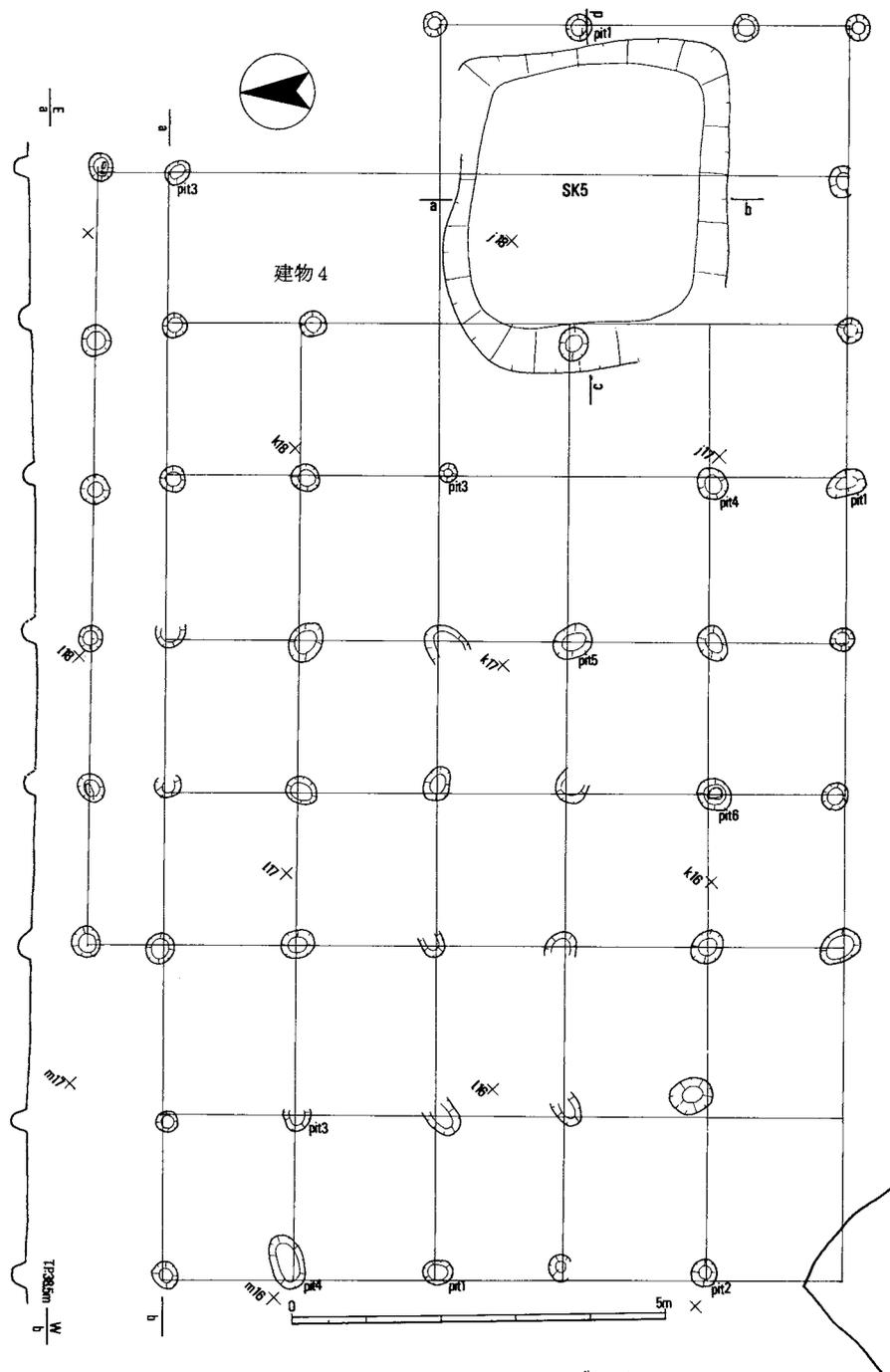


fig.14. A地区建物4平面・断面図 (scale=1/100)

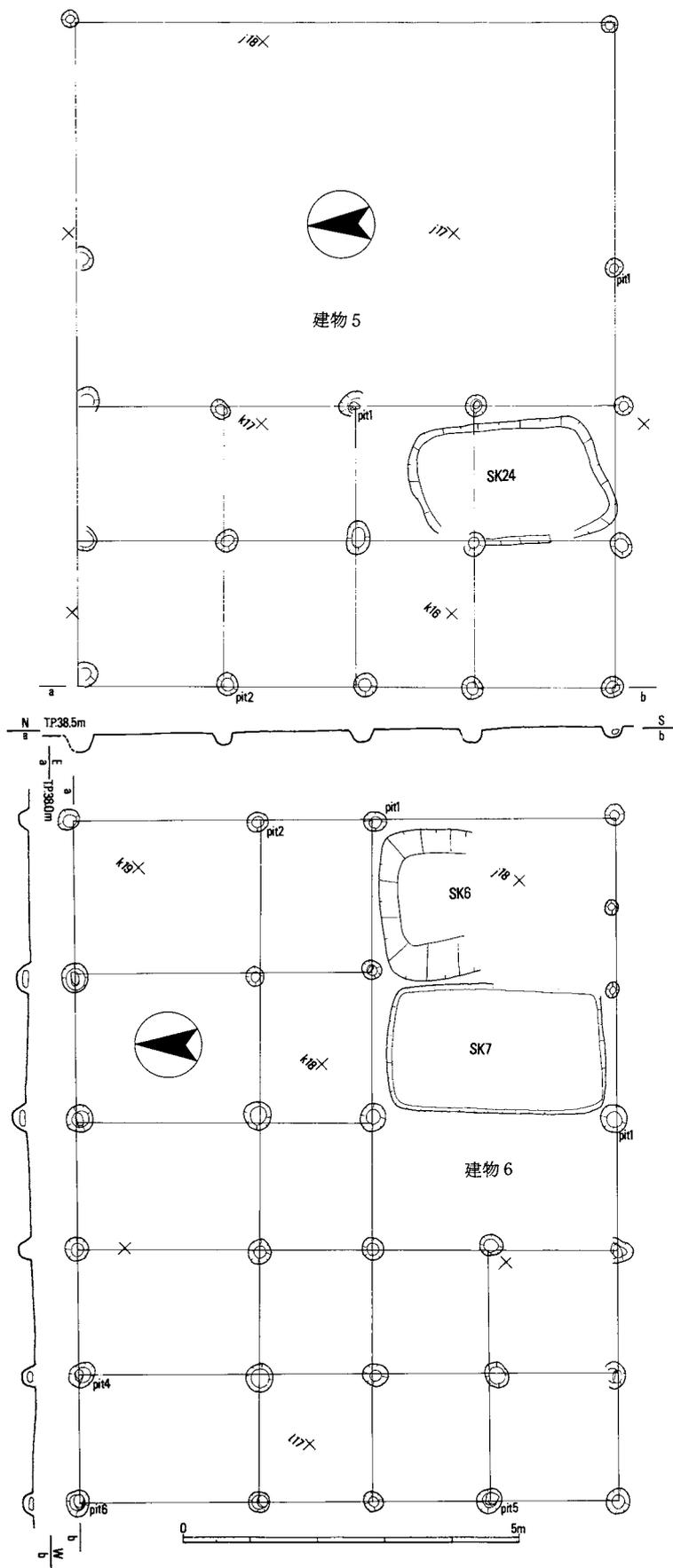


fig.15. A地区建物5・6付近平面・断面図 (scale=1/100)

SD12が当建物のピットと重なっていることなど、建物に付随する施設とするには問題点もある。また建物の南東に位置する土坑SK5は、建物4やそれ自身の規模の点からもこの建物に伴う土坑である可能性は極めて高い。土坑SK7と重なるピット(j17Pit3)はSK7埋没後に掘削されており(fig.16)、当建物がSK7よりは新しいことがいえる。時期はピットと土坑SK5出土土器から鎌倉時代後葉から南北朝時代頃(Ⅱ期後半～Ⅲ期前半)の比較的長期にわたる建物と考えられる。建物10のピットと重なっているピットから出土した土器は土坑SK5よりも古い傾向があり、この土器を建物10の所属時期を示すものと考えれば上記の時期比定が可能である。そうするとほぼ同じ時期となる建物1の付属施設とあまりにも近接するが、前述のように建物1の付属施設は拡張と考えられるので無理はないものとする。

建物5(fig.15)は建物集中部分にあり、なかでもその南寄りに存在する。土坑SK24を当建物に伴う土坑と想定すると南東隅土坑である可能性が想定し得る。そうするとこの土坑以東の柱列はひとつの可能性を示すものとなる。この柱列が妥当であれば東西棟、土坑SK24を南東隅土坑と考えれば南北棟となる。東西棟とすれば桁行4間ないしは5間(約9.7m、約32尺)、梁間4間(約7.9m、約26尺)で、桁行の東端は1か所のピットを検出したのみである。根石は部分的に残存している。出土土器から平安時代末(Ⅰ期)と考えられる。

建物6(fig.15)は建物集中部分にあり、そのなかでも北寄りに位置する。東西棟で桁行5間(南端は6間 約10m、約33尺)、梁間4間(約7.9m、約26尺)である。梁間は付属施設と考えられる土坑SK7や土坑SK6などのためか、不統一となっている。土坑SK7(fig.16)は2間×1間分の大きさで、壁面がほぼ垂直に掘られてい

る特殊なものである。埋土の状況からは人為的に埋め戻されているようである。時期は出土土器から鎌倉時代後半（Ⅱ期後半）と考えられ、建物4に伴うピット（j17pit3）と土坑SK7との関係から、建物6は建物4に先行するものと見做し得る。

建物7（fig.12）は東西2間（約3.6m、12尺）、南北3ないしは4間（約4.8m、16尺）の規模である。西側桁行は溝SD12に若干の歪みがある部分を柱穴の痕跡と考えた。出土土器は小片であるが、時期は鎌倉時代（Ⅱ期）の範疇と考えられる。

建物8（fig.17）は建物集中部分の北側、溝SD2の南で確認された。棟方向は不明であるが、東西2間（約3.6m、約12尺）、南北2間（約3.6m、約12尺）の規模である。根石は全く認められなかった。この大きさからはA地区内での一般的な建物とは言い難い。出土土器から鎌倉時代後半（Ⅱ期後半）以降かと考えられる。

建物9（fig.18）は建物1の南に位置する。東西3間（約5.5m、約18尺）南北3間（約6.4m、約21尺）を確認したが、東西方向にもう少し伸びる可能性がある。例えばa14Pi1の北にあるピットはこの建物のものである可能性が大きい。ただし、遺構検出時にはこのピットと同じ南北方向の柱列は確認できなかった。現状よりは東に広がるとすれば、土坑SK38はこの建物に伴うものと考えられ、所属時期でも問題はない。部分的ではあるが根石の残るピットも認められる。時期は出土土器から鎌倉時代前半（Ⅱ期前半）と考えられる。ピット内には土錘も含まれており、興味深い。

建物10（fig.19）は建物集中部分の北寄りに位置している。東西棟で、桁行6間（約12.8m、約42尺）、梁間3間（約5.5m、約18尺）である。東側の柱列は見つからず、建物が東へさらに伸びる可能性がある。建物の構造は建物2に類似し、建物の中央部北寄りの5間×2間分は柱列が認められない。根石は認められなかった。ピット出土土器は建物4と重なっているピットからのもののみで、前述のようにこれらは建物10に伴う土器と考えるのが妥当である。時期は鎌倉時代前半（Ⅱ期前半）と考えられ、建物2との類似からそのなかでも早い時期と想定される。

建物11（fig.9）は区画溝群の北方にある唯一の

建物である。土坑SK40周辺に数個のピットが存在しており、調査の段階では全体を確認することができなかったが、検出したピットから東西方向2間（約4.3m、約14尺）南北方向3間（約6.4m、約21尺）が確認できる。棟方向は不明であり、調査区外へ広がることも考えられる。土坑SK40を南東隅土坑とする建物であろうか。土坑SK40はやや不整形な長方形を呈し、長軸約4.3m、短軸約2.4mを測る。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは約0.2mである。時期は土坑SK40出土土器から平安時代末（Ⅰ期）と考えられる。

建物12（fig.11）は調査区南西隅近くに位置し、建物集中部分からはやや離れる位置にある。東西棟で桁行3間（約5.5m、約18尺）、東の梁間2間、西の梁間1間（約4.5m、約15尺）である。この規模からは主要な建物と見做すことはできない。西の梁間を南に8尺延長したところにピットがあり、建物に付随するものかあるいは建物が南へさらに広がる

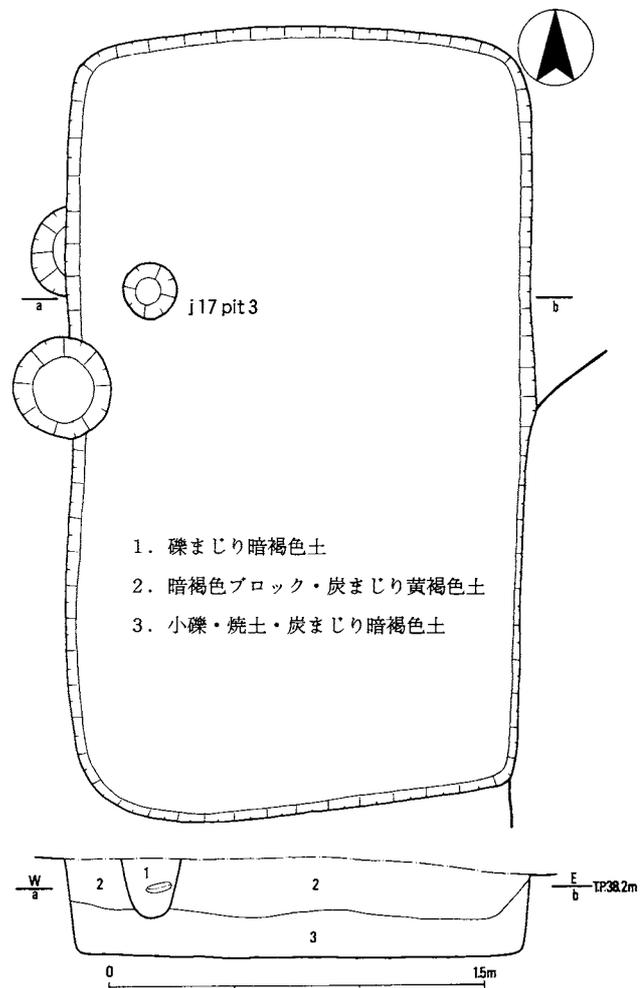


fig.16. A地区土坑SK7他平面・土層断面図 (scale=1/30)

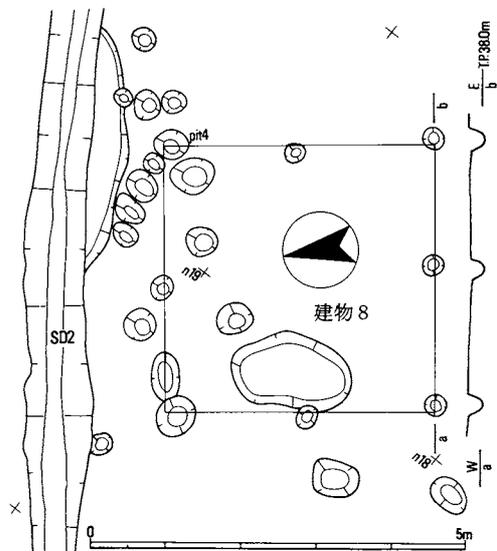


fig.17. A地区建物8付近平面・断面図
(scale=1/100)

ものかと考えられる。出土土器が全くないので正確な所属時期は不明である。

建物13(fig.25)はピット集中部分で確認できたものである。南北棟で、桁行3間(約6.4m, 約21尺)、梁間2間(約3.6m, 約12尺)である。建物主軸は他の建物と異なり、西へ若干振れている。時期は出土土器から鎌倉時代後葉(Ⅱ期後半)と考えられる。なお、先述のようにこの周辺ではまだかなりの建物が存在するものと考えられ、ピット出土土器は圧倒的にⅢ期のものが多い。

土坑および落ち込み

建物に付随するものとして記述した土坑以外の主なものについて触れておく。

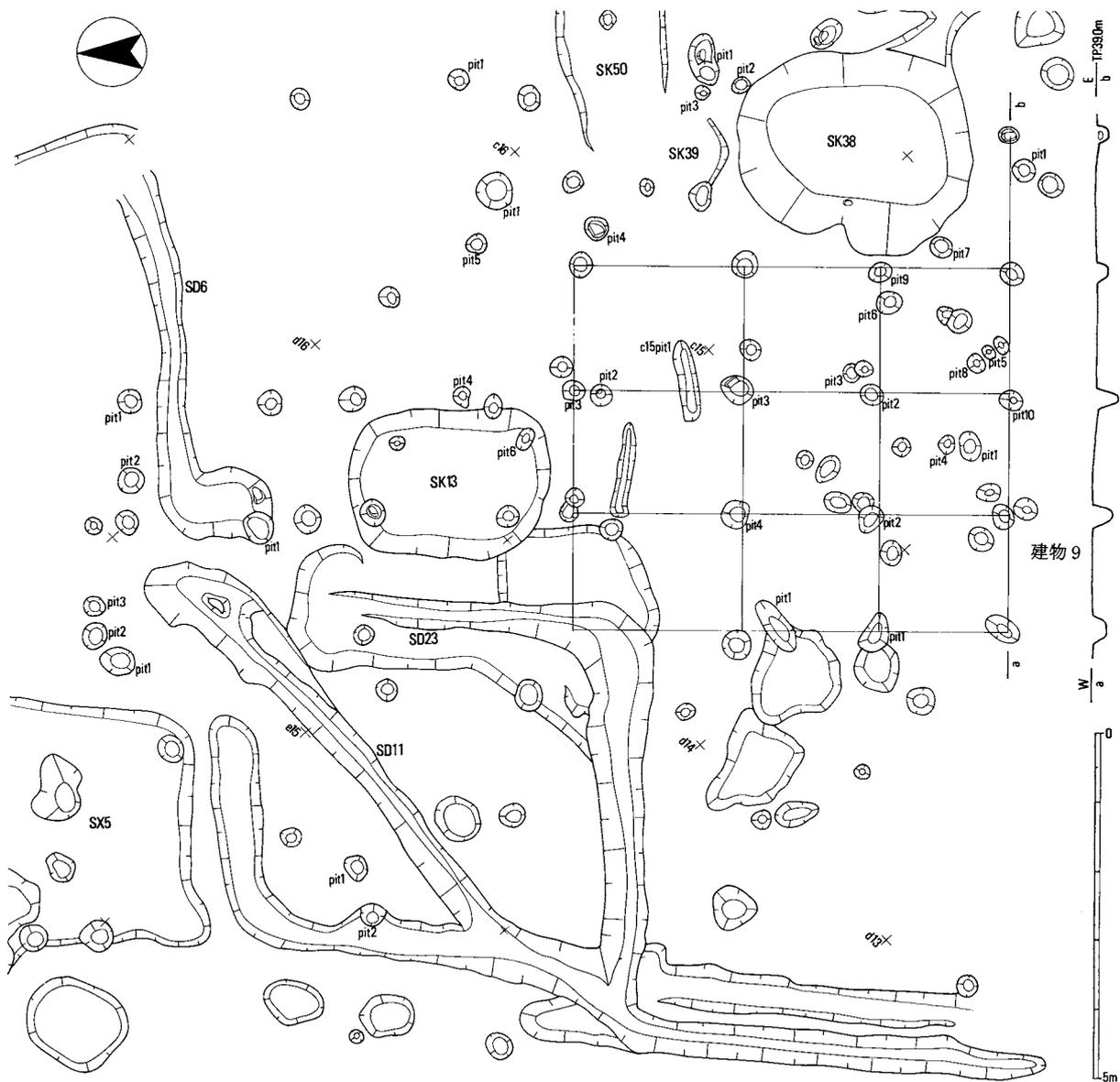


fig.18. A地区建物9付近平面・断面図 (scale=1/100)

土坑SK 4は調査区中央部の建物集中部分の南東寄りに位置する。やや歪んだ方形で、1辺約2.4mである。断面形は皿状を呈する。埋土は灰褐色系土で、焼土は認められなかった。遺構の位置からはいずれかの建物に伴う土坑である可能性は高いであろう。時期は出土土器から鎌倉時代後半から南北朝時代(Ⅱ期後半～Ⅲ期)と考えられる。

土坑SK 5 (fig.20)は調査区中央部の建物集中部分の北寄りに位置する。東西にやや長い方形のプランで、長辺約4.3m、短辺約3.6mである。断面形は皿状を呈し、全体の形状は竪穴住居を思わせる。埋土には焼土が自然堆積状に認められたが、木炭は少量であった。切り合い関係からSK 6・7・9・10よりは新しく、SK 4よりは古いことが言える。遺構の位置からは建物4に伴う可能性は極めて高いが、南東隅土坑とするには少々大きすぎるようにも思う。時期は出土土器から鎌倉時代後半から南北朝時代(Ⅱ期後半)と考えられる。

土坑SK 9・10は土坑SK 5の南で切り合い関係にあるものである。2基の土坑として検出をしたが、本来は1基のものかも知れない。埋土には多量の焼土を含んでいた。時期は出土土器から鎌倉時代前半(Ⅱ期)でも初期と考えられる。

土坑SK 13は調査区中央部やや南寄りの、建物9の北に位置する。隅丸長方形を呈し、長辺約2.9m、短辺約2.1mである。断面形は皿状を呈する。出土土器から平安時代末(Ⅰ期)と考えられる。

土坑SK 17 (fig.21)は建物集中部分の南隅に位置する。土坑の南西部分は第1次調査時の土層確認のために破壊されている。土坑は2基が重なっていると考えてよいが、検出時には不定形土坑として検

出してしまったために前後関係は層位的には確認できなかった。しかし、出土遺物の時期をみると、東側が新しく西側が古いことがわかる。便宜上、東側をSK 17E、西側をSK 17Wとする。共に断面形は逆台形を呈し、ややSK 17Wの方が深いがほぼ両者とも検出面から約0.35mの深さである。。SK 17E

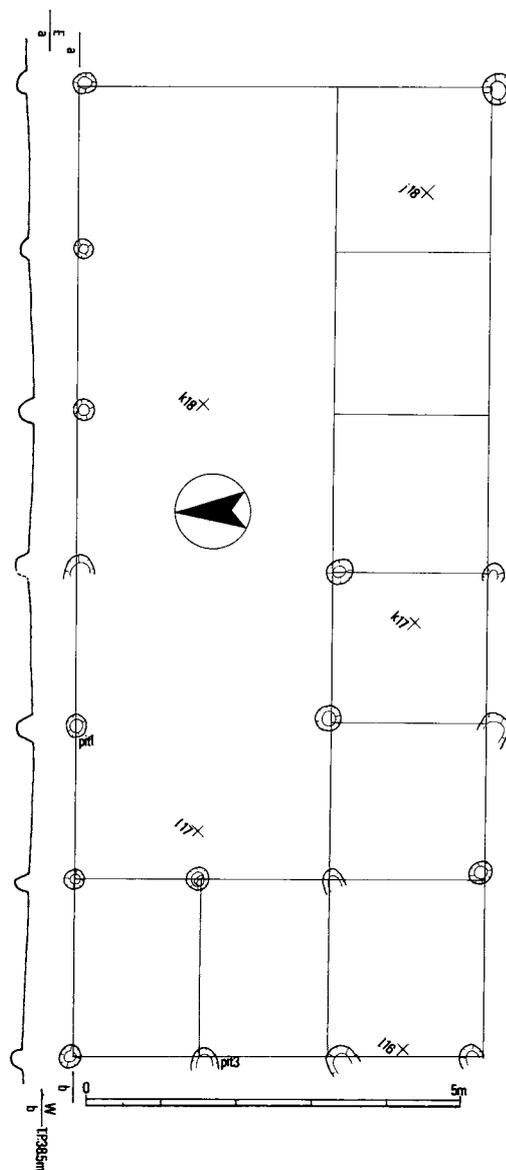


fig.19. A地区建物10平面・断面図 (scale=1/100)

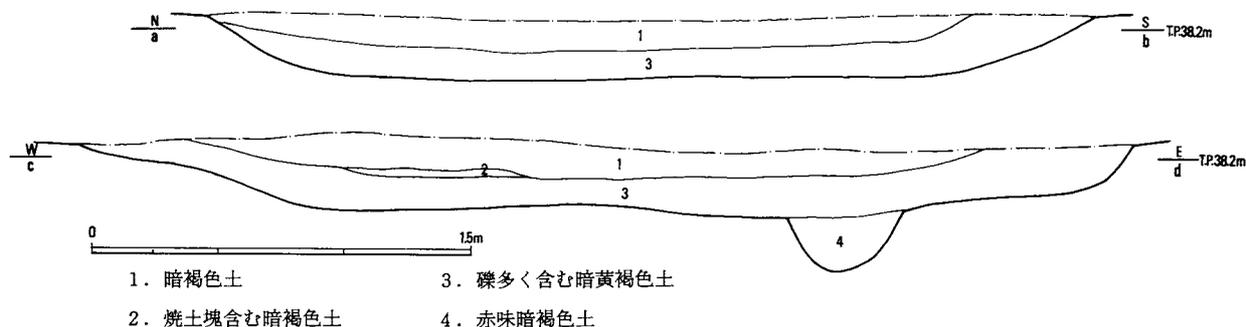


fig.20. A地区土坑SK 5土層断面図 (scale=1/30) 土層位置はfig.14

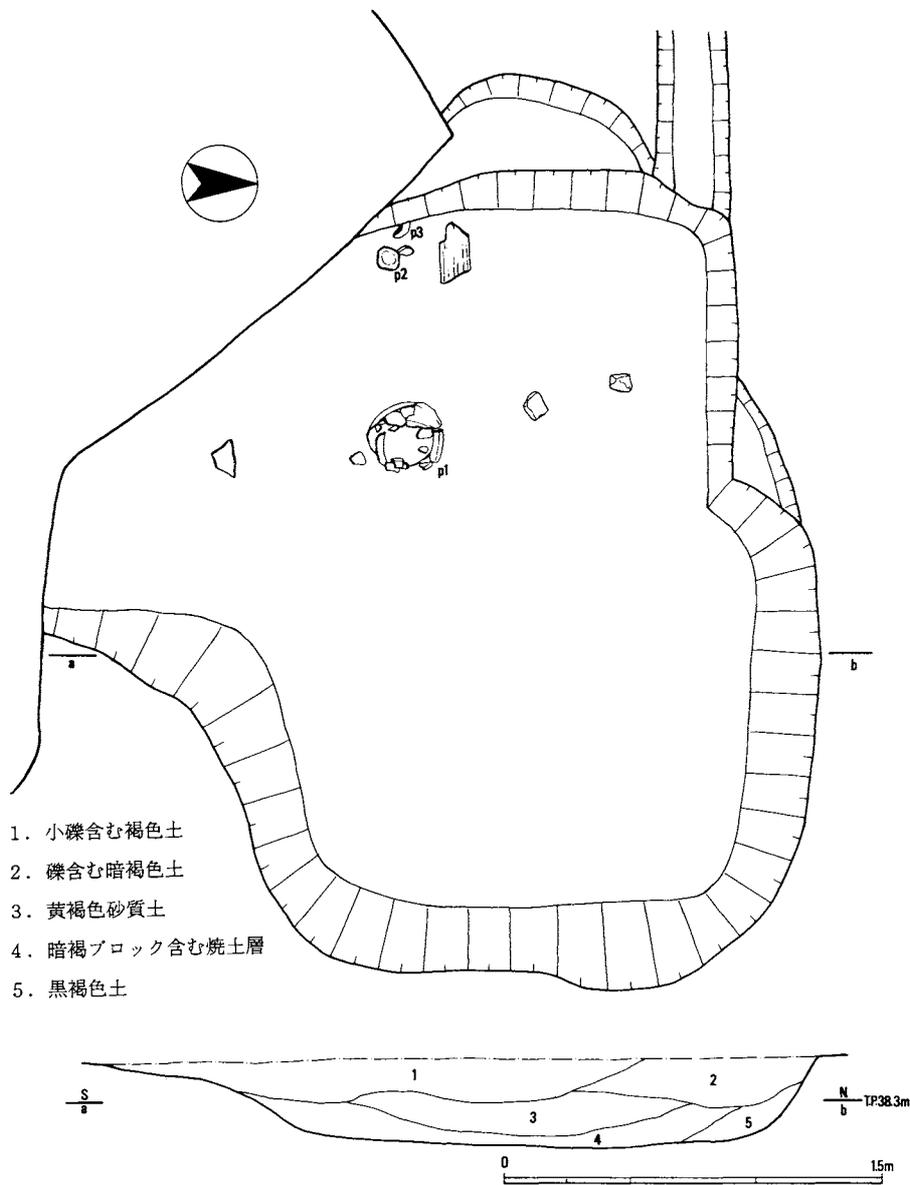


fig.21. A地区土坑SK17 (W・E) 平面・土層断面図 (scale= $\frac{1}{30}$)

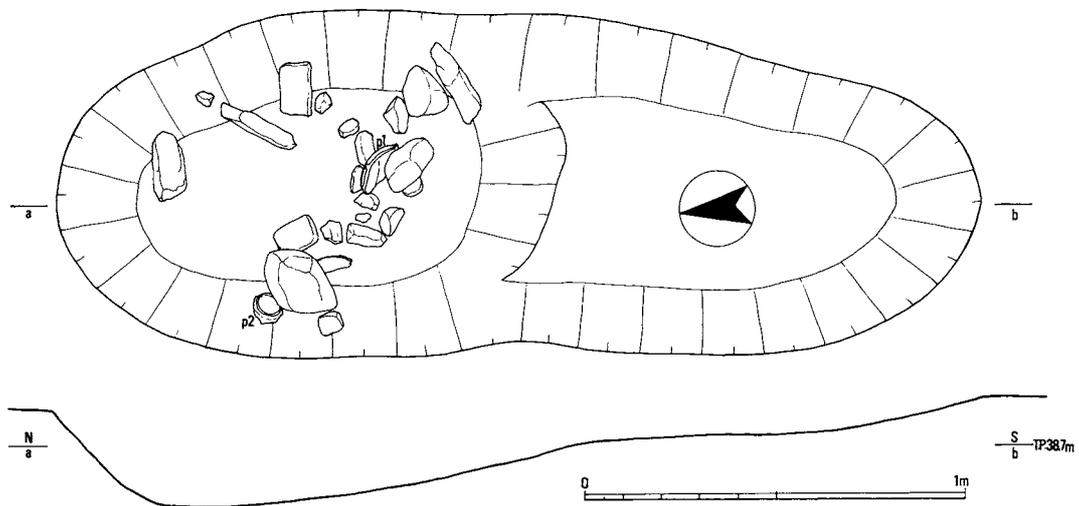


fig.22. A地区土坑SK20平面・断面図 (scale= $\frac{1}{20}$)

では埋土に焼土層が堆積している。時期は出土土器から鎌倉時代後半 (Ⅱ期後半) と考えられる。SK17Wでは土器類がまとまって出土したが、焼土層は認められなかった。この2基の土坑には溝SD12が付属するものと考えられるが、どちらの土坑に伴うものは不明である。時期は出土土器から鎌倉時代前半 (Ⅱ期前半～後半) と考えられる。

土坑SK20 (fig.22) は建物1の南約6mの位置にある。長楕円形を呈し、長軸約2.4m、短軸約0.9mの規模である。底面は舟底状で、北側ほど深くなる。最も深いところで検出面から約0.25mである。深い部分に集中して土器類や礫群が認められ、礫群の下から大和か伊賀産と思われる瓦器片が出土した。出土土器か

ら平安時代末（I期）と考えられる。

土坑S K 24は建物集中部分の南寄りに位置する。検出面からの深さは約0.15mと非常に浅いものであるが、建物に伴う土坑の可能性はある。隅丸長方形を呈し、長軸約2.9m、短軸約1.9mを測る。出土土器から平安時代末（I期）と考えられる。

土坑S K 35は建物3の北側に位置する。平面形は台形状を呈し、長軸約1.8 m、短軸約1.5mで、検出面からの深さは約0.65 mである。鉄釘が2本、土師器小皿が3枚出土しており、墓の可能性はある。時期は出土土器から鎌倉時代前半（II期前半）と考えられる。

土坑S K 36 (fig.23~25) はピット集中部分の南に位置する。円形を呈し、直径約3.3mである。検出面からの深さは約0.25mである。埋土上層の南側には大量の鉄滓（約90kg）が認められ、轡の羽口片を3個体分ほど含んでいた。土器はほとんどないが、最下層の淡黄色粘質土内に陶器甕片が認められた。時期はIII期（室町時代前半）と思われる。

土坑S K 37 (fig.24 ~25) はピット集中部分の南に近接して存在する土坑である。検出時には不定形な落ち込み（S X 7）としていたが、掘削を行っていくにしたがって方形の形状を呈することが判明した。規模は上面で長軸約3.2m、短軸約2.6mである。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さは約0.6mである。土坑底面には長さ約0.3mほどの礫が多数認められた。埋土は中層から下層にかけて焼土・炭を多く含む。出土遺物には用途不明の銅製品や鉄釘、少量の鉄滓の他、土器類が多く認められた。時期は室町時代前半（III期後半）と考えられる。

土坑S K 48 (fig.24) は土坑S K 37と切り合い関係にあるものである。両者の前後関係は平面的には把握されなかったが、土層の観察からはS K 37が後出することが判明した。形態は落ち込み状を呈し、全体の形態は不明である。出土土器から鎌倉時代後葉（II期後半）と考えられる。

土坑S K 49は調査区東壁寄りの溝S D 20の北に位

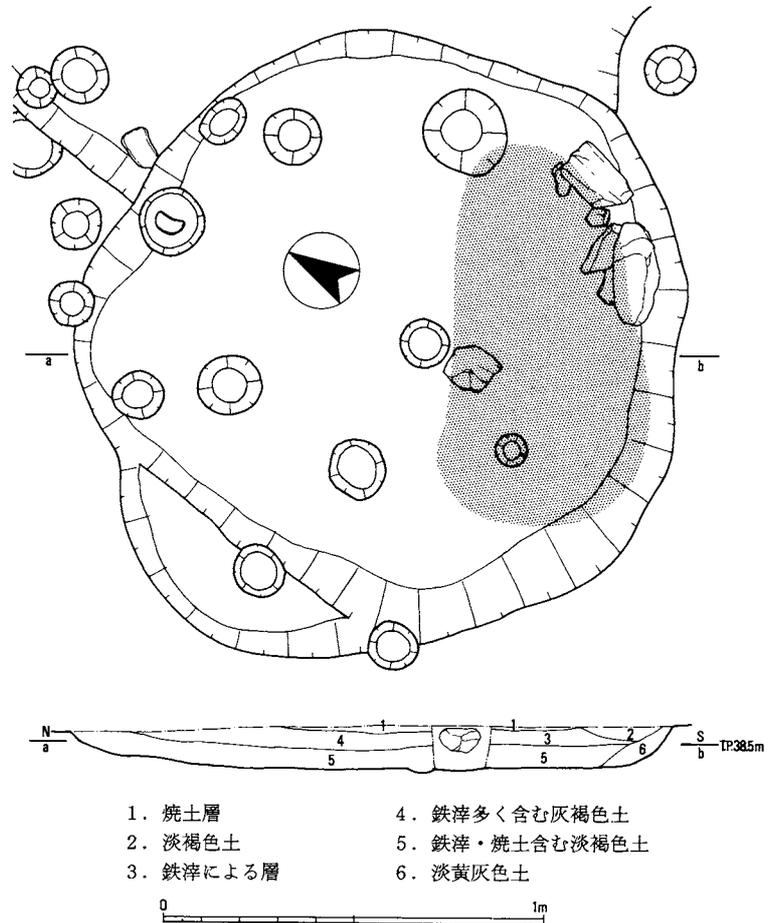


fig.23. A地区土坑S K 36平面・断面図 (scale=1/40)
※トーンは鉄滓集中部分

置する。平面は楕円形を呈し、長軸約1.2m、短軸約0.8mである。断面形は皿状で、検出面からの深さは約0.15mである。埋土内からは中国北宋期の銅銭が5枚以上出土した。これらのことから墓である可能性も想定できるが決定要素を欠く。出土土器から鎌倉時代後半（II期後半）と考えられる。

土坑S K 55は土坑S K 48の東に隣接するものである。土層の観察によってある種の掘り込みを確認したためそれをS K 55として扱った。この付近（S X 7およびS K 37～S X 9に至る部分）は全体的に落ち込み状で個々の遺構が錯綜しており、明確な判断が行いにくい。S K 55もその1つである。規模は不明である。出土土器は鎌倉時代後半から室町時代前半にかけてのものがあり、特定が困難である。

土坑S K 61 (fig.29) は調査区拡張部の東端にある。土坑東端は調査区外に出るがさほど広がるものではないであろう。検出面からおよそ0.05mを確認できたに止まるが、土坑の上に長軸約0.3mの石と土師

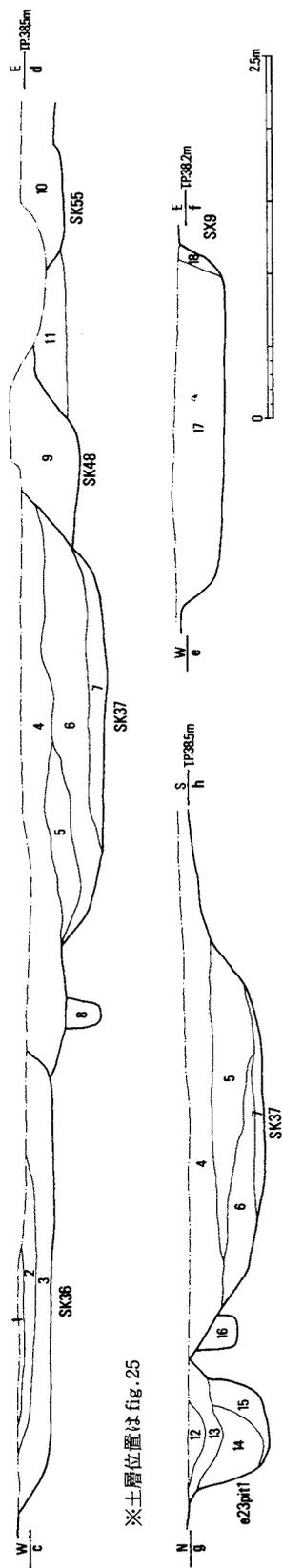


fig. 24. A地区土坑S K37他土層断面図 (scale=1/50)

- 1～3. fig.23のSK36 (1, 4, 5) に同じ
- 4. 黄色まじり暗褐色土
- 5. 暗褐色土
- 6. 焼土まじり暗褐色土
- 7. 焼土・炭まじり暗褐色土
- 8. 記入ナシ
- 9. 炭まじり暗褐色土
- 10. 焼土・炭まじり暗褐色土
- 11. 暗褐小ブロック含む黄褐色土
- 12. 焼土層
- 13. 焼土まじり淡灰褐色土
- 14. 淡灰褐色土少量含む焼土層
- 15. 焼土多い淡黄灰褐色土
- 16. 暗褐ブロック含む淡黄褐色土
- 17. 暗褐色土
- 18. 淡黄灰褐色土

器小皿があり、埋土に焼土と少量の木炭を含むことやこの付近の遺物出土状況から、墓の可能性が想定できる。時期は出土土器が少量で断定しがたいが、室町時代前半（Ⅲ期）と考えてよいであろう。

土坑S K62は土坑S K37の南側に位置している。平面は長方形を呈し、長軸約3.0m、短軸約1.6mである。検出面からの深さは約0.15mである。埋土最下層は焼土層であった。少ない出土土器から推定すれば、時期は鎌倉時代に収まるであろう。

土坑S K63 (fig.26) は、調査区拡張部の北東部分、溝S D1が途絶える付近に位置する。平面は方形を呈し、長軸約3.0m、短軸約2.7mである。検出面からの深さは約0.2mで、断面形は逆台形である。埋土は2層に分けられ、下層は淡黄色系の砂質土で、基盤層（黄色粘質土）と近似したものである。このような土層のあり方はA地区土坑S K37・土坑S X9、B地区土坑S K31などにも認められる。出土土器は極めて少量で時期の判定は困難である。

土坑S X9 (fig.23～24) は調査区拡張部の土坑S K55の東側に位置する。平面は方形を呈し、1辺約2.4mである。検出面からの深さは約0.35mである。埋土の状況は土坑S K63に類似する。出土土器から室町時代前半（Ⅲ期後半）と考えられる。

落ち込みS X1は調査区中央付近、溝S D3の北側に位置する。不定形で南北に長い形状を呈するが、溝S D19と接続しているので溝である可能性も大きい。鉄鎌が出土している。出土土器からは鎌倉～室町時代と考えられる。

落ち込みS X5は調査区中央付近の建物1の南側に位置する。方形を基本としたプランのようで土坑とした方が良くも知れない。西と北に突出する溝状のものがある。これが本来の形態かどうかは土器の出土量が少ないために判断できなかった。しかし、2基から4基の遺構が重なっていると考えるのが妥当であろう。出土土器には平安時代末（Ⅰ期）のものが認められる。この中には土師器の羽釜も認められるが、出土状態は記録していないため確実なことは言えない。

落ち込みS X7は調査区拡張部南寄りに位置する。東端は井戸S E2付近まで広がる。不定形の落ち込みとして検出したが、東半部分では下部から数基の

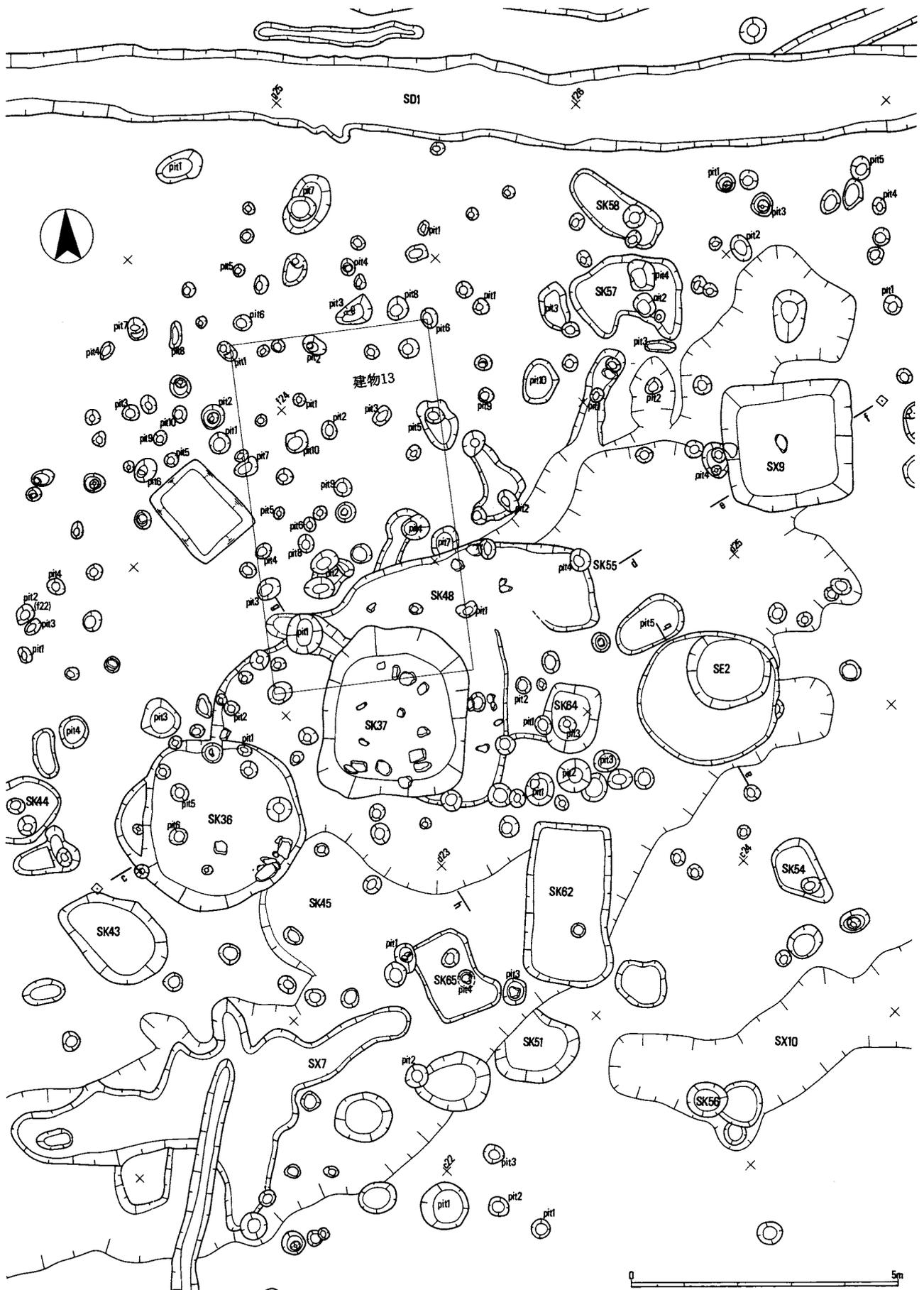


fig. 25. A地区拡張部土坑群・ピット集中部分・建物13平面図 (scale=1/100)

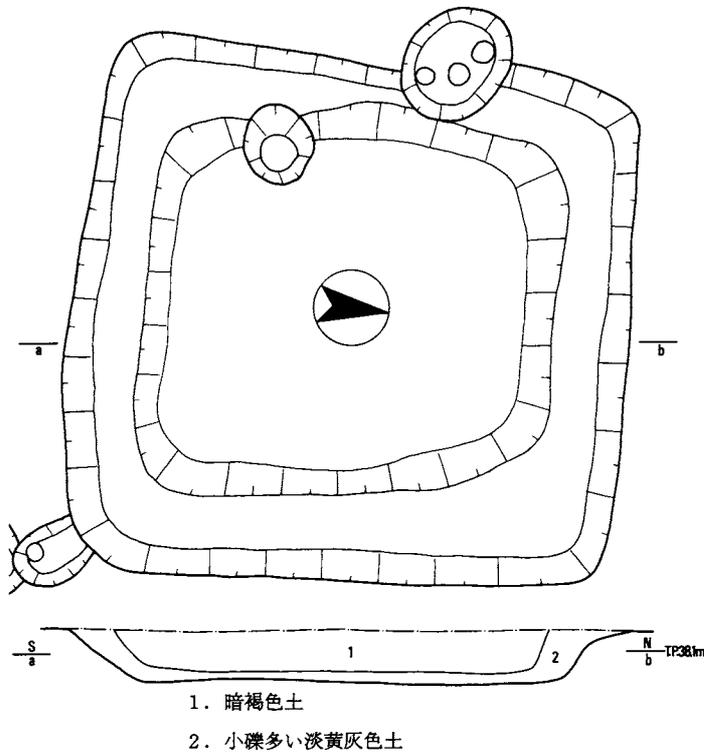


fig.26. A地区土坑SK63平面・断面図 (scale=1/40)

遺構を検出した。埋土中には比較的多くの鉄滓(約5kg)を含んでいた。遺物にはI期のもものとIII期のもものがあるが、前者は土坑SK65などに伴うものと考えられる。

井戸 (fig.27~28)

井戸は合計5基確認できた。大きくみると建物集中部分に位置するもの(SE1・SK3・21・22)と、調査区拡張部に位置するもの(SE2)とに分けられる。全て素掘りのものである。

井戸SE1 (fig.28)は建物集中部分の北に近接して存在する。直径約0.8mである。検出面からの深さは約3.3mである。埋土下層から土器類がまとめて出土している。土器の時期は鎌倉時代前半(II期前半)である。

井戸SK3 (fig.27)は建物集中部分の東に近接して存在する。検出時には長軸約2.0m、短軸約1.7mの楕円形を呈していたが、

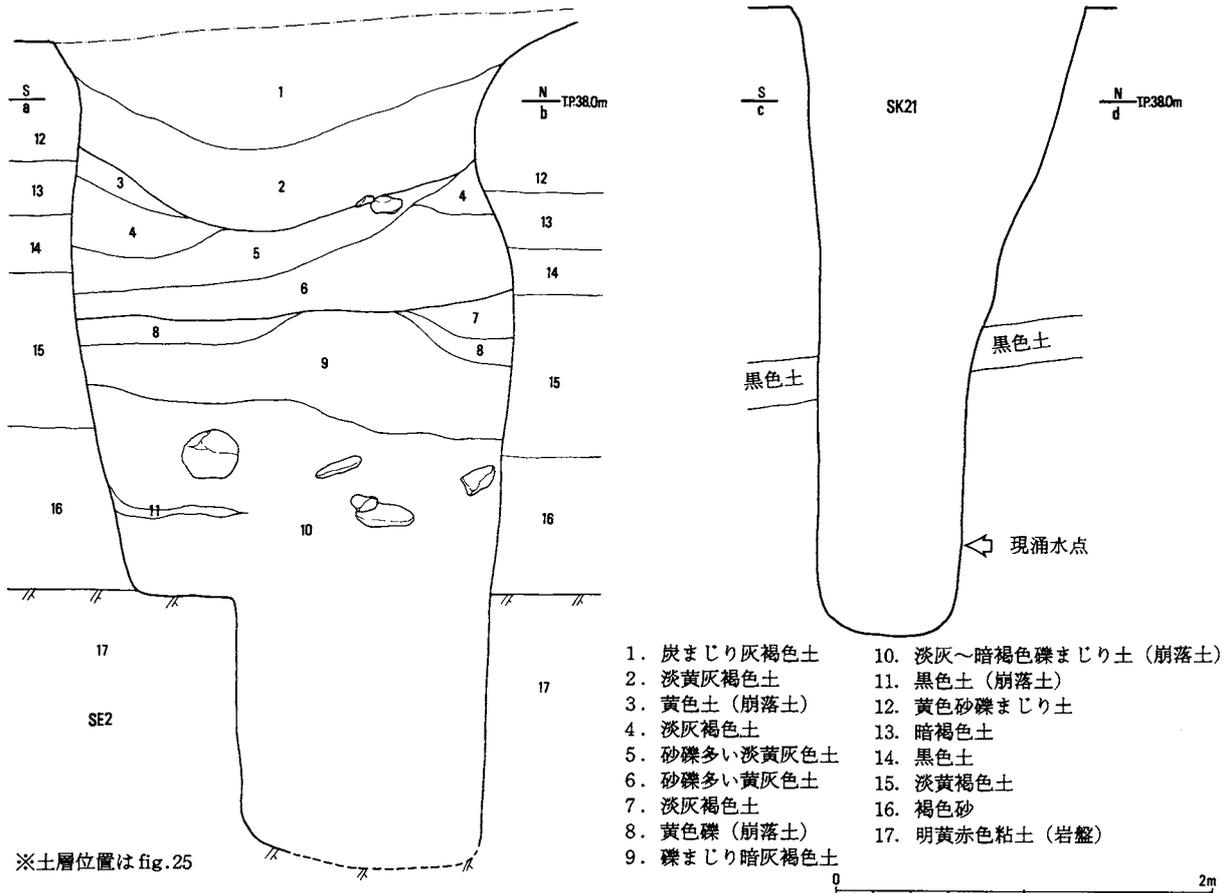


fig.27. A地区井戸SE2・SK21断面図 (scale=1/40)

断ち割りを行ったところ径約0.8mのものが崩れて大きくなっていることが判明した。検出面から約3.2mまで確認したが、それ以下は危険なために調査を中止した。出土土器は鎌倉時代後半以降室町時代(Ⅱ期後半～Ⅲ期後半)までのものが認められる。なお、この井戸から出土した陶器甕 (fig.57-22) は、土坑SK4、落ち込みSX3、土坑SK26から出土したものと、別の陶器甕 (fig.57-12) は土坑SK27、井戸SK21から出土したものと、それぞれ接合している。

井戸SK21 (fig.27) は建物1の東に近接している。検出時には長軸約1.8mの不整卵形を呈していたが、断ち割りの結果、径約0.8mのものが崩れたことが判明した。検出面から約3.3mの深さまで確認したが、それ以下は不明である。しかし、検出面から約2.8mで現在の湧水点に達するため、さほど深くないところで底に達するものと考えられる。土器は鎌倉時代前半から南北朝時代のもの(Ⅱ期前半～Ⅲ期前半)がある。出土土器に別の遺構と接合関係にあるものが存在することは建物1・井戸SK3の項で触れたとおりである。

井戸SK22 (fig.28) は建物集中部分の北に隣接し、井戸SE1の東にある。遺構掘削時には土坑と考えており、断ち割りの際に井戸であることが判明した。検出時には長軸約2.3m、短軸約1.1mの楕円

形を呈しており、ややオーバーハングして下方へ伸びている。検出面から約3.0mまで確認したが、当初のプランは不明であった。出土土器は少量で、鎌倉時代前半(Ⅱ期前半)のものが認められる。

井戸SE2 (fig.27) は調査区拡張部の中央付近に位置する。土坑SK37付近の土坑群と同様の落ち込み遺構の中に含まれている。検出時には径約2.6mの円形を呈しており、そこから約0.3m下で若干オーバーハングしている。検出面から約2.9mで地山(岩盤)に達し、その部分は南から西にかけてがテラス状となっている。そして北寄りの径約1.3mの部分が岩盤を突き破って掘削されている。埋土は、

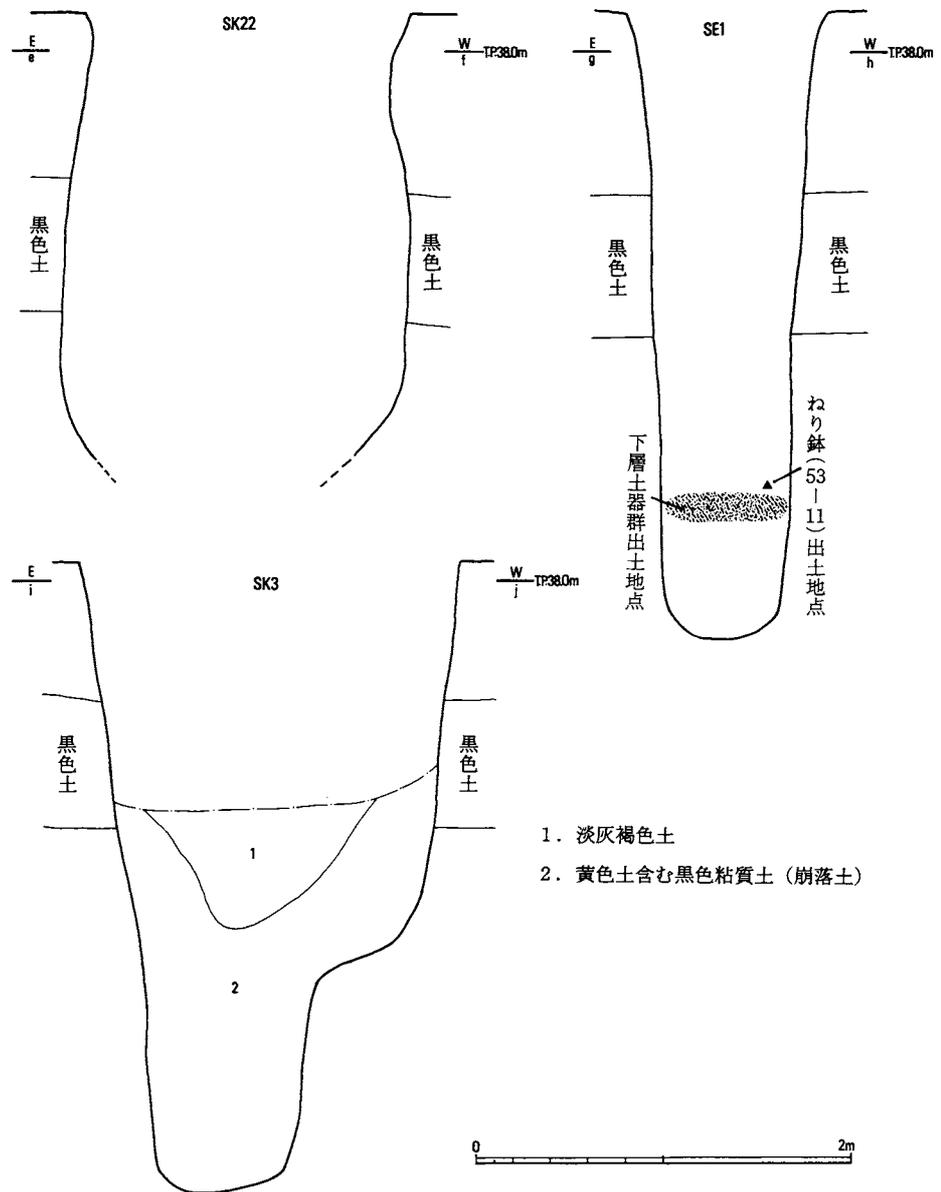


fig.28. A地区井戸SE1・SK3・22断面図 (scale=1/40)

崩落土（下層）・崩落土と堆積土の互層（中層）・堆積土（上層）に大きく分けられる。下層には長軸0.3m以上の大礫が多数認められたが石組はない。出土土器は南北朝時代から室町時代にかけてのもの（Ⅲ期）が認められ、室町時代のもが主体のようである。その他の遺物には鞆の羽口や鉄滓などが認められる。

溝 (fig. 9)

中世に掘削されたと考えられる溝は約22条認められる。それらは正確上、区画溝と考えられるもの（SD 1・2・3・15・16・19）、建物ないしはそれに付随するものと関連すると考えられるもの（SD 6・11・12・23）、溝とするよりは落ち込みに近いもの（SD 4）などがある。これらのうち、主なものについて記述する。

区画溝SD 1・2・3・15・16・19は調査区中央やや北寄りを東西方向に走る溝である。これらの溝の埋土は赤褐色系土を基本としている。溝の断面形は逆台形を呈する。SD 2は近世以降の溝SD 8と交差する付近から西側にかけて深くなっている。同様のことがSD 3についても認められ、これは東側の拡張部に至る手前から東にかけて深くなっている。これらは再度掘削されたことを示しているのかも知れない。また、SD 2は西端でやや南に曲がっており、それに平行するかたちでSD 16が認められるとともに、途切れたところからおおよそ2mでSD 15が始まっている。これは、この部分がある種の通路ないしは入口に相当すると考えられる。出土土器から時期を考えると、SD 1は鎌倉時代前半～室町時代前半（Ⅱ期～Ⅲ期後半）、SD 2は平安時代末～

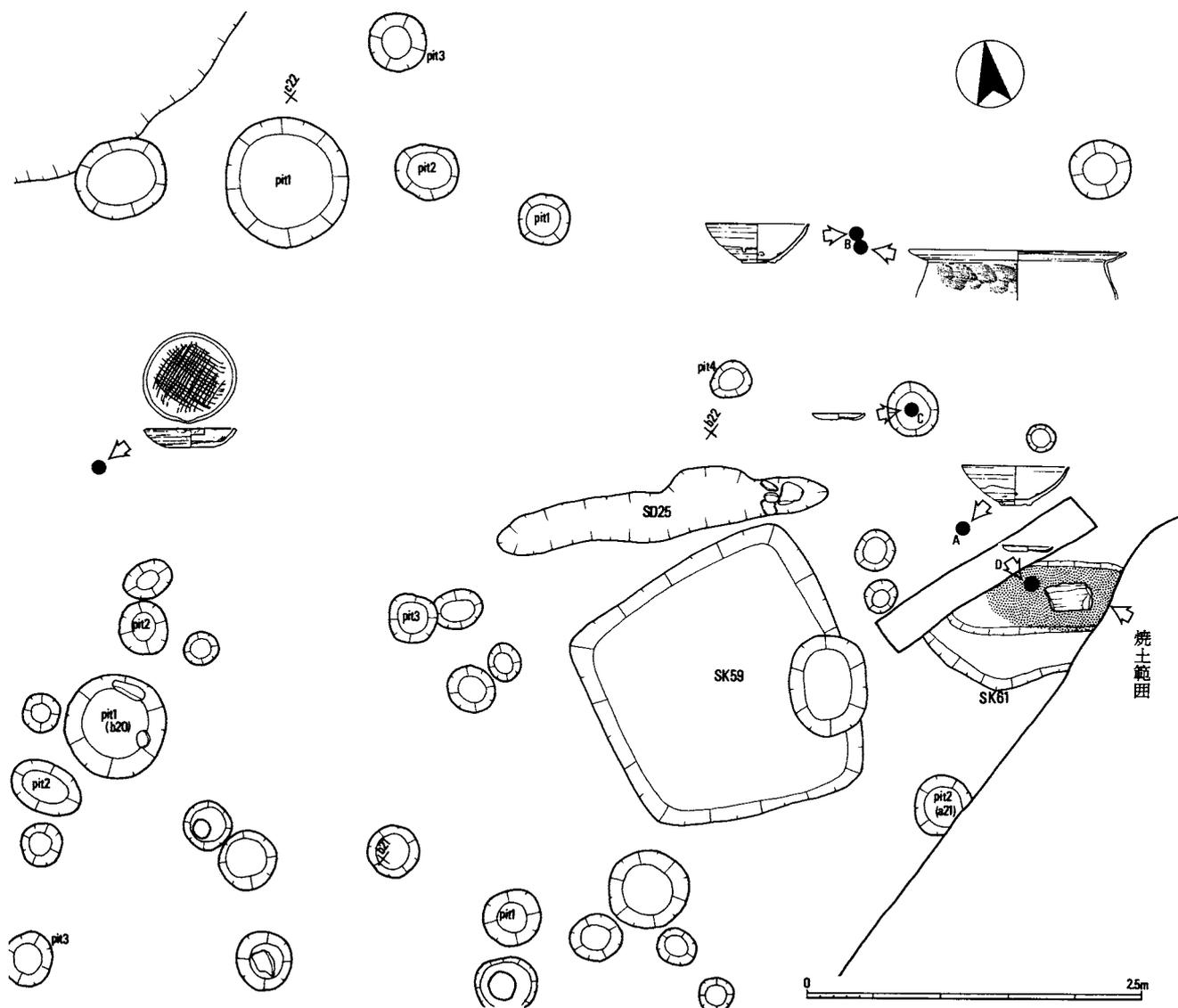


fig. 29. A地区土坑SK61付近平面および遺物出土地点位置図 (scale=1/50、遺物は1/10)

鎌倉時代前半（Ⅰ期～Ⅱ期前半）、SD3は鎌倉時代後半～室町時代（Ⅱ期後半～Ⅲ期後半）、SD15は鎌倉時代、SD16・19は不明である。

溝SD27は拡張部の東端に認められるものである。東側の肩は調査区外にあるようである。前述の区画溝と直行するかたちになるために、区画溝の可能性を想定し得るが、SD27の東は丘陵部と谷状地（湿っぽいところ）があるので、ことさら区画を行う必要がないとも考えられる。溝底には部分的に礫群が認められた。時期は出土土器から鎌倉時代～室町時代前半と考えられる。

溝SD11・23は調査区南側の、建物9と重なって確認されたものである。溝SD23は方形に巡るもので、長いところで約6m、短いところで約5.5mである。南西隅からは、西辺に相当する溝と平行する溝が南方向に2条伸びている。北東隅は繋がっておらず、その間を溝SD11が斜めに伸びて、南東隅で交差している。溝SD11からはほぼ完形に復元でき

る常滑産の三筋壺がちらばって出土した。時期的には両者とも近接しており、ともに平安時代末（Ⅰ期）と考えられる。

溝SD12は建物の項で触れた。

落ち込み状を呈する溝SD4は調査区中央から南にかけて認められるものである。検出時には溝と考えたが、南側ほど浅く不明瞭となり、落ち込みと考えた方が妥当であろう。出土土器は細片ではあるが比較的多く、鎌倉時代前半以降（Ⅱ期～）のものが認められる。

その他のもの (fig.29)

特に取り上げるものとして、拡張部南端の部分についてのことがある。この部分には明確な遺構は認められなかったが、陶器の平茶碗2点と卸皿1点、さらに土師器小皿の完形品が3点認められた (fig.29)。この地点は南から派生する小尾根の先端部分に相当し、立地条件からは墓域の可能性が想定できる。時期的には室町時代前半（Ⅲ期後半）と考えら

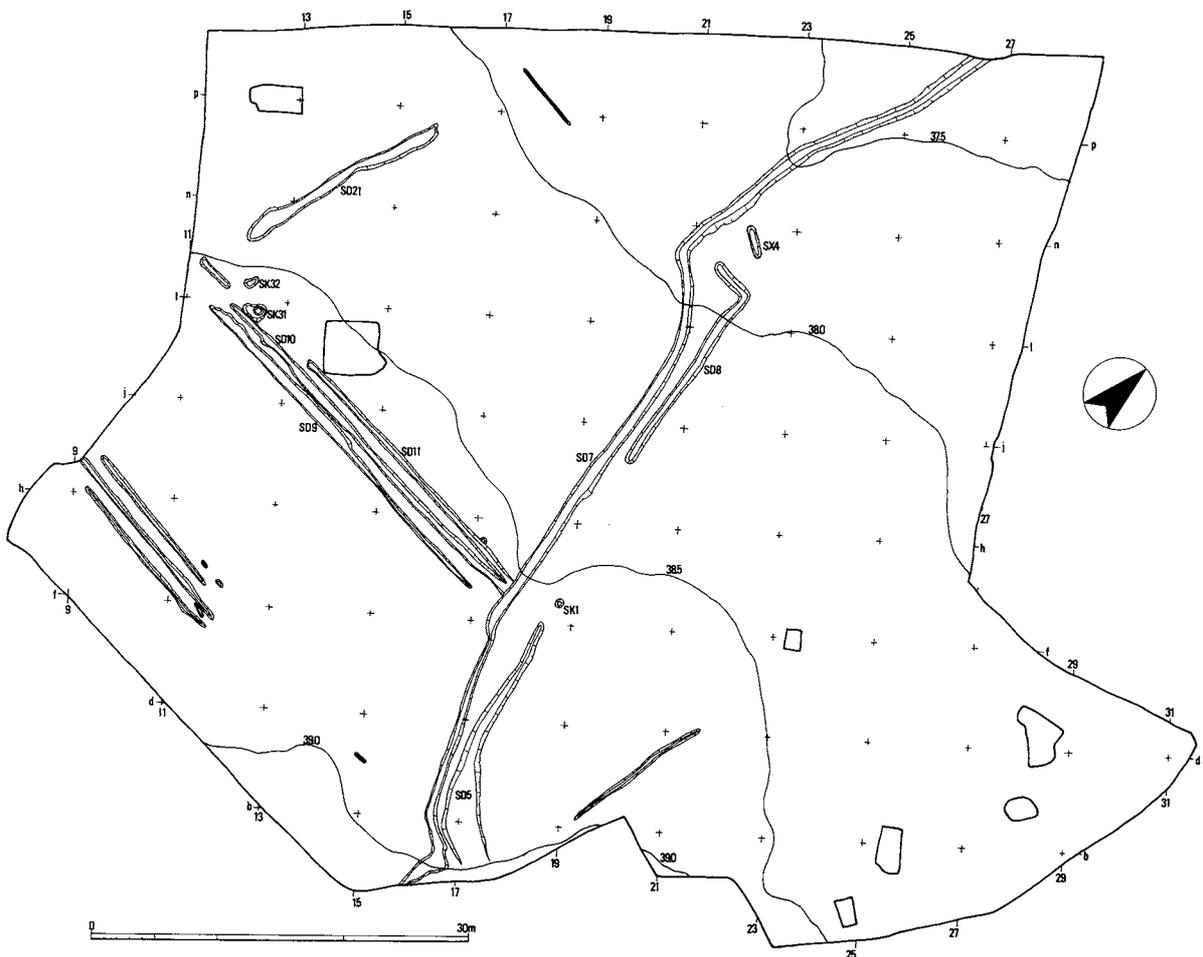


fig.30. A地区近世以降の遺構および等高線図 (scale=1/600)

れる。

近世以降の遺構 (fig.30)

近世以降のものには土坑3基と溝数条がある。土坑SK1は調査区中央付近にあり、土師器鍋の良好なものが認められた。溝は3条単位でまとまるものと調査区中央部を南北に走るものがある。溝SD9・10・11は耕作に伴うものと思われる。溝SD7・8は小字の境目あたりに認められるもので、そういう意味では区画溝に相当するものであろう。これらは時期的には江戸時代から昭和初期までのものと考えられる。

A地区のまとめ

A地区では平安時代から室町時代前半に至る時期の遺構が認められた。これらは大別すると居住域と生産域、さらに可能性として墓域とがある。

居住地は建物集中部分に想定でき、おおよそ5棟ほどの重なりが認められる。これらは棟方向がほぼ揃っており、時期的にも接近したものであるために同一集団(家族?)によって建て替えが行われた「屋敷地」とみられる。「屋敷地」として存在していたのは、I期からIII期まで(平安時代末～室町時代)で、それ以降は廃絶しているようである。この「屋敷地」の北は区画溝が存在しており、建物11付近は別の居住域と考えるのが妥当であろう。

区画溝南側の遺構群には「居住地」を示すものと「工房」を示すものがあり、両者は同一の集団によるものと考えられる。このことは違った遺構から出土した土器が接合していることや、建物1に竈の

羽口片が認められることから窺われるであろう。

「工房」に関するものには、直接にそれを示す炉などの遺構は見つからなかった。しかし、土坑SK36に認められた大量の鉄滓と、井戸SE2や建物1(ピット)から出土した鉄滓や竈の羽口は、この遺構が造られた時期に確実にこの生産が行われていたことを示すものである。出土した鉄滓からは鉄器の鍛造に関わるものと考えるのが妥当かと思われる。工房の存在時期はIII期(南北朝時代～室町時代)は確実であり、それ以前にも存在していた可能性も想定される。

溝は平安時代末～室町時代のもものが認められる。溝埋土に含まれる平安時代末の土器は山茶碗が多く、土師器甕などはほとんど含まない。なお、溝SD2から出土した平安時代末以前の甕の存在は、当地の区画がその時期まで遡る可能性を含んでいる。しかし、掘削時がその時期まで遡る可能性は調査による結果からは確認することができなかった。

墓域はその可能性が想定できるのみであるが、後述するB地区の状況からは可能性が大きいと思われる。土坑SK61の存在もそれを裏付けるものではないだろうか。

近世以降は遺構こそ存在するものの、土器の型式が中世と連続しないことや遺構がまばらでまとまらないことから中世と連続性をもつものと考えことはできない。したがってA地区の遺構群は中世後期(室町時代前半)に至って廃絶したものとするのができよう。

遺構番号	小地区	性格	時期	その他
SK1	f18	土坑	江戸時代～	*
SK2	e20	土坑	II期前半	*
SK3	j19	井戸	II期前～III期	SK4・21・27・26・SX3・SD13と接合関係。鉄滓少量。
SK4	i17	土坑	III期	方形
SK5	i17	土坑	II期後半	方形 建物4に伴う? 焼土層あり鉄滓少量 青磁6点
SK6	j18	土坑	II期後半	建物6に伴う? 青磁2点
SK7	j17	土坑	II期前半	建物6に伴う? 青磁6点
SK8	j16	小土坑	II期前半	*
SK9	i17	土坑	I期	焼土含む。
SK10	i17	土坑	I期	焼土含む。
SK11	i15	土坑	II期後半	
SK12	i15	土坑	II期	
SK13	d15	土坑	II期前半	
SK14	j15	小土坑	II期	皿類多い。
SK15	i18	小土坑	II期	

遺構番号	小地区	性 格	時 期	そ の 他
S K16	j 18	落ち込み	Ⅱ期?	鉄滓少量。
S K17	k 15	土 坑	Ⅱ期前半	2基が重なる。建物に伴う土坑 *
S K18	m19	土 坑	Ⅱ期以降	
S K19	l 20	土 坑	Ⅱ期前半	
S K20	f 13	土 坑	I 期	中世墓?瓦器含む。 *
S K21	g 17	井 戸	Ⅱ期後～Ⅲ期	S K 3.27と接合関係。 *
S K22	k 19	井 戸	Ⅱ期前半	
S K23	m16	落ち込み	I 期	鉄滓少量。
S K24	j 16	土 坑	I 期	建物に伴う土坑? *
S K25	j 17	落ち込み	Ⅱ 期	
S K26	i 16	小土坑	Ⅱ期後半	S K 3. S X 3. S D13と接合関係。
S K27	g 15	土 坑	Ⅱ期後～Ⅲ期	S K 3. S K21と接合関係。 *
S K28	l 14	小土坑	I 期	
S K29	n 16	土 坑	不 明	
S K30	n 16	落ち込み	Ⅱ 期	
S K31	k 12	土 坑	近世～近代	
S K32	l 12	土 坑	近世～近代	
S K33	j 10	土 坑	Ⅱ 期	中世墓?
S K34	i 15	小土坑	Ⅱ期後半	
S K35	p 15	土 坑	Ⅱ期前半?	中世墓? 釘2点 *
S K36	d 22	土 坑	Ⅲ 期	鉄滓多量に含む。鞆羽口少量 釘1点。 *
S K37	d 23	土 坑	Ⅲ期後半	鉄滓含む。S D 1と接合関係。 *
S K38	b 15	土 坑	Ⅱ 期	鉄滓少量。青磁2点 *
S K39	b 15	落ち込み	Ⅱ期後半	
S K40	p 20	土 坑	I 期	
S K41	p 21	土 坑	I 期	
S K42	m 20	土坑?	I～Ⅱ期前半	
S K43	d 21	土 坑	Ⅲ期?	鉄滓少量
S K44	e 21	土 坑	Ⅲ期?	S D 1・S K58と接合関係。
S K45	d 22	落ち込み	I～Ⅱ期	鉄滓少量
S K46	a 15	落ち込み	Ⅱ期前半	
S K47	a 15	落ち込み	Ⅱ 期	青磁1点
S K48	e 23	土 坑	Ⅱ期後半	釘2点 *
S K49	k 26	土 坑	Ⅱ期後半	北宋銭5枚以上。中世墓? *
S K50	b 16	落ち込み	Ⅱ期後半	
S K51	c 22	土 坑	Ⅲ期前半	鉄滓少量。
S K52		欠 番		
S K53	g 22	土 坑	Ⅱ期後半	
S K54	b 24	土 坑	Ⅱ期後～	
S K55	d 24	土 坑	Ⅱ期後～Ⅲ期	2時期重複?鉄滓少量。青磁6点白磁2点。 *
S K56	a 24～b 24	落ち込み	Ⅱ 期	S X10と同一。青磁1点。
S K57	e 25	落ち込み	Ⅱ期以降	
S K58	e 25	土 坑	Ⅱ期以降	S D 1・S K44と接合関係。
S K59	a 21	土 坑	Ⅲ期後半	
S K60	e 27～d 27	落ち込み	Ⅱ期後半?	
S K61	a 22	中世墓?	Ⅲ期?	焼土炭層あり *
S K62	c 23	土 坑	Ⅲ期前半	焼土層あり。鉄滓少量。 *
S K63	c 27	土 坑	Ⅲ期前半	*
S K64	d 24	小土坑	Ⅱ 期	
S K65	c 22	土 坑	I 期	
S K66	d 27	土 坑	不 明	
S X 1	l 22	落ち込み	Ⅱ～Ⅲ期	鉄滓少量。
S X 2	k 22	溝	Ⅱ期～	S D19に接続する。
S X 3	l 22	落ち込み	Ⅱ 期	S K 3.26. S D13と接合関係。
S X 4	m 22	落ち込み	近世以降	

tab. 2 楠ノ木遺跡A地区遺構一覧表

*は文中にて記述している遺構

遺構番号	小地区	性 格	時 期	そ の 他	
S X 5	f 15	不定形土坑	I～II期前	2～3基の重複?	*
S X 6		欠 番			
S X 7	c 21	落ち込み	II～III期	鉄滓少量。	*
S X 8	k 24	土 坑	III期前半	縄文土器混入。	
S X 9	d 25	土 坑	III期後半	鉄滓少量。	
S X 10	b 23	落ち込み	II 期	S K 56と同一。鉄滓少量。	
S X 11	ア 23	落ち込み	III期前半		
S E 1	k 18	井 戸	II期前半		*
S E 2	c 24	井 戸	III期後半	鉄滓多い。良好な輪羽口あり	*
S D 1	h 23～	区画溝	II期～III期後	i 22. f 25に鉄滓少量。	*
S D 2	i 23～	区画溝	II 期		*
S D 3	j 23～	区画溝	II期後半～	i 23. k 23. h 24に鉄滓少量。	*
S D 4	d 19～	溝	II 期	落ち込み状。鉄滓少量。	*
S D 5	e 18～	溝	II期?		
S D 6	d 16～	溝	I期?	縄文土器混入。	
S D 7	h 18～	溝	近世～近代		
S D 8	l 21～	溝	近世～近代	耕作に伴うもの?	
S D 9	i 14～	溝	近 世	耕作に伴うもの?	
S D 10	i 14～	溝	近 世	耕作に伴うもの?	
S D 11	d 15～	溝	I 期	三筋壺出土。	
S D 12	l 14～	溝	II期前半	土坑S K 17に伴うもの?	*
S D 13	p 15～	溝	II期以降	S K 3・4・26. S X 3と接合関係。	
S D 14	o 14～	溝	近・現代	II期の土器混入。	
S D 15	q 16～	区画溝	I～II期		*
S D 16	q 16～	区画溝	不 明		*
S D 17	b 19～c 20	溝	近・現代?		
S D 18	f 25～g 25	溝	I 期		
S D 19	j 24～	区画溝	III期以降		*
S D 20	j 26～	溝	III期?		
S D 21	m 12～o 15	落ち込み	不 明		
S D 22	n 12～n 13	落ち込み	II 期		
S D 23	d 15～e 14	溝	I 期	方形に巡る。	
S D 24	c 29～	溝	III期後半	S D 1のつづきか?	
S D 25	a 21～b 21	小溝	II期?		
S D 26	ア 25～a 25	溝	不 明	落ち込み状。	
S D 27	b 29～	溝	II期～III期前	区画溝か?	*
S D 28	i 24～	区画溝	不 明		

tab. 3 楠ノ木遺跡A地区遺構一覧表

*は文中にて記述している遺構

遺構名	棟方向	主軸方向	規 模 桁行(m)×梁間(m)	根石の 有無	時 期	備 考
建物1	東西棟	N 1° E	5間(10.0m)×4間(6.3m)	有	II期後半～III期	付属施設(2間×2～3間)が伴う。土坑S K 27が伴う。
建物2	東西棟	N 3° E	5間(10.3m)×3間(6.3m)	無	I 期	土坑S K 28は関連遺構か?
建物3	東西棟	N 6° E	3間(5.7m)×2間(4.2m)	無	I期?	
建物4	東西棟	N 2° E	8間(12.7m)×5間(9.0m)	有	III期?	土坑S K 5が伴う。廂あり
建物5	東西棟	N 5° E	4～5間(9.7m)×4間(7.9m)	有	I 期	土坑S K 24が伴う。
建物6	東西棟	N 1° E	5～6間(10.0m)×4間(7.9m)	有	II期後半	土坑S K 6・7が伴う。
建物7	南北棟	N 2° E	4間(4.8m)×2間(3.6m)	無	II 期	
建物8	不 明	N 7° E	2間(3.6m)×2間(3.6m)	無	II 期	
建物9	南北棟	N 2° E	3間(6.4m)×3間(5.5m)	有	II 期	土坑S K 38は関連遺構か?
建物10	東西棟	N 3° E	6間(12.8m)×3間(5.5m)	無	II 期	
建物11	不 明	N 2° E	3間(6.4m)×2間(4.3m)を確認	無	I 期	土坑S K 40が伴う。
建物12	東西棟	N 5° E	3間(5.5m)×2間(4.5m)	無	不 明	
建物13	南北棟	N 7° W	3間(6.4m)×2間(3.6m)	有	II期後半	工房?根石は小礫の集まりである。

tab. 4 A地区掘立柱建物一覧表

2. B地区の層位と遺構

層位 (fig.32)

B地区は北方へ派生する尾根が終結する先端の北側とその尾根の西斜面に相当する地点にあり、標高約40～42mである。層位的にはA地区の状況と類似する。表土は暗灰褐色系の砂質土で約0.2～0.3m堆積しており、その下の暗黄灰色系砂質土層が中世の遺構基盤層に相当する。井戸S K 30の断ち割りの際に確認した層位では、表土下約0.6mと約1.2mの部分に2層の黒褐色系の粘土層がある。この層は調査区南西方向に位置する尾根に近づくほど薄くなることから、調査区北方の平坦地側でレンズ状に堆積していることが分かる。井戸S K 30付近では、表土下約2.6mで地山（マンガンを含んだ黄色粘土層）に達する (fig.42)。

層位で注目されるのは調査区北壁の土層 (fig.32) に認められる、黒褐色系粘質土が不連続なことである。この土層では西側の層が上方へ撥ね上げられたような状況を呈している。これはあるいは地震の際の断層とも考えられるが、地質学的な検討を行うだけの力量はないので断定することは避けたい。

遺構 (fig.31ほか)

検出した遺構は中世の以降が大部分で、1基のみ奈良時代のものがあつた。また、それらの遺構に縄文土器・弥生土器が少量混入しており、地山までの層のどれかが、あるいは縄文・弥生時代の遺物包含層に相当するのかも知れないが、それを特定することはできなかった。

中世の遺構には掘立柱建物・土墳墓・土坑・井戸・溝などがある。記述の便宜上地形的状况から溝S D 2・3以南を「南側斜面」、以北を「北側平坦部」とする。

掘立柱建物、その他ピット

掘立柱建物は5棟確認できたが、検出したピットの数から、さらに数棟存在しているものと考えられる。これらは、北側平坦部に存在しており、南側斜面には、確認できなかった。斜面上には、たとえ存在していたとしても1～2棟で、平坦地に比べれば少ないと考えられる。

建物1 (fig.33)は北側平坦部の北西に存在する3

間×2間のもので、南北棟と考えられる。柱間は全体に不統一であるが、桁行はおよそ16尺(約4.7m)、梁間はおおよそ10尺(約3m)である。ピットは直径0.3m内外のものである。時期はピットから出土した土器から、室町時代後半(IV期)と考えられる。なお、全調査区のなかで当該時期に比定できる確実な建物はこれのみである。

建物2 (fig.34)は北側平坦部のほぼ中央、溝S D 4の南側に存在する。北から2列目までの柱間は明瞭に確認できた。しかしそれ以南は釈然とせず、東側に2か所ピットを確認できたに止まる。出土土器からは溝S D 4より新しいが、溝S D 4の埋土上にピットは認められなかった。このことから、中央の調査ができなかった部分に広がりを持つことも考えられるが、一応4間×2間の建物と考えておきたい。東西棟と考えると柱間は桁行がおよそ22尺(約6.6m)梁間がおおよそ11尺(約3.3m)である。ピットの中には部分的に石が認められ、根石をもつものであることが窺われる。時期的には鎌倉時代末～南北朝時代(Ⅲ期前半)頃と考えられる。なお、この建物と切り合い関係にある中世墓S K 25とは、出土土器を比較すると建物2の方が後出するものであると考えられる。

建物3 (fig.35)は北側平坦部の南側、斜面寄りに位置する3間×2間のものである。東西棟と考えると桁行15尺(約4.5m)、梁間14尺(約4.2m)となる。出土土器は極めて細片であるため、所属時期は不明であるが、建物4と規模が類似し、切り合い関係にあるため、それと前後する時期の築造が想定される。

建物4 (fig.35)は北側平坦部の南側、建物3と重なって検出された。東西棟と考えると桁行17尺(約5.1m)、梁間13尺(約3.9m)である。梁間の柱間は食い違っているようであるが、本来そのようなものであつたのかどうか分からない。南西隅に相当するピット(i36pit1)から土師器小皿4枚と陶器椀片がまとまって出土した(fig.60-1～5)。時期は出土土器から鎌倉時代末～南北朝時代頃(Ⅱ期後半あるいはⅢ期前半)と考えられる。

建物5は北側平坦部の北寄り確認した。1間×2間分を確認したが、建物の大部分は中央の未調査



fig.31. B地区平面図 (scale= $\frac{1}{300}$) 土層 a ~ h は fig.32、i ~ j は fig.40、k ~ l は fig.42

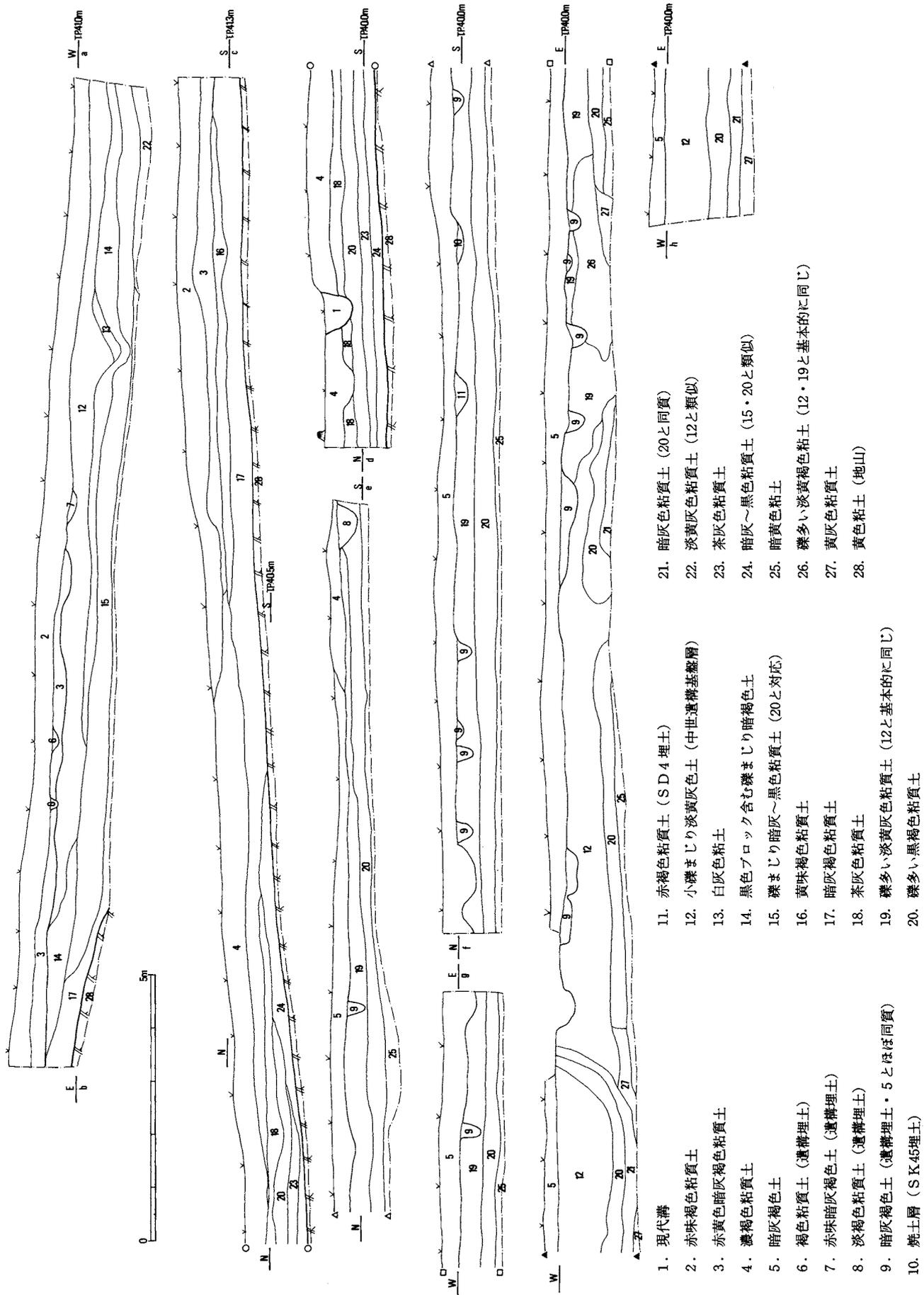


fig.32. B地区西・南・北壁土層断面図 (scale = $\frac{1}{100}$)

区域に及ぶものと考えられる。出土遺物がないので所属時期は不明である。

なお建物としてまとまらない他のピット出土の土器からは、平安時代末（Ⅰ期）から室町時代後半（Ⅳ期）にかけての建物の存在が想定される。

中世墓

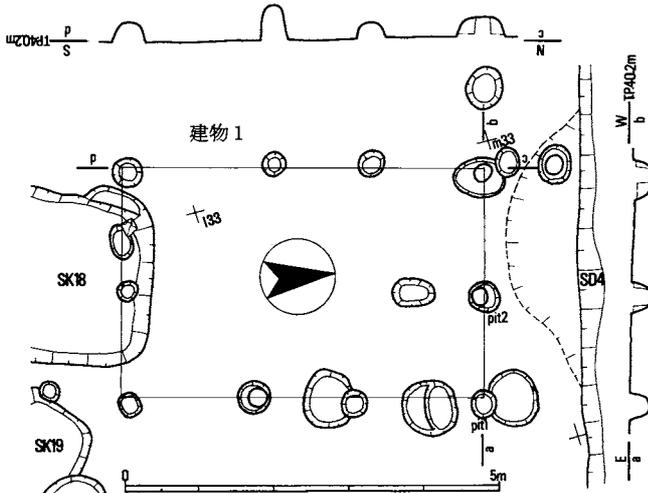


fig. 33. B地区建物1平面・断面図 (scale=1/100)

※断面では、建物に関係のない遺構を省略している。

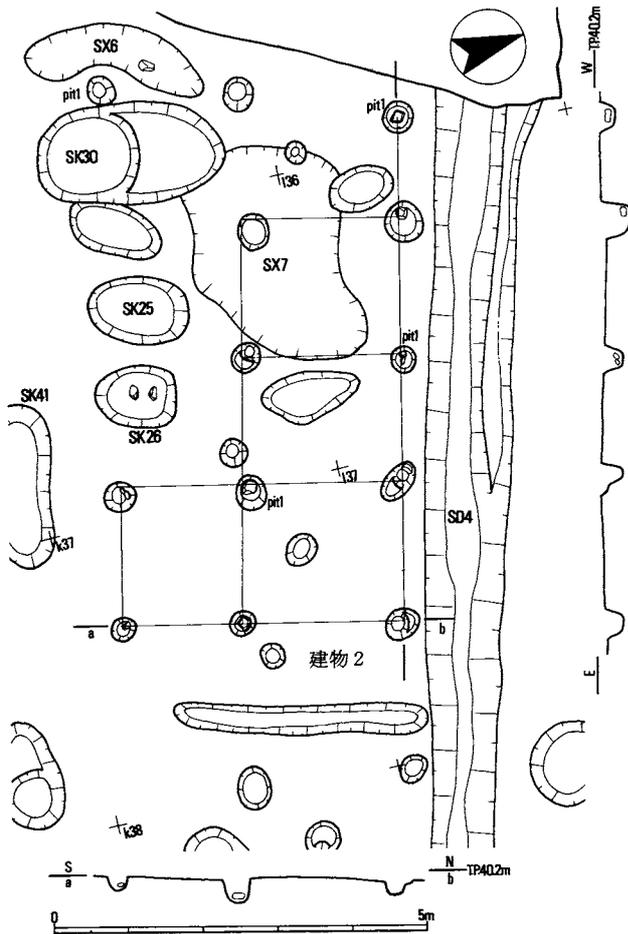


fig. 34. B地区建物2付近平面・断面図 (scale=1/10)

明らかに中世墓と考えられるものと、その可能性が考えられるものをその他の土坑とは区別して記述しておく。明らかに中世墓と考えられるのはSX3、SK4・23・25・33・43・44であり、その可能性のあるものはSK2・3・26・35・45である。

中世墓SX3 (fig.36)は調査区南端の斜面上に存在する。墓壙は長さ約1.8m、幅約1.3mの南北に長い不整楕円形を呈する。検出面からの深さは約0.3mである。木棺直葬で、棺痕跡は縦1.21m、幅0.42mのものである。小片ではあるが木棺の木質が一部残っている部分もあった。木片にはほぞ穴が残っているものもある。少量ではあるが鉄釘が出土していることから、釘の使用が想定される。棺内からは土師器小皿 (fig.61-18) が小刀の直上から出土したが、不手際があり、実測図作成前に取り上げてしまった。棺の東寄りにある小刀は、出土状況から棺外副葬品の可能性も想定できるが、木棺底面に近いことから棺内にあったものが木棺腐朽とともに外へ出たものと考えておきたい。墓壙内の棺両木口側と棺の上部には礫が認められ、特に両木口のは棺を押さえるために密に詰められている。出土土器は土師器小皿と若干の土師器細片のみであるため時期は特定しがたいが、室町時代後半以降（Ⅲ期後半～Ⅳ期）と思われる。

中世墓SK4 (fig.37)は南側斜面部中央に位置している。墓壙は長軸が約1.6m、短軸が約0.9mで、南北に長い隅丸長方形を呈している。検出面からの深さは約0.2mである。墓壙内南側には土師器小皿が5点と鉄釘が1点出土し、北側には自然石が1個あった。時期は出土土器から室町時代後半（Ⅲ期後半～Ⅳ期）と考えられる。

中世墓SK23は調査区北平坦部の東寄りに存在する。付近には中世墓SK33・43・44がある。墓壙は長軸約1.7m、短軸約1.0mで南北に長い形状を呈する。検出面からの深さは約0.5mを測る。墓壙内北寄りから土師器小皿が3枚出土した。時期は出土土器から鎌倉時代後半（Ⅱ期）と考えられる。

中世墓SK25 (fig.38)は調査区北平坦部のほぼ中央に位置し、建物2の敷地と重なっている。長軸約1.3m、短軸約0.9mの南北に長い楕円形を呈しており、検出面からの深さは約0.35mである。埋土上層

には陶器碗と不明鉄製品のほか、常滑産の大甕が破片となつてかたまっていた。この大甕はfig.38およびPL.24 にみえるように、底部片が口縁部片よりも上にあり、体部片の一部は墓壙北側に立てられた状態にある。そして接合したものは大甕を縦に半載した半分のみであった。これらのことからSK25は大甕を用いた甕棺墓ではなく、土器片を埋葬時に集積させた墓であると考ええる。埋土中層から下層には完形の土師器小皿が4枚出土した。出土遺物から鎌倉時代後葉(Ⅱ期後半)と考えられる。

中世墓SK33(fig.38)は調査区北平坦面の西寄りに位置する。付近には中世墓SK23・43・44がある。墓壙は長軸が約2.6m、短軸が約1.3mの、南北に長い隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは約0.15mである。木棺直葬と考えられるが、木棺痕跡は検出できなかった。墓壙内西端で鉄製の小刀が出土した。時期を決定出来る要素に乏しく、切り合い関係からSK43・44より新しいといえるのみである。

中世墓SK43(fig.38)はSK33の東隣に位置する。長軸約1.9m、短

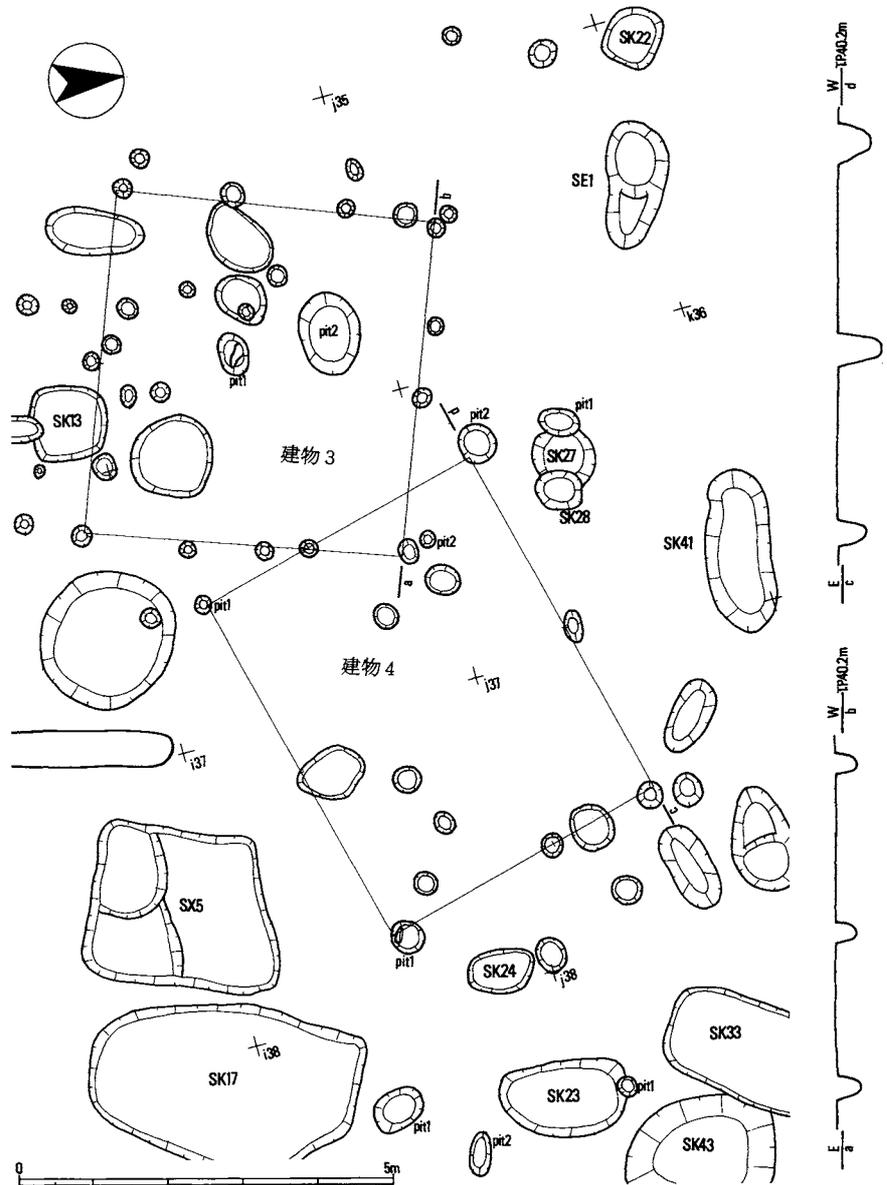


fig.35. B地区建物3・4他平面・断面図 (scale=1/100)

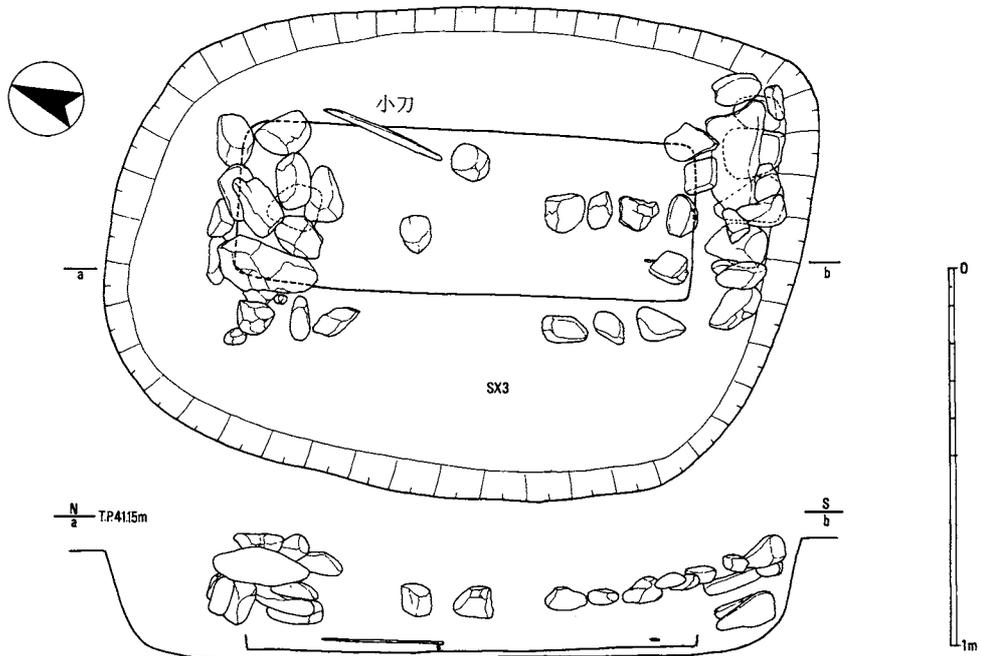


fig.36. B地区中世墓SX3平面・立面図 (scale=1/20)

軸約1.5mの南北に長い不整楕円形を呈する。検出面からの深さは約0.6mである。墓壙内北寄りに渥美産(?)の陶器壺、土師器鍋、皿(2個)、小皿(2個)を副葬品として置いている。鍋は底の一部が墓壙内から出土せず、底を打ち欠いて副葬している可能性が大きい。またこの鍋は煤が厚く付着していた。自然石が墓壙底からやや浮いた状態ではほぼ同一レベルに認められるが、規則性はない。時期は出土

土器から南北朝時代頃(Ⅱ期後半~Ⅲ期前半)と考えられる。

中世墓S K 44(fig.38)はS K 43の北側に位置する。長軸約1.6m、短軸約1.2mの南北に長い楕円形を呈する。検出面からの深さは約0.6mである。墓壙内北側で土師器小皿が3点出土した。出土土器から鎌倉時代後半(Ⅱ期後半)と考えられる。

以上が出土遺物の状態や遺構の形態などから中世墓と判断したものである。以下は個々の項で述べるように、中世墓の可能性が考えられるものである。

土坑S K 2(fig.37)は南側斜面やや西寄りに位置する。規模は長軸約1.6m、短軸約1.3mのずんぐりした楕円形を呈している。検出面からの深さは約0.6mである。埋土上部には多くの土器片を含んでいたが、遺構に伴うものかどうかは不明である。底から約0.15mほど浮いた状態で河原石と土師器皿が出土したので中世墓の可能性を考えた。時期は埋土上部にて認められた土器から南北朝時代頃(Ⅲ期前半)と考えられる。

土坑S K 3は南側斜面、S K 2とS K 4の間にある。長軸約1.2m、短軸約0.8mの東西に長い楕円形を呈している。検出面からの深さは約0.25mである。埋土は赤褐色砂質土で、鉄製の小刀と思われる破片が出土したために中世墓の可能性を考えた。時期は不明である。

土坑S K 26は調査区北平坦面のほぼ中央に位置している。中世墓S K 25の東隣で、それと並列して構築されているので、中世墓と考えてよいであろう。長軸約0.7m、短軸約0.8mの南北に長い楕円形を呈している。土坑内には自然石が2個存在していた。出土土器から鎌倉時代後半頃(Ⅱ期後半)と考えられる。

土坑S K 35・45は調査区北平坦部

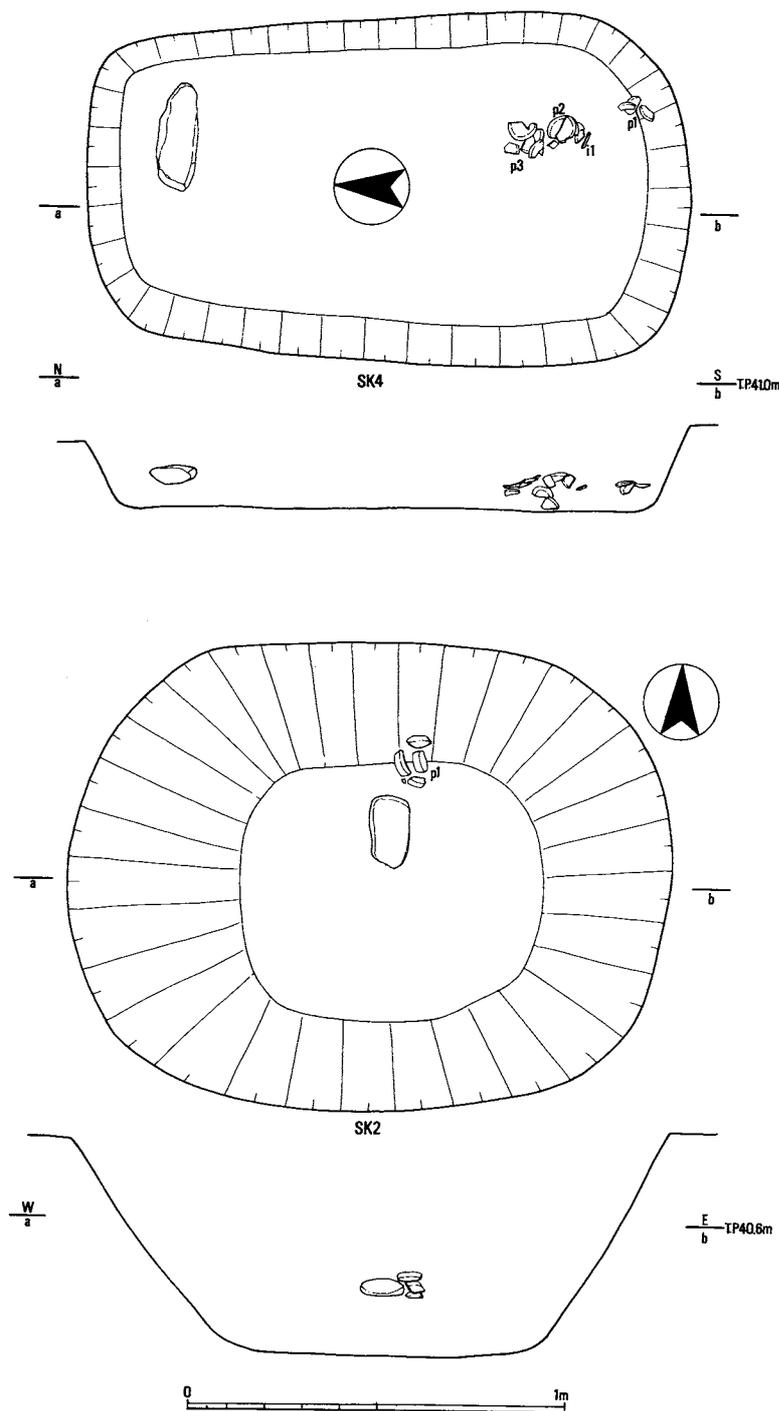


fig.37. B地区中世墓S K 4、土坑S K 2平面・断面図 (scale=1/20)

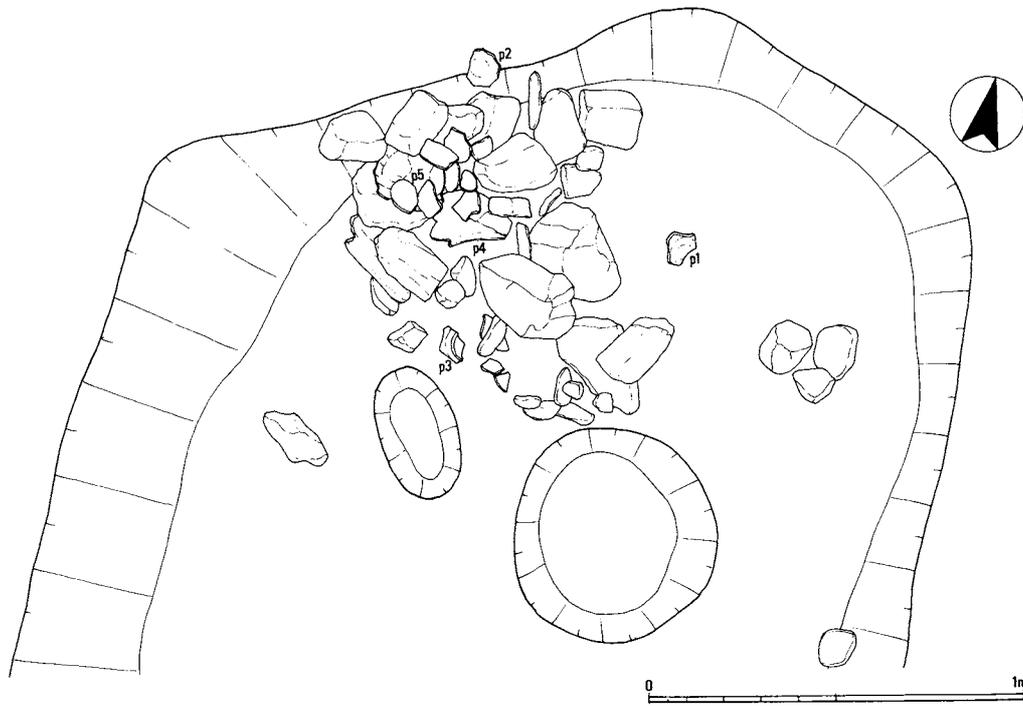


fig.39. B地区落ち込みSK1土器・礫群出土状況平面図 (scale= $\frac{1}{20}$)

の中央東に位置する。付近には中世墓SK33・43・44などがある。これらの埋土上部からは焼土が認められた。出土遺物は皆無に近いので時期は不明である。

その他の土坑・落ち込み

中世墓以外の土坑である。このなかには、比較的明瞭な掘り方のもの (SK5・SK16・SK18・SK31SK39) などのほか、浅い落ち込み状を呈するもの (SK1・SK17・SX5) もある。これらのうち、主なものについて記述していく。

土坑SK5は南側斜面の東端に位置する。遺構は検出時には浅い落ち込み状を呈していたが、最終的には長軸約2.7m、短軸約1.9mの不整長方形状を呈するものとなった。遺物は落ち込み状の部分から土坑状の部分にかけて土器類や砥石などがかなり多く

出土している。また、土坑内には多くの自然石が含まれていた。土器はその型式からはほとんど単一時期に投棄されたものと考えられる。時期は出土土器から室町時代後半 (Ⅲ期後半) と考えられる。なお、土坑内には弥生土器が混入していた。

土坑SK16は北平坦部の西寄りにあり、建物1の南に位置する。土坑SK7・SK11がこの土坑の南西部分を切り込んでいるが、3者の時期は極めて近接しているようである。長軸約3.4m、短軸約2.7mのやや胴張りの方角を呈する。断面形は摺鉢状である。時期は、出土土器から室町時代後半 (Ⅳ期) と考えられる。

土坑SK18は北平坦部の西寄りにあり、建物1の南側と重なっている。長軸約3.8m、短軸約2.2mの隅丸長方形状を呈している。掘立柱建物に伴う土坑かと思われたが、周囲にそれらしいピットは認められなかった。出土土器は主に北寄りに認められ、時的には平安時代末 (Ⅰ期) と考えられる。

土坑SK31 (fig.40) は北側平坦部北寄りに位置する。この土坑は長軸約4.0m、短軸約2.7mの繭形を呈している。掘形は垂直に近く、土坑の壁に沿って薄く淡黄灰色の粘質土

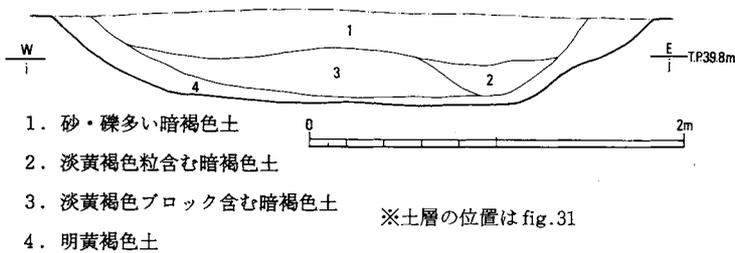


fig.40. B地区土坑SK31土層断面図 (scale= $\frac{1}{40}$)

が貼り付くように認められた。出土遺物には、釘などの鉄製品類が比較的多く認められた。時期は、室町時代前半（Ⅲ期後半）と考えられる。

土坑S K 32 (fig.41) は北側平坦部の西寄りに位置している。南側は溝S D 4に切られている。形状は南北に長く、溝状を呈しているが、溝S D 4の南にはそれに対応するものがないため、土坑と考えた。埋土は赤褐色系土であり、焼土も含んでいた。検出面からの深さは約0.1mである。南寄りで土師器甕や甑がかたまって出土したが、これらは破損後に火を受けているものであった。時期は奈良時代頃と考えられる。なお、全地区を通じて奈良時代の遺構はこの土坑のみであった。

土坑S K 39は北側平坦部の西寄りに位置し、溝S D 5と重なっている。土層の観察からはS K 39の方が後出する。土器はS D 5のものが混入しているので、時期については確実なことは言えない。

落ち込みS K 1 (fig.39) は南側斜面の東寄りに位置し、北にはS K 5がある。この遺構は長軸約3.2m、短軸約2.2mの不定形のものである。北寄りのところから礫群とともに土師器・陶器類が多く出土した。完形に近いものも含まれており、良好な一括資料となるものである。時期は、平安時代末（Ⅰ期）と考えられる。

落ち込みS K 17は調査区北平坦の東寄りに位置している。その北には中世墓S K 23・33・43・44がある。平面形は不整長方形を呈し、検出面から約0.2mの深さが残存している。室町時代前半（Ⅲ期後半）の土器類が出土している。

落ち込みS X 5は調査区北平坦面の東寄りに位置し、落ち込みS K 17の西隣に当たる。遺構はやや歪んだ方形を呈し、南側は2段に落ち込むものである。したがって人為的な土坑である可能性も十分に想定し得るが、あまり明確な堀り込みでないために落ち込みと考えた。室町時代後半（Ⅳ期）の土器が出土しているが細片のため実測は不能である。

落ち込みS D 8は調査区北平坦面の北端に位置している。南は溝S D 7によって切られている。検出面からの深さは約0.1mと極めて浅く、当初は溝としたが落ち込みとした。土師器の羽釜が出土しており、時期は室町時代後半（Ⅳ期）と考えられる。

井戸

井戸は2基確認された。いずれも調査区北平坦面の中央付近にあり、近接して築かれている。

井戸S E 1は建物3の北西方向に位置している。遺構検出時には東西約1.7m、南北約0.8mの楕円形を呈していたが、東側はおよそ0.35mでテラス状になり、井戸そのものは径約0.6m、検出面からの深さ約2.95mを測り、素掘りのものと考えられた。出土遺物は極めて少量で時期の判断は難しいが、陶器碗（山茶碗）、土師器皿などがあり、鎌倉時代後半以降と考えられる。

井戸S K 30 (fig.42) は井戸S E 1の北に位置す

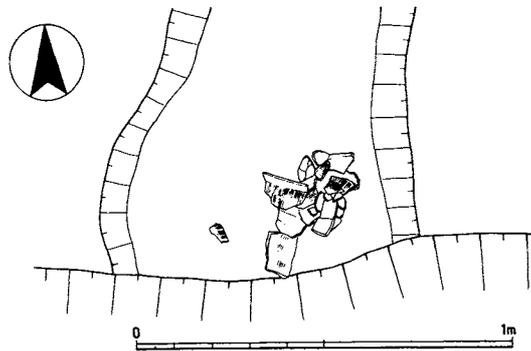


fig.41. B地区土坑S K 32土器出土状況平面図 (scale=1/20)

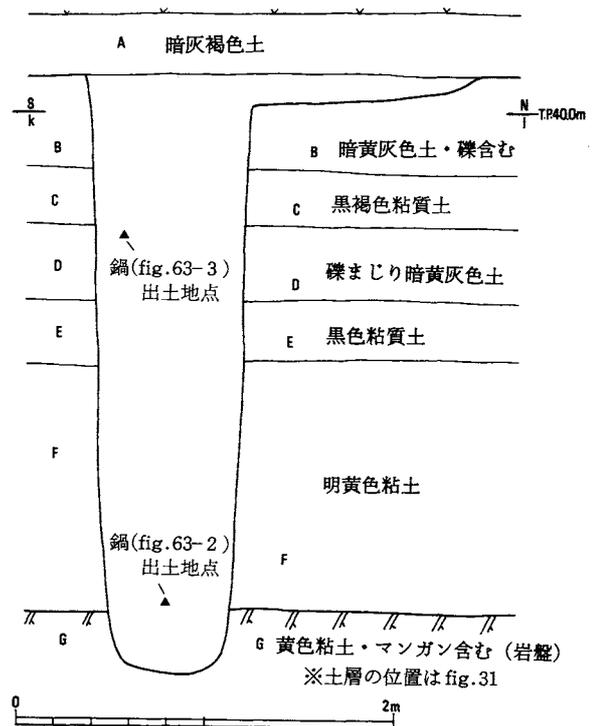


fig.42. B地区井戸S K 30断面図 (scale=1/40)

る。井戸SE1と同様、検出時には南北約2.4m、東西約1.4mの楕円形を呈しており、北側は検出面から約0.2mでテラス状となる。井戸そのものの径は約0.8mで、検出面からの深さは約3.2mを測る。素掘りのものと考えられる。出土遺物は少量ではあるが良好なものが認められた。埋土上部にはほぼ完形の土師器鍋が、井戸底付近からは鍋の口縁部が出土している。時期は室町時代後半（Ⅳ期）と考えられる。

溝

溝には、区画溝と考えられるもの（SD2・3・4・5）とその他のもの（SD6など）がある。

溝SD2・3は調査区中央部の北平坦面と南斜面との境目にある。両者は中央付近で重なっているが、ともに赤褐色系の粘質土であるため土層の観察によっても両者の前後関係を識別することができなかったため、同一に記述していくこととしたい。調査区内では東西方向の部分が主に検出されたが、西隅ではそれに直行するかたちで南北方向の落ち込みを検出しており、方形に巡らされていたものと考えられる。西側は不明瞭であるが、その場所には丘陵尾根があるので、この部分で途切れているものと考えられる。出土遺物は平安時代末頃（Ⅰ期）のものと室町時代後半（Ⅳ期）のものに大きく分けられ、2時期に掘削された可能性が想定される。

溝SD4は調査区北平坦面の中央北寄りを東西に走るものである。埋土は赤褐色系の粘質土である。溝の幅は約1.1mで逆台形を呈する。中央付近では北側に1段テラスが認められた。出土土器から鎌倉時代（Ⅱ期）に存在していたものと考えられる。

溝SD5は調査区北平坦面の北寄りに存在し、南北方向に走るものである。南寄りでは幅約0.5m、検出面からの深さ約0.15mであるが、北側では幅約

0.8m、深さ約0.25mとなる。北端で埋土最下部に焼土や木炭が認められた。出土土器はⅠ期からⅡ期（平安時代末～鎌倉時代）のものが認められる。

溝状を呈する遺構として、北平坦部の北寄り、溝SD5より東側にあるSD6・7付近のものや、調査区南斜面東寄りのSD1などがある。これらは出土遺物がほとんどないので時期的には不明である。近年の植林に伴うものとも考えられる。

B地区のまとめ

B地区の中世関係では平安時代末から室町時代後半に至る時期（Ⅰ期～Ⅳ期）の遺構を検出した。遺構の傾向をみると、平安時代末から鎌倉時代には溝（SD2・3とSD4）に囲まれた一画が形成され、それは室町時代後半に至って再度区画されているようである。検出した建物や井戸など、人間の生活が想定でき得る遺構はこのあいだに主に認められると考えてよいであろう。ただし、出土土器や遺構をみるとⅡ期前半に相当するものが極めて少ない状況にある。

注目すべきことは、生活に関する遺構という点ではA地区のものと比べて規模の点で格段に劣っていることである。建物跡は合計5棟確認できるものの、A地区のように棟方向を揃えているわけではなく、雑然としており、規模も小さい。このことはⅡ期後半からⅣ期あたりまで継続して墓域として利用されていることと係わっているのかも知れない。

墓域は調査区の南東寄りにある丘陵尾根の裾付近に形成されたものとみてよいであろう。B地区の居住域は規模が小さいことから、この墓地の形成にはB地区に居住していた集団以外のものの関与も充分想定できよう。

遺構番号	小地区	性 格	時 期	そ の 他	
SK1	d23	落ち込み	I 期	落ち込み状。土器多量。	*
SK2	f32	中世墓?	III 期	II期の土器混入。	*
SK3	f32	中世墓?	不 明	刀片出土。	*
SK4	f32	中世墓	IV期?	小皿約7枚。	*
SK5	f34	土 坑	III期後半	弥生土器混入。	*
SK6	h32	土 坑	II 期		
SK7	i33	土 坑	IV 期		
SK8	i34	土 坑	III期後半以降		
SK9	i34	土 坑	III期後半以降		
SK10	i32	土 坑	IV 期		
SK11	j33	土 坑	IV 期		
SK12	h35	落ち込み	不 明		
SK13	h35	土 坑	III期?		
SK14	h36	土 坑	II 期		
SK15	h36	土 坑	III期後半	木炭混じる。	
SK16	j33	土 坑	IV 期		*
SK17	h38	落ち込み	IV 期		
SK18	k33	土 坑	I 期		*
SK19	k33	土 坑	IV 期		
SK20	j33	土 坑	III期?		
SK21	i33	落ち込み	III期?		
SK22	k35	土 坑	III 期		
SK23	j38	中世墓	II 期	小皿3枚。	*
SK24	i37	土 坑	III期後半		
SK25	k36	中世墓	II期後半		*
SK26	k36	土 坑	II期後半~III期前半	中世墓の可能性あり。	*
SK27	j36	土 坑	II期前半		
SK28	j36	ピット?	II期前半		
SK29	j34	土 坑	IV 期		
SK30	k35	井 戸	IV 期		*
SK31	n36	土 坑	III期後半		*
SK32	m33	土 坑	奈良時代	焼土混じる。	*
SK33	j33	中世墓	不 明	小刀出土。	*
SK34	m35	土 坑	II期以降		
SK35	k38	中世墓?	III期後半	上部に焼土層あり。	
SK36	n37	土 坑	II期後半	上部に炭層あり。中世墓?	
SK37	n37	土 坑	II 期		
SK38	m37	土 坑	II 期		
SK39	n34	土 坑	II期後半	溝SD5より新。	
SK40	o35	土 坑	II期以降	溝の可能性あり。	
SK41	j36	土 坑	III期以降		
SK42	m35	土 坑	III期前半		
SK43	j38	中世墓	II期後半		*
SK44	j38	中世墓	II 期		*
SK45	k39	中世墓?	II期?	上部に炭層あり。	
SX1	b32	落ち込み	I期~IV期		*
SX2	d32	落ち込み	I期~IV期		
SX3	d30	中世墓	IV期?	小刀・小皿出土。	*
SX4	e31	落ち込み	I期~IV期	I期のもの多い。	
SX5	h37	落ち込み	IV 期		
SX6	k35	落ち込み	II期後半~III期前半		
SX7	l36	落ち込み	III 期		
SE1	j35	井 戸	II 期		*
SD1	e34~	溝	不 明		
SD2	i31~	溝	II期~IV期		*
SD3	i31~	溝	II期~IV期		*
SD4	m33~	区画溝	II 期		*
SD5	n34~	溝	II期後半		*
SD6	l37	溝	II 期		
SD7	n37	溝	不 明		
SD8	n36	溝	IV 期	土坑の可能性あり。	

tab. 5 楠ノ木遺跡B地区遺構一覧表

*は文中にて記述している遺構。

遺構名	棟方向	主軸方向	規 模 桁行(m)×梁間(m)	根石の 有無	時 期	備 考
建物1	南北棟	N5° E	3間(4.7m)×2間(3m)	無	IV 期	桁行の柱間は不統一。
建物2	東西棟	N70° W	4間(6.6m)×2間(3.3m)・1間	有	III 期	南西部は不明瞭。
建物3	東西棟	N80° W	2間(4.5m)×3間(4.3m)	無	不 明	
建物4	東西棟	N68° E	2間(5.1m)×2間(3.9m)・1間	無	III期?	
建物5	南北?	N4° E	1間(1.2m)×2間(3.6m)を確認	無	不 明	

tab. 6 B地区掘立柱建物一覧表

3. C地区の層位と遺構

層位 (fig.44)

C地区は標高42~43mの平坦な丘陵上に位置している。層位的には表土下の灰褐色土が遺物包含層と

なり、その下の層である黄灰色混礫土を基盤層として中世遺構面が検出された。層位は黄灰色混礫土と基本的には同質の土壌が遺構面下約0.4mまで堆積しており、さらに間層を挟んでその下に黒灰色系粘質土が堆積している。この層はA・B地区に認めら

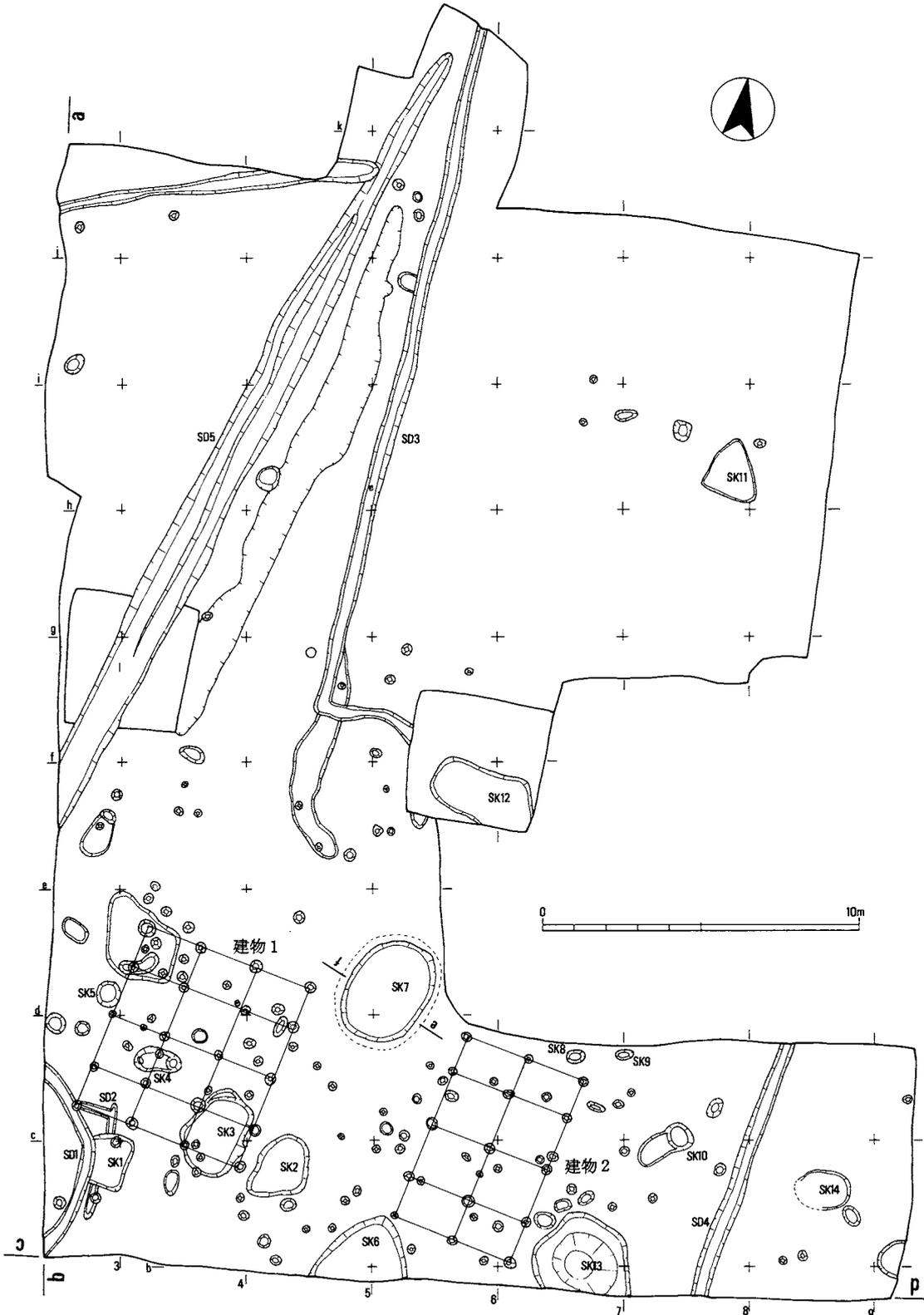


fig.43. C地区平面図 (scale=1/200) 土層 a~d は fig.44、e~f は fig.47

れる層と基本的には同質のものであると考えられる。地山は検出できなかったが、A・B地区と同様であると考えられる。地形的状況から、堆積土は西から東にかけて傾斜していくものと考えられる。遺構としては中世のものが検出されたのみであるが、遺構基盤層である黄灰色混礫土層中に縄文土器が極めて少量であるもの含まれており、この層が縄文時代の遺物包含層に相当するものと考えられる。

遺構 (fig.43ほか)

中世の遺構は掘立柱建物、土坑、井戸、溝などがあり、これらは調査区の南側に集中している。以下、個々の遺構について記述していく。

掘立柱建物、その他ピット

掘立柱建物は2棟確認できたが、検出されたピットの数からさらに数棟存在しているもの考えるのが妥当である。確認された建物2棟は、ほぼ梁軸を揃えており、同時存在と見なしてよいであろう。

建物1 (fig.45) は調査区南側で確認された。南北棟で桁行4間(約6.1m, 約20尺)、梁間3間(約5.5m, 約18尺)の総柱建物である。梁間は3間それぞれが約1.8m(6尺)で統一されているのに対し、桁行は南北端2間がそれぞれ約1.2m(4尺)、中央2間はそれぞれ約1.8m(6尺)となっている。建物を構成しているピットには部分的ではあるものの根石が認められる。建物の敷地内の南東隅には長楕円形を呈した土坑(土坑SK3)があり、当建物に伴うものと考えてよいであろう。この土坑は検出面からの深さは約0.25mで、断面は皿状を呈している。出土遺物から南北朝時代(Ⅱ期後半~Ⅲ期前半)と考えられる。

建物2 (fig.45) は調査区南側で確認された。南北棟で桁行4間(約6.1m, 約20尺)、梁間2間(約3.6m, 約12尺)の総柱建物である。梁間2間はそれぞれ約1.8m(6尺)、桁行は南北端2間がそれぞれ約1.2m(4尺)、

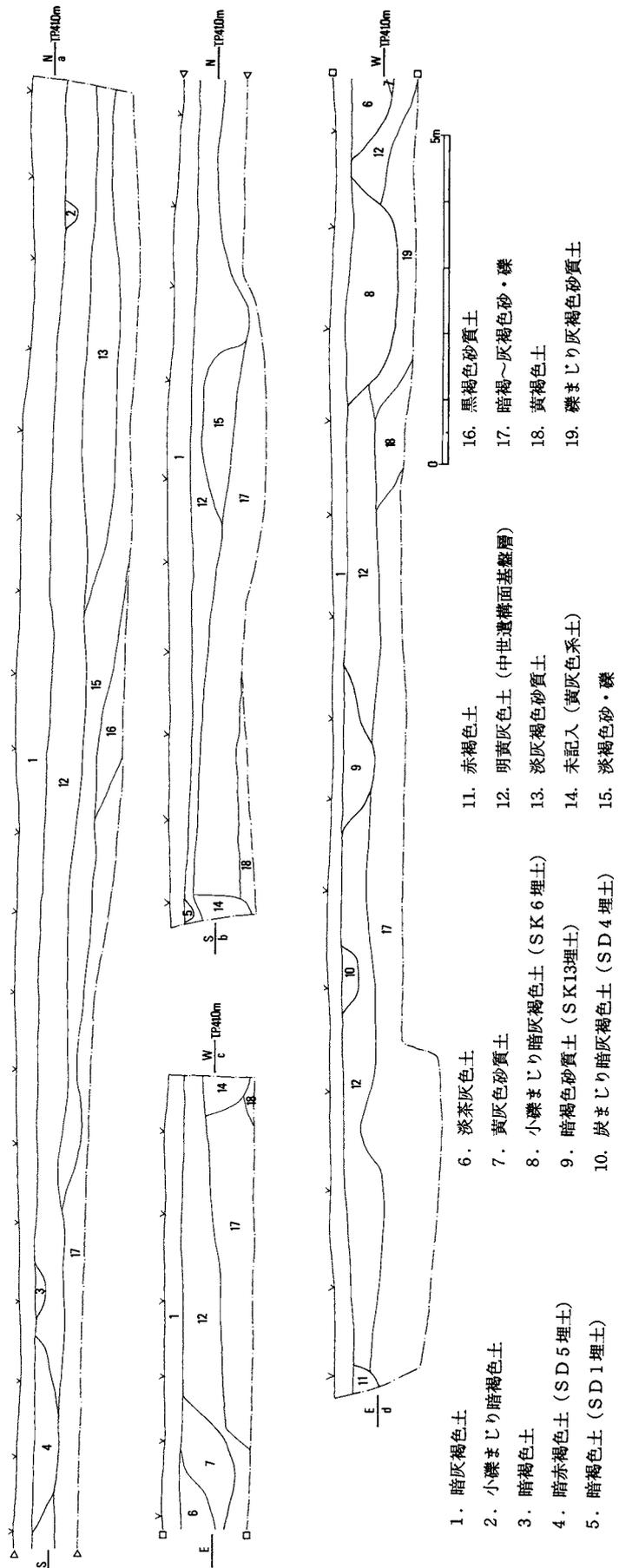


fig.44. C地区西・南壁土層断面図 (scale = 1/100)

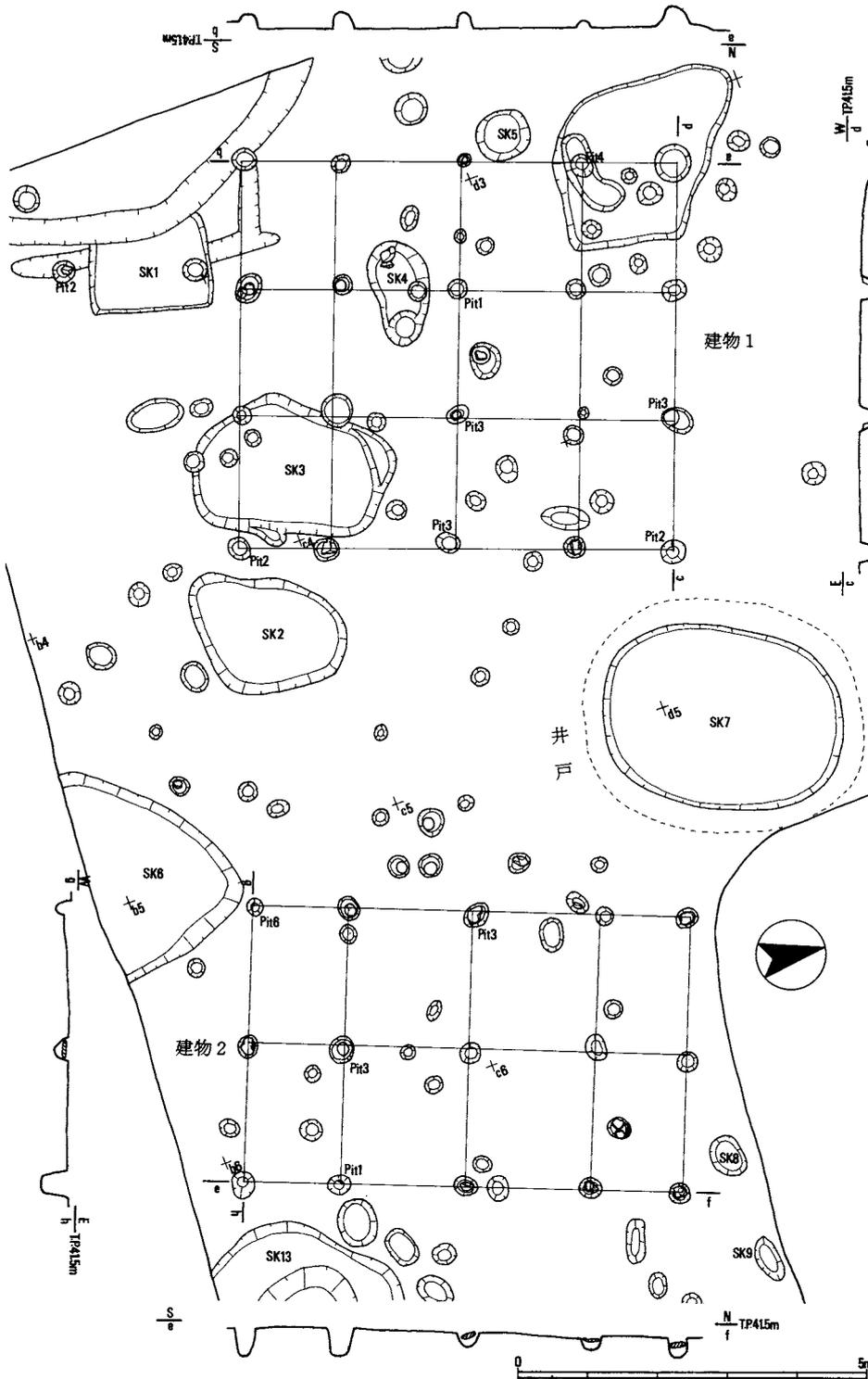


fig.45. C地区掘立柱建物1・2平面・断面図 (scale=1/100)

中央2間がそれぞれ約1.8m (6尺)である。建物を構成しているピットには部分的ではあるものの根石が認められる。そのうち、c6pit1の根石には円形に窪んだような痕跡が認められ、あるいは柱の位置を示すものかもしれない(PL.37)。建物の敷地内には建物1のような土坑は認められなかった。建

物1から18尺離れて建てられており、ほぼ並行させていることや出土遺物からも建物1と同時期と考えられる。

なお、建物としてまとまるもの以外にも多くのピットが検出されている。これらは建物1・2付近に多く認められ、この付近が居住地であったことを示している。ピットは出土土器から平安時代末～室町時代後半(I期～IV期)までのものがあり、その時期の建物が存在する可能性を示唆する。なかには鉄滓を出土したものの(d4pit1)もある。

土坑

土坑状の遺構は14基確認できた。これらのうちで特徴的なものには、焼土の認められるもの(SK1・11)、ピット状の小さなもの(SK4・5・8・9・10)、建物に付随するもの(SK3)、がある。それ以外のは、断面摺鉢状のもの(SK6・13)、不定形で浅いもの(SK2・12・14・SX1)がある。

焼土を伴うSK1・11は検出面からの深さが約

0.~0.15mの浅いものである。SK11(fig.46)は土坑の壁際に焼土があるものの底面には認められなかった。SK1はブロック状に焼土があるもので面的には認められなかった。SK1の平面形は方形、SK11の平面形は三角形状である。共に10数個の土器の出土をみたが、特にSK11からは完形の土師器

皿・小皿が多い。SK11の形態は土器焼成坑に類似するが、焼土の状態からはそうであると断定はできない。SK1は鎌倉時代後半（Ⅱ期後半）、SK11は南北朝時代頃（Ⅲ期前半）と考えられる。

ピット状の小さな土坑のうち、SK4・5・8・10からは良好な土器類が出土している。いずれも完形の土器を置いた状態ではなく、投棄したものと考えられる。SK10からは南北朝時代（Ⅲ期前半）、SK4（PL.34）・5からは室町時代前半（Ⅲ期後半）に相当する土器類が出土している。SK8（PL.33）・9から出土した土器は井戸SK7から出土したものと接合し、3者が近接した時期のものであることを示している。

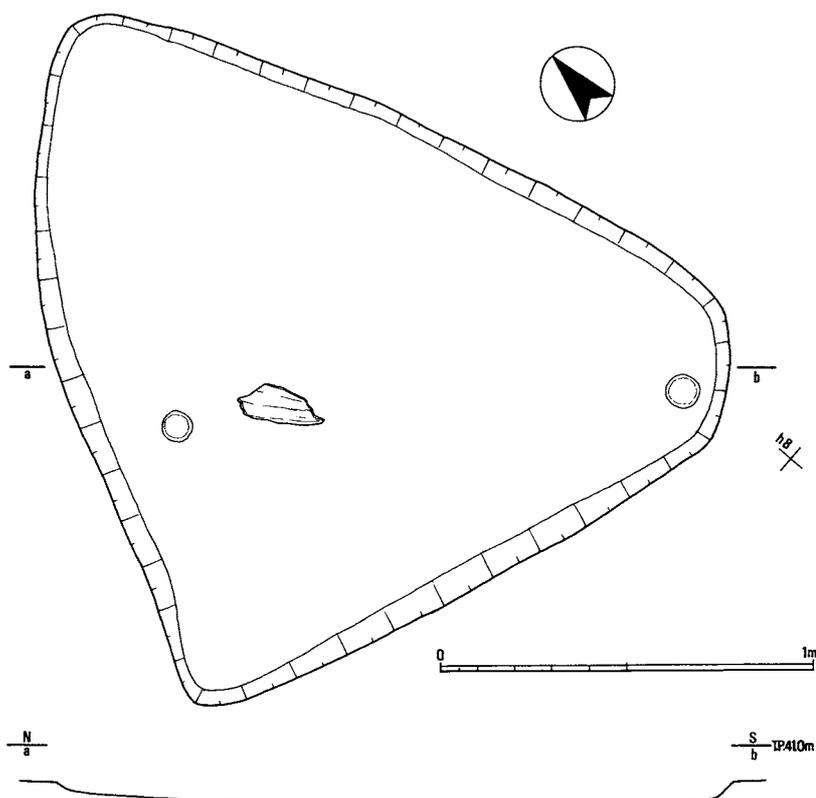


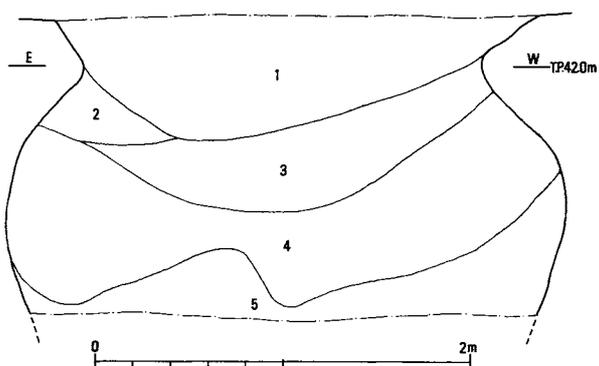
fig.46. C地区土坑SK11平面・断面図 (scale=1/20)

断面摺鉢状を呈する土坑（SK6・13）は調査区の南端に存在している。2基とも検出面からの深さは約0.3mである。出土遺物（土器）は細片が大部分でまとまった出土は見られなかった。

形状が不定形のものも調査区南側に集中している。SK2,14およびSX1からはあまり多くの出土遺物はみなかったが、SK12（PL.34）からは南北朝時代（Ⅲ期前半）の良好な土器が出土した。

井戸

井戸は1基検出した。SK7（fig.47）は建物1と2のあいだの北側にある。検出面から約1.6mまでは調査を行ったが、それ以下は湧き水と地盤が軟質であったために調査を断念した。検出面からおよそ0.3mのところ大きくオーバーハングしているが、その部分にも土器類が認められ、この遺構が機能していた時期にはすでに崩壊が始まっていたものと考えられる。出土遺物は大部分が土器類で、若干の鉄製品を含む。土器類には完形に近いものもある。出土した土器は鎌倉時代前半（Ⅱ期前半）以降のもので、量的に最も多いのはⅡ期後半～Ⅲ期のものである。埋土最上層からは室町時代後半（Ⅳ期）のものも認められる。なお、下部の層には縄文時代早



- | | |
|---------------|---------------------|
| 1. 炭・礫まじり暗褐色土 | 4. 礫・暗褐ブロックまじり褐色砂質土 |
| 2. 黄色まじり暗褐色土 | 5. 礫多い黄褐色土 |
| 3. 礫多い灰褐色砂質土 | |

fig.47. C地区井戸SK7土層断面図 (scale=1/40)

期末頃および弥生時代後期の土器が混入していた。

溝

溝は合計8条検出された。性格的には、区画溝と考えられるもの（SD3・4・5）とそれ以外のもの（SD1・2・6・7など）とに分けられる。

区画溝と考えられるSD4は調査区の東側、SD5は西側にある。SD5は部分的に2重になっており、ある時期に作り直しを行っているものと考えられる。出土遺物は皆無であったが、埋土の状態がB

地区溝SD4やA地区溝SD1・2・3などと類似するために、この溝も土地を区画する溝と考えてよいであろう。SD4はSD5と比べて浅く細いものである。出土遺物は図示不可能であるが土師器皿があり、時期的には鎌倉時代前半(Ⅱ期前半)であろう。

SD3は調査区中央から北方向に向かって認められるもので、断面形は逆台形を呈した明確なものである。出土土器から室町時代後半以降で、おそらくは江戸時代のもと考えられる。SD6はSD5と並行するものであるが、非常に浅く不明瞭なものである。SD1・2は調査区南端にあるもので、浅く細いものである。SD2から土師器(ロクロ土師器)杯が出土しているが、この溝と重なっていたピットのものである可能性もある。SD7は調査区北端に

あるもので、埋土の状態からは比較的新しいものと考えられる。SD1・6・7は出土遺物がなく時期は不明である。

C地区のまとめ

C地区の遺構・遺物からは、おおよそ平安時代末(Ⅰ期)から室町時代後半(Ⅳ期)にかけて形成された居住地であったと考えられる。出土土器の量と遺構からは、その中心時期は鎌倉時代後半(Ⅱ期後半)から室町時代前半(Ⅲ期後半)と考えられるが、時期的な幅のみを見るとB地区の状況と同様である。また、墓と考えられる遺構が認められないことから、墓域は別の地に求められる。なお、ピットから鉄滓が出土していることから、この付近に鍛冶(鍛造)の遺構の存在も想定しえる。

遺構番号	小地区	性格	時期	その他	
SK1	b1	焼土坑	Ⅱ期後半		*
SK2	b4	土坑	Ⅲ期前半		*
SK3	b3	土坑	Ⅱ期～Ⅲ期	建物1に伴う土坑	*
SK4	c3	小土坑	Ⅲ期		*
SK5	d2	小土坑	Ⅲ期		*
SK6	b4	土坑	Ⅲ期		
SK7	d5	井戸	Ⅱ期～Ⅳ期	縄文・弥生土器混入	*
SK8	c6	小土坑	Ⅲ期?	SK7出土土器と接合	*
SK9	c7	小土坑	Ⅲ期?	SK7出土土器と接合	*
SK10	c7	土坑	Ⅱ期後半		*
SK11	h7	焼土坑	Ⅲ期前半?		*
SK12	e5・6	土坑	Ⅲ期前半		*
SK13	b6	土坑	不明		
SK14	b8	落ち込み	不明		
SX1	d3	土坑	Ⅱ期?		
SX2	e2	土坑	不明		
SD1	b1	溝	不明		
SD2	b1	溝	不明		
SD3	e4～g4	溝	江戸時代?		*
SD4	b7	区画溝	Ⅱ期前半		*
SD5	e2～K5	区画溝	Ⅲ期?		*

tab. 7 楠ノ木遺跡C地区遺構一覧表 *は文中にて記述している遺構。

遺構名	棟方向	主軸方向	規模 桁行(m)×梁間(m)	根石の有無	時期	備考
建物1	南北棟	N11° E	4間(6.1m)×3間(5.5m)	有	Ⅱ期後半～Ⅲ期	土坑SK3が伴う。
建物2	南北棟	N11° E	4間(6.1m)×2間(3.6m)	有	Ⅱ期後半～Ⅲ期	

tab. 8 C地区掘立柱建物一覧表

IV. 調査の成果—出土遺物—

出土遺物は整理箱（テンバコ）にしておよそ125箱ある。その大部分が中世の土器類であり、2箱分の金属製品、12箱分の鉄滓、少量の石製品および木製品がある。それぞれの詳細については観察表を参照されたい。なお、土器類は正式には「鍋形土器」のように呼称すべきものであるが、以下「鍋」のように呼称していくこととする。

1. 中世集落形成以前の遺物

中世以前のもは、大きく縄文・弥生時代のものと奈良時代のものに分けられる。前者には土器と石鏃、後者には土器がある。前者の遺構は確認されず、中世の遺構に混入しているか、あるいは中世の基盤層の黄灰色系土に含まれていたものである。

縄文・弥生時代の遺物

土器類 (fig.48)

縄文土器には外面にポジティブな楕円文を回転施文する押型文土器、条痕文を施すもの、爪型文を施すもの、の3種類がある。押型文土器は2点のみの出土である。小型の楕円文を持つもの(1)と大型の楕円文のもの(2)がある。前者は内面に縦位に凹線状の施文をするもので、高山寺式の範疇に含まれるものである。条痕文を施すものには内外面に条痕を施すものと外面のみ条痕を施すもの、および外面には縄文を施し内面には条痕を施すものがある。条痕はすべて二枚貝で行っている。外面に縄文を施すもの(4)は口縁端部上面に巻き貝状のもので刺突して施文するものである。外面の縄文は無節である。爪型文を施すものは1点のみである(3)。爪型は外面の拓影右側にある隆帯に沿って湾曲させて施文している。天地は逆かも知れない。

これらは全体としておよそ縄文時代早期末頃に比定できようが、若干の時期幅をもつものかと考えられる⁽¹⁾。資料的には少量であるため、明確なことは不明と言わざるを得ない。

弥生土器には甕・壺・高杯がある。甕の1例(fig.48-18)は中期に比定できようが、その他は後期のものと考えられる。

石器類 (fig.48, PL.37)

石器類には石鏃の他、剥片などの未製品がある。石鏃は無茎式のものが認められる。大部分がチャート製であるが、一部サヌカイト製のもの (fig.48-13~14) もある。時期的には縄文時代早期末の土器類に伴うものかと思われる。未製品にはサヌカイト・チャートのものがある。これらについては旧石器時代のものである可能性もある。

奈良時代の遺物 (fig.48,58)

当該時期のものは土師器杯・甕および甑がある。fig.58-30は平安時代のものかも知れない。

2. 中世の遺物

中世に相当する遺物には金属製品、石製品、木製品、土器類がある。ここで中世とするのはおよそ平安時代末（およそ12世紀以降）から室町時代後半（およそ16世紀中葉まで）にかけての時期である。この時期の出土遺物が当遺跡の中心を占める。時期比定については拙稿の基準⁽²⁾に従っている。そのうち(仮) A段階に相当する時期を楠ノ木Ⅰ期（平安時代末、12世紀後半）、第1段階を楠ノ木Ⅱ期前半（鎌倉時代前半、13世紀前葉～中葉）、第2段階c型式までを楠ノ木Ⅱ期後半（鎌倉時代後半、13世紀後葉～14世紀前葉）、第3段階a型式を楠ノ木Ⅲ期前半（南北朝時代、14世紀中葉～後葉）第3段階b型式を楠ノ木Ⅲ期（室町時代前半、14世紀後葉～15世紀中葉）、第4段階を楠ノ木Ⅳ期（室町時代後半、15世紀中葉～16世紀前葉）とした。なお、Ⅱ期後半からⅢ期後半の実年代については確証はなく、およそその目安と考えていただきたい。

金属製品類 (fig.49)

金属製品には大きくは鉄製品と銅製品がある。すべて中世遺構からの出土であり、出土地点等については金属製品類観察表(tab.10)を参照されたい。

鉄製品は中世墓から出土した小刀のほか、毛抜き・火打ち鎌・鎌・釘などがある。最も多いのは釘で、A・B地区からの出土が目立つ。火打ち鎌は松阪市南山遺跡⁽³⁾、神奈川県鎌倉市内遺跡⁽⁴⁾などから出土して

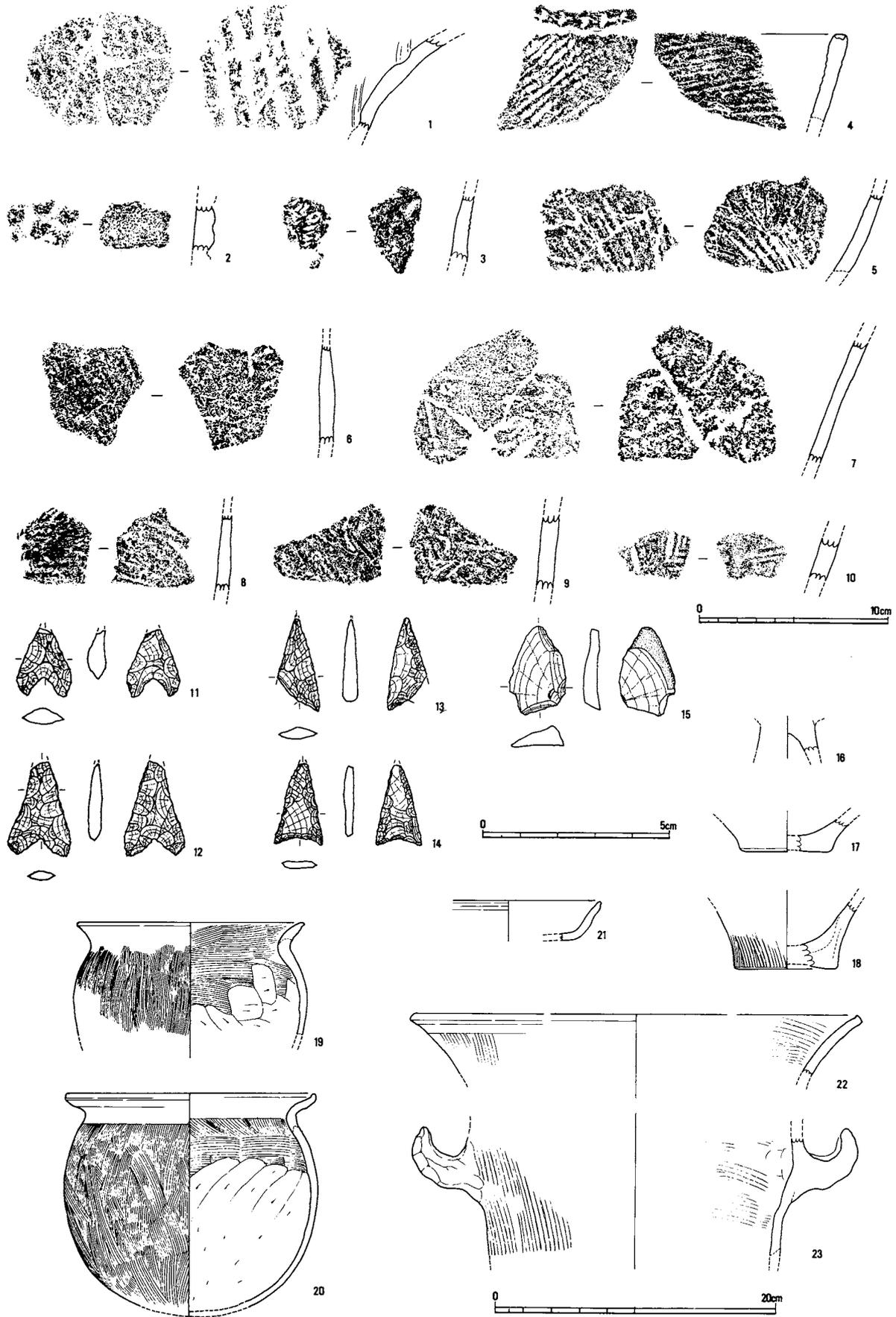


fig.48. 出土縄文・弥生・奈良時代土器・石器（1～10は $\frac{1}{3}$ 、11～15は $\frac{2}{3}$ 、16～23は $\frac{1}{4}$ ）

いるものとの類似から判断した。これらの鉄製品は小刀を日常的に使用するナイフに相当するものと考えれば、武器類の出土がなく、すべて通常の生活に用いるものと考えられよう。

銅製品には環状の用途不明製品と銅銭がある。前者は断面形が六角形を呈している。後者は中国北宋時代のもののみであった。銅銭の出土はⅡ期前半からⅢ期にかけての遺構から認められた。

石製品類 (fig.50, PL.37)

石製品は砥石と掘立柱建物のピット根石 (PL.37) がある。特にC地区建物2のピット根石は中央から少しずれたところが円形に窪んでおり、柱を受けた部分の可能性を考えたい。

木製品類

木製品はC地区井戸SK7から小さな杭状のものとB地区中世墓SX3出土のものがある。前者は腐朽がひどく、図示し得ない。後者は小片であるが方形のほぞ穴が認められ、木棺の一部かと思われる。

土器類 (fig.48, fig.50~65)

土器類は陶器類と土師器類および瓦器類の3種に大きく分けることができる。個々の記述の前に、楠ノ木Ⅰ~Ⅳ期の傾向を見ておくこととする。

楠ノ木Ⅰ期

南伊勢系土師器 (以下「南伊勢系」と呼称) 成立以前の、(仮) A段階に相当する時期である。B地区落ち込みSK1出土土器を典型とする。

土師器類では甕・小皿・皿の他、ロクロ製の土師器 (以下、ロクロ土師器) がある。甕では口径20~25cmの中形のものと同口径20cmに満たない小形のものがある。B地区土坑SK1の資料では小形のものには偏平な形態のものも含まれている。小皿はfig.51-18~20のように形態的なヴァリエーションが大きい。これはⅠ期の特徴と考えられる。皿は15cm前後のもので、形態的なヴァリエーションの多いことは小皿と同様である。

瓦器は1点認められるが、当該地域で一般的なものではなく、大和ないしは伊賀地域からの搬入品と考えられる。

陶器類では椀・小椀 (「山茶椀・(小椀) 山皿」と俗称。以下この呼称を用いる) が大多数を占め、その他常滑産の三筋壺が認められた。また、この時

期に比定できるねり鉢は明確にし得なかった。山茶椀には輪花をもつものもある。小椀は高台が付くのが通常⁽⁵⁾のようである。藤澤良祐氏による編年 (以下「藤澤編年」) のⅡ段階第3~4型式を主体とする。

磁器類では確実な共伴は見当たらないが、形式的にはfig.55-4はⅠ期に相当するであろう。

楠ノ木Ⅱ期

南伊勢系第1段階から第2段階に相当する時期である。前半はA地区井戸SE1下層出土土器を典型とし、後半はA地区土坑SK39、C地区土坑SK3・10出土土器をその参考とする。

土師器類では鍋・小皿・皿の他、後半には羽釜も認められる。しかし羽釜はfig.61-26がおそらく当該時期、fig.58-13がその可能性があるという程度で、少量であることは確実である。ロクロ土師器は確認されていない。鍋は口径が20cmの小形、25~30cmの中形、35cm前後の大形の3種類に大別できる。小皿はⅠ期のような形態的ヴァリエーションが消失し、口径8cm内外で口縁部外面に面をなすものに集約している。なお、胎土の特徴からは赤褐色系と淡褐色系のものが存在しており、「赤土器」「白土器」の意識が想定される。皿は口径13cm前後のもので若干薄手となり、Ⅰ期と比べれば形態・手法的ヴァリエーションに乏しいが、Ⅱ期後半からⅢ期のものと同様と形態的なばらつきが認められる。

陶器類では山茶椀・山皿がⅠ期同様陶器類の大部分を占め、その他常滑産の大甕・壺・ねり鉢が認められる。山茶椀は藤澤編年のⅢ段階4~7型式が主体である。山皿で高台を持つものはない。

磁器類では青磁が認められる。

楠ノ木Ⅲ期

南伊勢系第3段階に相当する時期である。前半はC地区土坑SK12・焼土坑SK11を、後半はB地区土坑SK5を、それぞれ典型とする。

土師器類では鍋・小皿・皿が多い。また、羽釜がⅡ期に比べて相対的に増加する。土器形式的に系譜の追えない器形の鍋 (fig.56-1・15~16) や茶釜 (fig.57-10) が認められるのもこの時期である。鍋は前半では小形・中形・大形が存在するようであるが、後半では大形のもの消滅するようである。小皿は口径はⅡ期とほとんど変化ないが、やや偏平な形態

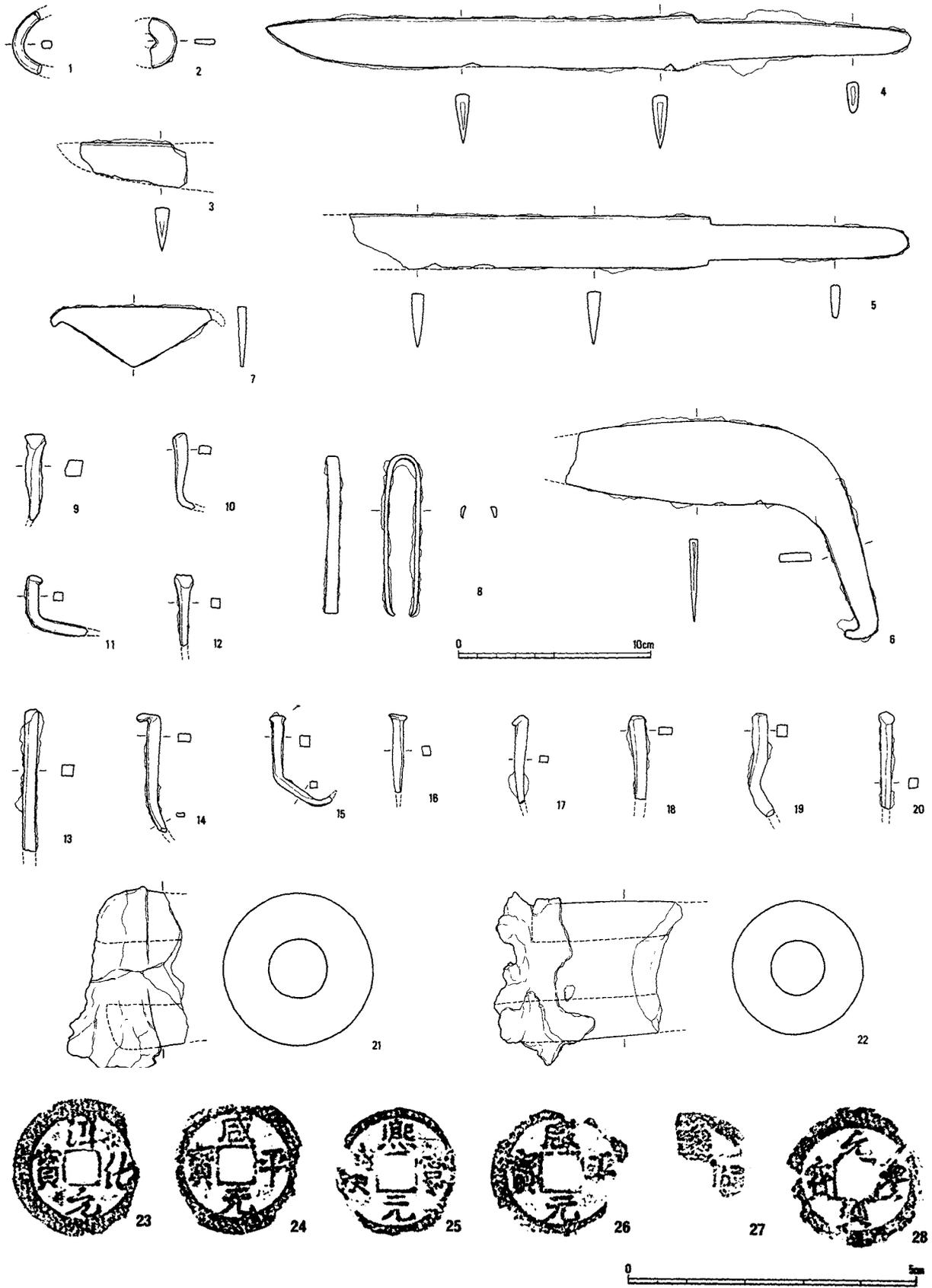


fig.49. 出土金属製品・鞆羽口実測図 ($\frac{1}{3}$) および貨幣拓影 ($\frac{1}{4}$)

になる。皿は口径が12cm前後（Ⅲ期前半）から次第に縮小していき、形態的なヴァリエーションが極めて少なくなる。羽釜については後に詳述するが、C地区土坑SK6に認められることからその増加はⅢ期前半から始まる可能性が極めて大きい。

陶器類では山茶碗・山皿が急激に減少する傾向にあり、後半では全く認められなくなる。藤澤編年のⅢ段階第8型式に相当するものが認められる（fig. 65-14）。その他のものとして、常滑産のねり鉢や卸皿などが前半から存在するようである（fig. 61-21～22）。陶器類の増加は後半に認められ、美濃・瀬戸産の平碗・縁釉皿（小皿）・卸皿・ねり鉢・壺、常滑産の甕・ねり鉢などが出土している。

磁器類ではfig.54-28がⅢ期に相当するかと考えられるが詳細は不明である。

楠ノ木Ⅳ期

南伊勢系第4段階に相当する時期で、当遺跡ではc型式にて終了する。B地区井戸SK30・土坑SK11出土土器を典型とする。絶対量が少ないので、器種構成は明確でない。

土師器類では鍋・羽釜・皿が確認できる。鍋では中形と小形に相当するものは確認できるが、大形の

ものはⅢ期後半同様、確認できない。また、口径20cmにも満たない小さなもの（fig.63-22）も認められるが、あまり類例がない。皿は口縁部が2段に屈曲して開くもので、Ⅲ期の皿との連続性は今後の検討課題である。羽釜には、南勢地域では系譜を追えないもの（fig.63-25）も出土しており、中・北勢地域からの搬入品と考えられる。

陶器類では美濃・瀬戸産の平碗・播鉢、常滑産のねり鉢・甕が確認できた。播鉢は大塚期⁽⁶⁾に属するものであろう。

磁器類は当遺跡では確認できなかった。

以上、Ⅰ～Ⅳ期の土器組成について概述した。以下、個々の問題について記述する。

陶器類

陶器類の多くのは常滑・渥美・美濃瀬戸の3地域のいずれかで生産されたもののようで、そのなかでも常滑産あるいは渥美産のものが多いようである。信楽・越前・東播系などの製品は認められなかった。これは当遺跡にのみ言えることではなく、南勢地域平野部の一般的傾向かと思われ、胎土分析などの手法を用いて確定していく必要がある。

甕で体部に模様の描かれた叩き目（スタンプ文）

の付くものは、常滑産のものと考えられる。この形状から常滑のなかでの産地が特定できる可能性があるという⁽⁷⁾。

fig.58-38は渥美産かと思われる壺の破片であるが、肩部に焼成前のヘラ書き文字がある。仏教関係の文句かと思われるが断定はできない。観察表に推定した判読文を掲載したので参照されたい。⁽⁸⁾

山茶碗・ねり鉢のうち高台が付くものには、少量ではあるが高台部分と体部（碗部）の胎土が明らかに異なっているものが認められる。胎土は、碗体部が淡灰色系を呈するのに対し、高台部は青灰色系を呈するものである。形態的特徴やB地区落ち込みSK1など（仮）A段階の土器に伴出していることから山茶碗の古い段階に相当するようである。形態や胎土の特徴を主観的に判断すると、その多くが渥美産のようであるが、瀬戸・常滑産のものにも散見され⁽⁹⁾、断定はできない。三重県内では、管見におよぶ

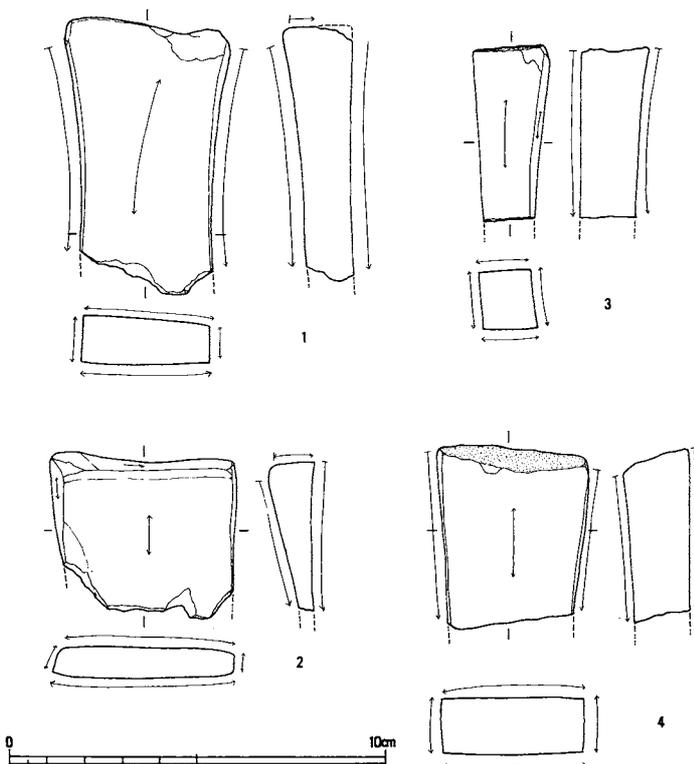


fig.50. 出土砥石実測図 (scale=1/2)

限り二見町莊遺跡⁽¹⁰⁾、津市宮ノ前遺跡⁽¹¹⁾に類例がある。確認事例が増加すると特定生産地からの流通状況が判明する可能性があるため、今後注意して見る必要があると言える。

磁器類

磁器類では青磁・白磁が認められるが、量的には前者が圧倒的に多い。椀形態が大部分であるが、少量の小皿も認められた。壺などの製品は認められない。白磁のなかにはfig.55-28のように口禿のものも認められる。

土師器類

土師器類には基本的に甕・鍋・羽釜・茶釜という煮沸形態と、皿・小皿⁽¹²⁾という供膳形態がある。大部分が南伊勢系土師器の部類に相当するが、少量ではあるが皿類の一部にロクロ土師器も認められた。また、搬入品と思われる羽釜も認められる。土師器と同様の焼成状態のものに風炉・土鍾および輪の羽口がある。

鍋・甕類 鍋・甕類には南伊勢系系統のものと金属器模倣形の非在地的形態のものがある。これらは全て南伊勢系的手法によって製作されたものと見做せるものである。

南伊勢系系統の甕・鍋は、(仮) A段階のものから第4段階c型式のものまでが型的に連続して認められる。

金属器模倣形ものは手法的には南伊勢系系統のものであり、土器そのものが搬入されたものとは考えられない。形態的にはfig.56-1や15のように口縁部が受け口状を呈するものが主体である。fig.56-16のように鉢形を呈したものも存在している。ただし、鉢形ものが金属器模倣形なのかどうかは今後の検討が必要である。この鉢形ものは未だ類例がない。この系統にあるものとして、第5段階以降に相当する焙烙(A地区SK1・SD7など)も認められるが、当遺跡では型的に連続しない。当遺跡の調査によって、Ⅱ期後半からⅢ期前半までの資料が充実したことが大きな成果といえる。

羽釜 羽釜は鍋に比べて量は相対的に少ない。また南勢地域の羽釜は基本的に金属器模倣形と考えられるので純粋な型式学的変遷をたどることは極めて困難な状況にある。羽釜が量的に増加する時期は

鍋の第3段階b型式以降であることは当遺跡出土土器から指摘できる。鍋第3段階に並行するもの(中世後期)を中心に器形上の特徴も鑑みてfig.51に口縁部の手法的な分類案⁽¹³⁾を提示した。大分類として大・中形(口径30cmを越えるもの)、小形(口径25cm内外のもの)があり、これらはさらにA～E類の5系統に大別できる。羽釜C・D類は基本的に金属器模倣形で、B類もその可能性がある。B類は口縁部手法によって2者に細分したが、この差は手法以上に大きい地域差である可能性もある。E類はC・D類とD類の折衷形的な形態である。

口縁部的手法の特徴でみると、擬口縁を作り、その上端を包むように素地を付加するもの(口縁部a手法)、成形時の口縁部上端に相当する部分を外側に折り返し、広い面をなすもの(同b手法)、成形時の口縁部上端に相当する部分を内側に折り返し、上端に面を持つもの(同c手法)とが存在している。a手法はC・D類ともに認められる手法であるが、主体はC類のようである。c手法は南伊勢系に普遍的な手法に通じるものであろう。なお当遺跡では確認されなかったが、C類のものにc手法を用いられているものもある(fig.69-84)。

このように、形態・手法の状況からは、折衷形的な形態であるE類を除けば、大きくはC・D類系統とB類系統の2者が存在していることが指摘できる。前者は大和地域を経由して流入してきた金属製品ないしは土製の羽釜の模倣、後者は東海地域に見られる羽釜(土器)の系統と考えられる。後者が金属器の模倣かどうかは今後の検討課題である。

B類のものに形態的には類似するが内面への折り返しがないものとして、口縁部の下に焼成前に穿孔を行うもの(fig.63-25)がある。この個体については先述のように中・北勢地域からの搬入品である可能性を想定すべきである。この土器が南勢地域に搬入されている事実も見過ごせない。

皿・小皿類⁽¹⁴⁾ 皿・小皿の類には南伊勢系系統のものとロクロ土師器と呼称されるものがある。皿は概略Ⅰ期では口径15cm、Ⅱ期で13cm、Ⅲ期で12～11cmと次第に縮小していくことが考えられる。胎土はⅠ～Ⅱ期にかけては粗い小石粒を多く含むものであったものがⅢ期あたりから小石粒の少ない精緻

なものへと変化する傾向が窺われる。小皿はⅠ期には口径9cmであったものがⅡ～Ⅲ期では7.5～8cmほどのものとなっている。胎土の変化は皿と同様である。ロクロ土師器はⅠ期にのみ認められる。

その他 風炉 (fig.52-17) は外面がいぶされており、厳密には瓦質土器の類に相当するものである。Ⅰ期の土器が伴っているが当該時期に比定される風炉は管見に及ばず、検討を要する。鞆の羽口はA地区土坑S K36とその周辺で3～5個体分が出土している。時期的にはⅢ期後半に最も多いようである。

瓦器類

瓦器碗 (fig.52-12) は、山田猛氏の⁽¹⁵⁾編年によるⅡ段階第2型式に相当しよう。

瓦類 (PL.47)

1点のみ出土している。A地区井戸S K21から出土しており、平瓦である。凹面・凸面ともなで調整しているもので布目は認められない。

3. 近世以降の遺物 (fig.59)

中世以降の出土遺物は主にA地区で出土した近世～近代のものがある。出土量は極めて少量である。土師器類では鍋・焙烙がある。陶磁器類では染付け椀類のほか、仏具かと思われる高杯状のものや合子状のものがある。また、実測は不可能であるが、瓦質の煮沸用具片がある。

註

- (1) 奥義次・山田猛・千葉豊の各氏に御教示いただいた。
- (2) 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Miehistory』vol.1 1990)
- (3) 下村登良男『南山遺跡発掘調査概報』Ⅰ(松阪市教育委員会1979)
- (4) 石井進・大三輪龍彦ほか『よみがえる中世3』武士の都鎌倉(平凡社 1989)
- (5) 藤澤良祐「穴田南窯址群発掘調査報告」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅱ 1983)
- (6) 藤澤良祐「瀬戸大窯の編年的研究」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ 1986)
- (7) 中野晴久氏のご教示による。
- (8) 判読文は小坂宜広氏のご教示による。
- (9) 瀬戸産の資料については藤澤良祐氏・服部郁氏・大蔵順子氏のご教示を、常滑産の資料については中野晴久氏のご教示を、それぞれ得た。
- (10) 新田洋『莊遺跡発掘調査報告』(三重県教育委員会 1980)
- (11) 平成元年度三重県埋蔵文化財センター調査。
- (12) 小皿は新田洋氏の分類による「皿B」、皿は「皿A」にほぼ相当する。新田洋「中・南勢における中世土師器—特に「在地系」皿—の変遷と地域色解明への一視点」(『マージナル』No.91988)
- (13) A類は図示していないが、中世前期に相当するfig.58-13がそれに相当する。
- (14) 南伊勢系系統の皿・小皿については別稿にて検討する予定である。
- (15) 山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」(『中近世土器の基礎研究』Ⅱ 1986)

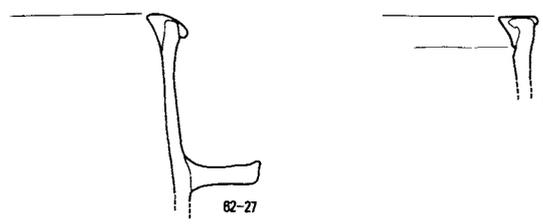
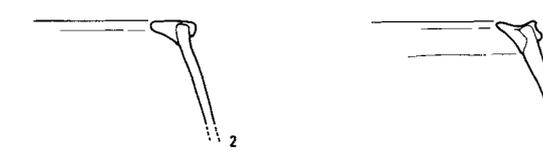
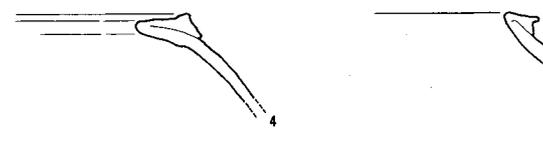
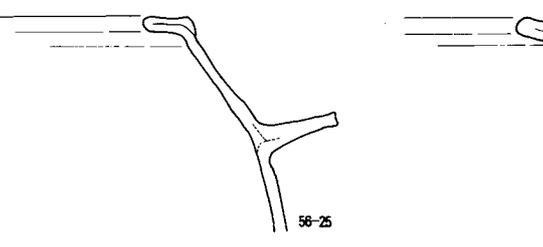
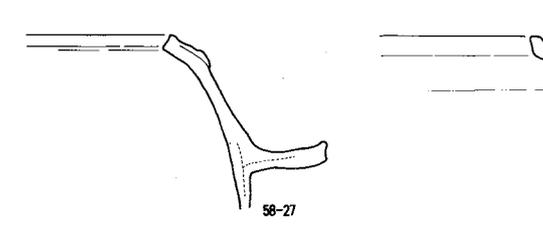
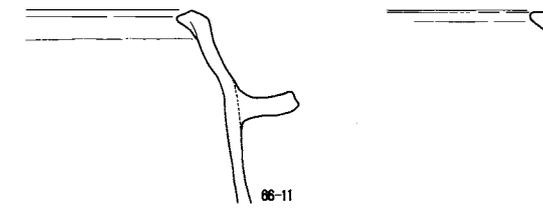
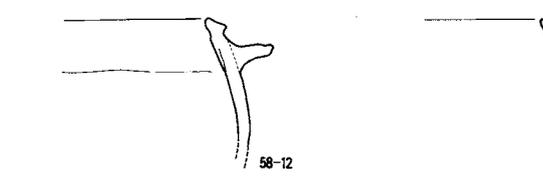
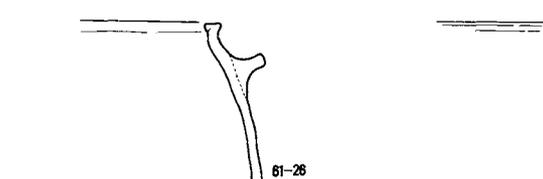
大	C、直立口縁系統		口縁部を直立させ、口縁端部を内・外面に肥厚させる。	口縁部 a (c) 手法	
	a		口縁部の内傾が弱いもの。C類と類似する。		
中	D、内傾口縁(姥口)系統	b		口縁部が強く内傾する。	口縁部 b 手法 口縁部と口縁端部が共に内傾する。
		1		口縁端部を丸く収める。	
	c	2		口縁端部内側に面を有し、上方に突出させる。	
	E、C・D折衷形		C・D類の折衷形的。口縁部は直立・内傾どちらも言い難いが、口縁部は内傾する。	口縁部 c 手法	
小	B、短口縁短頸系統		成形時の口縁端部を内側に折り返す。口縁部上端の押圧が強い。		
			成形時の口縁端部を折り返すことなく、方頭状に収める。 (61-26は中世前期)		

fig. 51. 楠ノ木遺跡出土羽釜形土器分類図 (scale = 1/3) ※横の並びは時期差を表したものではない。

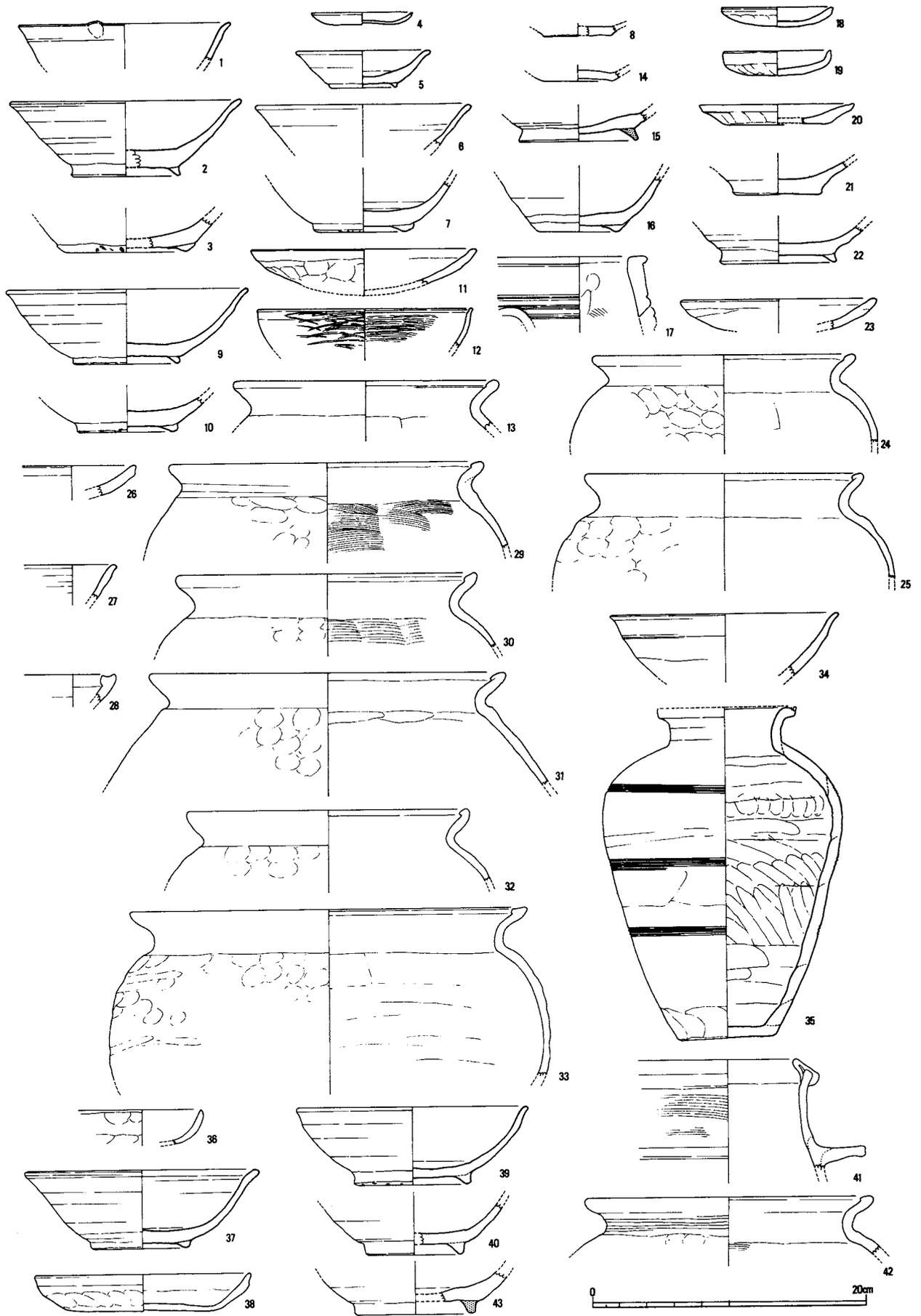


fig. 52. A地区土坑 S K 20 · 65他出土土器 (scale = 1/4)

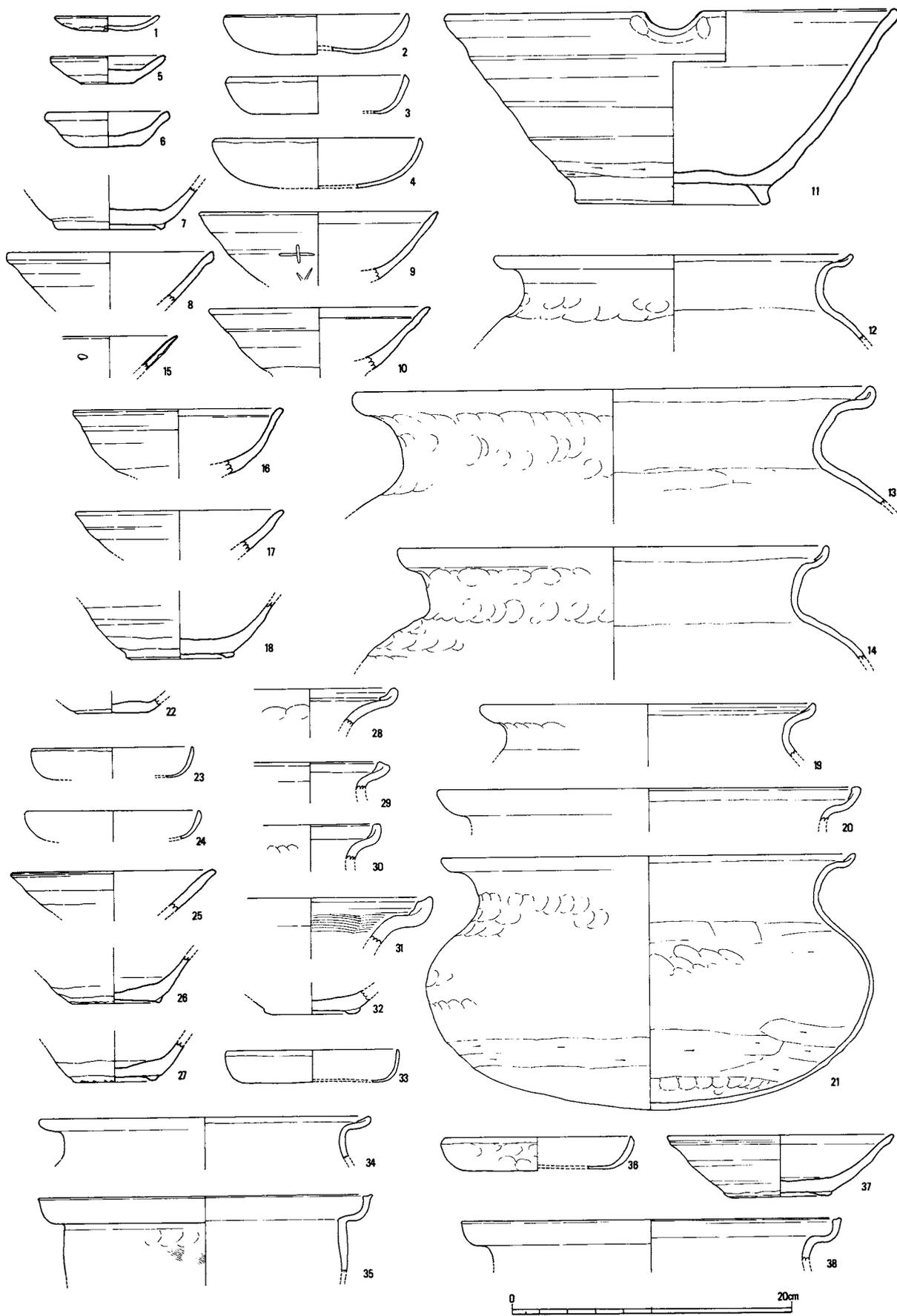


fig.53. A地区井戸SE 1、土坑SK17他出土土器 (scale=1/4)

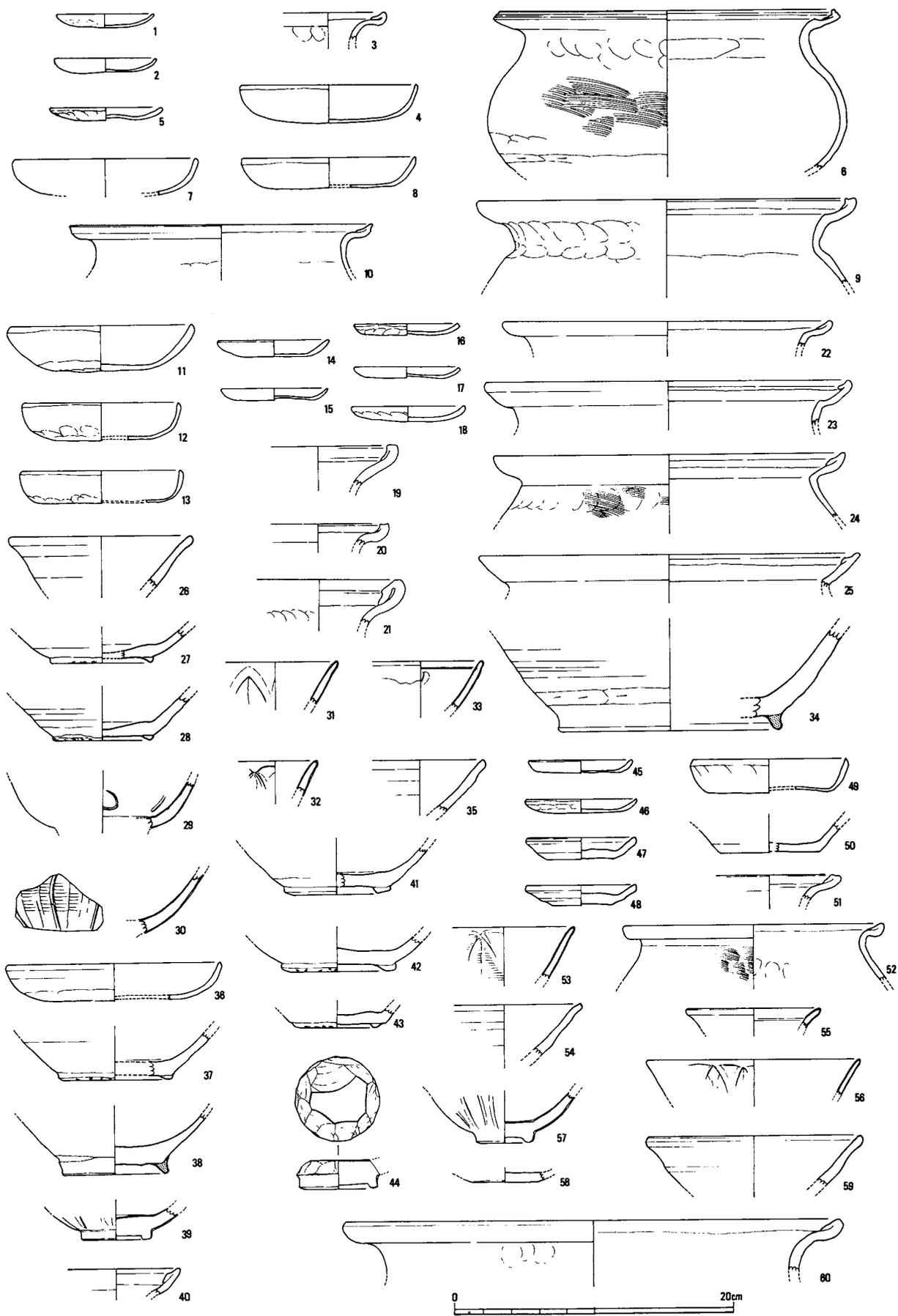


fig. 54. A地区土坑SK 5·7他出土土器 (scale=1/4)

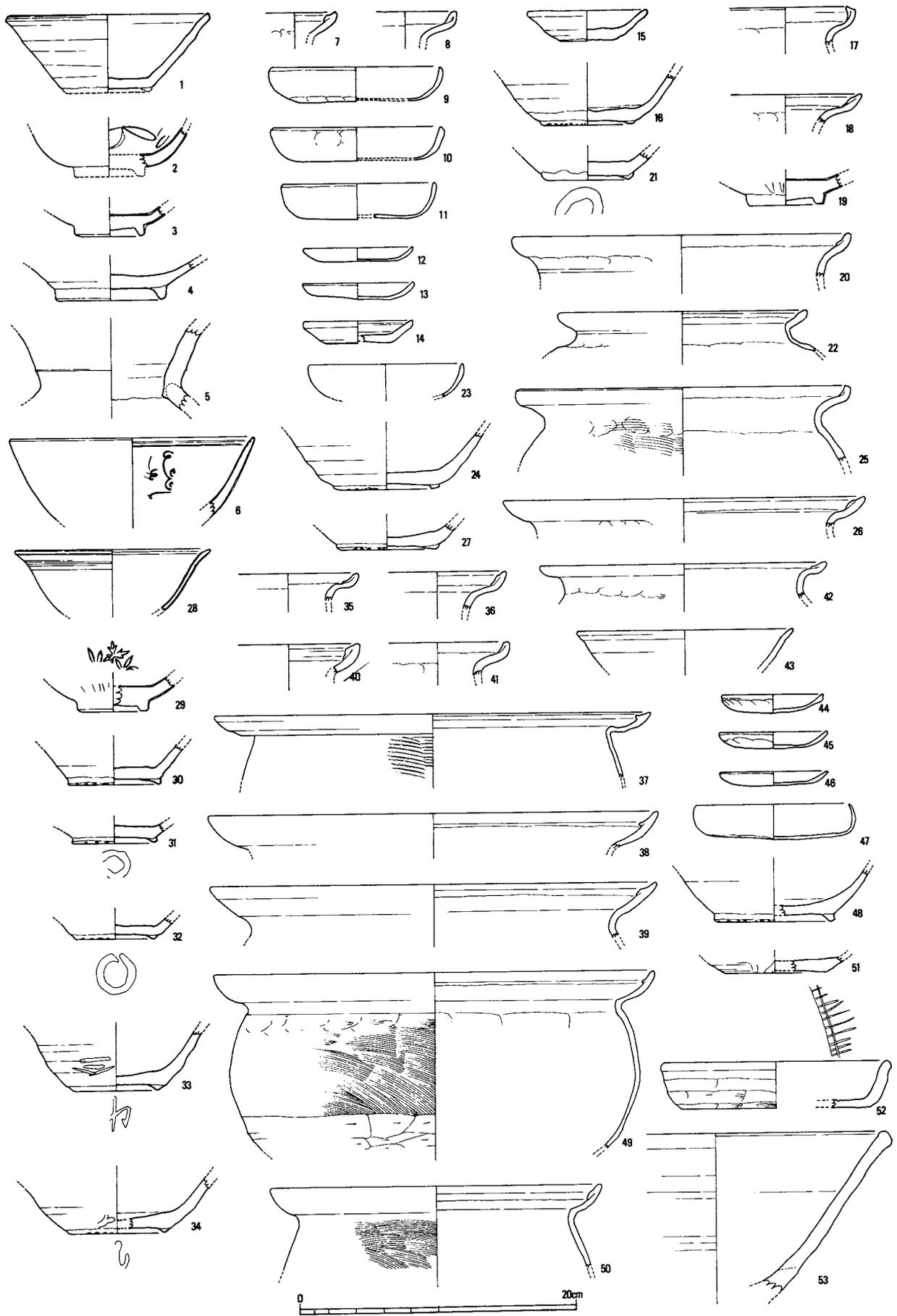


fig.55. A地区土坑S K55他出土土器 (scale = $\frac{1}{4}$)

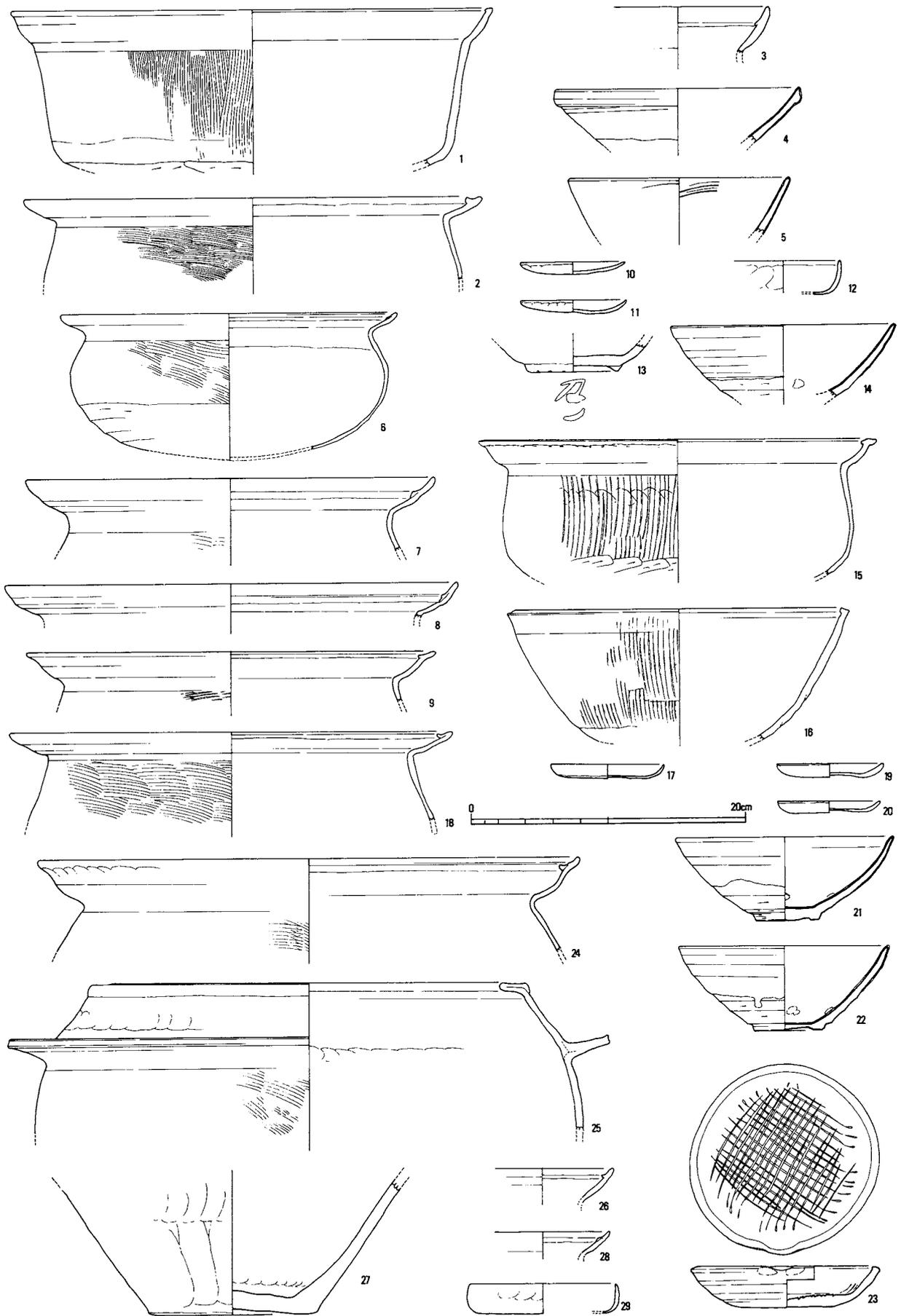


fig. 56. A地区土坑S K37、S X 9 他出土土器 (scale=1/4)

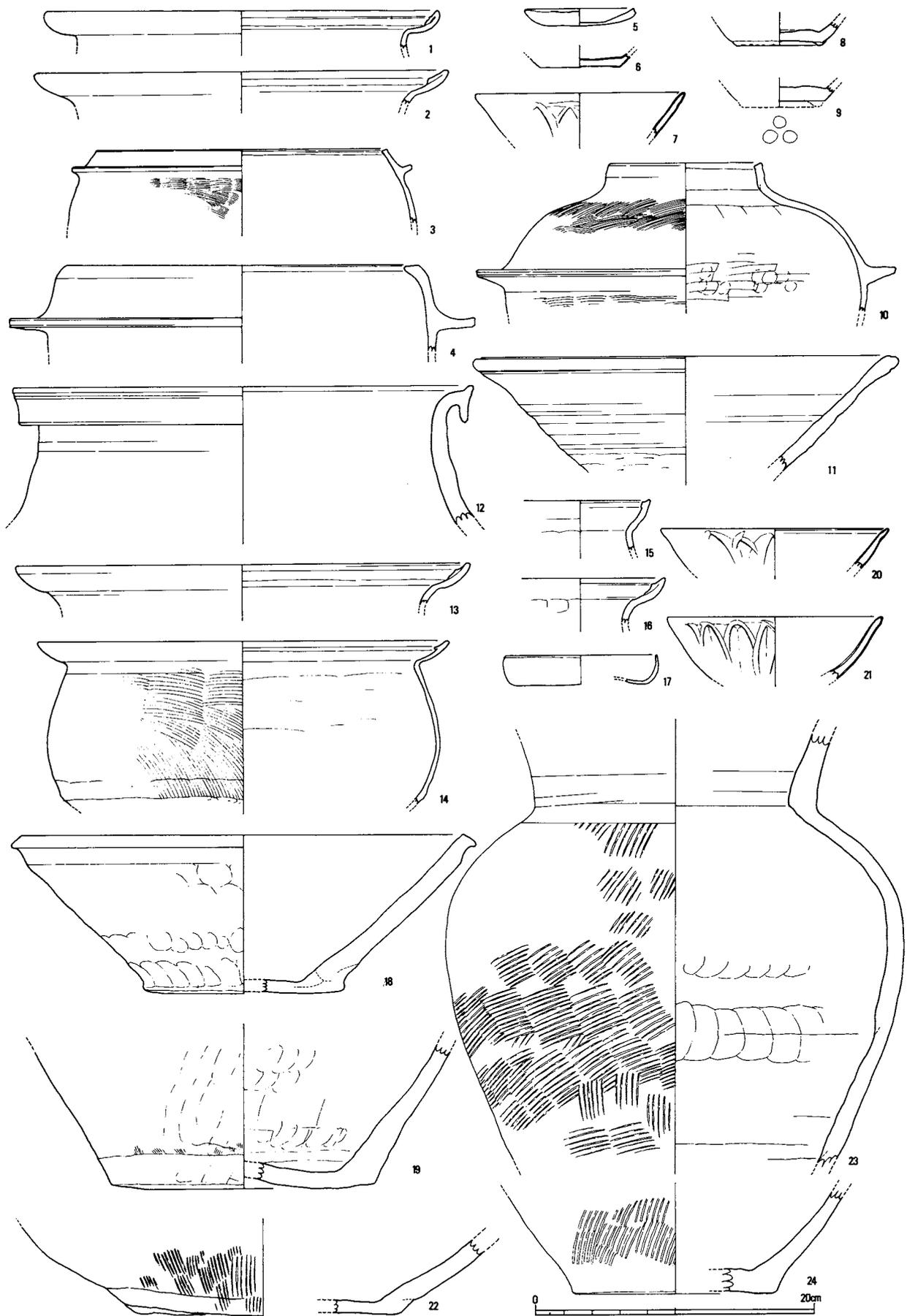


fig. 57. A地区井戸SK3、SE2他出土土器 (scale=1/4)

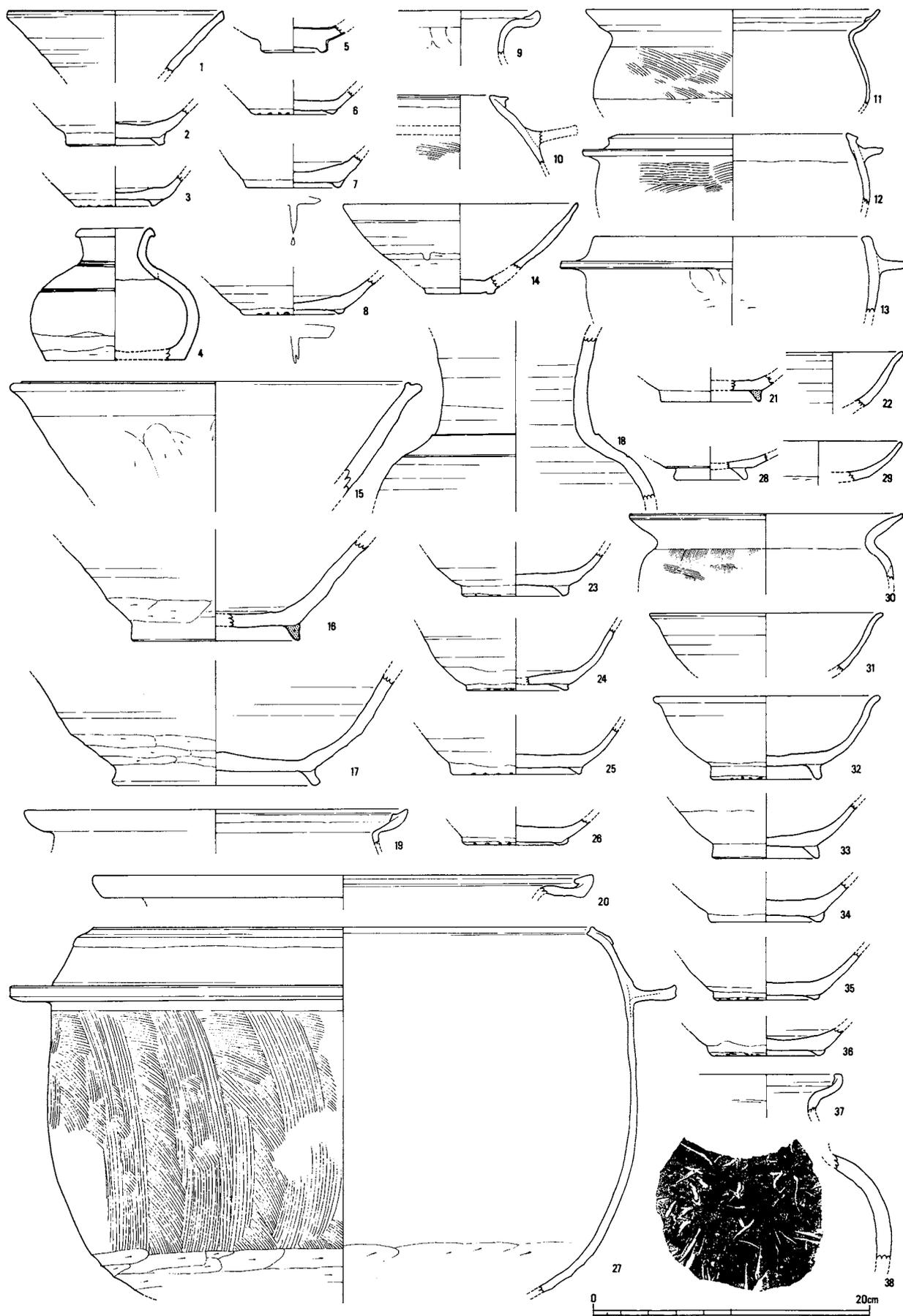


fig.58. A地区溝SD 1・2・3出土土器 (scale=1/4)

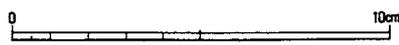
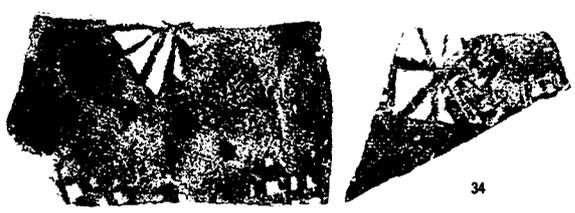
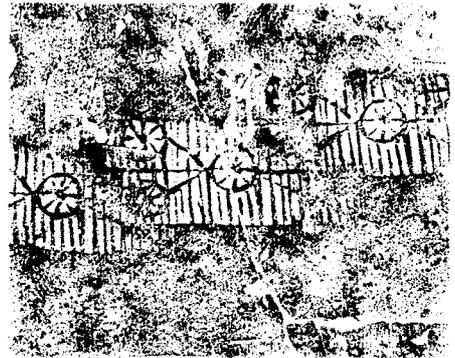
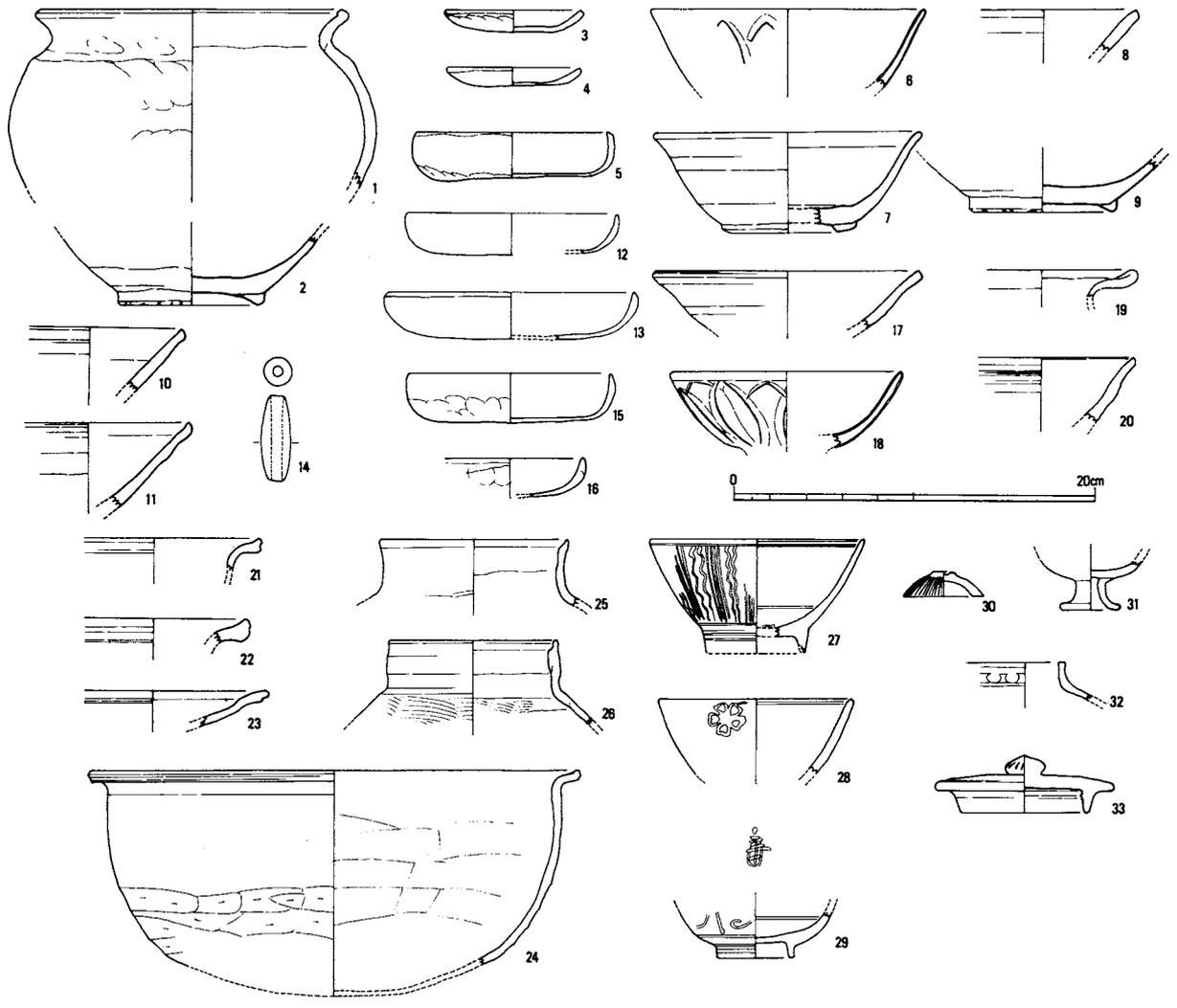


fig. 59. 掘立柱建物・近世以降他出土土器 (scale=1/4) およびA・B地区出土土器拓影 (scale=1/2)

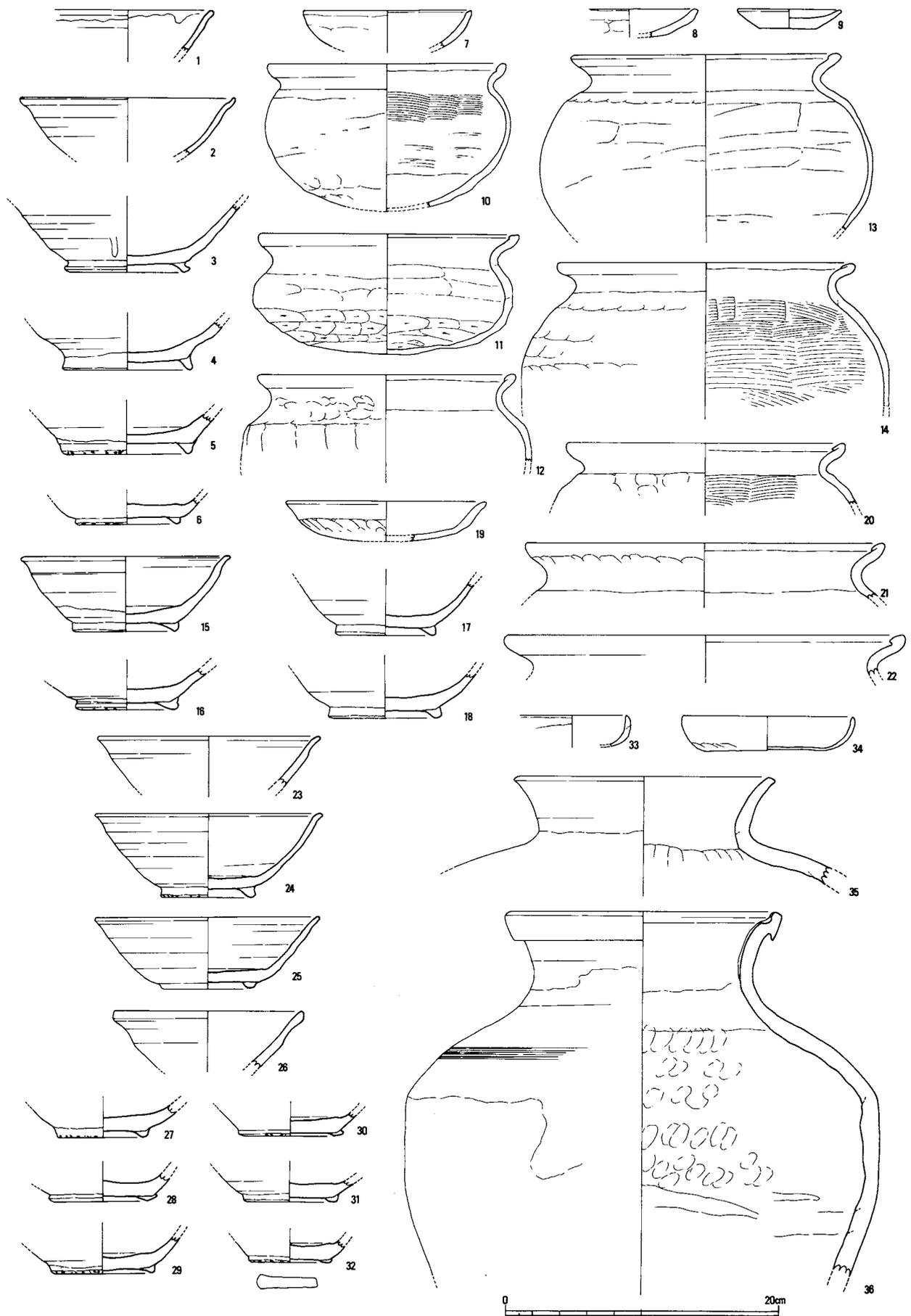


fig.60. B地区落ち込みSK1、土坑SK18他出土土器 (scale=1/4)

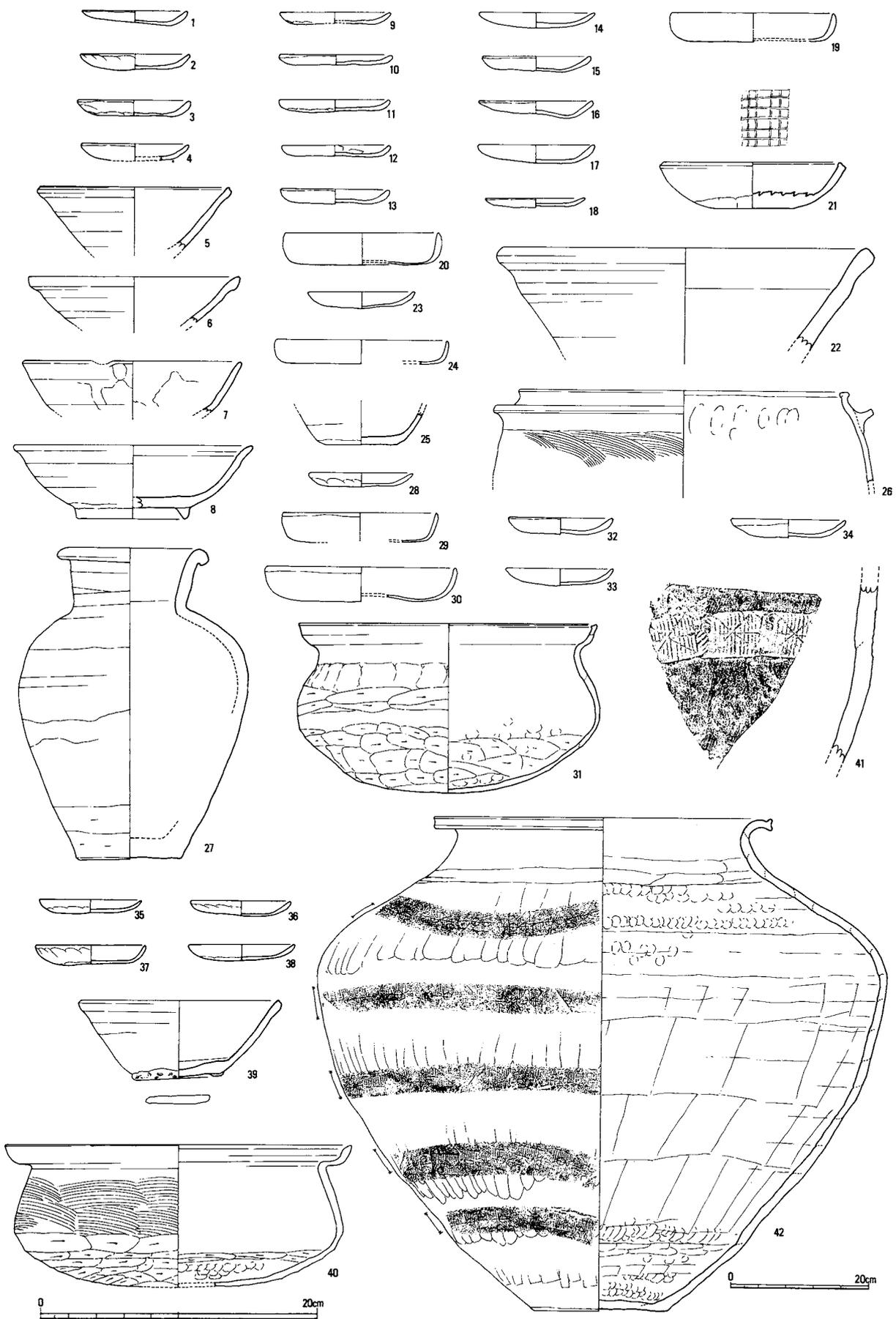


fig.61. B地区中世墓S K25・43他出土土器 (scale= $\frac{1}{4}$ 、42は $\frac{1}{8}$)

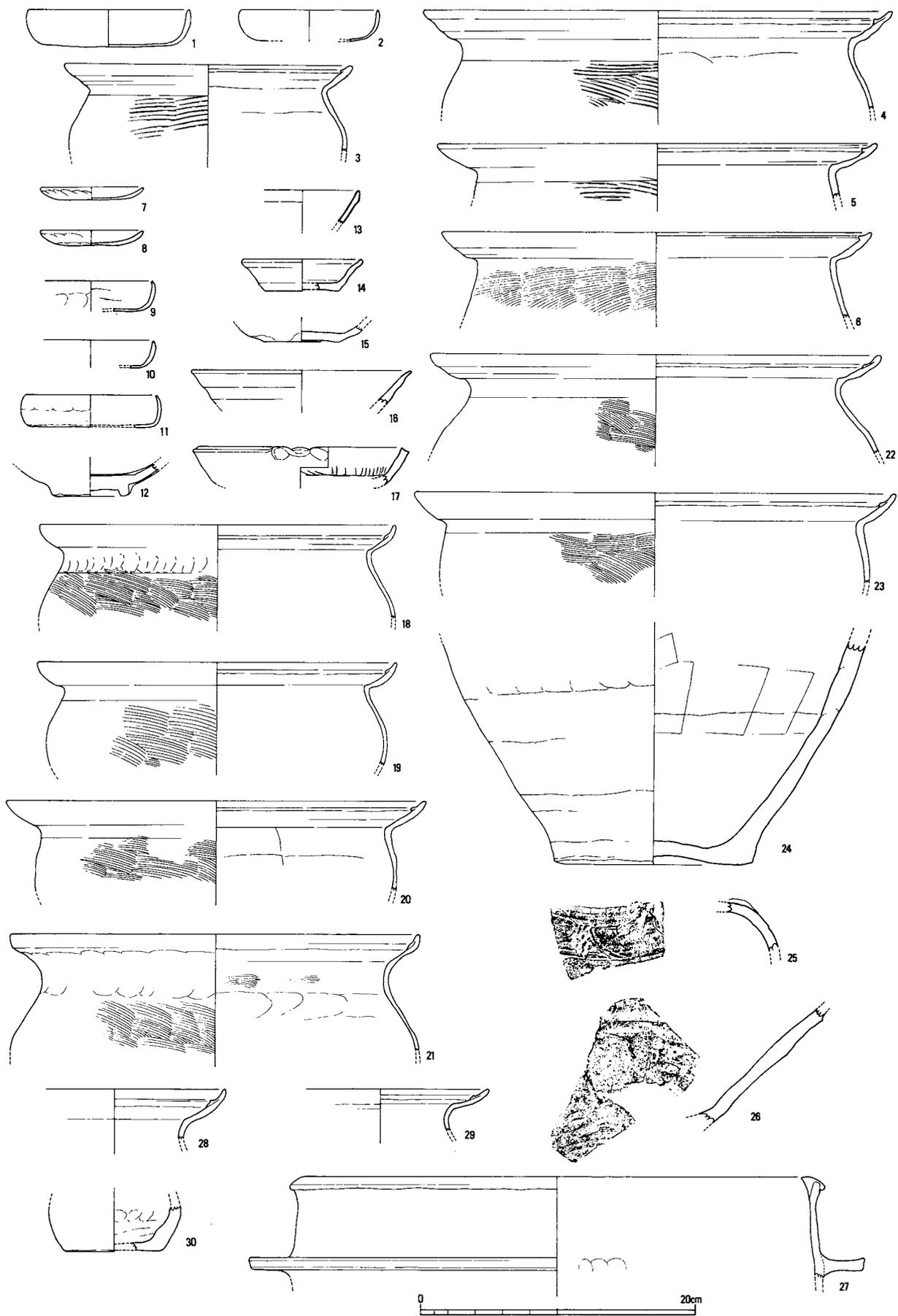


fig. 62. B地区土坑SK 5他出土土器 (scale=1/4)

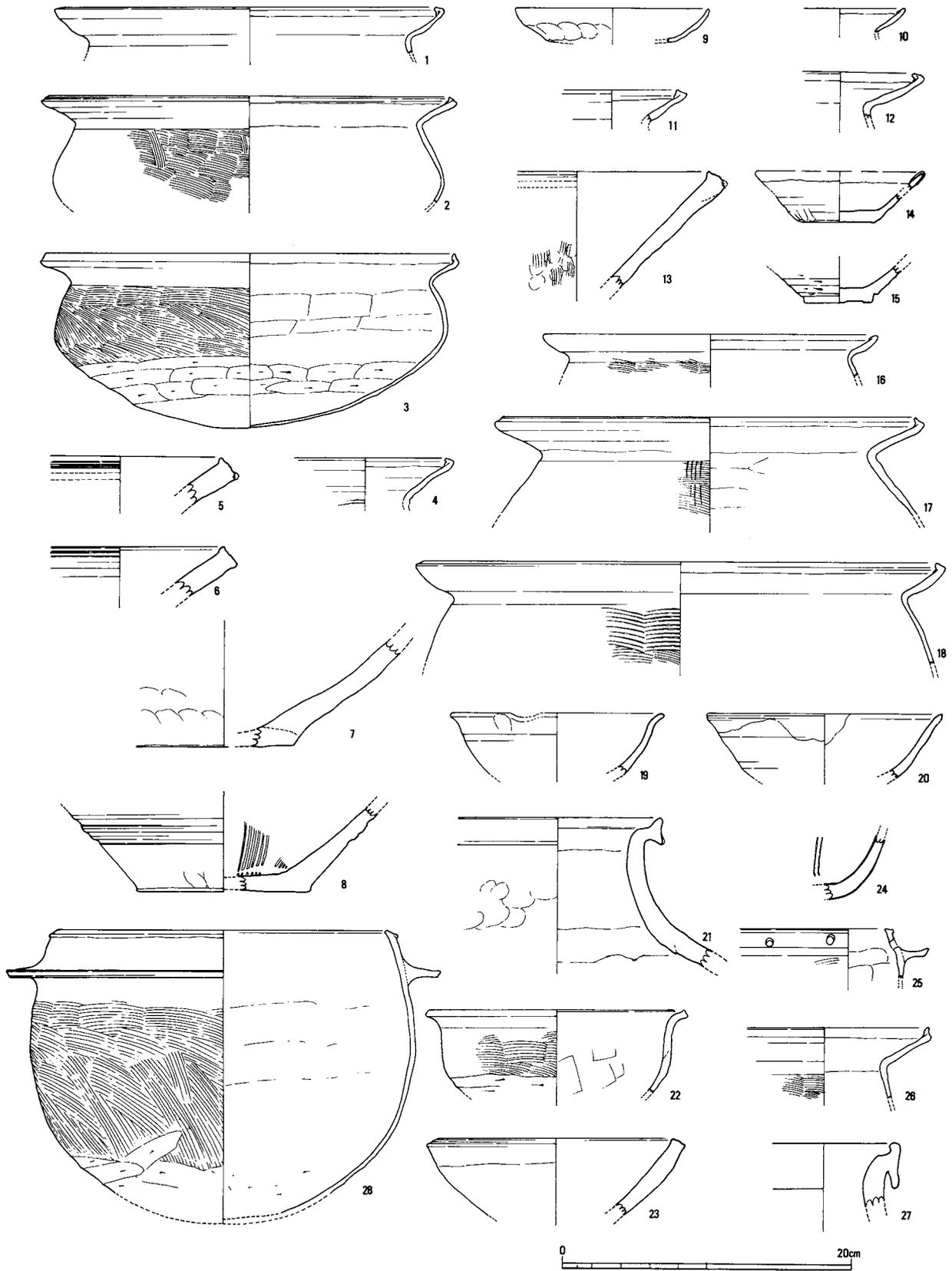


fig. 63. B地区井戸SK30、溝SD2・3他出土土器 (scale=1/4)

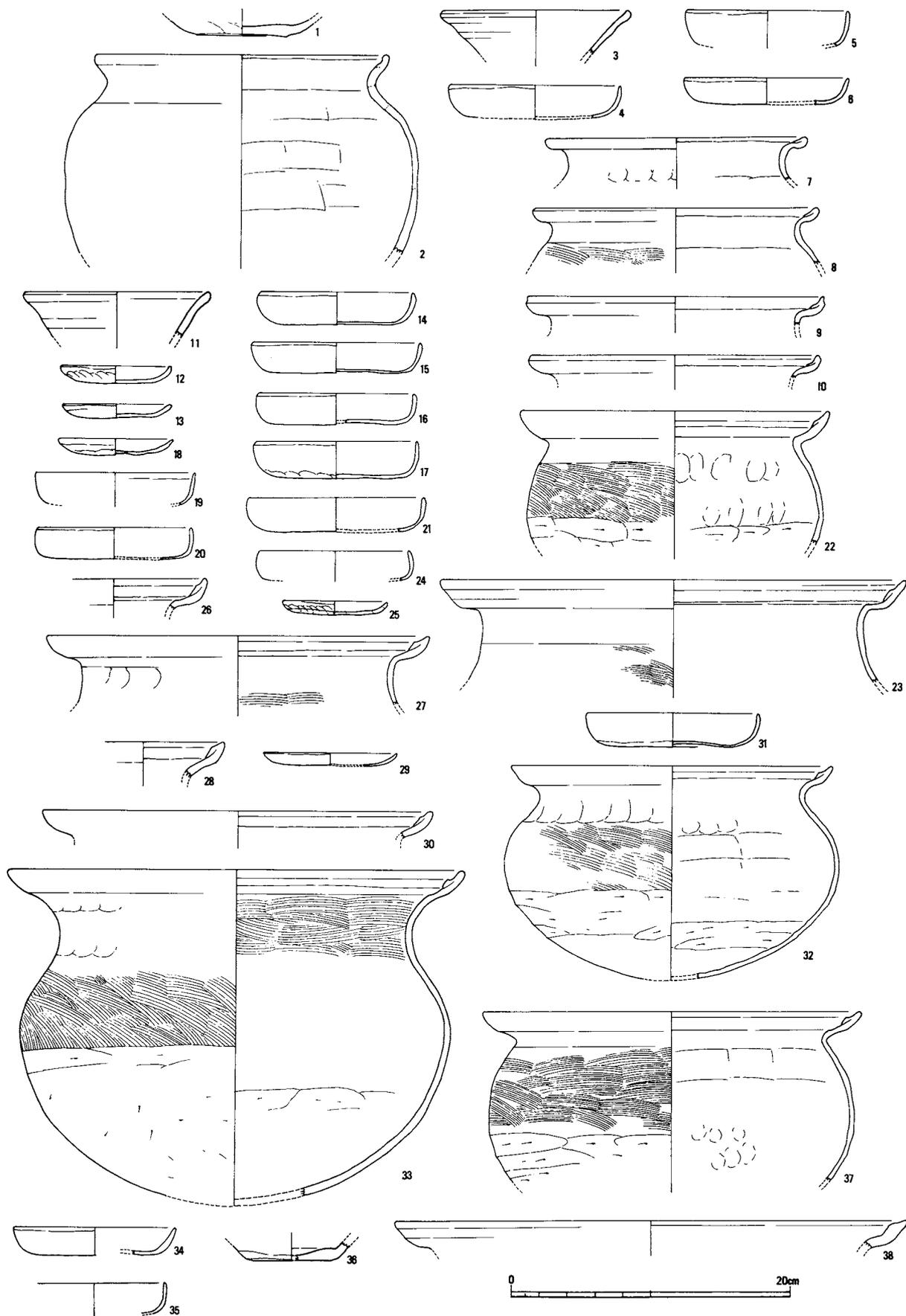


fig.64. C地区土坑SK10·11·12他出土土器 (scale=1/4)

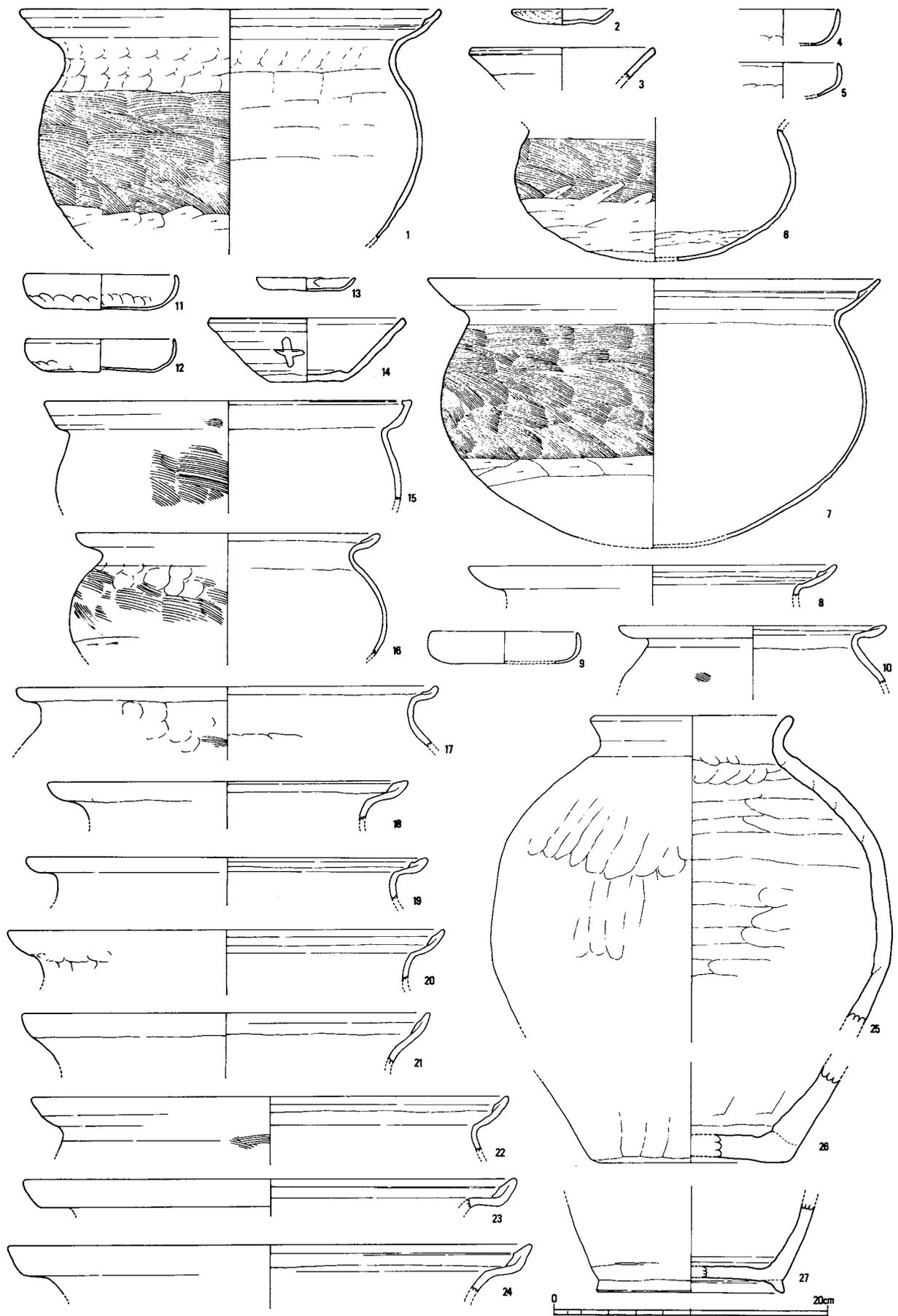


fig.65. C地区土坑SK4・5他出土土器 (scale=1/4)

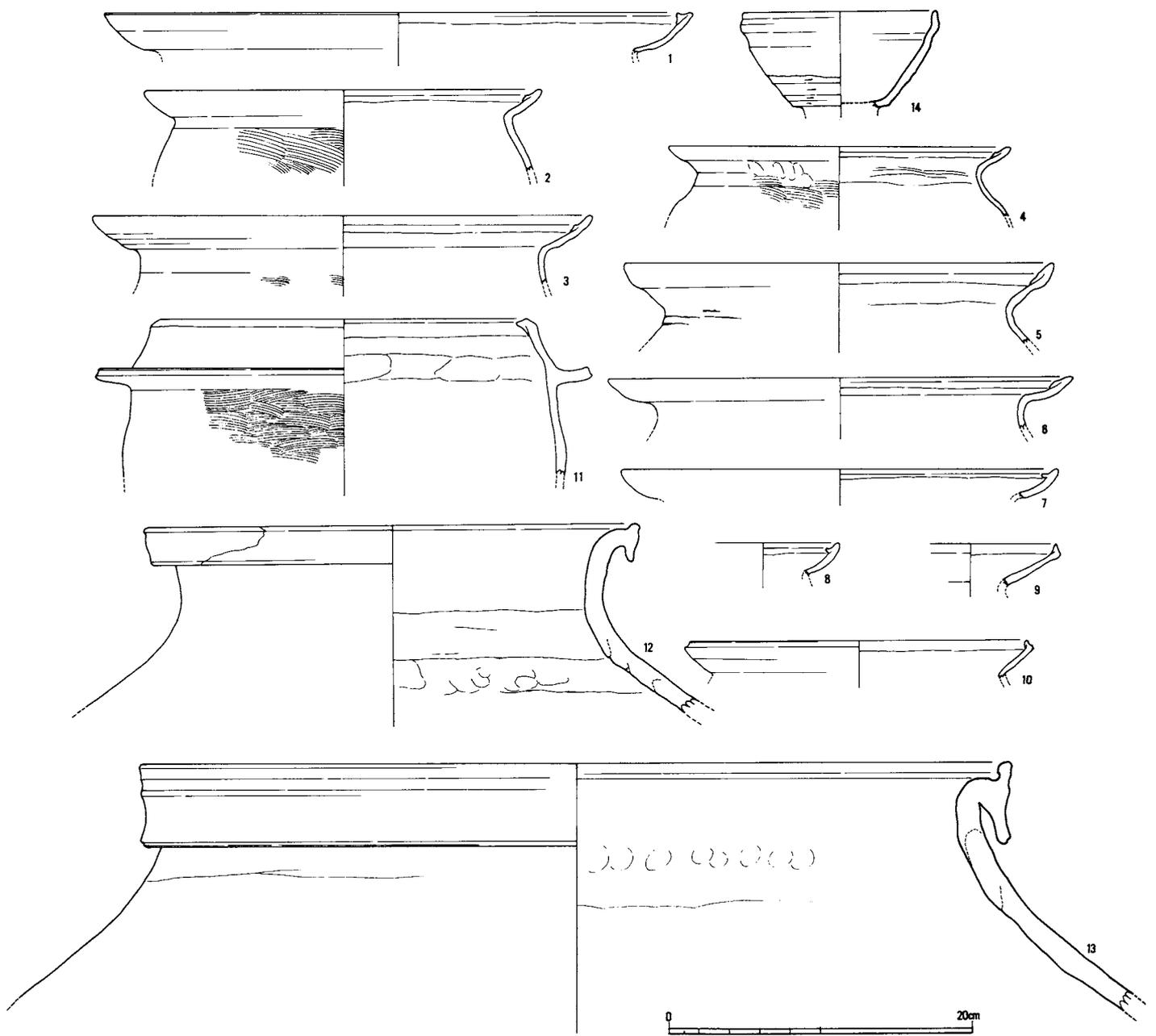


fig.66. C地区井戸SK 7 他出土土器 (scale=1/4)

4. 出土遺物の観察

遺物観察表の凡例

1. 「No.」 : 報告書内の実測図の番号である。35-11 (例) とはfig.35の11番の土器のことである。
2. 「器種」 : 土器の種類によって「土師器」、「陶器」などに分けた。また、どちらも言えないようなもの場合には「備考」の項で触れた。
3. 「地区」 : A・B・C地区の別と出土小地区を記入した。A-k21 (例) とはA地区k21グリットのすることである。
4. 「遺構・層名」 : 出土遺構あるいは層名を記入した。また、遺物出土状況を作成している場合にはその取り上げ番号 (p) を添えた。
5. 「法量」 : 遺物の寸法について記入した。(口) は口縁部径、(高) は高さ、(底) は底部径、(高台) は高台部径、(径) は直径、(長) は長さ、(残長) は残存している長さを示す。法量の計測部位はそれぞれの部位の最大幅である。ただし歪んでいるものは全体の平均値を求めている。
6. 「調整・技法の特徴」 : 外面調整は「外:」内面は「内:」で指示した。表現のなかで「・」でつながれているものは両者の前後関係が不明なもの、「のち」でつながれているものは前後関係を、それぞれ示す。「ヨコナデ」は基本的に口縁部に施されているものであるため、それ以外の部位についてのもののみ場所を記述した。手法の基本的な用語については『纏向』(桜井市教育委員会1976) に準じた。
7. 「胎土」 : 素地の細かさによって「密」「粗」を判断し、混入物としての「小石」などを表現した。
8. 「焼成」 : 見た目の基準である。「堅緻」の表現は陶器類の通常のものについてのみ行った。したがって、土師器類で焼成の良いものは「良好」とした。
9. 「色調」 : 見た目と『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社1988) との折衷によった。土器の色と土の色とは必ずしも一致しないからである。
10. 「残存度」 : 実測した土器のおおよその残存を示した。この項目によって口径などが信用できるかどうか判断されたい。
11. 「備考」 : その他の補足的事項を記入した。
12. 「実測No.」 : 実測時の登録番号を記入した。土器そのものにはこの番号が記入してあるので、実見される時の参考とされたい。

No.	名称	地区	遺構・層	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	材質	備考	登録 番号
48-11	鏃	B i 32	S D 2	1.85	1.45	0.4	1.0	チャート		590
48-12	鏃	B j 33	S K 16	2.5	1.65	0.35	1.2	チャート		589
48-13	鏃	A l 21	表土	2.35	1.1	0.4	0.8	サヌカイト		592
48-14	鏃	A c 16	検出面	2.15	1.3	0.25	0.7	サヌカイト		591
48-15	鏃?	A l 21	Pit 1	2.35	1.5	0.5	1.7	サヌカイト	未製品?	593
50-1	砥石	A	表採	7.3	4.4	1.8	69.7	砂岩	近世?	586
50-2	砥石	C b 3	遺構面	3.3	4.9	1.2	27.0	砂岩?		585
50-3	砥石	B f 34	S K 5	4.7	1.8	1.9	23.2	砂岩		94
50-4	砥石	B f 34	S K 5	4.4	4.5	1.8	51.4	砂岩		93

tab. 9. 石製品類観察表

No.	質	名称	地区	遺構・層	法量 (cm)	備考	登録 番号
49-1	銅	不明製品	A-e 23	S K 37	(径)0.55	断面六角形	550
49-2	鉄	不明製品	A-d 14	S K 48	(径)2.6		538
49-3	鉄	小刀?	B-f 32	S K 3	(残長)5.5	内部の鉄質は外部と異なる	537
49-4	鉄	小刀	B-d 30	S X 3	(長)33.5	内部の鉄質は外部と異なる	535
49-5	鉄	小刀	B-j 38	S K 33	(残長)29.1		536
49-6	鉄	鎌	A-m 22	S X 1	(刃幅)4.3	内部の鉄質は外部と異なる	547
49-7	鉄	火打ち鎌	B-o 34	S D 5	(幅)3.1		542
49-8	鉄	毛抜き	A-k 15	Pit 1	(長)8.4		546
49-9	鉄	釘	A-d 25	S X 9	(幅)0.6	断面正方形	548
49-10	鉄	釘	A-e 23	S K 48	(幅)0.6	断面長方形	569
49-11	鉄	釘	B-m 35	S K 42	(幅)0.6	断面正方形 L字状に屈曲	541
49-12	鉄	釘	B-n 34	S K 39	(幅)0.45	断面正方形	540
49-13	鉄	釘	B-f 34	Pit 1	(幅)0.6	断面正方形	539
49-14	鉄	釘	B-n 34	S K 39	(幅)0.6	断面長方形	545
49-15	鉄	釘	A-k 15	S K 17	(幅)0.55	断面正方形	543
49-16	鉄	釘	A-d 25	S X 9	(幅)0.5	断面長方形	549
49-17	鉄	釘	B-f 32	S K 4 i 1	(幅)0.45	断面長方形	588
49-18	鉄	釘	B-m 36	S K 31	(幅)0.7	断面長方形	568
49-19	鉄	釘	B-m 36	S K 31	(幅)0.55	断面正方形	567
49-20	鉄	釘	B-n 34	S K 39	(幅)0.45	断面正方形	544

鞆の羽口

49-21	土器	鞆羽口	A-d 22	S K 36	(径)8.0	鉄分付着	519
49-22	土器	鞆羽口	A-c 24	S B 2下層	(径)6.9	鉄分付着	518

銭貨

No.	名称	地区	遺構・層	初 鑄 の 年 代	備考	登録 番号
49-23	淳化元寶	C-d 5	S K 7 下層	北宋淳化元年(990)		595
49-24	咸平元寶	C-d 5	S K 7 下層	北宋咸平元年(998)		596
49-25	熙寧元寶	C-d 5	S K 7 下層	北宋熙寧元年(1068)		597
49-26	咸平元寶	A-k 26	S K 49	北宋咸平元年(998)	S K 49には元豊通寶	598
49-27	皇宋通寶	A-k 26	S K 49	北宋宝元2年(1039)	の他2枚ある	599
49-28	元豊通寶	A-g 17	S K 21	北宋元豊元年(1078)		600

tab. 10. 金属製品類観察表 (鞆の羽口、貨幣を含む)

tab.11 出土土器観察表

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
7-1	陶器 椀	字 土山口	表採	(高台) 7.6	外: ロクロナデのち糸きりのち高台にヨコナデ 内: 回転ナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台40	山茶碗 高台に靱殻痕	594
7-2	陶器 椀	字 小清水	表採	(高台) 8.0	外: ロクロナデのち糸きりのち高台にヨコナデ 内: 回転ナデ	粗0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗 高台に靱殻痕	517
7-3	土師器 皿	A区北 東尾根	字ヤケ山 表採	—	外: 剝離 内: 剝離	粗0.5~2.0mmの小石	やや軟	暗褐~黒 褐	口縁10		573
7-4	土師器 皿	A区北 東尾根	字ヤケ山 表採	—	外: 剝離 内: 剝離	粗0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁10		574
48-1	縄文 深鉢	A-k21	S D 2	—	外: 押型文 (ポジティブな楕円文) 内: 斜行沈線	粗0.5~3.0mmの小石	やや軟	茶灰		広義の高山寺式	523
48-2	縄文	A区 中央	淡黄灰礫層	—	外: 押型文 (ポジティブな楕円文)	粗0.5~3.0mmの小石	やや軟	茶~淡茶			526
48-3	縄文	B-d30	S X 3	—	外: 隆帯・爪型文 内: ナテ	粗0.5~1.0mmの小石、 繊維	良好	茶灰			527
48-4	縄文 深鉢	C-d5	S K 7 下層 最下	—	外: 縄文・口縁部に刺突 (巻き貝?) 内: 条痕文	粗0.5~2.0mmの小石、 繊維、赤色小粒	良好	暗褐		縄文早期末?	522
48-5	縄文	A-k24	S X 8	—	外: 条痕 内: 条痕	粗0.5~3.0mmの小石、 繊維	良好	暗褐		縄文早期末	524
48-6	縄文	A-e13	がりかけ中	—	外: 条痕 内: 条痕	粗0.5~3.0mmの小石、 繊維	良好	暗褐		縄文早期末	529
48-7	縄文	A-m16	黄色粘質土	—	外: 一部条痕	粗0.5~4.0mmの小石、 繊維	良好	暗褐		縄文早期末	531
48-8	縄文	A-e13	黄色粘質土	—	外: 条痕 内: 条痕	粗0.5~3.0mmの小石、 繊維	良好	暗褐		縄文早期末	530
48-9	縄文	C-b6	S K 13	—	外: 条痕 内: 条痕	粗0.5~1.0mmの小石、 繊維	良好	茶灰~茶		縄文早期末	528
48-10	縄文	A-k22	S X 2	—	外: 条痕 内: 条痕	粗0.5~2.0mmの小石	良好	暗茶灰			525

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	成色	調色	残存度 (%)	備考	実測No.
48-16	弥生 高杯	C-c7	SK7下層	(脚注) 3.9	外：剥離 内：剥離	粗0.5~2.0mmの小石	やや軟	明褐		脚柱上端100	弥生後期	532
48-17	弥生 壺	B-e34	SK5	(底) 6.6	外：剥離 内：剥離	粗0.5~4.0mmの小石	やや軟	淡褐		底30	弥生後期	533
48-18	弥生 甕	A-p13	がりがけ中	(底) 7.4	外：ハケメのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	良好	淡赤褐 淡褐		底25	弥生中期	534
48-19	土師器 甕	B-m33	SK32	(口) 16.1	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ・ケズリ	密0.5~6.0mmの小石	良好	淡褐 黒灰		口縁95		187
48-20	土師器 甕	B-m33	SK32	(口) 17.8 (復高) 15.7	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ・ケズリ	密0.5~2.0mmの小石 赤色粒	良好	淡褐		口縁90	破損後に熱を受けて破片ごとで 色が異なる	186
48-21	土師器 坏	B-m34	SD4	—	外：剥離 内：剥離	密0.5~1.0mmの小石 赤色粒	良好	赤褐		10以下	SK32の混入	188
48-22	土師器 飯	B-m33	SK32	—	外：ナデ・ハケメのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	良好	淡褐		口縁10		189
48-23	土師器 飯	B-m33	SK32	—	外：ナデ・オサエのちハケメ 内：オサエ・ハケメ	粗0.5~3.0mmの小石	良好	淡褐		把手部分20		190
51-1	土師器 羽釜	A-d28	SD1	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	乳灰		口縁5		581
51-2	土師器 羽釜	A-g24	SD1	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	暗乳灰		口縁10		582
51-3	土師器 羽釜	A-d21	SK43	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	乳灰		口縁10		579
51-4	土師器 羽釜	B-j33	SK20	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石 (多) チャート・赤 色小粒	良好	淡褐		口縁10		575
51-5	土師器 羽釜	A-h23	SD1	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰		口縁10		580
51-6	土師器 羽釜	B-h35	SK13	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	白茶灰		口縁10		576
51-7	土師器 羽釜	A-d23	SK37	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~3.0mmの小石 (多)	良好	乳灰		口縁5		577

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
52-1	陶器 碗	A-p20	SK40	(口) 15.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁25	山茶碗 輪花あり 外面に釉	251
52-2	陶器 碗	A-p20	SK40	(口) 16.8 (高) 5.5 (高台) 8.0	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	30	山茶碗 内外面に自然?釉(緑 灰・黒灰)	250
52-3	陶器 碗	A-p20	SK40	(高台) 10.0	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台30	山茶碗 高台に粗穀痕	252
52-4	土師器 小皿	A-d15	SK13	(口) 7.3 (高台) 0.9	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡黄	完形		275
52-5	陶器 小碗	A-d15	SK13	(口) 9.8 (高) 2.7 (高台) 4.9	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10 高台100		277
52-6	陶器 碗	A-d15	SK13	(口) 15.7	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁20	山茶碗	279
52-7	陶器 碗	A-d15	SK13	(高台) 7.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗 高台に粗穀痕 内面に自然釉	278
52-8	土師器 小皿	A-d15	SK13	(底) 5.0	外：糸切り・剝離 内：剝離	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡褐	底25	ロクロ土師器	276
52-9	陶器 碗	A-f13	SK20p1	(口) 17.7 (高) 5.5 (高台) 7.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台60 口縁20	山茶碗 高台に粗穀痕 内面に自然釉	203
52-10	陶器 碗	A-f13	SK20p2	(高台) 7.2	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	灰	高台100	山茶碗 高台に粗穀痕 内面に自然釉	207
52-11	土師器 皿	A-f13	SK20	(口) 16.4	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁25		204
52-12	瓦器 碗	A-f13	SK20 標詳下	(口) 15.8	外：ナデのちヨコナデ・ミガキ 内：ヨコナデのちミガキ	密0.5~1.0mmの小石	良好	暗灰 白灰	口縁20		206
52-13	土師器 菱	A-f13	SK20	(口) 19.3	外：ナデのちヨコナデ 内：板ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	軟	淡褐	口縁12		205
52-14	土師器 小皿	A-d22	SK45	(底) 5.0	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡褐	底100	ロクロ土師器	255
52-15	陶器 碗	A-d22	SK45	—	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密 体部0.5~2.0mm 高台部~1.0mmの 小石	堅緻	淡灰 灰	高台50	山茶碗 体部と高台部の胎土が 異なる	256

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
52-16	陶器 碗	A-d22	S K45	(高台) 6.0	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台60	山茶碗	253
52-17	土師器 風炉	A-d22	S K45	—	外：凹線状のヨコナデ 内：ナデ・ハケメ	粗0.5~3.0mmの小石	良好	明褐	口縁10未満	外面にいぶし(黒灰)	254
52-18	土師器 小皿	A-m16	S K23	(口) 8.2 (高) 1.4	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデ	粗0.5~3.0mmの小石	軟	淡褐	80		310
52-19	土師器 小皿	A-m16	S K23	(口) 7.9 (高) 1.8	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデ	粗0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	70		311
52-20	土師器 小皿	A-m16	S K23	(口) 11.2 (高) 1.5	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデ	粗0.5~3.0mmの小石	良好	淡茶灰	15	ロクロ土師器か陶器小皿の模倣か?	312
52-21	陶器 碗	A-m16	S K23	(底) 6.6	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	密0.5~6.0mmの小石	堅緻	淡灰	底100	山茶碗 高台は成形時から付けていない	309
52-22	陶器 碗	A-k23	S X 2	(高台) 8.5	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台70	山茶碗 重ね焼き痕あり 内面に自然釉	281
52-23	土師器 皿	A-j16	S K24	(口) 14.2	外：剥離 内：剥離	粗0.5~1.0mmの小石	軟	淡茶灰	口縁12		488
52-24	土師器 甕	A-j16	S K24	(口) 19.2	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：板ナデのちヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石	良好	明褐	頸部20	内面に炭化物	487
52-25	土師器 甕	A-m20	S K42	(口) 20.2	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡~明褐	口縁20	外面に煤付着	486
52-26	土師器 皿	A-c22	S K65	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデ	粗0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁10未満	外面は剥離している	381
52-27	陶器 碗	A-c22	S K65	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10未満	山茶碗 内面に一部釉がかかる が人為的かどうか不明	382
52-28	土師器 甕	A-c22	S K65	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁5未満		380
52-29	土師器 甕	A-c22	S K65	(口) 22.8	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡茶~淡黄灰	口縁25	外面に煤付着	378
52-30	土師器 甕	A-c22	S K65	(口) 21.8	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	379

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
52-31	土師器 甕	A-c22	S K 65	(口) 25.8	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁25	外面に煤付着	377
52-32	土師器 甕	A-l14	S K 28	(口) 20.6	外：オサエのちヨコナデ 内：斜離	粗0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡黄灰	口縁20		271
52-33	土師器 甕	A-l14	S K 28	(口) 28.9	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：板ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁20	外面に煤付着 内面に炭化物?	270
52-34	陶器 碗	A-d15	S D 11	(口) 16.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁25	山茶碗 内面に自然釉	209
52-35	陶器 壺	A-d15	S D 11	(口) 10.0 (高) 24.2 (底) 7.2	外：ナデのちロクロナデのち櫛描 回転施文 内：オサエ・ナデのちロクロナデ	密0.5~10.0mmの小石	堅緻	褐~淡褐	口縁30 体部70	常滑産 三筋壺	208
52-36	土師器 皿	A-d16	S K 8	—	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡灰 黒灰	口縁20	歪み大きい	216
52-37	陶器 碗	A-d16	S K 8	(口) 17.0 (高) 7.2 (高台) 5.7	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~3.0mmの小石	やや軟	淡灰~灰	60	山茶碗	215
52-38	土師器 皿	A-j17	S K 9	(口) 15.8 (高) 2.7	外：ナデ・オサエのちヨコナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	乳灰~淡 黄灰	口縁40		505
52-39	陶器 碗	A-f15	S X 5	(口) 16.8 (高) 5.7 (高台) 8.6	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石、 黒色粒	堅緻	淡灰	口縁20 高台30	山茶碗 高台に靱靱痕 口縁部 片(2片)と高台部片を合成	283
52-40	陶器 碗	A-f15	S X 5	(高台) 5.1	外：ロクロナデのち高台にヨコナ デ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台50	山茶碗	282
52-41	土師器 羽釜	A-f15	S X 5	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁10 罎 10	外面に煤付着	284
52-42	土師器 甕	A-f15	S X 5	(口) 21.0	外：ハケメ・オサエのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁25	外面に煤付着	285
52-43	陶器 碗	A中央	S D 7	(高台) 8.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	体部：淡 灰 高台 暗灰	高台20	山茶碗 体部と高台部の胎土が 異なるもの。遺構は近世以降	402
53-1	土師器 小皿	A-k19	S E 1 下層	(口) 7.6 (高台) 1.1	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	明褐	口縁40		321
53-2	土師器 皿	A-k19	S E 1 下層	(口) 13.4 (高) 2.8	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	明褐	口縁25	内面に煤付着	316

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
53-3	土師器 皿	A-k19	SE1下層	(口) 13.2 (高) 2.7	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	明褐	口縁25		320
53-4	土師器 皿	A-k18	SE1(上層)	(口) 15.0	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁30	内面に煤付着	325
53-5	陶器 小皿	A-k19	SE1下層	(口) 8.2 (高) 2.0 (底) 5.0	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	60	山皿	315
53-6	陶器 小皿	A-k19	SE1下層	(口) 9.0 (高) 2.5 (底) 4.8	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	粗0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	30	山皿	318
53-7	陶器 碗	A-k18	SE1(上層)	(高台) 7.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗 内面に自然釉	324
53-8	陶器 碗	A-k19	SE1下層	(口) 14.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~3.0mmの小石 ・粗粒	やや軟	淡灰	口縁13	山茶碗	317
53-9	陶器 碗	A-k18	SE1(上層)	(口) 17.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁30	山茶碗 外面に墨書あり	323
53-10	陶器 碗	A-k19	SE1下層	(口) 15.9	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁13	山茶碗 内面に煤付着	319
53-11	陶器 ねり鉢	A-k19	SE1下層	(口) 32.6 (高) 13.9 (高台)14.1	外：ロクロナデのちケズリのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~6.0mmの小石	良好 一部瓦質	淡灰~灰	体部100 高台60	常滑?	322
53-12	土師器 鍋	A-k19	SE1下層	(口) 25.8	外：ロクロナデ・ナデのちヨコナ デ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁40(2片)		314
53-13	土師器 鍋	A-k19	SE1下層	(口) 37.4	外：オサエのちヨコナデ 内：指ナデのちヨコナデ	密0.5~3.0mmの小石 (多)	良好	淡褐~灰 褐	口縁60(3片)	外面に煤付着	313
53-14	土師器 鍋	A-114	SD12	(口) 30.8	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石 (多)	やや軟	明茶灰	口縁40(2片)	外面に煤付着	249
53-15	青磁 碗	A-k15	SK17	—	外：ロクロナデ?刺突文 内：ロクロナデ?	密0.5以下の小石	堅緻	灰	口縁10以下	内外面に釉(緑灰)	219
53-16	陶器 碗	A-k15	SK17	(口) 15.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡灰	口縁20	山茶碗	223
53-17	陶器 碗	A-k15	SK17	(口) 14.9	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁20	山茶碗 内面に自然釉(緑黄)	224

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度 (%)	備考	実測No.
53-18	陶器 碗	A-k15	SK17p2	(高台) 7.7	外:ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗	218
53-19	土師器 鍋	A-k15	SK17p3	(口) 24.0	外:オサエのちヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡褐	口縁20	内面に煤付着	220
53-20	土師器 鍋	A-k15	SK17 _{sec} 内	(口) 30.2	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡褐	口縁12	内面に煤付着	221
53-21	土師器 鍋	A-k15	SK17p1	(口) 29.6 (高) 18.1	外:オサエ・ナデのちヨコナデ・ケズリ 内:オサエ・ナデ・ナデ・板ナデのちヨコナデ・ケズリ	粗0.5~3.0mmの小石 (多)	やや軟	淡褐	65	外面に煤・赤変 内面に炭化物	217
53-22	陶器 小皿	A-b15	SK38	(底) 5.2	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	底33	山皿	267
53-23	土師器 皿	A-b15	SK38	(口) 11.6	外:剥離 内:剥離	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁25		268
53-24	土師器 皿	A-b15	SK38	(口) 12.6	外:ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁25		269
53-25	陶器 碗	A-b15	SK38	(口) 14.6	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	粗0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁13	山茶碗	266
53-26	陶器 碗	A-b15	SK38	(高台) 6.6	外:ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内:ロクロナデ	粗0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗 高台に靱殻痕 底部に墨書	260
53-27	陶器 碗	A-b15	SK38	(高台) 5.8	外:ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内:ロクロナデ	粗0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台70	山茶碗 高台に靱殻痕	261
53-28	土師器 鍋	A-b15	SK38	—	外:オサエ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁10未満	外面に煤付着	265
53-29	土師器 鍋	A-b15	SK38	—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	暗赤褐	口縁10未満	外面に煤付着	264
53-30	土師器 鍋	A-b15	SK38	—	外:オサエ・ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡~暗褐	口縁10未満	外面に煤付着	263
53-31	土師器 鍋	A-b15	SK38	—	外:ハケメのちヨコナデ 内:ハケメのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石、 赤色粒	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	262
53-32	陶器 碗	A-k26	SK49	(高台) 6.8	外:ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台30	山茶碗 高台に靱殻痕	328

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
53-33	土師器 皿	A-k26	S K49	(口) 12.4	外: オサエ・ナデ 内: ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁20		329
53-34	土師器 鍋	A-k26	S K49	(口) 23.6	外: ヨコナナデ 内: ヨコナナデ	密0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	327
53-35	土師器 鍋	A-k26	S K49	(口) 23.8	外: オサエ・ハケメのちヨコナナデ 内: ナデのちヨコナナデ	粗0.5~3.0mmの小石 (多)	良好	淡褐	口縁20	金属器の模倣形? 外面に煤付着	326
53-36	土師器 皿	A-b13	Pit 2	(口) 13.8 (高) 2.4	外: オサエ・ナデのちヨコナナデ 内: ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁25		387
53-37	陶器 碗	A-b13	Pit 2	(口) 16.1 (高) 4.5 (高台) 7.6	外: ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナナデ 内: ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡~暗灰	口縁70 高台100	山茶碗	385
53-38	土師器 鍋	A-b13	Pit 2	(口) 27.0	外: ヨコナナデ 内: ヨコナナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	386
54-1	土師器 小皿	A-j10	S K33	(口) 7.1 (高) 1.0	外: オサエ・ナデ 内: ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	白茶	口縁70		272
54-2	土師器 小皿	A-j10	S K33	(口) 7.4 (高) 1.1	外: オサエ・ナデ 内: ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄灰	70		273
54-3	土師器 鍋	A-f24	Pit 1	—	外: オサエのちヨコナナデ 内: ヨコナナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡褐	口縁10以下	外面に煤付着	307
54-4	土師器 皿	A-f24	Pit 1	(口) 12.8 (高) 2.8	外: オサエ・ナデ 内: ナデ	密0.5~2.0mmの小石、 赤色粒	やや軟	淡黄灰	口縁30		305
54-5	土師器 小皿	A-f24	Pit 1	(口) 8.1 (高) 0.9	外: オサエ 内: ナデ	密0.5~1.0mmの小石、 赤色粒	良好	明褐	口縁40		306
54-6	土師器 鍋	A-f24	Pit 1	(口) 25.2	外: オサエ・ナデ・ハケメのちヨ コナナデ・ケズリ 内: ナデ・板ナデのちヨコナナデ	粗0.5~3.0mmの小石 (多)	良好	淡褐~明 褐	口縁20	外面に煤付着	308
54-7	土師器 皿	A-b15	S K39	(口) 13.4	外: 剥離 内: 剥離	密0.5~2.0mmの小石	軟	白茶	口縁25		259
54-8	土師器 皿	A-b15	S K39	(口) 12.6 (高) 2.2	外: 剥離 内: 剥離	密0.5~2.0mmの小石	やや軟	白茶	口縁25		258
54-9	土師器 鍋	A-b15	S K39	(口) 27.4	外: オサエ・ナデのちヨコナナデ 内: ナデのちヨコナナデ	粗0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡赤褐~ 淡褐	口縁25		257

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
54-10	土師器 鍋	A-22	SK53	(口) 21.8	外：オサエのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	485
54-11	土師器 皿	A-117	SK5	(口) 13.5 (高) 3.3	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	やや軟	淡茶灰	25		238
54-12	土師器 皿	A-117	SK5	(口) 11.4 (高) 2.7	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~3.0mmの小石 (少)	やや軟	淡茶灰	口縁25		242
54-13	土師器 皿	A-117	SK5	(口) 11.8 (高) 2.3	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石 (少)	良好	淡黄灰	口縁30		239
54-14	土師器 小皿	A-117	SK5	(口) 8.1 (高) 1.2	外：オサエ・ナデ 内：ナデ・板ナデ	密0.5~2.0mmの小石 (少)	やや軟	淡黄灰	60		248
54-15	土師器 小皿	A-117	SK5	(口) 7.7 (高) 0.9	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~2.0mmの小石 (少)	良好	淡黄灰	80		247
54-16	土師器 小皿	A-117	SK5	(口) 7.6 (高) 0.9	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石 (少)	良好	淡黄灰	95		241
54-17	土師器 小皿	A-117	SK5	(口) 7.6 (高) 0.8	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~2.0mmの小石 (少)	良好	淡黄灰	30		240
54-18	土師器 小皿	A-117	SK5	(口) 7.2 (高) 1.2	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡黄灰	90	楕円形	231
54-19	土師器 鍋	A-117	SK5	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡褐	10未満	内外面に煤付着	230
54-20	土師器 鍋	A-117	SK5	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶褐	10未満	外面に煤付着	228
54-21	土師器 鍋	A-117	SK5	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	10未満		229
54-22	土師器 鍋	A-117	SK5	(口) 23.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	淡茶褐	口縁12	外面に煤付着	246
54-23	土師器 鍋	A-117	SK5	(口) 26.5	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	やや軟	淡褐	口縁20	外面に煤付着	227
54-24	土師器 鍋	A-117	SK5	(口) 25.4	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁25	外面に煤付着	225

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
54-25	土師器 鍋	A-i17	SK 5	(口) 27.5	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡~暗褐	口縁20	外面に煤付着	226
54-26	陶器 碗	A-i17	SK 5	(口) 13.3	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	粗0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁13	山茶碗 内面に自然釉	245
54-27	陶器 碗	A-i17	SK 5	(高台) 7.4	外:ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内:ロクロナデ	粗0.5~4.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台30	山茶碗 高台に靱殻痕	244
54-28	陶器 碗	A-i17	SK 5	(高台) 7.4	外:ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内:ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台50	山茶碗 高台に靱殻痕	237
54-29	青磁 碗	A-i17	SK 5	(高台上部) 7.0	内:陰刻	密0.5mm以下の小石	堅緻	淡灰	下部10	内外面に釉 (暗オリーブ)	233
54-30	青磁 碗	A-i17	SK 5	-	外:蓮弁文	密0.5mm以下の小石	堅緻	淡灰	下部20	内外面に釉 (灰オリーブ)	236
54-31	青磁 碗	A-i17	SK 5	-	外:蓮弁文	密0.5mm未満の小石	堅緻	淡灰	口縁10未満	内外面に釉 (緑灰)	232
54-32	青磁 碗	A-i17	SK 5	-	外:蓮弁文	密0.5mm以下の小石	堅緻	淡灰	口縁10以下	内外面に釉 (淡緑)	234
54-33	青磁 碗	A-i17	SK 5	-	内:陰刻	密0.5mm以下の小石	堅緻	淡灰	口縁10未満	内外面に釉 (淡緑灰)	235
54-34	陶器 ねり鉢	A-i17	SK 5	(高台) 16.1	外:ロクロナデのちケズリのち高 台にヨコナデ 内:ナデ	体部 粗0.5~3.0mmの小 石(多) 高台 密0.5 ~1.0mmの小石(少)	堅緻	体部 淡灰 高台 暗灰	高台20	体部と高台部の胎土が異なる	243
54-35	陶器 碗	A-i15	SK34	-	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	粗0.5~5.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10未満	山茶碗	384
54-36	土師器 皿	A-o14	SD14	(口) 15.6 (高) 2.7	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石、 赤色粒	良好	淡褐	口縁30	内面に煤付着	390
54-37	陶器 碗	A-o14	SD14	(高台) 8.2	外:ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内:ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁25	山茶碗 高台に靱殻痕	389
54-38	陶器 碗	A-c22	SX 7	(高台) 7.7	外:ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内:ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	体部 灰 高台 暗灰	高台100	山茶碗 体部と高台部の胎土が 異なる 壺美?	298
54-39	青磁 碗	A-g15	SK27	(高台) 5.0	外:削り出し高台・蓮弁文のち釉 内:釉	密	堅緻	淡灰 釉 緑黄	高台30	釉は高台内面にはない	468

No	器種	地区	連携・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成色	調色	残存度 (%)	備考	実測No
54-40	土師器 鍋	A-g15	S K27	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石	良好	暗褐	口縁10未満	内外面に煤附着	467
54-41	陶器 椀	A-g15	S D18	(高台) 7.7	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台40	山茶碗	388
54-42	陶器 椀	A-d16	S D 6	(高台) 8.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	白灰	高台100	山茶碗 高台に剝剥痕	506
54-43	陶器 椀	A-122	S X 1	(高台) 6.0	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗	297
54-44	青磁 椀	A-122	S X 1	(高台) 5.8	外：ケズリ	密0.5以下の小石	堅緻	淡灰	高台100	内外面に釉(緑黄) 円盤状に加工	296
54-45	土師器 小皿	A-b21	S D25	(口) 7.6 (高) 1.0	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄~淡茶白	80		383
54-46	土師器 小皿	A-n16	S K29	(口) 8.1 (高) 1.0	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~4.0mmの小石	良好	明褐	100		475
54-47	陶器 小皿	A-g17	S K21	(口) 8.0 (高) 1.6 (底) 4.9	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデのち底に指ナデ	密0.5~5.0mmの小石	堅緻	淡灰	底100	山皿	469
54-48	陶器 小皿	A-g17	S K21	(口) 8.0 (高) 1.5 (底) 4.5	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデのち底に指ナデ	密0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	底100	山皿 内面に自然釉	470
54-49	土師器 皿	A-g17	S K21	(口) 11.4 (高) 2.4	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡茶灰	口縁40(2片)		472
54-50	陶器 椀	A-g17	S K21	(底) 7.2	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡茶灰	底30	山茶碗 内面に煤附着	473
54-51	土師器 鍋	A-g17	S K21	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	暗灰褐	口縁10未満	内外面に煤附着	471
54-52	土師器 鍋	A-g17	S K21	(口) 18.8	外：ハケメのちヨコナデ 内：オサエ・ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤附着	474
54-53	青磁 椀	A-i17	S K 7	—	外：蓮弁文のち釉 内：釉	密	良好	白茶灰 釉黄灰	口縁10未満	青磁にしては軟質である	514
54-54	陶器 椀	A-i17	S K 7	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10	山茶碗	507

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度 (%)	備考	実測No.
54-55	白磁皿	A-i17	SK 7	(口) 9.8	外：釉 内：釉	密	堅緻	淡灰 釉緑味淡 灰	口縁20	内面には釉で付けた一条の線がある	513
54-56	青磁碗	A-i17	SK 7	(口) 15.6	外：蓮弁文のち釉 内：釉	密	堅緻	白灰 釉淡緑	口縁12		512
54-57	青磁碗	A-i17	SK 7	(高台) 4.1	外：蓮弁文のち釉 内：釉	密	堅緻	白灰 釉淡緑	高台70	高台内面には釉ナシ 高台はケズり出し	511
54-58	陶器小皿	A-i17	SK 7	(底) 4.9	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	密0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	底40	山皿	509
54-59	陶器碗	A-i17	SK 7	(口) 15.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~5.0mmの小石	堅緻	白灰	口縁12	山茶碗	508
54-60	土師器鍋	A-i17	SK 7	(口) 36.3	外：オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口頸部20	外面に煤付着	510
55-1	陶器碗	A-c15	Pit 1	(口) 14.9	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	碗部70	山茶碗 高台は欠損している	433
55-2	青磁碗	A-c15	Pit 1	(高台上部) 5.1	外：刺花文のち釉 内：釉	密	堅緻	淡灰 釉淡緑黄	碗下部25		436
55-3	青磁碗	A-c15	Pit 1	(高台) 5.1	外：釉 内：釉	密	堅緻	淡灰 釉緑白	高台90	高台削り出し	435
55-4	陶器碗	A-q16	SD15	(高台) 8.0	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台90	山茶碗	403
55-5	陶器壺	A-q16	SD15	(頸) 10.2	外：回転ナデ 内：ナデのち回転ナデ	密0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	頸部25	口縁部上端破断面に鉄分付着	404
55-6	青磁碗	A	重機掘削	(口) 17.8	外：釉 内：陰刻のち釉	密	堅緻	淡灰 釉緑灰	口縁10		437
55-7	土師器鍋	A-i16	SK26	—	外：オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	376
55-8	土師器鍋	A-i16	SK26	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡灰褐	口縁10未満	外面に煤付着	375
55-9	土師器皿	A-i16	SK26	(口) 12.7 (高) 2.5	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄白	口縁40		374

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度 (%)	備考	実測No
55-10	土師器 皿	A-k19	SK22	(口) 12.7	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	暗褐~ 黒褐	口縁20		373
55-11	土師器 皿	A-b24	SK54	(口) 11.2 (高) 2.6	外:剥離 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡茶白	口縁100		371
55-12	土師器 小皿	A-b24	SK54	(口) 8.0 (高) 1.1	外:剥離 内:剥離	密0.5~1.0mmの小石、 赤色小粒	軟	淡茶白	口縁30		372
55-13	土師器 小皿	A-l17	Pit 2	(口) 8.2 (高) 1.3	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡灰	100		441
55-14	陶器 小皿	A-l17	Pit 2	(口) 8.0 (高) 1.7	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁30	山皿	442
55-15	陶器 小皿	A-e23	SK48	(口) 8.8 (高) 2.2 (底) 3.8	外:ロクロナデのち糸切り 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	50	山皿	476
55-16	陶器 椀	A-e23	SK48	(高) 6.8	外:ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶椀 高台に剥離痕	477
55-17	土師器 鍋	A-e23	SK48	—	外:オサエのちヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡褐	口縁10未満	外面に煤付着	478
55-18	土師器 鍋	A-e23	SK48	—	外:オサエのちヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	480
55-19	青磁 椀	A-e23	SK48	(高台) 5.7	外:蓮弁文・削り出し高台のち釉 内:釉	密	堅緻	淡灰 粗緑灰	高台30	釉は高台内面までは及ばない	479
55-20	土師器 鍋	A-e23	SK48	(口) 24.8	外:オサエのちヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	481
55-21	陶器 椀	A-c23	Pit 2	(高台) 6.7	外:ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内:ロクロナデ	粗0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台50	山茶椀 墨書「〇」あり	443
55-22	土師器 鍋	A-d27	SK60	(口) 18.2	外:オサエのちヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁80		482
55-23	土師器 皿	A-j18	SK 6	(口) 11.4	外:剥離 内:剥離	粗0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁25		502
55-24	陶器 椀	A-j18	SK 6	(高台) 7.8	外:ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内:ロクロナデ	粗0.5~3.0mmの小石 (多)	堅緻	淡灰	高台50	山茶椀 高台に剥離痕	501

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
55-25	土師器 鍋	A-118	S K 6	(口) 24.6	外：オサエのちハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石	やや軟	暗茶灰	口縁20	内面に炭化物 外面に煤付着	499
55-26	土師器 鍋	A-118	S K 6	(口) 26.6	外：オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁12		500
55-27	陶器 椀	A-122	S X 3	(高台) 7.4	外：ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰褐	高台100	山茶碗 高台に靱殻痕	280
55-28	白磁 椀	A-422	S K 55	(口) 14.2	外・内：釉のち口縁部のみ釉を 削る	密	堅緻	白灰 釉灰白	口縁20	口禿 外面頸部には釉の濃淡に よる横線がある	452
55-29	青磁 椀	A-424	S K 55	(高台) 5.2	外：蓮弁文のち釉 内：陰刻花文のち釉	密	堅緻	淡灰 釉緑黄	高台50	ケズリ出し高台	451
55-30	陶器 椀	A-424	S K 55	(高台) 6.8	外：ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~4.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗 高台に靱殻痕	453
55-31	陶器 椀	A-424	S K 55	(高台) 6.2	外：ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台25	山茶碗 高台に靱殻痕 墨書「○」あり	454
55-32	陶器 椀	A-424	S K 55	(高台) 5.9	外：ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗 高台に靱殻痕 墨書「○」あり	449
55-33	陶器 椀	A-424	S K 55	(高台) 6.4	外：ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台25	山茶碗 高台に靱殻痕 墨書あり 意味不明	448
55-34	陶器 椀	A-424	S K 55	(高台) 7.1	外：ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台90	山茶碗 高台に靱殻痕 墨書あり 意味不明	450
55-35	土師器 鍋	A-423	S K 55	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	455
55-36	土師器 鍋	A-423	S K 55	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~3.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	456
55-37	土師器 鍋	A-424	S K 55	(口) 31.8	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡褐~暗 褐断面黒	口縁30	外面に煤付着	445
55-38	土師器 鍋	A-424	S K 55	(口) 32.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石 (多)	やや軟	淡茶灰	口縁12		447
55-39	土師器 鍋	A-424	S K 55	(口) 32.6	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰 断面黒	口縁20	外面に煤付着	446

No	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	成色	色調	残存底 (%)	備考	実測No
55-40	土師器 鍋	A-i15	SK11	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	やや軟	茶灰	口縁10未満			491
55-41	土師器 鍋	A-i15	SK11	—	外：オサエのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁10未満		外面に煤付着	490
55-42	土師器 鍋	A-i15	SK11	(口) 20.9	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁10未満		外面に煤付着	489
55-43	陶器 碗	A-p15	SK35	(口) 15.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁12		山茶碗	330
55-44	土師器 小皿	A-p15	SK35	(口) 7.6 (高) 1.4	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	明褐	70			332
55-45	土師器 小皿	A-p15	SK35	(口) 7.9 (高) 1.2	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	100			331
55-46	土師器 小皿	A-p15	SK35	(口) 7.9 (高) 1.0	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡褐	60			333
55-47	土師器 皿	A-k15	(SK17) 北東部分	(口) 11.3 (高) 2.6	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	乳灰	60		土坑内出土遺物と時期的に隔た るので、土坑と重なっていたピッ トのものであろう	222
55-48	陶器 碗	A-c22	SX 7	(高台) 8.9	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石、 黒色の粒子	堅緻	淡灰	高台30		山茶碗 高台に靱靱痕	458
55-49	土師器 鍋	A-c22	SX 7	(口) 32.2	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ・ ケズリ 内：ナデ・板ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡~暗褐	口縁40 2片		外面に煤付着	457
55-50	土師器 鍋	A-k24	SX 8	(口) 24.2	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	黄灰	口縁25 2片		外面に煤付着	274
55-51	陶器 鉢	A-a23	SK56	(底) 7.5	外：ロクロナデのち糸切りのち釉 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡茶灰	底25		片口の付くものか	484
55-52	陶器 御皿	A-a23	SK56	(口) 16.9 (高) 3.4 (底) 13.8	外：ロクロナデのちケズリ 内：ロクロナデのち銚による脚し 目	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡黄灰	口縁20		底以外に釉がかかる	483
55-53	陶器 ねり鉢	A-m19	SK18	—	外：回転ナデのちケズリ 内：磨耗	粗0.5~5.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10未満			459
56-1	土師器 鍋	A-d25	SX 9	(口) 35.1	外：ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (少)	良好	淡褐 黒褐	口縁13		外面に煤付着	211

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
56-2	土師器 鍋	A-d25	S X 9	(口) 33.2	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁25	外面に煤付着	210
56-3	土師器 鍋	A-d25	S X 9	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	やや軟	乳灰 黒灰	口縁10未満		214
56-4	白磁 椀	A-d25	S X 9	(口) 17.8	外：ケズリ	密0.5mm以下の小石	堅緻	淡灰	口縁20	内外面に釉 (淡緑灰)	212
56-5	青磁 椀	A-d25	S X 9	(口) 16.1	内：陰刻施文のち釉	密0.5mm以下の小石	堅緻	淡灰	口縁13	内外面に釉 (淡緑)	213
56-6	土師器 鍋	A-d23	S K 37	(口) 24.6	外：ハケメ・ナデのちヨコナデ・ ケズリ 内：ナデ・板ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石、 赤色粒	良好	白茶	口縁20		421
56-7	土師器 鍋	A-e22	S K 37	(口) 29.6	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁10	外面に煤付着	416
56-8	土師器 鍋	A-e23	S K 37 sec	(口) 32.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	415
56-9	土師器 鍋	A-d23	S K 37	(口) 29.6	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	暗茶灰	口縁12	外面に煤付着	417
56-10	土師器 小皿	A-e22	S K 37	(口) 7.6 (高) 0.9	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄茶灰	100		418
56-11	土師器 小皿	A-d23	S K 37	(口) 7.6 (高) 1.0	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁60		422
56-12	土師器 皿	A-d23	S K 37	—	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁10		424
56-13	陶器 椀	A-e23	S K 37	(高台) 6.6	外：ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~4.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台70	山茶碗 高台に粗敷痕 墨書あり 意味不明	423
56-14	陶器 椀	A-d23	S K 37	(口) 16.3	外：ロクロナデのち回転ケズリの ち釉 内：ロクロナデのち釉	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁25	平釉 内面にトチン跡	414
56-15	土師器 鍋	A-d23	S K 37	(口) 29.0	外：ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡褐 暗褐	口縁70	外面に煤付着	419
56-16	土師器 鉢	A-d23	S K 37	(口) 25.0	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁10		420

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	成色	調	残存度(%)	備考	実測No.
56-17	土師器 小皿	A-e23	SK37 sec	(口) 8.2 (高) 1.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁50			584
56-18	土師器 鍋	A-a22 A-b22	濁赤褐色土	(口) 32.4	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁30			462
56-19	土師器 小皿	A-a22	濁赤褐色土	(口) 7.8 (高) 1.1	外:ナデ・オサエ 内:ナデ・オサエ	密0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	完形			463
56-20	土師器 小皿	A-a22	濁赤褐色土	(口) 7.5 (高) 0.9	外:ナデ・オサエ 内:ナデ・オサエ	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	ほぼ完形			464
56-21	陶器 椀	A-a22	濁赤褐色土	(口) 16.0 (高) 6.1 (高台) 4.2	外:ロクロナデのち糸切りのちケ ズリ・ケズリ出し高台 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡茶	95		平鉢 内面にトチン跡(4ヶ所) 内外面に釉(明緑灰)	461
56-22	陶器 椀	A-b22	濁赤褐色土	(口) 15.4 (高) 6.1 (高台) 5.2	外:ロクロナデのち糸切りのちケ ズリ・ケズリ出し高台 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡茶黄	90		平鉢 内面にトチン跡(4ヶ所) 内外面に釉(淡緑灰)	460
56-23	陶器 卸皿	A-b21	濁赤褐色土	(口) 13.8 (高) 3.1 (底) 7.0	外:ロクロナデのち糸切りのち釉 内:ロクロナデのち底による卸し 目のち釉	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	釉 淡緑黄	100		片口を持つ	465
56-24	土師器 鍋	A-b21	Pit 3	(口) 39.2	外:オサエ・ハケメのちヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石 (多)	やや軟	茶灰	口縁12		外面に煤付着	444
56-25	土師器 羽釜	A-c29	S D24	(口) 31.6 (鑊) 43.6	外:オサエ・ハケメのちヨコナデ 内:ナデ・オサエのちヨコナデ	密0.5~3.0mmの小石 (多)	軟	淡灰~淡 褐	口縁20			334
56-26	土師器 小皿	A-c29	S D24	—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁10未満		外面に煤付着	335
56-27	陶器 壺?	A-d22	SK36	(底) 12.2	外:ナデ 内:オサエ・ナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡褐 粗緑灰	底60		破断面に鉄付着	494
56-28	土師器 鍋	A-i17	SK 4	—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁 5			588
56-29	土師器 皿	A-i17	SK 4	(口) 11.0 (高) 2.1	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁30			589
57-1	土師器 鍋	A-j19	SK 3	(口) 28.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	淡黄灰	口縁15			406
57-2	土師器 鍋	A-j19	SK 3	(口) 30.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁10		外面に煤付着	410

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度 (%)	備考	実測No.
57-3	土師器 羽釜	A-j19	SK3	(口) 21.1	外: オサエ・ハケメのちヨコナデ 内: ナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁12	外面に煤付着	409
57-4	土師器 羽釜	A-j19	SK3	(口) 25.6	外: ヨコナデ 内: ナデ	粗0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁15 鋸部30		407
57-5	土師器 小皿	A-j19	SK3	(口) 8.0 (高) 1.3	外: 剥離 内: 剥離	粗0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡褐	100		412
57-6	青磁 小皿?	A-j19	SK3	(底) 5.8	外: 板状痕跡(糸切り?)のち釉 内: 釉	密	堅緻	白灰 釉白緑	底25	青白磁? 釉は底部にも一部かかる	439
57-7	青磁 椀	A-j19	SK3	(口) 15.2	外: 蓮弁文のち釉 内: 釉	密	堅緻	淡灰 釉淡緑灰	口縁10		438
57-8	陶器 椀	A-j19	SK3	(高台) 6.8	外: ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内: ロクロナデ	粗0.5~6.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗 高台に粗段痕	411
57-9	陶器 椀	A-j19	SK3	(高台) 5.9推定	外: ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内: ロクロナデ	粗0.5~4.0mmの小石	堅緻	淡灰	底100	山茶碗 高台に粗段痕 墨書「…」あり	413
57-10	土師器 茶釜	A-j19	SK3	(口) 11.3	外: オサエ・ナデ・ハケメのちヨ コナデ 内: オサエ・ハケメのちヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁50 鋸部25	外面に煤付着 鋸部と口縁部は接合しない	405
57-11	陶器 ねり鉢	A-j19	SK3	(口) 30.8	外: 回転ナデのちケズリ 内: 磨耗	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁20		408
57-12	陶器 甕	A-g17 A-g17 A-j19	SK27 SK21 SK3	(口) 33.6	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	堅緻	茶灰	口縁25	外面に釉 異遺構間接合資料	466
57-13	土師器 鍋	A-c24	SE2下層	(口) 32.8	外: オサエのちヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	431
57-14	土師器 鍋	A-c24	SE2上層	(口) 29.8	外: オサエ・ハケメのちヨコナデ・ ケズリ 内: 板ナデ・ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	425
57-15	土師器 鍋	A-c24	SE2上層	—	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	426
57-16	土師器 鍋	A-c24	SE2上層	—	外: オサエのちヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	427
57-17	土師器 皿	A-c24	SE2下層	(口) 11.2 (高) 2.1	外: オサエ・ナデ 内: ナデ	粗0.5~1.0mmの小石	良好	淡白灰	口縁25		428

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
57-18	陶器 ねり鉢	A-c24	SE2下層 崩落土下	(口) 33.5 (高) 11.5 (底) 14.6	外：オサエ・ナデのちちヨコナデ 内：磨耗	密0.5~6.0mmの小石	堅緻	暗赤褐～ 灰	口縁10 底25	2片を合成 常滑産	429
57-19	陶器 壺?	A-c24	SF2上層	(底) 19.0	外：ナデ 底部無調整 内：オサエ・ナデ・板ナデ	密0.5~8.0mmの小石	堅緻	淡褐～淡 灰 釉淡緑灰	底30	内面の釉は自然釉	430
57-20	青磁 碗	A-c18	SD4	(口) 16.6	外：蓮弁文のち釉 内：釉	密	堅緻	淡灰 釉淡緑黄	口縁12		504
57-21	青磁 碗	A-c18	SD4	(口) 15.6	外：蓮弁文のち釉 内：釉	密	堅緻	淡灰 釉淡緑灰	口縁20		503
57-22	陶器 大甕	A-122 A-119 A-116	SX3 SK3 SK26	(底) 20.0	外：ナデ・タタキメ 内：ナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	灰～淡灰	底部60(2片)	内面に自然釉 異遺構間接合資料	495
57-23	陶器 壺	A-f25 A-g21 A-e25	SD1 SK44 SK58	(頸部) 20.5	外：タタキメのちヨコナデ 内：オサエのちナデのちちヨコナデ	密0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	体部30	外面に釉(淡緑) 異遺構間接合資料	497
57-24	陶器 壺	A-e23 A-g24	SK37 SD1	(底) 15.0	外：タタキメ・ナデ 内：ナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	底部25	内面に自然釉 異遺構間接合資料57-23と同一?	496
58-1	陶器 碗	A-f15	SD1	(口) 15.7	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁20	山茶碗	347
58-2	陶器 碗	A-f25	SD1	(高台) 7.2	外：ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗	342
58-3	陶器 碗	A-h23	SD1	(高台) 6.0	外：ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗 高台に粉殻痕	343
58-4	陶器 小壺	A-f25	SD1	(口) 5.7 (高) 9.6 (底) 10.0	外：ロクロナデ・ヘラ沈線 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	濃褐	60	内面に鉄分厚く付着 底部に砂付着	336
58-5	青磁 碗	A-f25	SD1	(高台) 4.8	外：釉 内：釉	密	堅緻	白灰 釉淡緑灰	高台80	ケズリ出し高台	440
58-6	陶器 碗	A-g24	SD1	(高台) 5.9	外：ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗 高台に粉殻痕 58-1と同一個体?	346
58-7	陶器 小皿	A-h23	SD1	(高台) 7.0	外：ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台40	山茶碗 高台に粉殻痕 墨書「十」?あり	493
58-8	陶器 小皿	A-h23	SD1	(高台) 7.4	外：ロクロナデのち米切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台40	山茶碗 高台に粉殻痕 墨書「十」?あり	492

No	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度 (%)	備考	実測No
58-9	土師器 鍋	A-f25	SD 1	—	外：オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	337
58-10	土師器 羽釜	A-d27	SD 1	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石 (多)	良好	淡黄灰	口縁10未満		341
58-11	土師器 鍋	A-f25	SD 1	(口) 21.2	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ ・ケズリ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石 (多) 赤色粒	良好	淡茶灰	口縁20 (2片)	外面に煤付着	338
58-12	土師器 羽釜	A-f25	SD 1	(口) 18.0	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁20	内外面に煤付着	339
58-13	土師器 羽釜	A-g24	SD 1	(口) 20.1	外：オサエのちヨコナデ・ケズリ? 内：ヨコナデ・ケズリ?	密0.5~3.0mmの小石 赤色粒	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	340
58-14	陶器 椀	A-d27 A-e26	SD 1	(口) 16.9	外：ロクロナデのち糸切りのちケ ズリのち高台ケズリ出し 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡茶灰 釉淡緑	口縁20 高台80	平椀 瀬戸産?	351 352
58-15	陶器 ねり鉢	A-f25	SD 1	(口) 29.8	外：回転ナデのちケズリ 内：回転ナデ	密0.5~3.0mmの小石	堅緻	濃褐~淡 褐	口縁10	瀬戸産?	345
58-16	陶器 ねり鉢	A-f25	SD 1	(高台) 12.2	外：回転ナデ・ナデのちケズリの ち高台にヨコナデ 内：回転ナデ	粗0.5~4.0mmの小石	堅緻	淡 灰高台	高台25	常滑あるいは瀬美産 体部と高台部の胎土が異なる	350
58-17	陶器 ねり鉢	A-g24 A-f25	SD 1	(高台) 15.0	外：回転ナデ・ナデのちケズリの ち高台にヨコナデ 内：回転ナデ	密0.5~4.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台40	常滑あるいは瀬美産	344
58-18	陶器 壺	A-g24 A-f25	SD 1	(頸) 12.0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	頸部30	外面に自然釉	498
58-19	土師器 鍋	A-g24	SD 1	(口) 27.7	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁12	外面に煤付着	348
58-20	土師器 鍋	A-f25	SD 1	(口) 36.1	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁10	外面に煤付着	349
58-21	陶器 椀	A-j23	SD 3	(高台) 7.2	外：ロクロナデのち糸切りのちケ ズリのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰 体部高台 暗灰	高台25	山茶椀 体部と高台部の胎土が 異なる 高台内面に鉄分厚く付着	353
58-22	陶器 椀	A-h24	SD 3	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10未満	山茶椀	369
58-23	陶器 椀	A-h24	SD 3	(高台) 7.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台90	山茶椀 高台に靱殻痕	366

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
58-24	陶器 碗	A-i22	SD 3	(高台) 7.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台30	山茶碗 高台に粉殻痕	370
58-25	陶器 碗	A-h24	SD 3	(高台) 9.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台60	山茶碗 高台に粉殻痕	367
58-26	陶器 碗	A-h24	SD 3	(高台) 7.6	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台90	山茶碗 高台に粉殻痕	368
58-27	土師器 羽釜	A-i23	SD 3	(口) 36.4 (鏝) 48.1	外：ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデのちヨコナデ・ケズリ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	鏝部25	外面に煤付着 内面に炭化物付着	365
58-28	土師器 台付皿	A-m19	SD 2	(高台) 5.2	外：剝離 内：剝離	密0.5~1.0mmの小石	軟	淡褐	高台25	ロクロ土師器?	362
58-29	土師器 皿	A-i26	SD 2	—	外：剝離 下半にケズリ 内：剝離	密0.5~2.0mmの小石	軟	淡褐	口縁10未満	平安時代のもの	363
58-30	土師器 甕	A-mn 19	SD 2	(口) 19.8	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石、赤色粒	良好	淡茶灰	口縁20	奈良・平安時代	361
58-31	陶器 碗	A-n19	SD 2	(口) 16.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	灰	口縁20	山茶碗	356
58-32	陶器 碗	A-h24	SD 2	(口) 16.4 (高) 6.0 (高台) 8.0	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	60	山茶碗 内外面に釉(緑黄・暗青) 重ね焼き痕 高台に粉殻痕	357
58-33	陶器 碗	A-h24	SD 2	(高台) 7.8	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台40	山茶碗 内面に墨?	358
58-34	陶器 碗	A-i22	SD 2	(高台) 8.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗	360
58-35	陶器 碗	A-g25	SD 2	(高台) 7.7	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗 高台に粉殻痕	355
58-36	陶器 碗	A-n19	SD 2	(高台) 8.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~5.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗 高台に粉殻痕	359
58-37	土師器 鍋	A-g25	SD 2	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐~暗褐	口縁10未満	外面に煤付着	364
58-38	陶器 壺	A-h21	SD 2	—	外：回転ナデのち筒書き文字 内：回転ナデ	密0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	頸部25	渥美産? 頸部の文字は「□いひし□のもと□へたつ」か?	354

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	成色	調色	残存度 (%)	備考	実測No.
59-1	土師器 甕	A-k16	Pit 2 建物 5	(口) 17.2	外: オサエ・ナデのちヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	明褐		口縁25	外面に煤付着	520
59-2	陶器 碗	A-m13	Pit 1 建物 2	(高台) 8.1	外: ロクロコナデのち米切りのち高台にヨコナデ 内: ロクロコナデ	密0.5~2.0mmの小石 植物痕	堅緻	淡灰~灰		高台100	山茶碗 内面に自然釉 内面に重ね磨き痕 高台に剝離痕	286
59-3	土師器 小皿	A-l16	Pit 4 建物 4・10	(口) 7.8 (高) 1.2	外: ナデ・オサエ 内: ナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	明褐		90		301
59-4	土師器 小皿	A-l15	Pit 1 建物 4・10	(口) 7.5 (高) 1.1	外: ナデ・オサエ 内: ナデ	密0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡茶~明褐		90	胎土はマーブル状	302
59-5	土師器 皿	A-j17	Pit 3 建物 4	(口) 11.2 (高) 2.7	外: ナデ・オサエ 内: ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶白		70		434
59-6	青磁 碗	A-j16	Pit 5 建物 4・10	(口) 15.4	外: 蓮弁文のち釉	密0.5mm前後の砂粒	堅緻	淡灰		口縁15	内外面に釉 (淡緑黄)	303
59-7	陶器 碗	A-l16	Pit 3 建物 4・10	(口) 15.0 (高) 5.5 (高台) 7.4	外: ロクロコナデのち高台にヨコナデ 内: ロクロコナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰		15	山茶碗 内外面に自然釉	299
59-8	陶器 碗	A-j17	Pit 3 建物 4	—	外: ロクロコナデ 内: ロクロコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰		口縁10未満	山茶碗	304
59-9	陶器 碗	A-l16	Pit 4 建物 4・10	(高台) 8.2	外: ロクロコナデのち米切りのち高台にヨコナデ 内: ロクロコナデ	密0.5mm以下の砂粒	堅緻	淡灰		高台50	山茶碗 高台に剝離痕	300
59-10	陶器 碗	A-i15	Pit 2 建物 1	—	外: ロクロコナデ 内: ロクロコナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰~灰		口縁10未満	山茶碗 内面に自然釉	287
59-11	陶器 碗	A-g15	Pit 1 建物 1	—	外: ロクロコナデ 内: ロクロコナデ	粗0.5~5.0mmの小石	堅緻	淡灰		口縁10未満	山茶碗	290
59-12	土師器 皿	A-h13	Pit 1 建物 1	(口) 11.8	外: ナデ・オサエ 内: ナデ	密0.5~2.0mmの小石、 赤色粒	やや軟	淡黄白		口縁60		288
59-13	土師器 皿	A-i14	Pit 1 建物 1	(口) 14.0 (高) 2.6	外: ナデ・オサエ 内: ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰		口縁25		289
59-14	土師器 皿	A-c14	Pit 4 建物 9	(長) 4.7 (径) 1.7 (孔径) 0.5	棒状工具に巻き付けて成形したものか	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶		完形	重量9.9g	294
59-15	土師器 皿	A-a14	Pit 1 建物 9	(口) 11.6 (高) 2.8	外: ナデ・オサエ 内: ナデ	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡褐		60		432

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度 (%)	備考	実測No
59-16	土師器 皿	A-c14	Pit.2 建物9	—	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石、 赤色粒	良好	淡褐	口縁13	歪み大きい	295
59-17	陶器 椀	A-b14	Pit.9 建物9	(口) 14.9	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石、 植物痕	堅緻	淡灰	口縁30(2片)	山茶椀	293
59-18	青磁 椀	A-c14	Pit.3 建物9	(口) 12.8	外：蓮弁文のち釉	密0.5mm未満の小石	堅緻	淡灰	口縁25	内外面に釉 (淡緑)	292
59-19	土師器 鍋	A-c14	Pit.3 建物9	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	茶灰	口縁10	内外面に煤付着	291
59-20	陶器 椀	A-m19	Pit.4 建物8	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10未満	山茶椀	521
59-21	土師器 焙烙	A中央	SD 7	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	明褐	口縁10未満	外面に煤付着	399
59-22	土師器 焙烙	A-121	SD 8	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁10未満	外面に煤付着	394
59-23	土師器 焙烙	A-121	SD 8	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	暗褐	口縁10未満	外面に煤付着	393
59-24	土師器 鍋	A-f18	SK 1	(口) 27.2	外：ナデのちヨコナデ・ケズリ 内：板ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	濃褐	口縁70	外面に煤付着	391
59-25	土師器 茶釜?	A-121	SD 8	(口) 10.4	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	暗褐	口縁13	内面に炭化物付着	395
59-26	土師器 茶釜?	A-f18	SK 1	(口) 9.4	外：ハケメのちヨコナデ 内：ハケメ・ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	明褐	口縁20	外面に煤付着	392
59-27	陶器 椀	A-k12	SK 31	(口) 12.0	外：染め付け釉 内：染め付け釉	密	堅緻	白灰・釉 白・青	高台30	内面見込みにも染め付け施文あり	516
59-28	陶器 椀	A中央	SD 7	(口) 10.8	外：染め付け釉 内：染め付け釉	粗0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰・釉 白・青	口縁10		398
59-29	陶器 椀	A中央	SD 7	(高台) 4.2	外：染め付け釉 内：染め付け釉	密 磁気質	堅緻	白灰 釉白灰・ 淡青	高台100	染付端反碗の類?	397
59-30	陶器 仏器?	A中央	SD 7	(口) 4.4 (高) 1.4	外：型押し? 模様のち釉 内：釉	密	堅緻	白灰 釉淡緑白	40	合子?	400

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	成色	調色	残存度 (%)	備考	実測No.
59-31	陶器 高杯	A-h15	SD10	(脚程) 3.4	外：ロクロナデのち釉 内：ロクロナデのち釉	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	淡灰	脚70		396
59-32	陶器 瓶?	A中央	SD7	—	外：染め付け釉 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡茶灰 釉 白灰 淡青	淡茶 濃茶	口縁10未満		401
59-33	陶器 壺	A-f18	SK1 付近	(受部) 10.0 (高) 3.2	外：回転ナデ・ツマミに列点文の ち釉 内：回転ナデ	密0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰 釉 淡緑 白灰 釉 淡灰	淡灰 濃茶	40	釉は鉄釉	515
59-34	陶器 壺	A-j19	SK3	—	外：スタンブ文のち釉 内：ナデ	密0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰	淡灰	体部片	瀬戸産?	587
60-1	陶器 碗	B-d33	SK1 p4	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	淡灰	口縁10	山茶碗 漬け掛け釉 (灰) 輪花 あり	155
60-2	陶器 碗	B-d33	SK1	(口) 15.7	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	淡灰	口縁20	山茶碗	148
60-3	陶器 碗	B-d33	SK1 p1	(高台) 9.2	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	淡灰	高台50	山茶碗	149
60-4	陶器 碗	B-d33	SK1 p2	(高台) 9.5	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	淡灰	高台60	山茶碗 内面に自然釉 重ね焼 き痕あり	147
60-5	陶器 碗	B-d33	SK1 p3	(高台) 9.6	外：ロクロナデのち高台にヨコナ デ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	淡灰	高台40	山茶碗 高台に剥殻痕	150
60-6	陶器 碗	B-d33	SK1	(高台) 7.5	外：ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	淡灰	高台50	山茶碗 高台に剥殻痕	154
60-7	土師器 皿	B-d33	SK1	(口) 12.5	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5~4.0mmの小石	良好	淡~暗褐	淡~暗褐	口縁30 (2片)		571
60-8	土師器 皿	B-d33	SK1	—	外：ナデのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石 (多)	やや軟	淡褐	淡褐	口縁10		572
60-9	土師器 小皿	B-d33	SK1	(口) 7.8 (口) 1.4 (底) 4.1	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	淡褐	30	ロクロ土師器	570
60-10	土師器 甕	B-d33	SK1 p4	(口) 17.4 (復高) 10.7	外：オサエ・ケズリのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	やや軟	淡褐	淡褐	口縁25	外面に煤付着 内面に炭化物付着	152
60-11	土師器 鍋	B-d33	SK1 p5	(口) 19.0 (高) 8.8	外：ナデのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデのちヨコナデ・ケズリ	粗0.5~2.0mmの小石	やや軟	明褐~灰 褐	明褐~灰 褐	80		146

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度 (%)	備考	実測No.
60-12	土師器 甕	B-d33	SK1p4	(口) 18.8	外：ナデ・オサエのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	良好	暗褐	口縁30	外面に煤付着	151
60-13	土師器 鍋	B-d33	SK1p4	(口) 19.6	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：ナデ・板ナデのちヨコナデ・ケズリ	粗0.5~3.0mmの小石	良好	淡褐~暗褐	口縁50	内外面に煤付着	153
60-14	土師器 甕	B-d33	SK1p4	(口) 21.8	外：ナデ・オサエのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁50	外面に煤付着	145
60-15	陶器 碗	B-k33	SK18	(口) 15.2 (高) 5.5 (高台) 7.8	外：ロクロナデのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	40	山茶碗	117
60-16	陶器 碗	B-k33	SK18	(高台) 7.5	外：ロクロナデのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗 高台に靱殻痕	115
60-17	陶器 碗	B-k33	SK18	(高台) 7.4	外：ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗	114
60-18	陶器 碗	B-k33	SK18	(高台) 8.3	外：ロクロナデのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台80	山茶碗 内面に軸(灰)	116
60-19	土師器 皿	B-k33	SK18	(口) 14.6	外：指オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁30	外面に黒斑	110
60-20	土師器 甕	B-k33	SK18	(口) 20.4	外：指オサエのちヨコナデ 内：ハケメのちヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	やや軟	暗褐	口縁25	外面に煤付着(一部赤変)	111
60-21	土師器 甕	B-k33	SK18	(口) 26.2	外：オサエ・ナデのちヨコナデ 内：板ナデのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	やや軟	淡褐	口縁25	内外面に煤付着	113
60-22	土師器 甕	B-k33	SK18	(口) 29.2	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡黄茶灰	口縁20		112
60-23	陶器 碗	B-137	SD4	(口) 16.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡灰	口縁30	山茶碗	105
60-24	陶器 碗	B-m33	SD4	(口) 16.6 (高) 6.2 (高台) 7.0	外：ロクロナデのち高台にヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁10 高台100	山茶碗 高台に靱殻痕	103
60-25	陶器 碗	B-136	SD4	(口) 16.4 (高) 5.2 (高台) 6.9	外：ロクロナデのち高台にナデ・ヨコナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石、 フラ	堅緻	白灰	口縁30 高台100	山茶碗	101
60-26	陶器 碗	B-m34	SD4	(口) 13.8	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁20	山茶碗	109

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
60-27	陶器 碗	B-m34	SD4	(高台) 6.3	外:ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗 高台に靱殻痕	107
60-28	陶器 碗	B-m34	SD4	(高台) 7.8	外:ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台50	山茶碗	108
60-29	陶器 碗	B-m33	SD4	(高台) 7.6	外:ロクロナデのち高台にヨコロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~4.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗 高台に靱殻痕	104
60-30	陶器 碗	B-137	SD4	(高台) 7.6	外:ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡灰	高台100	山茶碗 高台に靱殻痕	106
60-31	陶器 碗	B-136	SD4	(高台) 6.9	外:ロクロナデのち高台にヨコロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~3.0mmの小石	良好	淡灰	高台100	山茶碗 高台に靱殻痕	102
60-32	陶器 碗	B-m33	Pit1	(高台) 6.1	外:ロクロナデのち糸切りのち高台にヨコロナデ 内:ロクロナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	山茶碗 高台に靱殻痕 底部に墨書「二」	202
60-33	土師器 皿	B-j35	SE1	—	外:剝離 内:剝離	粗0.5~1.0mmの小石	軟	淡茶灰	口縁20		561
60-34	土師器 皿	B-n34	SD5	(口) 12.6 (高) 2.5 ~2.6	外:オサエ・ヨコナデ 内:板ナデ・ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	ほぼ完形		163
60-35	陶器 壺	B-o34	SD5 焼土内	(口) 19.0	外:ヨコナデ 内:オサエ・ナデのちヨコナデ	密0.5~3.0mmの小石	堅緻	灰~暗灰	口縁10 頸部30	外面に釉 (緑灰)	165
60-36	陶器 壺	B-o34 B-n34	SD5 SK39	(口) 20.2	外:ナデのちヨコハケ施文・ヨコナデ 内:オサエ・ナデのちヨコナデ	密0.5~4.0mmの小石	堅緻	暗灰	口縁70	常滑産 外面に釉 (暗茶灰・淡緑灰) 接合資料	164
61-1	土師器 小皿	B-i36	Pit1	(口) 7.6 (高) 1.1	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶白	完形	胎土はマーブル状	173
61-2	土師器 小皿	B-i36	Pit1	(口) 8.0 (高) 1.2	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡茶白	完形		172
61-3	土師器 小皿	B-i36	Pit1	(口) 8.1 (高) 1.2	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶白	ほぼ完形		171
61-4	土師器 小皿	B-i36	Pit1	(口) 7.8	外:ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	50		174
61-5	陶器 碗	B-i36	Pit1	(口) 14.0	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡灰	口縁20	山茶碗	170

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	成色	調	残存度(%)	備考	実測No.
61-6	陶器 碗	B-k38	SK14	(口) 15.2	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	粗0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡灰		口縁30	山茶碗 内面に自然釉 (淡緑灰)	169
61-7	陶器 碗	B-e31	Pit1	(口) 15.8	外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰		口縁25	山茶碗 輪花あり 漬け掛け釉 (灰白)	175
61-8	陶器 碗	B-b32	Pit1 Pit2	(口) 17.2 (高) 5.3 (高台) 8.0	外:ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨコナデ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰		口縁12 高台30	山茶碗	176
61-9	土師器 小皿	B-f32	SK4p2	(口) 8.0 (高) 0.9	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡茶灰		口縁30		160
61-10	土師器 小皿	B-f32	SK4p3	(口) 8.1 (高) 0.7	外:オサエ・ナデ 内:板ナデ・ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰		口縁30		159
61-11	土師器 小皿	B-f32	SK4p2	(口) 7.9 (高) 0.9	外:オサエ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰		70		156
61-12	土師器 小皿	B-f32	SK4p3	(口) 7.9 (高) 0.9	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰		口縁50		158
61-13	土師器 小皿	B-f32	SK4p2	(口) 7.9 (高) 1.1	外:オサエ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰		口縁30		157
61-14	土師器 小皿	B-j38	SK44p1	(口) 8.3 (高) 1.1	外:ナデ 内:ナデ	粗0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰		完形		100
61-15	土師器 小皿	B-j38	SK44	(口) 7.9 (高) 1.2	外:剝離 内:剝離	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	乳白		完形		98a
61-16	土師器 小皿	B-j38	SK44p2	(口) 8.3 (高) 1.2	外:剝離 内:剝離	粗0.5~1.0mmの小石	軟	乳白		60		99
61-17	土師器 小皿	B-j38	SK44	(口) 8.4 (高) 1.4	外:剝離 内:剝離	粗0.5~1.0mmの小石 (多)	軟	乳白		60		562
61-18	土師器 小皿	B-d30	SX3	(口) 6.6~7.2 (高) 0.7~1.2	外:オサエ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄灰		完形		161
61-19	土師器 皿	B-k35	SX6	(口) 12.0 (高) 2.1	外:剝離 内:剝離	密0.5~1.0mmの小石	軟	乳灰		口縁50		566
61-20	土師器 皿	B-f32	SK2	(口) 11.2 (高) 2.4	外:剝離 内:剝離	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	茶灰		口縁60		563

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
61-21	陶器卸皿	B-f32	SK2	(口) 13.4 (高) 2.3	外:ロクロナデ 内:ロクロナデのち御目	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	白~淡緑 灰	口縁10 底部30	内外面に釉	180
61-22	陶器 ねり鉢	B-f32	SK2	(口) 27.2	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ・磨減	密0.5~4.0mmの小石	堅緻	淡灰	25	常滑産?	179
61-23	土師器 小皿	B-k36	SK26	(口) 7.8 (高) 1.2	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁30		143
61-24	土師器 皿	B-k36	SK26	(口) 12.6 (高) 1.7	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡乳灰	口縁20		144
61-25	陶器 壺?	B-k36	SK26	(底) 5.1	外:ロクロナデのち糸切り・篋ナ デ 内:ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	底部50		142
61-26	土師器 羽釜?	B-k36	SK26	(口) 23.8	外:ハケメのちヨコナデ 内:オサエ・ナデ	粗0.5~3.0mmの小石、 赤色粒	良好	淡黄灰	口縁40 (2片)		141
61-27	陶器 壺	B-j38	SK43p1	(口) 11.0 (高) 22.7 (底) 7.8	外:回転ナデのちケズリ 内:回転ナデ	粗0.5~11.0mmの小 石	堅緻	暗灰	口縁70 底部 完形	渾美? 外面に自然釉 (白灰)	77
61-28	土師器 小皿	B-j38	SK43p3	(口) 7.7 (高) 1.0	外:オサエ・剝離 内:剝離	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	70		78
61-29	土師器 皿	B-j38	SK43	(口) 11.3 (高) 2.1	外:ナデ 内:ナデ	粗0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁20		80
61-30	土師器 皿	B-j38	SK43p4	(口) 14.0 (高) 2.5	外:ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁25		79
61-31	土師器 鍋	B-j38	SK43p2	(口) 21.6 (高) 12.3	外:ナデのちヨコナデ・ケズリ 内:ナデ・オサエのちヨコナデ・ ケズリ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁95 底部80	外面に煤付着	76
61-32	土師器 小皿	B-j38	SK23下	(口) 7.6 (高) 1.1	外:剝離 内:剝離	粗0.5~3.0mmの小石、 赤色粒	やや軟	淡茶灰	完形		167
61-33	土師器 小皿	B-j38	SK23下	(口) 7.8 (高) 1.2	外:オサエのちナデ 内:板ナデのちナデ	粗0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	95		166
61-34	土師器 小皿	B-j38	SK23下	(口) 8.7 (高) 1.3	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡黄灰	40	外面に黒斑?	168
61-35	土師器 小皿	B-k36	SK25p13	(口) 7.3 (高) 1.0	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	完形		127

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	成色	調	残存度(%)	備考	実測No.
61-36	土師器 小皿	B-k36	S K25p14	(口) 7.3 (高) 1.2	外: オサエ 内: ナデ	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰		95		129
61-37	土師器 小皿	B-k36	S K25p12	(口) 8.0 (高) 1.4	外: オサエ・ナデ 内: ナデ	密0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰		完形		130
61-38	土師器 小皿	B-k36	S K25p15	(口) 7.6 (高) 1.2	外: オサエ・ナデ 内: ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄褐		80		128
61-39	陶器 椀	B-k36	S K25p1	(口) 14.6 (高) 5.6 (高台) 6.6	外: ロクロナデのち糸切りのち高 台にヨココナデ 内: ロクロナデ	粗0.5~4.0mmの小石	良好	淡灰		口縁40 高台100	山茶碗 底部に墨書「一」あり 高台に粗黄褐	126
61-40	土師器 鍋	B-k36	S K25p11	(口) 25.0 (復高) 10.3	外: ハケメのちヨココナデ・ケズリ 内: ナデ・指オサエのちヨココナデ・ ケズリ	粗0.5~2.0mmの小石、 赤色粒	やや軟	淡茶灰		40	外面に煤付着	125
61-41	陶器 大甕	B-k36	S K25p16	—	外: ナデのちタタキメ 内: 板ナデ	粗0.5~3.0mmの小石	堅緻	赤褐		小片	常滑	131
61-42	陶器 大甕	B-k36	S K25p2 ~11	(口) 49.6 (高) 71.2 (底) 19.6	外: ナデ・板ナデのちヨココナデ・ タタキメ (5列) 内: 指オサエ・ ナデ・板ナデのちヨココナデ	粗0.5~5.0mmの小石	堅緻	淡灰		50	常滑 外面に自然釉 (淡緑灰)	124
62-1	土師器 皿	B-k37	Pit1 建物2	(口) 11.7 (高) 2.7	外: ナデ・オサエ 内: ナデ	粗0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡褐		80	外面に煤付着	162
62-2	土師器 皿	B-h37	S K17	(口) 10.2	外: ナデ 内: ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡褐		口縁15		135
62-3	土師器 鍋	B-h37	S K17	(口) 20.8	外: ハケメのちヨココナデ 内: ナデ・板ナデのちヨココナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰~ 暗褐		口縁20	外面に煤付着	133
62-4	土師器 鍋	B-h37	S K17	(口) 34.0	外: ハケメのちヨココナデ 内: ナデのちヨココナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	明茶灰		口縁25	外面に煤付着	132
62-5	土師器 鍋	B-h37	S K17	(口) 31.8	外: ハケメのちヨココナデ 内: ナデのちヨココナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡褐		口縁12	外面に煤付着	134
62-6	土師器 鍋	B-i37	S K24	(口) 31.2	外: ハケメのちヨココナデ 内: ナデのちヨココナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡黄灰		口縁40	外面に煤付着	81
62-7	土師器 小皿	B-e34	S K5	(口) 7.5 (高) 0.9	外: オサエ 内: ナデ	粗0.5~3.0mmの小石	やや軟	淡黄灰		70		87
62-8	土師器 小皿	B-e34	S K5	(口) 7.6 (高) 1.1	外: オサエ・ナデ 内: ナデ・板ナデ	密0.5~1.0mmの小石 (少)	やや軟	淡茶灰		50		557

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度 (%)	備考	実測No.
62-9	土師器 皿	B-f34	SK 5	(高) 2.2	外: ナデ・オサエ 内: ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁10		559
62-10	土師器 皿	B-f34	SK 5	(高) 2.1	外: ナデ・オサエ 内: ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁10		560
62-11	土師器 皿	B-f34	SK 5	(口) 9.7 (高) 2.3	外: ナデ・オサエ 内: ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	白茶灰	口縁30		558
62-12	青磁 碗	B-f34	SK 5	(高台) 5.6	外: ケズリ	密0.5mm前後の小石	堅緻	白灰	高台25	内外面に釉 (淡緑)	91
62-13	白磁 碗	B-f34	SK 5	-	内外面とも白色釉かかる	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	白灰	10弱	内外面に釉 (白)	92
62-14	陶器 小皿	B-f34	SK 5	(口) 8.8 (高) 2.3 (底) 5.4	外: ロクロナデのち糸切り 内: ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡黄灰	口縁20	内外面に釉 (淡緑灰~淡黄灰)	95
62-15	陶器 壺?	B-f34	SK 5	(底) 5.6	外: ロクロナデのち糸切りのち釉 内: ロクロナデのち釉	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	白茶灰 釉 淡緑灰	底部80	瀬戸産?	556
62-16	陶器 碗	B-e34	SK 5	(口) 15.9	外: ロクロナデ 内: ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡茶灰	口縁12	平碗 内外面に釉 (淡緑灰)	88
62-17	陶器 卸皿	B-f34	SK 5	(口) 15.6	外: ナデのちヨココナデ 内: ヨココナデのち卸目	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁25	外面に釉 (白)	96
62-18	土師器 鍋	B-e34	SK 5	(口) 25.8	外: オサエ・ハケメのちヨココナデ 内: ナデのちヨココナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	82
62-19	土師器 鍋	B-e34	SK 5	(口) 26.0	外: ハケメのちヨココナデ 内: ナデ?のちヨココナデ	粗0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	83
62-20	土師器 鍋	B-e34	SK 5	(口) 30.3	外: ハケメのちヨココナデ 内: 板ナデのちヨココナデ	粗0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	84
62-21	土師器 鍋	B-f34	SK 5	(口) 30.2	外: オサエのちハケメのちヨココナデ 内: ハケメ・ナデのちヨココナデ	密0.5~1.0mmの小石、 赤色小粒	良好	淡灰褐	口縁30	外面に煤付着	555
62-22	土師器 鍋	B-e34	SK 5	(口) 32.6	外: ハケメのちヨココナデ 内: オサエのちヨココナデ	粗0.5~1.0mmの小石	やや軟	白灰	口縁20	外面に煤付着	85
62-23	土師器 鍋	B-e34	SK 5	(口) 34.8	外: ハケメのちヨココナデ 内: ナデのちヨココナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	茶灰	口縁12	外面に煤付着	86

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存底(%)	備考	実測No
62-24	陶器 壺	B-e34	SK 5	(底) 14.4	外：ナデ 内：ヨコナデのち板ナデ	粗0.5~8.0mmの小石	堅緻	暗灰 淡褐	底60		97
62-25	陶器 壺	B-f34	SK 5	—	外：筒状工具による施文・ハリツケ把手？ 内：ナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	暗灰	10以下	瀬戸？外面に釉 (黒灰~白灰)	90
62-26	陶器 ねり鉢	B-f34	SK 5	—	外：ヨコナデのちケケズリ 内：磨減	粗0.5~4.0mmの小石	堅緻	淡灰	10以下	瀬戸産	89
62-27	土師器 羽釜	B-e34	SK 5	(口) 38.8	外：ヨコナデ 内：ナデ	粗0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	98
62-28	土師器 鍋	B-h36	SK31	—	外：ヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	やや軟	乳灰	10以下	外面に煤付着	199
62-29	土師器 鍋	B-h36	SK31	—	外：ヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡褐	10以下		200
62-30	陶器 小壺	B-h36	SK31	(底) 7.1	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	粗0.5~1.0mmの小石	堅緻	暗褐~ 淡茶灰	底部25	常滑 内外面に釉 (外：淡緑灰・ 内：暗褐)	201
63-1	土師器 鍋	B-j33	Pit 2	(口) 26.8	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶褐	口縁20	外面に煤付着	177
63-2	土師器 鍋	B-k32	SK30 下層下	(口) 28.5	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡褐~褐	口縁30	外面に煤付着	120
63-3	土師器 鍋	B-k30	SK30 下層	(口) 28.8 (高) 12.3	外：ナデ・オサエ・ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデのちヨコナデ・板ナデのちヨコナデ・ケズリ	密0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡褐	口縁60	外面に煤付着	119
63-4	土師器 鍋	B-k35	SK30	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石 (少)	良好	淡茶灰	口縁10		565
63-5	陶器 ねり鉢	B-k35	SK30 下層下	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	橙	10未満		123
63-6	陶器 ねり鉢	B-k35	SK30	—	外：オサエのち回転ナデ 内：ナデ	粗0.5~3.0mmの小石	堅緻	赤茶	口縁10未満	常滑産	564
63-7	陶器 甕？	B-k30	SK30 下層下	—	外：ナデ 内：ナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	濃褐~褐	底10	甕の可能性あり	122
63-8	陶器 挿鉢	B-k30	SK30 下層下	(底) 12.0	外：ロクロナデのち糸切り 内：ロクロナデのちハケメ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	底12	瀬戸産 内外面に釉 (濃褐)	121

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
63-9	土師器 皿	B-133	Pit.1 建物1	(口) 13.3	外: ナデ・オサエ 内: ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁30		185
63-10	土師器 鍋	B-133	SK16	-	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡褐 黒灰	10以下	外面に煤付着	183
63-11	土師器 鍋	B-133	SK16	-	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡黄灰	口縁10		184
63-12	土師器 鍋	B-133	SK16	-	外: ハケメのちヨコナデ 内: ヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	10	外面に煤付着	182
63-13	陶器 ねり鉢	B-133	SK16	-	外: ハケメのちヨコナデ 内: ヨコナデ・磨減	粗0.5~2.0mmの小石	堅緻	赤褐	10未満		181
63-14	陶器 皿	B-133	SK11	(底) 5.1	外: ロクロナデのち糸切り 内: ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁5 高台80	縁軸皿 口縁部に釉(黒茶) 口縁部片と体部片を合成	140
63-15	陶器 椀	B-133	SK11	(高台) 4.8	外: 糸切りのち高台ケズリ出し	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台100	平椀 瀬戸産 内面に釉(淡緑灰)	138
63-16	土師器 鍋	B-133	SK11	(口) 23.0	外: ハケメのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁30(2片)		137
63-17	土師器 鍋	B-133	SK11	-	外: ハケメのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡黄灰	口縁10	口縁部片と体部片を合成	139
63-18	土師器 鍋	B-133	SK11	(口) 36.4	外: ハケメのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰 黒灰	口縁25	外面に煤付着	136
63-19	陶器 椀	B-g37	SD2	(口) 14.7	外: ロクロナデ 内: ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁20	山茶椀 輪花あり	196
63-20	陶器 椀	B-g37	SD2	(口) 16.2	外: ロクロナデ 内: ロクロナデ	粗0.5~1.0mmの小石	良好	淡灰	口縁20	山茶椀 漬け掛け釉(白灰)	195
63-21	陶器 甕	B-i32	SD2・3	-	外: ヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	堅緻	茶 淡灰	口縁10	常滑産 内外面に釉(淡緑灰)	197
63-22	土師器 鍋	B-g37	SD2	(口) 18.0	外: ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内: 板ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰 黒灰	口縁12		193
63-23	陶器 ねり鉢	B-i31	SD2	(口) 17.8	外: ナデのちヨコナデ 内: ナデのちヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	赤褐~淡 褐	口縁20		191

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
63-24	青磁 椀	B-h34	SD3	—	内：クシメ状施文のち軸	密0.5mm前後の小石	堅緻	淡灰	椀下部20	内外面に釉 (暗緑灰)	198
63-25	土師器 羽釜	B-i31	SD2	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡褐 黒灰	口縁10	口縁部に施成前穿孔 (2ヶ所) 北勢産	192
63-26	土師器 鍋	B-g37	SD2	—	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰 黒灰	口縁10		194
63-27	陶器 大甕	B-i34	SK9	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	濃褐	口縁10以下	常滑産	178
63-28	土師器 羽釜	B-o36	SD8	(口) 24.0	外：ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：ナデ・板ナデのちヨコナデ・ ケズリ状のナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁20	外面に煤付着	118
64-1	土師器 皿	C-b1	SD2	(底) 6.6	外：剝離、糸切り 内：剝離	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	底部40	ロクロ土師器	554
64-2	土師器 甕	C-b2	Pit2	(口) 21.0	外：ナデ・オサエのちヨコナデ 内：ヨコナデ・板ナデ	粗0.5~3.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	75
64-3	陶器 椀	C-b1	SK1	(口) 13.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	口縁20	山茶碗	54
64-4	土師器 皿	C-b1	SK1	(口) 12.4	外：ナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁25	外面に煤付着	56
64-5	土師器 皿	C-b1	SK1	(口) 11.8	外：ナデ 内：ナデ	密0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁30		55
64-6	土師器 皿	C-b1	SK1	(口) 11.8	外：ナデ 内：ナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁25		57
64-7	土師器 鍋	C-b1	SK1	(口) 18.6	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ・板ナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	暗茶灰	口縁25	外面に煤付着	50
64-8	土師器 鍋	C-b1	SK1	(口) 20.4	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ・ナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁25	外面に煤付着	51
64-9	土師器 鍋	C-b1	SK1	(口) 21.3	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁12	外面に煤付着	53
64-10	土師器 鍋	C-b1	SK1	(口) 20.8	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	52

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
64-11	陶器 碗	C-h7	SK11	(口) 13.4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	粗0.5~3.0mmの小石	堅緻	淡茶灰	口縁12	山茶碗	74
64-12	土師器 小皿	C-h7	SK11	(口) 7.9 (高) 1.3	外：オサエのちナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁95		69
64-13	土師器 小皿	C-h7	SK11	(口) 7.8 (高) 1.0	外：オサエのちナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄灰	完形		68
64-14	土師器 皿	C-h7	SK11	(口) 11.2 (高) 2.3	外：オサエのちナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁70		73
64-15	土師器 皿	C-h7	SK11	(口) 12.2 (高) 2.2	外：オサエのちナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	茶灰	口縁30		71
64-16	土師器 皿	C-h7	SK11	(口) 11.4 (高) 2.2	外：オサエのちナデ 内：ナデ	粗0.5~1.0mmの小石	やや軟	黄灰	口縁80		72
64-17	土師器 皿	C-h7	SK11	(口) 11.8 (高) 2.6	外：オサエのちナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁50		70
64-18	土師器 小皿	C-h7	SK10	(口) 8.2 (高) 1.2	外：指オサエ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁25		49
64-19	土師器 皿	C-c7	SK10	(口) 11.3	外：剥離 内：剥離	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁50		46
64-20	土師器 皿	C-c7	SK10	(口) 11.0 (高) 2.3	外：ナデ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡乳灰	口縁40		47
64-21	土師器 皿	C-c7	SK10	(口) 12.6	外：剥離 内：剥離	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡乳灰	口縁25		48
64-22	土師器 鍋	C-c7	SK10	(口) 22.0	外：ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内：オサエ・ナデのちヨコナデ・ケズリ	粗0.5~3.0mmの小石	良好	淡茶褐	口縁25	外面に煤付着	44
64-23	土師器 鍋	C-c7	SK10	(口) 33.2	外：ハケメのちヨコナデ 内：ヨコナデ・ナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁20	外面に煤付着	45
64-24	土師器 皿	C-b3	SK3	(口) 10.6	外：ナデ 内：ナデ	粗0.5~1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁20		41
64-25	土師器 小皿	C-b3	SK3	(口) 7.4 (高) 1.0	外：ナデ・オサエ 内：ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁30		43

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
64-26	土師器 鍋	C-b3	SK3	—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁10以下	外面に煤附着	42
64-27	土師器 鍋	C-b3	SK3	(口) 27.1	外:ヨコナデ・オサエ 内:ナデ・ハケメのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	やや軟	暗褐	口縁25	外面に煤附着	40
64-28	土師器 鍋	C-d4	Pit3 建物1	—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁10		38
64-29	土師器 小皿	C-d3	Pit4 建物1	(口) 9.5 (高) 0.9	外:オサエ・ナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡乳灰	口縁20		39
64-30	土師器 鍋	C-b5	Pit6 建物2	(口) 27.8	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁12	外面に煤附着	37
64-31	土師器 皿	C-e6	SK12	(口) 12.4 (高) 2.4	外:オサエのちナデ 内:ナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁30 底100		2
64-32	土師器 鍋	C-e6	SK12	(口) 23.2	外:オサエ・ハケメ・ナデのちヨコナデ・ケズリ 内:オサエ・ナデ・板ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡灰・褐 暗褐	口縁50		6
64-33	土師器 鍋	C-e6	SK12	(口) 32.4	外:オサエ・ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:ハケメ・ナデのちヨコナデ・ケズリ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	やや軟	淡茶灰	口縁60	外面に煤附着	1
64-34	土師器 皿	C-b4	SK2	(口) 11.7 (高) 2.0	外:ナデ・オサエ 内:ナデ	粗0.5~1.0mmの小石	良好	暗褐~ 淡茶灰	口縁12		65
64-35	土師器 皿	C-b4	SK2	—	外:ナデ 内:ナデ	粗0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁10未滿		64
64-36	陶器 椀	C-b4	SK2	(底) 6.6	外:クロコナデのち糸切り 内:クロコナデ	粗0.5~1.0mmの小石	堅緻	淡灰	底30	山茶碗	63
64-37	土師器 鍋	C-b4	SK2	(口) 27.0	外:ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:オサエ・板ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	暗茶灰	口縁10 体部上半30	外面に煤附着 内面に炭化物?	62
64-38	土師器 鍋	C-b4	SK2	(口) 36.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁10	外面に煤附着	66
65-1	土師器 鍋	C-d2	SK5	(口) 30.6	外:オサエ・ハケメのちヨコナデ・ケズリ 内:オサエ・板ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁25 体部上半40	内外面に煤附着	5
65-2	土師器 小皿	C-c3	SK4	(口) 7.4 (高) 1.2	外:ナデ・オサエ 内:ナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡黄灰	60		4

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成色	調度	残存度(%)	備考	実測No
65-3	陶器 碗	C-c3	SK4	(口) 13.5	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密0.5~3.0mmの小石	淡茶灰	口縁10	口縁10	山茶碗	61
65-4	土師器 皿	C-c3	SK4	(高) 2.6	外：剥離 内：剥離	密0.5~1.0mmの小石、 赤色粒	やや軟	口縁10	口縁10		553
65-5	土師器 皿	C-c3	SK4	—	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	粗0.5~1.0mmの小石	淡茶灰	口縁10	口縁10		552
65-6	土師器 鍋	C-c3	SK4	(頸) 18.6	外：ナデ・ハケメのちヨコナデ・ ケズリ 内：ナデのちケズリ	粗0.5~2.0mmの小石 (多)	乳灰	体部30	体部30	外面に煤付着	551
65-7	土師器 鍋	C-c3	SK4	(口) 32.8	外：ハケメ・ナデのちヨコナデ・ ケズリ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~3.0mmの小石	淡茶灰	口縁30	口縁30	外面に煤付着	3
65-8	土師器 鍋	C-b4	SK6	(口) 26.8	外：ヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	淡茶灰	口縁12	口縁12	外面に煤付着	58
65-9	土師器 皿	C-b4	SK6	(口) 11.0 (高) 2.4	外：剥離 内：剥離	密0.5~1.0mmの小石	淡黄茶灰	口縁50	口縁50		60
65-10	土師器 鍋	C-b4	SK6	(口) 19.4	外：ナデ・ハケメのちヨコナデ 内：ナデのちヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石	淡茶褐	口縁12	口縁12	外面に煤付着	59
65-11	土師器 皿	C-d5	SK7 下層下	(口) 11.3 (高) 2.6~ 3.0	外：ナデ・オサエ 内：ナデ・オサエ	粗0.5~1.0mmの小石	淡茶灰	60	60		23
65-12	土師器 皿	C-d5	SK7 下層下	(口) 11.0 (高) 2.4	外：ナデ・オサエ 内：剥離	密0.5~2.0mmの小石	乳白	25	25		31
65-13	土師器 小皿	C-d5	SK7 下層下	(口) 7.2 (高) 0.5~ 1.7	外：ナデ 内：ナデ	密0.5~2.0mmの小石	淡赤褐~ 淡黄褐	完形	完形		24
65-14	陶器 碗	C-d5	SK7 下層下	(口) 14.4 (高) 4.7 (底) 5.3	外：ロクロナデのち糸切りのちハ ケズリ 内：ロクロナデ・ナデ	密0.5~4.0mmの小石	淡灰	口縁25	口縁25	山茶碗 体部外面に墨書「十」 鉄分付着	29
65-15	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層最下	(口) 26.7	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	淡褐	口縁20	口縁20	外面に煤付着 内面に黒斑あり	26
65-16	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層下	(口) 22.0	外：オサエ・ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	淡黄灰	口頸30	口頸30		16
65-17	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層最下	(口) 30.3	外：ハケメのちヨコナデ 内：ナデ・ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	淡茶灰	口縁12	口縁12	外面に煤付着	25

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度 (%)	備考	実測No.
65-18	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層最下	(口) 26.2	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁12	外面に煤付着	28
65-19	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層	(口) 29.0	外: ヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	14
65-20	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層上	(口) 31.6	外: オサエのちヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁10	外面に煤付着	11
65-21	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層最下	(口) 29.6	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁12	外面に煤付着	27
65-22	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層	(口) 34.6	外: ハケメのちヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石、 赤色粒	良好	淡茶灰	口縁10	外面に煤付着	7
65-23	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層下	(口) 35.8	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡黄灰	口縁20		17
65-24	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層	(口) 38.0	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	13
65-25	陶器 壺	C-d5 C-c7	SK7 下層下 SK9	(口) 14.8	外: ナデのちヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	粗0.5~4.0mmの小石	堅緻	淡灰~灰	口縁30 底部40	滲美? 外面に釉 (淡緑灰) 異速構間接合資料	32
65-26	陶器 壺	C-d5	SK7 下層	(底) 14.8	外: ナデ 内: ナデ・板ナデ	粗0.5~5.0mmの小石	堅緻	淡灰	底部30	滲美? 内面に釉 (淡緑灰) 65-25と同一?	33
65-27	陶器 壺	C-d5	SK7 下層	(高台) 13.6	外: ロクロナデ 内: ロクロナデ	密0.5~2.0mmの小石	堅緻	淡灰	高台30	瀬戸? 外面に釉 (淡緑灰) 内面に炭化物	34
66-1	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層最下	(口) 38.6	外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	白茶灰	口縁20	外面に煤付着	18
66-2	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層下	(口) 26.0	外: ハケメのちヨコナデ 内: ナデ?・ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	19
66-3	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層	(口) 32.6	外: ハケメのちヨコナデ 内: ナデ?・ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	白灰	口縁12	外面に煤付着	12
66-4	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層最下	(口) 22.6	外: オサエ・ハケメのちヨコナデ 内: ハケメ・ナデのちヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	白灰	口縁25		20
66-5	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層最下	(口) 28.2	外: 板ナデ?のちヨコナデ 内: ナデ・ヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	良好	淡褐	口縁12	外面に煤付着	22

No.	器種	地区	遺構・層名	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度(%)	備考	実測No.
66-6	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層	(口) 30.6	外:ヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁12	外面に煤付着	15
66-7	土師器 鍋	C-d5	SK7 下層下	(口) 28.6	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~2.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁20	外面に煤付着	30
66-8	土師器 鍋	C-d5	SK7 上層	—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡黄灰	口縁10弱	外面に煤付着	10
66-9	土師器 鍋	C-d5	SK7 上層	—	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	良好	淡茶灰	口縁5	外面に煤付着	9
66-10	土師器 鍋	C-d5	SK7 上層	(口) 22.9	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	密0.5~1.0mmの小石	やや軟	淡茶灰	口縁10	外面に煤付着	8
66-11	土師器 羽釜	C-d5	SK7 下層最下	(口) 25.4	外:ハケメのちヨコナデ 内:ナデ・ヨコナデ	粗0.5~1.0mmの小石	良好	淡褐	口縁20	外面に煤付着	21
66-12	陶器 甕	C-d5 C-c6	SK7 下層下 SK8	(口) 32.5	外:ヨコナデ 内:指オサエ・ナデのちヨコナデ	粗0.5~2.0mmの小石	堅敏	暗茶	口縁50	常滑 外面に釉(明緑灰) 異遺構間接合資料	36
66-13	陶器 大甕	C-d5	SK7 下層	(口) 57.1	外:ナデのちヨコナデ 内:オサエ・ナデのちヨコナデ	密0.5~3.0mmの小石	堅敏	暗褐~褐	口縁20	常滑 外面に釉(淡灰)	35
66-14	陶器 椀	C-i5	SD3	(口) 12.8	外:ロクロナデのちケズリ 内:ロクロナデ	密0.5~1.0mmの小石	堅敏	淡茶灰	口縁25	内外面に鉄釉(茶) 天目茶碗	67

V. 調査資料の化学分析

1. 分析の目的

楠ノ木遺跡の調査の一環として化学分析を行った。分析は土壌墓と考えられる遺構の土壌分析と、出土した鉄滓と土器を中心として、その成分分析を行ったものがある。分析は、土壌分析を三重県農業技術センターに、鉄滓と土器の成分分析をパリオ・サーヴェイ株式会社に依頼した。具体的な成果は後述されているので、ここでは分析資料の出土遺構・遺跡とおおよその所属時期や分析の目的などについて触れておく。

土壌分析

B地区で検出した中世墓SK25・33・43・44の土壌中に含まれる成分を分析し、当該遺構が墓であることを確定しようとした。結果は土壌サンプルを採集した地点が良くなかったため、墓であることを傍証するには至らなかった。特にSK33・43・44は遺構をやや掘りすぎたことが影響しているようである。

鉄滓の成分分析

鉄滓の成分に時期的な傾向があるかどうかを知ることが目的とした。鉄滓に関する分析は当県でほとんどなされておらず、今後分析事例を増やす必要がある。

鉄滓関係の分析は10点の資料を抽出した。1～4は楠ノ木遺跡A地区土坑SK36から出土したものである。時期はⅢ期で、おおよそ15世紀前半と見做し得る。5は貝弁郡大安町・中貝戸遺跡土坑SK1⁽¹⁾から出土した鉄滓である。時期は伴出した土器類から15世紀から16世紀と考えられる。6は度会郡玉城町・蚊山遺跡包含層⁽²⁾から出土した鉄滓である。時期的には13世紀代の可能性が高い。7は一志郡嬉野町・東野B遺跡h28グリット井戸SE1⁽³⁾から出土した鉄滓である。時期は伴出した鍋が第3段階b型式⁽⁴⁾で、おおよそ15世紀前半と見做し得る。8・9は一志郡白山町・家野遺跡包含層⁽⁵⁾から出土した鉄滓である。遺跡の時期からは15世紀前半から16世紀初頭までの間と考えられる。10は松阪市伊勢寺町・榎長遺跡土坑SK10⁽⁶⁾上面から出土したるつぼである。時期は奈良

時代と考えられる。

土師器の胎土分析

土師器の胎土分析は楠ノ木遺跡出土土器を中心として、比較資料も含めておもに平安時代末から明治時代あたりまでの時期のものについて行った。おおよそ中世から近代にかけての南伊勢系土師器の胎土上の動向をさぐることを目的としたのである。

比較資料として多気郡明和町・黒土遺跡⁽⁷⁾・外山遺跡⁽⁸⁾・北野遺跡⁽⁸⁾・多気郡勢和村・若宮遺跡⁽⁹⁾、松阪市伊勢寺町・伊勢寺遺跡、一志郡白山町・家野遺跡⁽⁵⁾、安芸郡芸濃町・下川遺跡⁽⁸⁾、志摩郡阿児町・東海道遺跡⁽¹⁰⁾の出土土器の分析も行った。これは南勢地域の遺跡(楠ノ木・黒土・外山・北野・若宮・伊勢寺)、中勢の遺跡(家野・下川)、志摩の遺跡(東海道)に土器の胎土のうえで差が認められるのかどうかの確認のためである。また南伊勢系とは異なる土師器として、家野遺跡・下川遺跡の資料を含めた。分析資料としてはごく少量であり、今後中北勢地域の胎土上の特徴を抽出することを主題とした分析をしていく必要がある。

南勢地域の遺跡を多く抽出したのは対象土器類が南勢で生産されている可能性が極めて高いからである。そして遺跡ごとで胎土の異なりが認められるかどうかによっては、土器が一定の場所で製作されていたかどうかの追求も可能と考えたのである。そのために、時期的には離れるが土器焼成坑出土の資料である北野遺跡の出土土器も含めた。

なお、楠ノ木遺跡以外は長期的に形成された集落ではない。時期的な変動の確認のためには今後も各遺跡で随時分析を行っていく必要がある。

分析資料の時期と型式については分析資料一覧表のなかに入れてあるので参照されたい。

註

- (1) 田中久生「中貝戸遺跡」(『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊1989三重県教育委員会) なお、共伴土器は山茶碗ではないことが後に判明した。
- (2) 小坂宜広・前川嘉宏・稲本賢治「度会郡玉城町・蚊山遺跡」(『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査概報』V

- I 1990三重県教育委員会三重県埋蔵文化財センター)
- (3) 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』18 (1988)
 - (4) 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」(『Miehi story』vol.1 1990)
 - (5) 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報』1 (1990)
 - (6) 河北秀実「榎長遺跡」(『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊1 (1990三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター)
 - (7) 三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報』19 (1989)
 - (8) 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報』2 (1991)
 - (9) 伊藤裕偉「丹生地区内遺跡群」(註(1) 文献に同じ)
 - (10) 伊藤裕偉「磯部大王自転車道整備事業に伴う東海道遺跡発掘調査報告」(1989 三重県教育委員会)

2. 土壌分析結果報告

三重県農業技術センター 広瀬和久・原正之

調査の目的

玉城町楠ノ木遺跡から検出された土壌墓と推定される土坑4基について、その埋土および周辺土壌中のカルシウムおよびリンを分析することにより、遺構の性格を明らかにするとともに、遺骸が埋葬されていたかどうかの確認、遺骸の埋葬位置および身長推定等を行う資料とする。

分析結果(別表)および考察

埋蔵文化財発掘調査において、遺構の性格を明らかにする目的で採集された資料(土壌)を分析することにより遺骸が埋葬されていたかどうかの確認、遺骸の埋葬位置および身長の推定を行うためには、人骨の成分中で含有量の多いカルシウム(Ca)とリン(P)を分析する必要がある。

この分析値について、土坑内部土壌の値と対照となる周辺土壌の値を比較し、内部の値が高い場合は外部からCaやP濃度の高い物質、すなわち人骨・遺骸等が持ち込まれたものと推察される。しかし、CaやPは肥料の含有成分でもあるため、人骨等の存在を判定する場合は、この点にも注意

が必要である。

今回採集された試料は大きく分けると、土坑内の埋土を点的に採集したSK33・43・44の試料と土坑内の最下層の一部を採集したSK25の試料、およびSK43から出土した陶器壺(fig.61-27)内の試料の計3種類である。

このうちSK43・44の2土坑については、表に示したように、土坑内部の土壌のCaおよびPの分析値(平均値)は周辺土壌の分析値(平均値)より低い場合が多い。しかしSK33については表に示したように土坑内部土壌は対照土壌に比べて、Pは低かったがCaは高かった。分析値からCaまたはPが高い地点は土坑中央部に多く、遺骸埋葬されていた可能性は高いが、分析値の高い地点の広がりが大きいため、遺骸の明確な身長推定はできなかった。

SK43から出土した壺の埋土については、埋土上半部・下半部ともSK43の対照土壌に比べてCaは低いPは高い。Caは雨等により溶出し易く、Pは残留しやすいので人骨等が存在していた可能性もあるが、Pのみ高い場合は肥料の施用によるP濃度の上昇も考えられる。

またSK25小皿p5下の土については土坑外の土壌(対照)に比べてCa・Pとも高く、人骨等の存在していた可能性が高い。

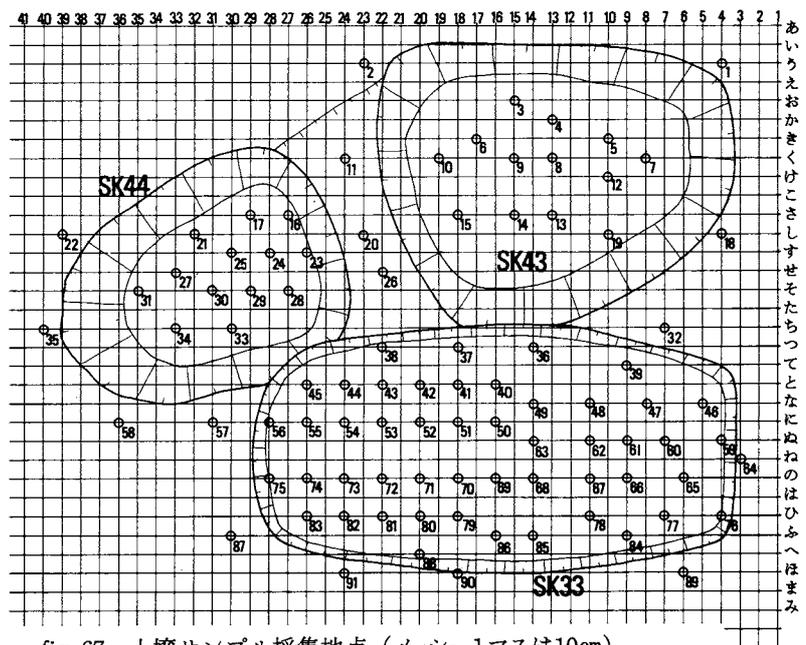


fig.67. 土壌サンプル採集地点(メッシュ1マスは10cm)

No	試料名	Ca (ppm)	P (ppm)	No	試料名	Ca (ppm)	P (ppm)
1	う-4	352	1317	53	ク-22	211	1409
2	ク-23	211	1329	54	ク-24	129	1144
3	お-15	222	691	55	ク-26	145	1494
4	か-13	129	780	56	ク-28	157	1336
5	き-10	124	910	57	ク-31	129	1459
6	ク-17	102	872	58	ク-36	145	1448
7	く-8	167	1144	59	ぬ-4	184	1306
8	ク-13	113	1121	60	ク-7	189	1286
9	ク-15	107	914	61	ク-9	167	1536
10	ク-19	91	1490	62	ク-11	162	1064
11	ク-24	134	1091	63	ク-14	205	1064
12	け-10	102	914	64	ね-3	189	1536
13	さ-13	140	853	65	の-6	172	1563
14	ク-15	113	983	66	ク-9	145	2089
15	ク-18	107	1279	67	ク-11	199	2077
16	ク-27	140	741	68	ク-14	238	1628
17	ク-29	86	691	69	ク-16	194	1367
18	し-4	151	1306	70	ク-18	216	1133
19	ク-10	118	768	71	ク-20	227	1125
20	ク-23	167	1271	72	ク-22	243	1425
21	ク-32	86	672	73	ク-24	205	1094
22	ク-39	172	1302	74	ク-26	113	1068
23	す-26	151	591	75	ク-28	172	1171
24	ク-28	118	703	76	ひ-4	297	1336
25	ク-30	107	737	77	ク-7	281	1651
26	せ-22	184	845	78	ク-11	281	1678
27	ク-33	86	822	79	ク-18	265	1079
28	そ-27	96	791	80	ク-20	129	1190
29	ク-29	59	1114	81	ク-22	140	1206
30	ク-31	69	952	82	ク-24	107	995
31	ク-35	80	1079	83	ク-26	91	1164
32	ち-7	222	1398	84	ふ-9	162	1889
33	ク-30	80	1263	85	ク-14	199	1459
34	ク-33	75	941	86	ク-16	172	1194
35	ク-40	172	1237	87	ク-30	102	1452
36	つ-14	157	1002	88	へ-20	205	1379
37	ク-18	249	1467	89	ほ-6	172	1628
38	ク-22	211	1306	90	ク-18	222	1475
39	て-9	162	1444	91	ク-24	124	1509
40	と-16	232	1129	II. 分析結果一覧(遺物)			
41	ク-18	249	1313				
42	ク-20	314	1379	No	試料名	Ca (ppm)	P (ppm)
43	ク-22	184	1025	101	壺埋土上段	129	1455
44	ク-24	162	1352	102	ク下段	134	1536
45	ク-26	157	998				
46	な-5	199	1087	No	試料名	Ca (ppm)	P (ppm)
47	ク-8	216	883	103	S K 25埋土	379	1498
48	ク-10	238	1352	104	S K 25外の土	319	887
49	ク-14	238	902				
50	に-16	276	1175				
51	ク-18	265	1398	平均値		±170	1200
52	ク-20	276	991	(標準偏差値)		±62	302

(注) Ca, Pの濃度は風乾土当たりで表示。

tab. 12 土壌分析結果表

3. 鉄滓に関する分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

今回の分析調査では、まず中世の遺跡から出土した鉄滓やその他の関連遺物に付着していたものの成分を把握する。一方、鉄滓のなかには繊維状の物質を含むものが認められ、鉄滓が溶解状態で放棄された際、周辺に放置されたり繁殖したりしていた草木類がその内部に取り込まれたものと見られている。そこでこれらの繊維部分を対象に当時の植生等を推定することを試みる。

2. 分析資料と手法

1) 鉄滓・るつぼ付着物の成分確認

鉄滓等の成分を定性的に確認するため、鉄滓9点（資料番号1～9）、るつぼ1点（資料番号10）の計10点について、E PMAによる定性分析を実施し、遺跡・時代による成分差が存在するか否か検討する。

2) 鉄滓中の繊維

鉄滓に繊維が取り込まれた経緯については、溶解状態にあるうちに近辺に成育する草木類が混入した可能性や、燃料材の一部として利用された稲ワラなどが混入した可能性など様々な状況が想定できる。いずれにしても、イネ科植物が混入しているのであれば、植物珪酸体が遺存しているものと予想されることから、繊維が顕著に混入する楠ノ木遺跡SK36出土の2試料について繊維のみを抽出し、植物珪酸体分析を実施して当時の植生等に関する情報を得ることを試みる。

3. 鉄滓に含まれる植物繊維の珪酸体分析

1) 分析試料

繊維を含む鉄滓（試料番号1～4）の観察結果を示す（tab.13）。

試験番号	状 況
1	表面に繊維が薄く付着する部分と樹木の節部状のものが埋没している部分が認められる。繊維は、酸化鉄の付着が著しい。
2	表面に繊維が薄く付着する部分が認められる。また、酸化鉄の付着が著しい樹木の表皮状のものが付着する。
3	鉄滓内部に炭化物が混入する。
4	表面に、酸化鉄の付着が著しい樹木の表皮状のものが付着する。

tab. 13 鉄滓中の繊維の観察結果

これらの試料のうち、繊維の保存が比較的良かったNo. 2・4から採集した繊維を分析試料とした。

2) 分析方法

鉄滓から繊維を分離する。繊維内に残留する有機物を過酸化水素水（H₂O₂）で分解し、表面に付着する酸化鉄を塩酸（HCl）で除去する。続いて、繊維を水洗して酸を除去し乾燥する。

これを電気炉内で500～600℃、1時間を目安に燃焼させ、灰化する。灰化試料を封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡（簡易偏光装置装備）下で観察する。その間に、出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）と葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）および樹木起源の植物珪酸体を近藤・佐藤（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

3) 結果と考察

分析結果をtab.14に示す。

灰化試料中には、珪化した植物繊維が多く認められるが、その保存状態は悪い。植物珪酸体は試料番号2で栽培植物とされるイネ属短細胞列と稲朶に形成されるイネ属穎珪酸体が、試料番号4でイネ属穎珪酸体が検出されただけである。このことから、繊維の一部はイナワラであったと思われる。また、繊維には樹木の表皮のように見えた（tab.13）ものもあることから、イネ属以外の植物も鉄滓中に取り込まれていたと考えられる。

ところで、鉄滓中の繊維は鉄滓が溶解状態にあるうちに周辺の草木類がその内部に取り込まれたものと見られている。しかし、取り込まれた経緯については、遺跡周辺の同時期に堆積した土層について調査していないので、近辺に成育する草木類が混入した可能性や燃料材の一部が混入した可能性など様々な状況が想定できるものの確定はできない。ただし、SK36が鉄器鍛造に関連する遺構である可能性を考慮すれば、近辺の稲作耕作地に鉄滓を放棄したとは

試料番号	検出された種類	計測数
2	イネ族イネ属（短細胞列）	1
	イネ族イネ属（穎珪酸体）	1
4	イネ族イネ属（短細胞列）	1

tab. 14 鉄滓中の繊維の同定結果

考えにくく、むしろイネ属などの植物が燃材料として利用されていた可能性が考えられる。燃材料の調査を行った例として、千葉県印旛村平賀遺跡群から検出された炉跡焼土を対象とした調査（大越1985）がある。これによれば、古墳時代から奈良時代には住居内の炉では燃材料としてススキ属やイネ属が多く使用されていたと推定されている。イネ属などの草木類を鉄器鍛造時の燃材料に利用していたと考えるには火力の点で問題があろうが、薪などの焚きつけ用に利用されたことは考えられる。

引用文献

近藤三・佐藤隆「植物珪酸体分析,その特性と応用」『第四紀研究』25 (1986) P31~64

大越昌子「プラント・オパール分析」(『平賀遺跡群発掘調査報告書』平賀遺跡調査会 1985 P803~815)

4. 鉄滓の成分定性分析

1) 試料

分析対象としたのは、楠ノ木遺跡4点(試料番号1~4)・中貝戸遺跡1点(試料番号5)・蚊山遺跡1点(試料番号6)・東野B遺跡1点(試料番号7)・家野遺跡2点(試料番号8~9)の鉄滓と、榎長遺跡から出土したるつば付着物1点(試料番号10)で、合計10点である。

2) 分析方法および分析装置

試料番号1~9については、試料が塊状であったため、その一部を粉碎した後、金属光沢のみられた部分について分析を実施した。また、試料番号10に

ついては、黒色付着物についてその表面から分析を実施した。

X線マイクロアナライザー(EPMA)による定性分析は、以下の条件で実施した。

装置：日本電子社製 J C X A - 840型

加速電圧：20KV

試料電流： 8×10^{-8} A

プローブ径：50 μ m ϕ

分析範囲： $_{5}B \sim _{92}U$

前処理：金蒸着(試料番号10のみ実施)

3) 結果

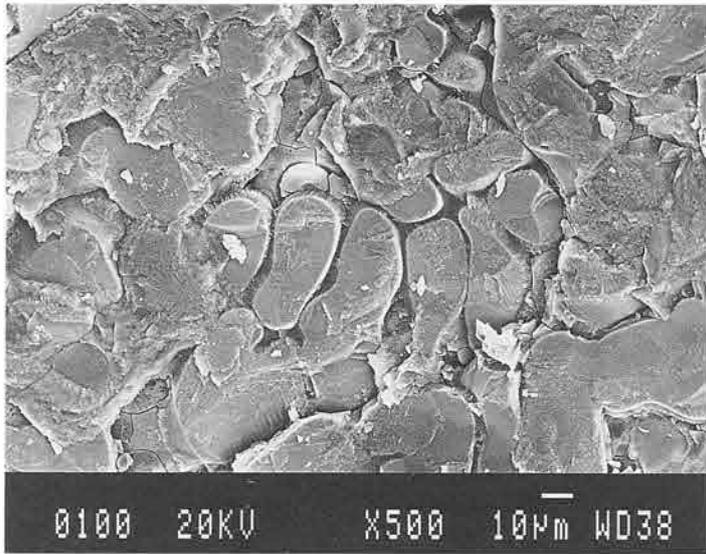
結果から、試料番号1~8についてはその組成は類似しており、鉄(Fe)・酸素(O)が強く検出された他、アルミニウム(Al)やケイ素(Si)・カルシウム(Ca)・カリウム(K)などを中位に検出した。また、分析位置の電子顕微鏡(SEM)像にみられるように、(pic. 3~4)、その破断面は各試料とも円形の粒子が集合している様子が窺われた。

試料番号9では定性分析の結果、鉄(Fe)・酸素(O)の他、ケイ素(Si)が強く検出され、他にアルミニウム(Al)が中位に検出された。分析位置のSEM像も試料番号1~8のそれと異なり、数 μ mの細かい粒子が溶け込んでいるような性状であった。

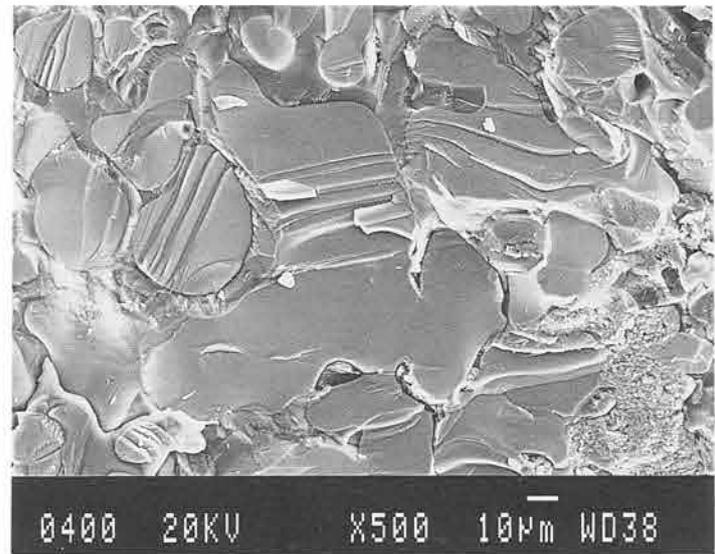
試料番号10の黒色付着物については、分析結果から鉄(Fe)・酸素(O)および銅(Cu)の他アルミニウム(Al)・カルシウム(Ca)・ケイ素(Si)・チタン(Ti)などが主に含まれる成分であることが判った。

試料 強度	楠ノ木				中貝戸 5	蚊山 6	東野B 7	家野		榎長 10
	1	2	3	4				8	9	
強く検出された元素	Fe, O	Fe, O	Fe, O	Fe, O	Fe, O	Fe, O	Fe, O	Fe, O	Fe, O, Si	Cu, Fe, O
中位に検出された元素	Al, Ca, K, Si	Al, Si	Al, Ca, K, Si	Al, Ca, Si	Al, Si	Si	Al, Ca, K, Si	Al, Si, Ti	Al	Al, Ca, Si, Ti
弱く検出された元素	Mg, Mn, Na, P, S, Ti	C, Ca, K, Mg, Na, Ti	Mg, Mn, Na, P, S, Ti	K, Mg, Na, P, Ti	Ca, K, Mg, Mn, Na, Ti	Al, Ca, Cl, K, Mg, S, Ti	Mg, Mn, Na, P, Ti	Ca, K, Mg, Mn, Na	Ca, K, Mg, Na, Ti	C, Cl, K, Mg, Mn, Na, P, S

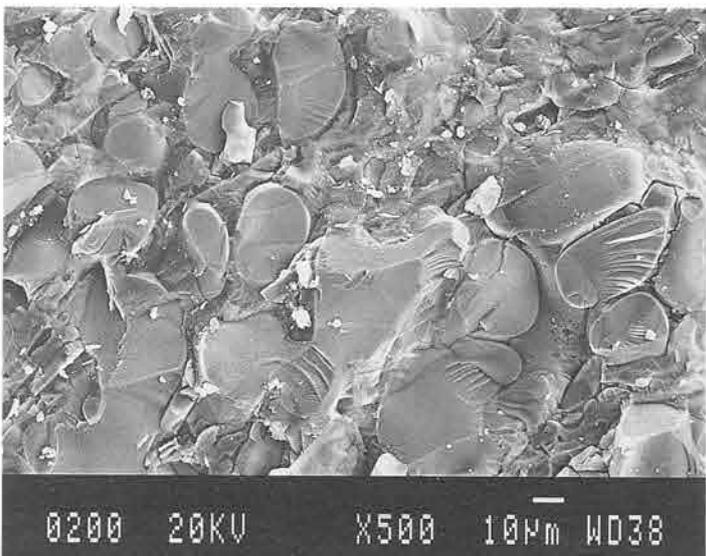
tab. 15 鉄滓の成分定性分析結果



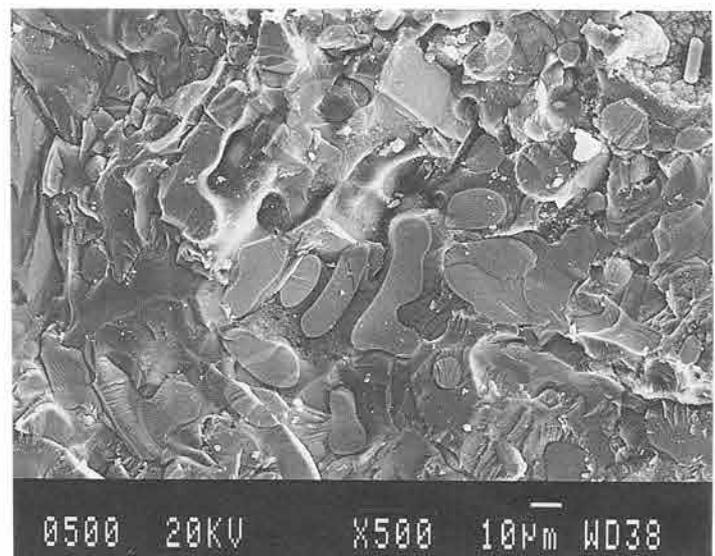
楠ノ木遺跡 試料番号 1 ×500



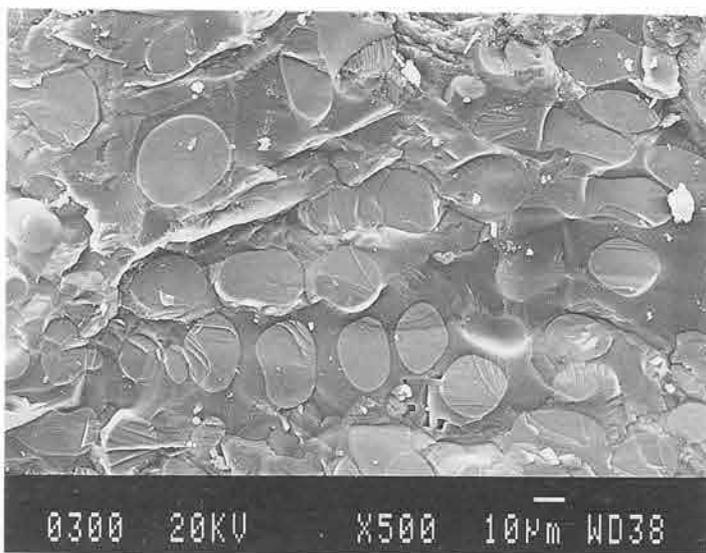
楠ノ木遺跡 試料番号 4 ×500



楠ノ木遺跡 試料番号 2 ×500

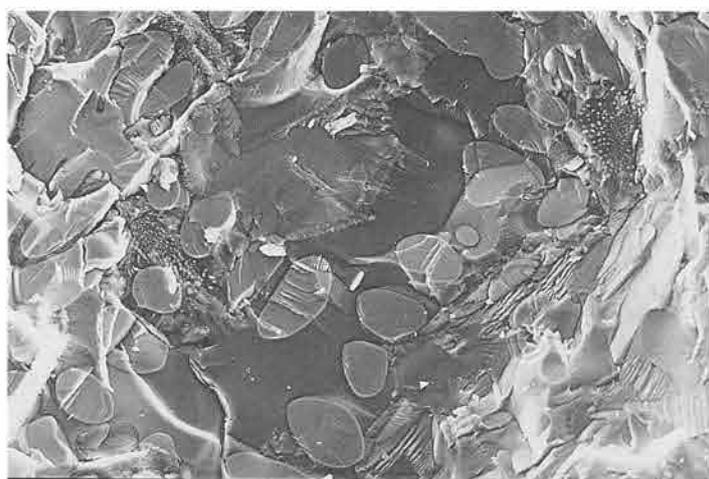


中貝戸遺跡 試料番号 5 ×500



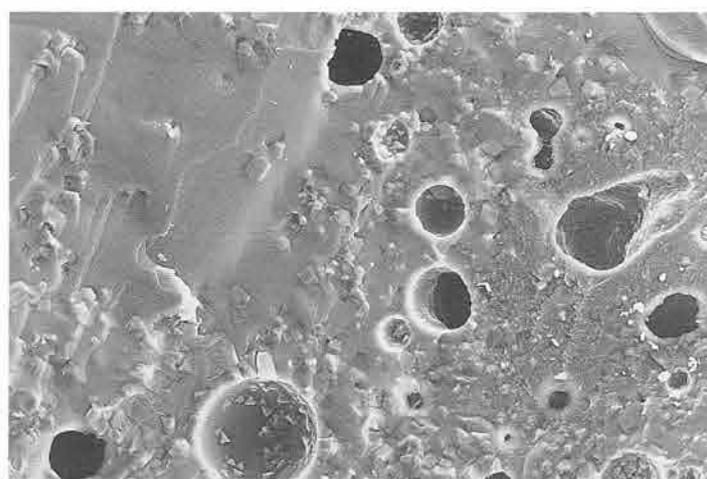
楠ノ木遺跡 試料番号 3 ×500

pho. 3 鉾津の電子顕微鏡写真 (1)



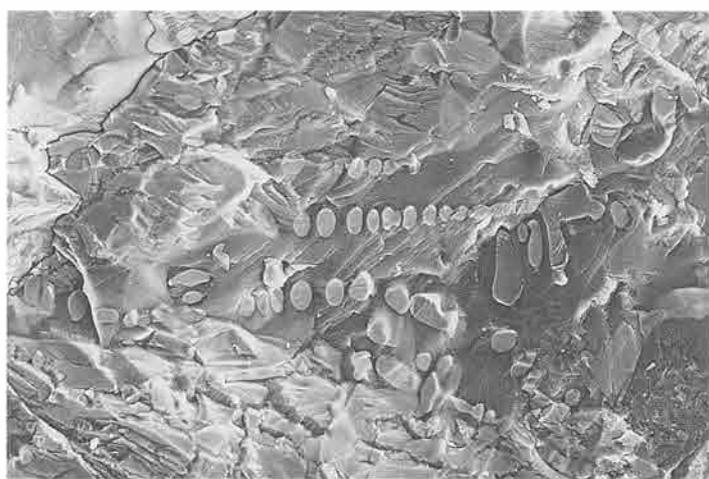
0600 20KV X500 10µm WD38

蚊山遺跡 試料番号6 ×500



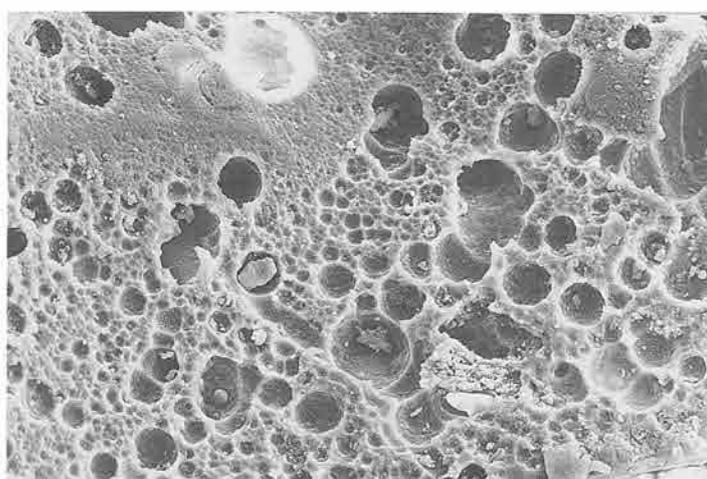
0900 20KV X500 10µm WD38

家野遺跡 試料番号9 ×500



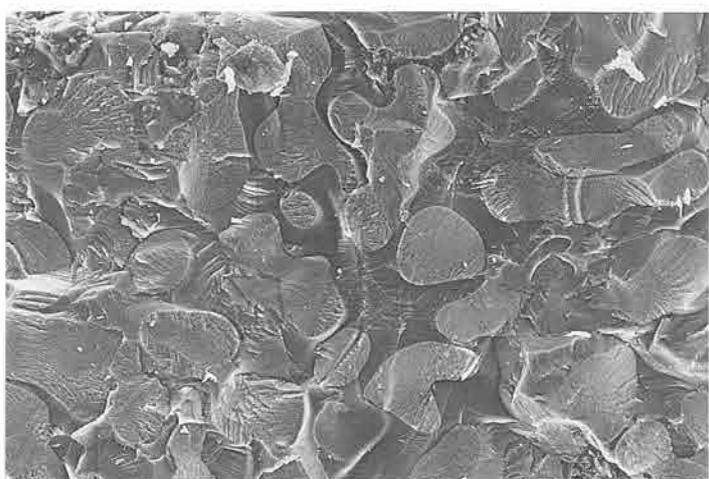
0700 20KV X500 10µm WD38

東野B遺跡 試料番号7 ×500



1000 20KV X500 10µm WD38

榎長遺跡 試料番号10 ×500



0800 20KV X500 10µm WD39

家野遺跡 試料番号8 ×500

pho. 4 鋳滓の電子顕微鏡写真 (2)

4. 中・近世土師器胎土分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

本分析は中世土師器研究の一環として、土器胎土の側面から情報を提供し、その検証の一部を担うものである。本分析では、土器の特徴として胎土中に含まれる細砂粒径の重鉱物の組成を用いる。この重鉱物組成は胎土全ての特徴ではないが、胎土の由来や分類を考える上で良い指標になり得る。重鉱物組成を指標とした胎土の特徴を客観的に捉えることを今回の主要課題とした。

2. 分析方法

土器片を鉄乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/14mm~1/8mmの粒子をテトラプロモエタン（比重約2.96）により重液分離、重鉱物のプレパラートを作製し、偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方から落射光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉱物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

3. 分析結果

全体的に処理後に得られた重鉱物砂分が非常に少なく、目標とする同定粒数の250粒を数えた試料は全体の約1/4に相当する23点しかなかった。また、100粒以上の試料を合わせても約半数の42点にしかなかった。

100粒以上を越えた試料では、「その他」とした変質粒子の多い試料がほとんどであった。「その他」を除くと全体的に主要な鉱物は、角閃石とジルコンである。傾向としては角閃石が多く、それにやや少量のジルコンが伴うという組成を示す。100粒を数えなかった試料でも出現した鉱物は角閃石とジルコンが多かった。また、試料によっては、少量の斜方輝石や単斜輝石、黒雲母や緑レン石などを伴う。各試料の重鉱物組成をtab.17・18に示す。

5. 考察

(1) 分析結果から読み取れる胎土の性質

今回試料とした土師器胎土の特徴の第一は、同定粒数100粒未満の試料、すなわち細砂粒分の少ない試料が比較的多かったことである。この原因として、提供された土師器片そのものの量が少なかったこと、および細砂粒径の重鉱物がもともと多く含まれていない胎土であることの両方が考えられる。今回は、同定粒数100粒以上を数えた試料の処理量の最小は2.7gで、平均は6.0gであった。これらの値を一目安とするならば、同定粒数100粒未満の試料のうち、処理量が2.7gより少ない試料は試料の量の不足、6.0gより試料は胎土そのものに重鉱物が多く含まれていない、そして2.7g~6.0gの試料は両者の要因によって、このような結果になったと考えられる。さらに今後の検討が必要であるが、現時点でこれらの土師器の胎土の性質として捉えておきたい。

特徴の二番目は、「その他」と分類した細砂粒分が多いことである。「その他」は、顕微鏡下では不透明で不定形の塊状粒であり、落射光下では暗灰褐色、褐色色などの色を呈する。その外見の特徴から、焼成にともなって生成した変質粒子であると考えられる。変質粒子からその地質学的背景を窺うことはできないが、変質粒子の多いことも胎土の特徴のひとつとなり得るものと考えられる。すなわち、これまでの分析例からみて、一般的に第四紀の火山噴出物起源の碎屑物が豊富なため自然堆積物中に混入する重鉱物の遊離結晶も多い関東以北の東日本の遺跡から出土する縄文・弥生・土師の各土器の胎土は、同定可能な重鉱物粒が比較的多い傾向を示し、一方、第四紀の火山噴出物が少なく、第三紀以前の基盤岩の風化碎屑物が多い東海~近畿地方の各土器は「その他」の多い傾向にある。いずれにしても今後、分析例の蓄積を持って再検討する必要がある。

特徴の三番目は、同定された鉱物の中では角閃石とジルコンが多いということである。これらを含む重鉱物組成から、次のような地質学的背景を考えることができる。

試料中に認められた鉱物の多くは、風化の影響を受けているものが多いことから、岩石の風化碎屑物に由来するものと考えられる。ただし、試料番号52などに認められた角閃石は、比較的新鮮で第四紀の火山噴出物に由来する可能性もある。

No.	遺跡名	遺構名	報告No.	実測No.	時期	分類	器種	No.	遺跡名	遺構名	報告No.	実測No.	時期	分類	器種
1	楠ノ木遺跡	AS K65	52-31	377	平安末	仮A	甕	44	楠ノ木遺跡	CS K12	64-33	1	南北朝?	3-a	鍋
2	楠ノ木遺跡	AS K9	52-38	505	平安末	I期	皿	45	楠ノ木遺跡	CS K5	65-1	5	南北朝?	3-a	鍋
3	楠ノ木遺跡	ASE1	53-2	316	鎌倉	II期	皿	46	楠ノ木遺跡	CS K4	65-7	3	室町	3-b	鍋
4	楠ノ木遺跡	ASE1	53-3	320	鎌倉	II期	皿	47	黒土遺跡	III SK3		9	平安末	(仮)A	甕
5	楠ノ木遺跡	ASE1	53-4	325	鎌倉	II期	皿	48	黒土遺跡	III SK3		6	平安末	(仮)A	甕
6	楠ノ木遺跡	ASE1	53-12	314	鎌倉	1-b	鍋	49	黒土遺跡	III掘立1		10	鎌倉前半	1-b	鍋
7	楠ノ木遺跡	ASE1	53-13	313	鎌倉	1-b	鍋	50	黒土遺跡	III掘立1			鎌倉前半	1-b	鍋
8	楠ノ木遺跡	AS D12	53-14	249	鎌倉	1-b	鍋	51	黒土遺跡	II SD1		56	江戸以降	5	焙烙
9	楠ノ木遺跡	AS K17	53-21	217	鎌倉	1-b	鍋	52	黒土遺跡	II SD1		57	江戸以降	5	焙烙
10	楠ノ木遺跡	Af24pit1	54-4	305	鎌倉後半	II期	皿	53	若宮遺跡	AS K4	18	49	室町後半	4-d	鍋
11	楠ノ木遺跡	Af24pit1	54-6	308	鎌倉後半	2-b	鍋	54	若宮遺跡	AS K4	19	65	室町後半	4-d	鍋
12	楠ノ木遺跡	AS K39	54-7	259	鎌倉後半	II期	皿	55	若宮遺跡	AS K24	23	8	室町後半	IV期	小皿
13	楠ノ木遺跡	AS K39	54-9	257	鎌倉後半	2-b	鍋	56	若宮遺跡	AS K24	31	11	室町後半	IV期	茶釜
14	楠ノ木遺跡	AS K37	56-11	422	室町	III期	小皿	57	若宮遺跡	AS K24	32	12	室町後半	IV期	茶釜
15	楠ノ木遺跡	AS K37	56-15	419	室町	III期	鍋	58	若宮遺跡	ASD3(南)	48	42	室町後半	4-	鍋
16	楠ノ木遺跡	AS K37	56-16	420	室町	III期	鍋	59	若宮遺跡	ASD3(北)	65	24	室町後半	IV期	羽釜
17	楠ノ木遺跡	AS D24	56-25	334	室町	III期	羽釜	60	若宮遺跡	AS K34	86	68	室町後半	IV期	皿
18	楠ノ木遺跡	AS D3	58-27	365	室町	III期	羽釜	61	若宮遺跡	AS K11	103	59	室町後半	IV期	甕
19	楠ノ木遺跡	AS K1	59-24	391	江戸以降	5	鍋	62	若宮遺跡	CSD1	112	113	室町後半	4-	鍋
20	楠ノ木遺跡	BS K1	60-13	153	平安末	仮A	甕	63	若宮遺跡	CSD1	127	117	室町後半	4-c	鍋
21	楠ノ木遺跡	BS K1	60-14	145	平安末	仮A	甕	64	若宮遺跡	CSD1			室町後半	IV期	皿
22	楠ノ木遺跡	Bi36pit1	61-1	173	鎌倉後半	II期	小皿	65	家野遺跡	土坑46		1-2	室町後半	4-	鍋
23	楠ノ木遺跡	BS K4	61-12	158	室町後半	III期	小皿	66	家野遺跡	土坑46		13-3	室町後半	4-c	鍋
24	楠ノ木遺跡	BS K43	61-30	79	南北朝?	III期	皿	67	家野遺跡	土坑46		3-2	室町後半	IV期	羽釜
25	楠ノ木遺跡	BS K43	61-31	76	南北朝?	III期	鍋	68	下川遺跡	SK1		17-1	室町後半	4-	鍋
26	楠ノ木遺跡	BS K25	61-40	125	南北朝?	II期?	鍋	69	下川遺跡	SK1		18-1	室町後半	IV期	羽釜
27	楠ノ木遺跡	BS K5	62-7	87	室町	III期	小皿	70	下川遺跡	SD1		5-6	室町後半	IV期	皿
28	楠ノ木遺跡	BS K5	62-11	558	室町	III期	皿	71	楠ノ木遺跡	BS K44		99	鎌倉後半	II期	小皿
29	楠ノ木遺跡	BS K5	62-18	82	室町	3-b	鍋	72	楠ノ木遺跡	AS K20			平安末	IV期	皿
30	楠ノ木遺跡	BS K5	62-20	84	室町	3-b	鍋	73	外山遺跡	土器溜り1		H-1	近世~近代		茶釜
31	楠ノ木遺跡	BS K5	62-21	555	室町	3-a	鍋	74	外山遺跡	土器溜り1		H-2	近世~近代		焙烙
32	楠ノ木遺跡	BS K5	62-27	98	室町	III期	羽釜	75	外山遺跡	土器溜り1		H-3	近世~近代		焙烙
33	楠ノ木遺跡	BS K30	63-3	119	室町後半	4-c	鍋	76	外山遺跡	土器溜り1		H-4	近世~近代		焙烙
34	楠ノ木遺跡	BS K11	63-17	139	室町後半	4-c	鍋	77	外山遺跡	土器溜り1		H-5	近世~近代		焙烙
35	楠ノ木遺跡	BS K11	63-18	136	室町後半	4-b	鍋	78	北野遺跡	SF54		H-6	奈良		甕
36	楠ノ木遺跡	BS D8	63-28	118	室町後半	IV期	羽釜	79	北野遺跡	SF54		H-7	奈良		甕
37	楠ノ木遺跡	CS K11	64-16	72	南北朝?	III期	皿	80	東海道遺跡		13	94	室町後半	4-c	鍋
38	楠ノ木遺跡	CS K11	64-17	70	南北朝?	III期	皿	81	東海道遺跡		16	63	室町後半	4-c	鍋
39	楠ノ木遺跡	CS K10	64-19	46	南北朝?	II~III期	皿	82	東海道遺跡		24	29	室町後半	4-a	鍋
40	楠ノ木遺跡	CS K10	64-22	44	南北朝?	2-c	鍋	83	東海道遺跡		27	28	室町後半	4-b	鍋
41	楠ノ木遺跡	CS K10	64-23	45	南北朝?	2-c	鍋	84	伊勢寺遺跡	Mb7SE1			南北朝	III期	羽釜
42	楠ノ木遺跡	CS K12	64-31	2	南北朝?	III期	皿	85	伊勢寺遺跡	Mb7SE1			南北朝	3-a	鍋
43	楠ノ木遺跡	CS K12	64-32	6	南北朝?	3-a	鍋	86	伊勢寺遺跡	Mb7SE1			南北朝	3-a	鍋

tab. 16 胎土分析試料一覧表

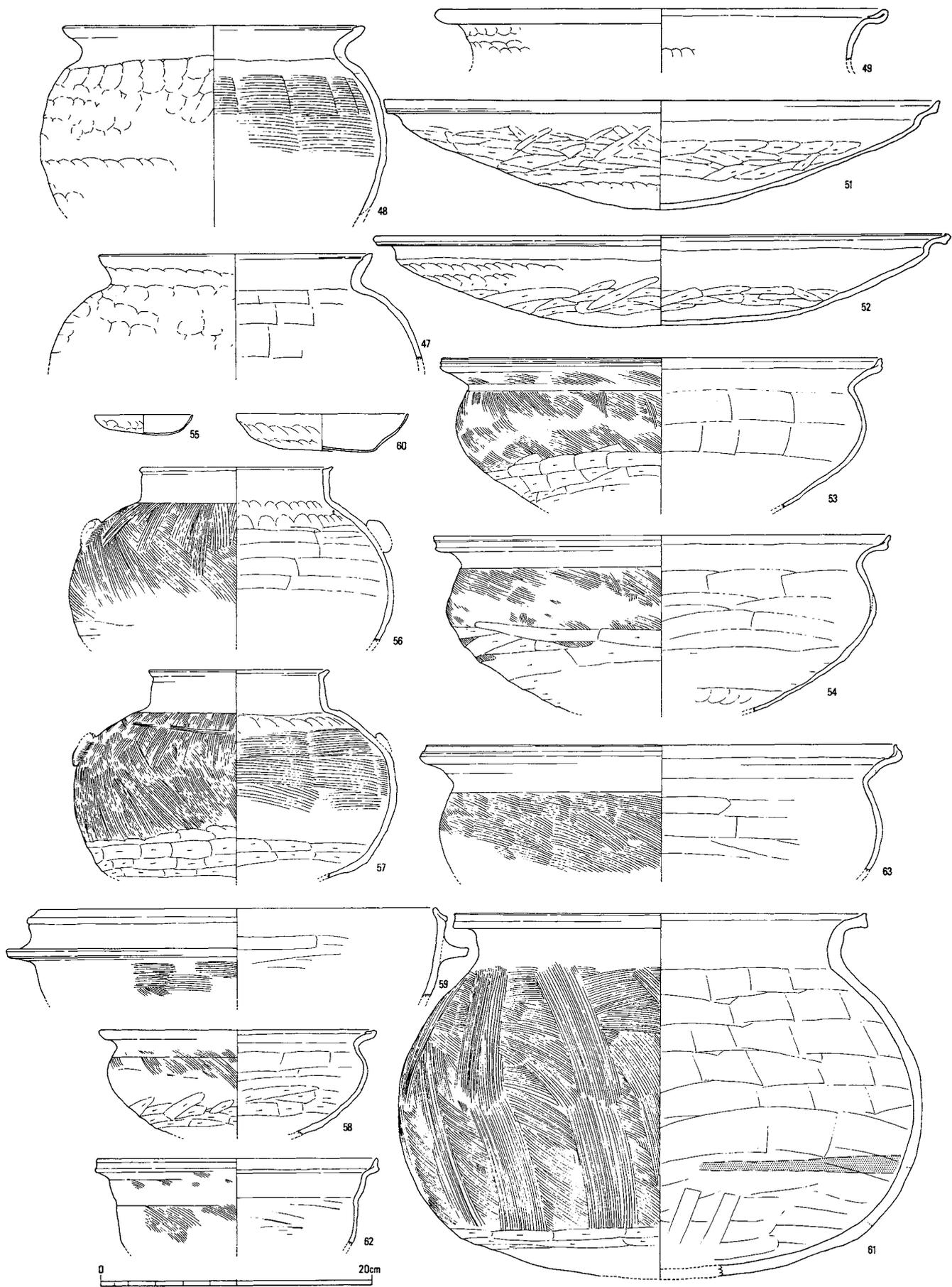


fig.68. 胎土分析資料実測図(1) (scale = $\frac{1}{4}$) ※番号は試料番号と対応する。

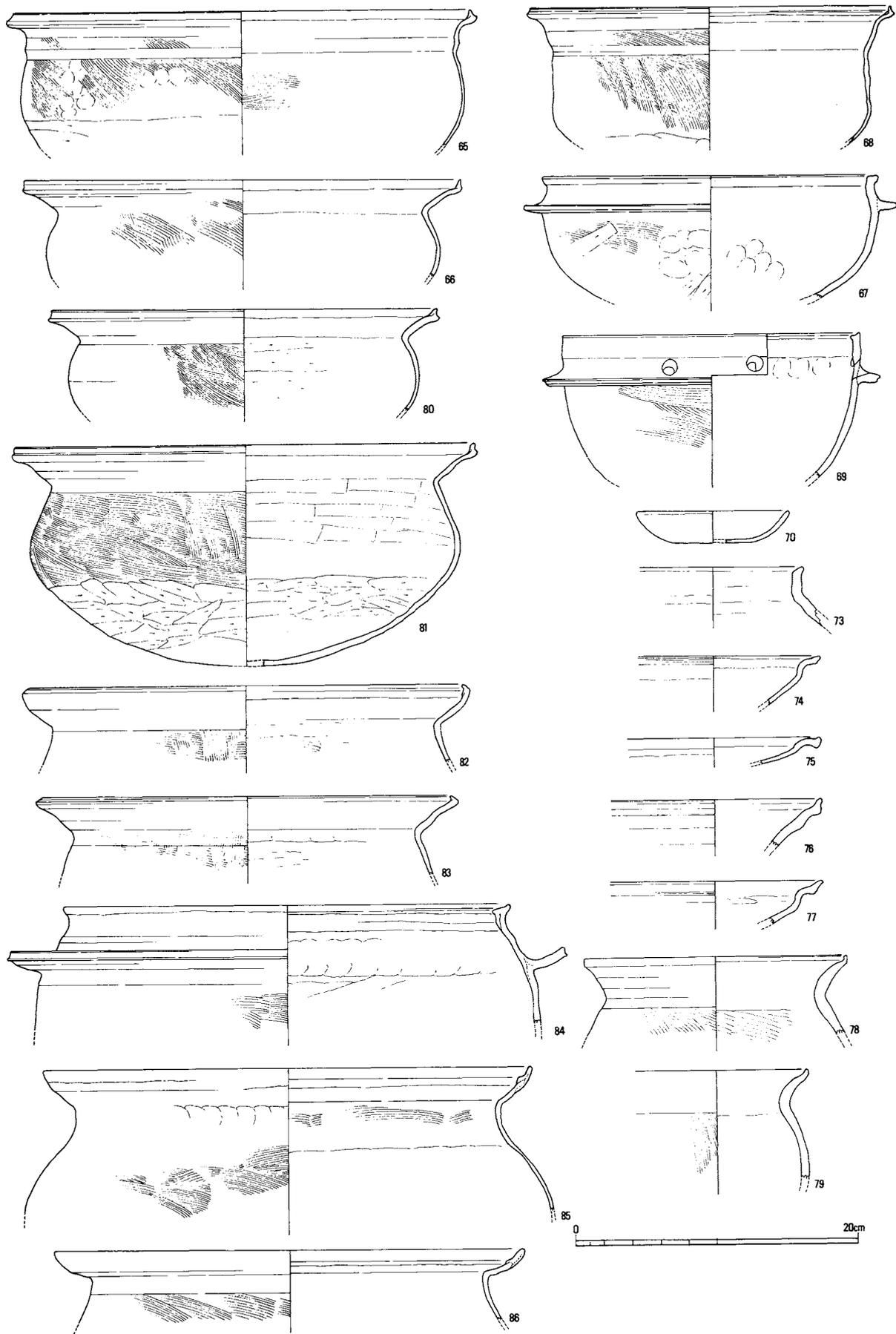


fig. 69. 胎土分析試料実測図(2) (楠ノ木遺跡を除く) (scale = $\frac{1}{4}$)

三重県の概略的な岩石分布は、まず中央構造線のすぐ南側に三波川変成帯の結晶片岩や緑色岩が分布、中央構造線の北側には領家カコウ岩や領家変成帯の片麻岩や角閃などが分布する。角閃石はカコウ岩や角閃岩に含まれる。また、ジルコンはカコウ岩に含まれることが比較的多い。黒雲母はカコウ岩や片麻岩に多く含まれる。酸化角閃石は普通は火山岩中に含まれることが多い。ただし、角閃石を約800℃で加熱すると酸化角閃石に変化することが知られている。したがって、土器の焼成により胎土中の角閃石が酸化角閃石に変化する可能性がある。つまり、これらの酸化角閃石は角閃石から変化した結果である可能性が考えられる。以上のことから、今回の試料の重鉱物組成は、三重県北半部の地質学的背景と調和的といえる。

(2) 胎土の特徴と土師器の時代について

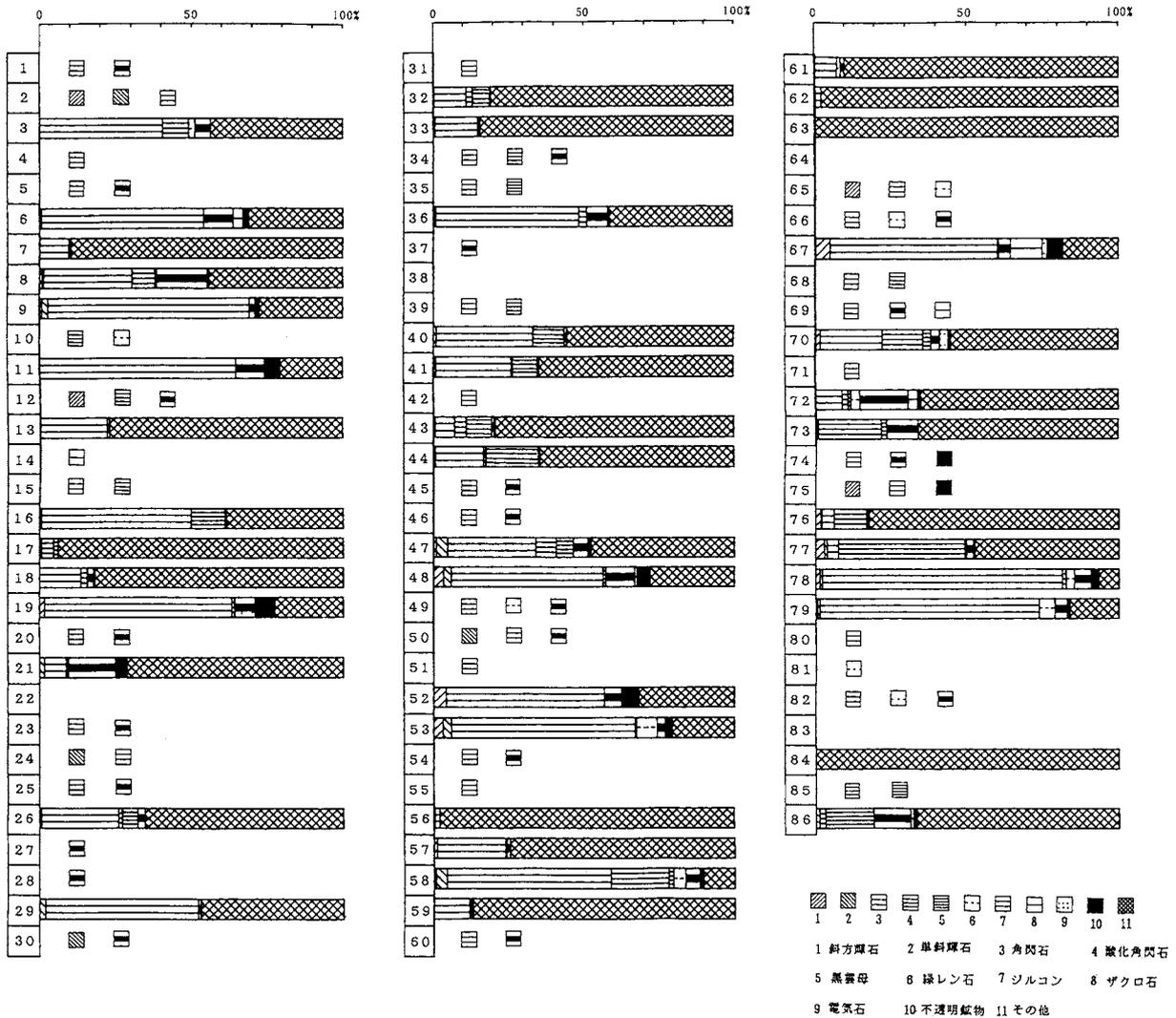
分析試料とした土師器片を器種別・時代別に並べ交えたものをtab.19に示す。今回の試料は点数が少ない上に鉱物組成を求めることのできた試料がさらに少なかったことから、土師器の時代と胎土との対応関係について議論するには、やや制約もある。ただし、得られた分析結果から、次のような傾向を認めることができた。

今回の試料の重鉱物組成の特徴は、「その他」が多いことと角閃石とジルコンが多く認められることである。この特徴は、奈良時代から江戸時代にわたって認められる。前述のような地質学的背景を反映すると考えると、今回の土師器胎土が単味で使用されたとすれば、奈良時代から江戸時代まで同じ地質学的背景を持つ地域で採集されたことが考えられる。このことは、時代を越えてある一定地域でこれらの土師器が製作された土器の一群が存在することを示唆する。

このようないわば時代を越えた共通性が胎土に認められる一方、区分された時代別にも胎土の特徴が明瞭ではないが認められる。今回の分析では奈良時代の試料は2点しかないが、その2点とも非常によく似た胎土の組成を示す。基本的には、角閃石とジルコンの組成であるが、これに少量の緑レン石を伴うことが特徴的である。ただし、類似の組成が室町時代後半の試料である試料番号53と58にも同様の特

試料番号	重 鉱 物 組 成													同定鉱物粒数		
	カンラン石	斜方輝石	單斜輝石	角閃石	酸化角閃石	黒雲母		緑レン石	ジルコン	ザクロ石	リン灰石	電気石	不透明鉱物		その他	
						緑色	赤褐色									
1				23	1				13					1	17	55
2		3	1	2											16	22
3				61	13			3	8						66	151
4				2											5	7
5				10					3					2	6	21
6			1	82					15	5				3	48	154
7				24					1					1	224	250
8		2	1	73	19			1	42					1	111	250
9		1	3	100					3					2	42	151
10					1			1				1				3
11				102					15					8	33	158
12		3			3				12			1			22	41
13				55					2						193	250
14										1						1
15				30	4										50	84
16		1		123		25	3	1							97	250
17				1	10		4								235	250
18				34	5				5	1					205	250
19		3		125	2				14	1				12	47	205
20				3					8					1	4	16
21			2	10	1				21					5	99	138
22															1	1
23				34	2		1		13					13	22	85
24			1	1											9	11
25		1	1	15					13					8	26	64
26			1	63	3	3	10		6						164	250
27									1						7	8
28									1						2	3
29			2	56					1						53	112
30			1						3						5	9
31				11											16	27
32		1		1	27	5	2	12	1						201	250
33				1	21									1	125	148
34				5	2				6						8	21
35				1			1									2
36		1	1	104	6				15	1					91	219
37									3						7	10
38															1	1
39				1	1										3	5
40			3	80		17	9		2						139	250
41			2	52	1	13	4		1						135	208
42				2											3	5
43			2	16	10	5	16		2		3			1	195	250
44			2	40	2	26	18							1	161	250
45			4	49					10					4	29	96
46			1	22	1				4						19	47
47		1	4	31	7		6		5		1			1	49	105
48		4	3	59		1			11	1				5	33	117
49		3	1	30					6	8				5	33	86
50		2	4	12				1	7	1				9	15	51
51				25								1		2	2	30
52		1	7		85				9					9	51	162
53			8	7	152	1			17	7				6	52	250
54			4		34	1			5					4	2	50
55					1										1	2
56				1	4										245	250
57		3		57					1	3					186	250
58		2	9	136	48	1	3	10	12					3	26	250
59				19	1			1							138	159
60				1					3						4	8
61		1		18					3	3					225	250
62				6											244	250
63				1											249	250
64															2	2
65		1		4											6	12
66		1	5	60	1				7	6					11	81
67		13		137	1				10	26		4	13	46	250	
68		1		9	5				1						2	18
69				2	10	1		1	15	5		1	11	33	80	
70		1	2		22	14		3	3			3	1	58	107	
71				1											1	2
72				9	2	1			3	16	3			1	66	101
73				1	23	1	1		11						72	109
74				10					1	4				2	56	73
75		3		43	1	1			1	1				3	7	59
76		4	1	10	27			1	1						206	250
77		6	2	8	89			1	5				1	102	214	
78		3	2	198	3			7	14	1			5	17	250	
79		1	2	181				13	10				2	41	250	
80				10	1	1		1	1						4	18
81				1	1			2	1						3	8
82				10	1			2	2					1	4	20
83	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
84															250	250
85				3	7	1	11	1	3					2	40	68
86				1	2		16		12	1				1	67	100

tab.17 土器胎土重鉱物組成



tab.18 土器胎土重鉱物組成ダイアグラム ※棒グラフになっていないものは同定粒数100粒未満のもので、その主な出現鉱物を棒グラフと同様な凡例で示している。

徴が認められることから、時代的变化とともに粘土採取地および製作地の地域的な条件が介在している可能性がある。平安時代末および鎌倉時代前半の試料は、今回の試料に共通してみられる特徴である角閃石とジルコンの組成が最も顕著である。さらに、試料番号21・72・8のようにジルコンの量比が高いものが存在することや、試料番号72や6のようにザクロ石を少量伴う試料のあることも、この時代の特徴といえる。鎌倉時代後半、南北朝室町時代および室町時代後半の試料は全体に「その他」が多い。また、角閃石とジルコンの組成は比較的少なく、試料番号40・41・43・44・16のように角閃石と黒雲母という組成が特徴的である。江戸時代の試料は、角閃石とジルコンの組成に少量の不透明鉱物を伴う組成(試料番号19・52)と酸化角閃石が特徴である組成(試料番号76・77・73)との2群が認められる。

以上の時代別分類のほかに、今回の試料では北伊勢地域のもと考えられる試料が3点(試料番号67~70)がある。試料番号67は角閃石とジルコンの他に、少量ではあるがザクロ石が他の試料と比べて多いのが特徴である。試料番号69は100粒を数えることができなかったが、試料の量からみてもともと重鉱物の少ない胎土である可能性がある。また、少ない中でもザクロ石が認められた。試料番号70は酸化角閃石と微量の電気石を含む。これら3点はいずれも南伊勢系の土師器には認められない特徴を示す。

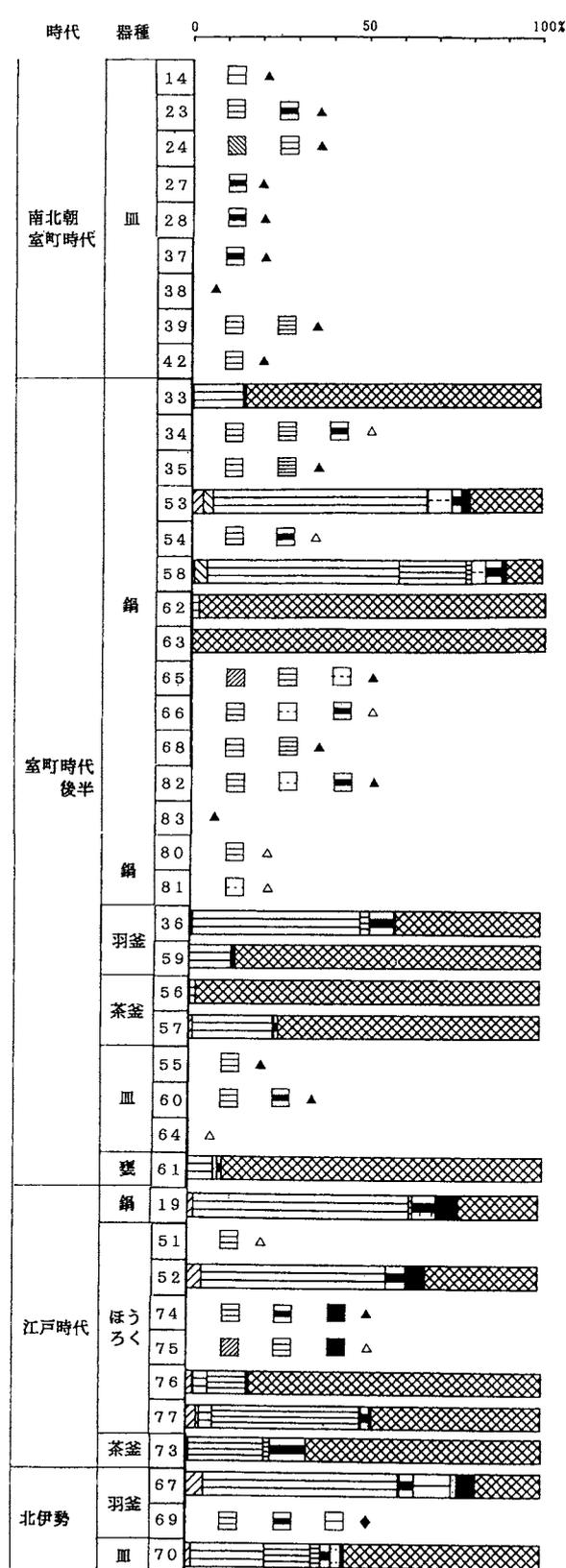
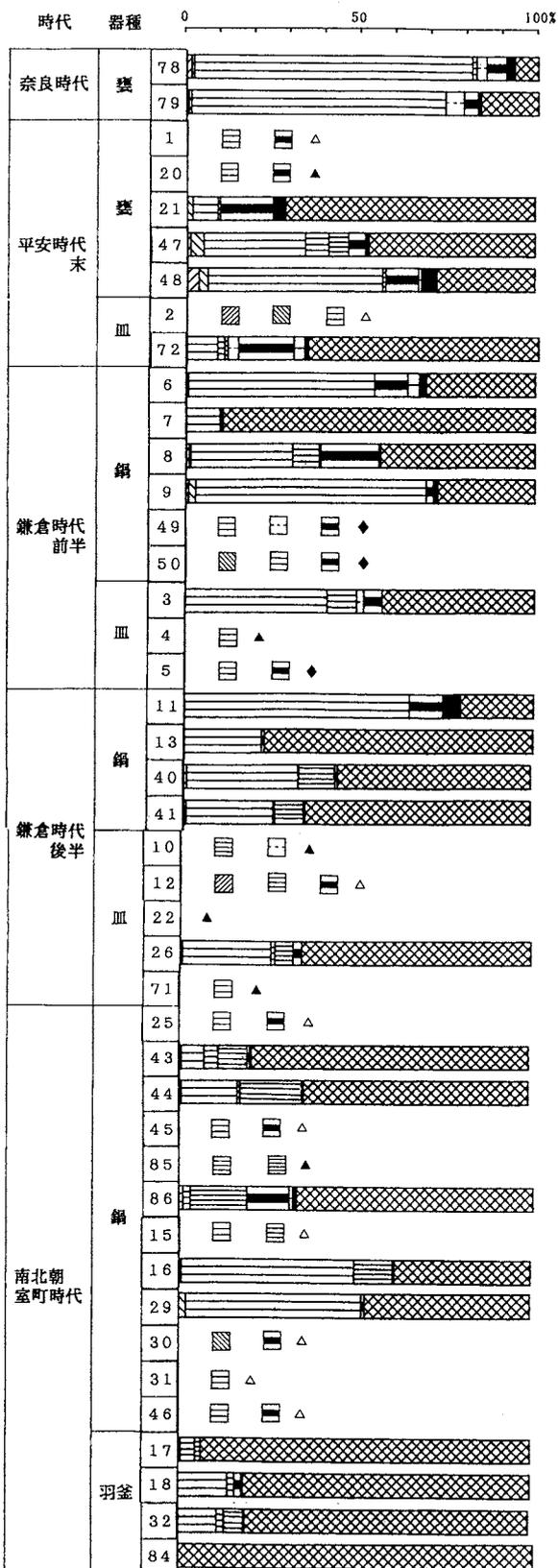
以上に述べた各時代別および北伊勢に認められた胎土の特徴は現時点で非常に限られたデータから把握したものである。今後、南伊勢系の土師器については比較的大きい破片を選択し、各時代のデータを蓄積するとともに、北伊勢の土師器についても同様の分析事例を蓄積して比較検討を重ねることが必要

と考える。

<参考文献>

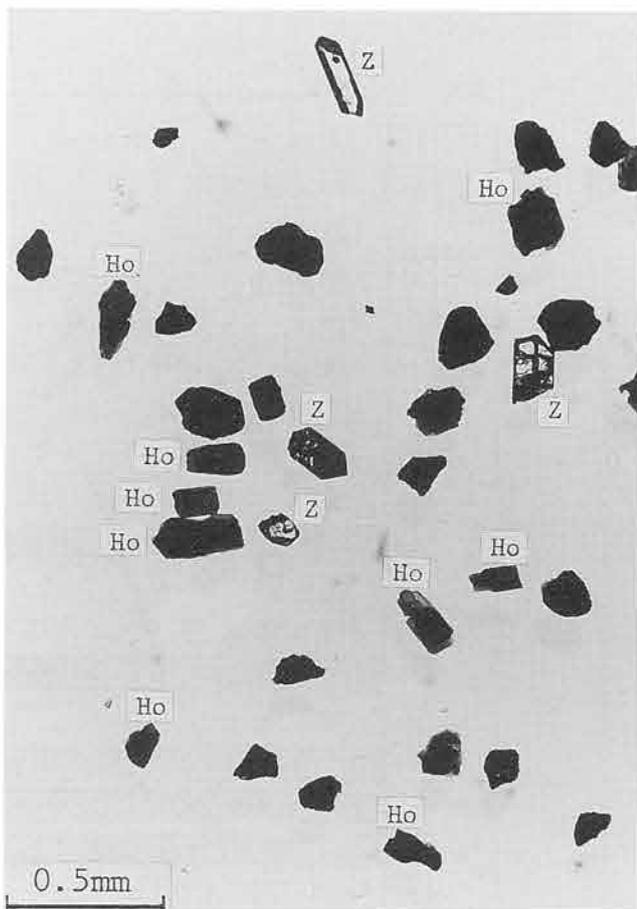
伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」

(『Miehistory』 vol.1 1990)

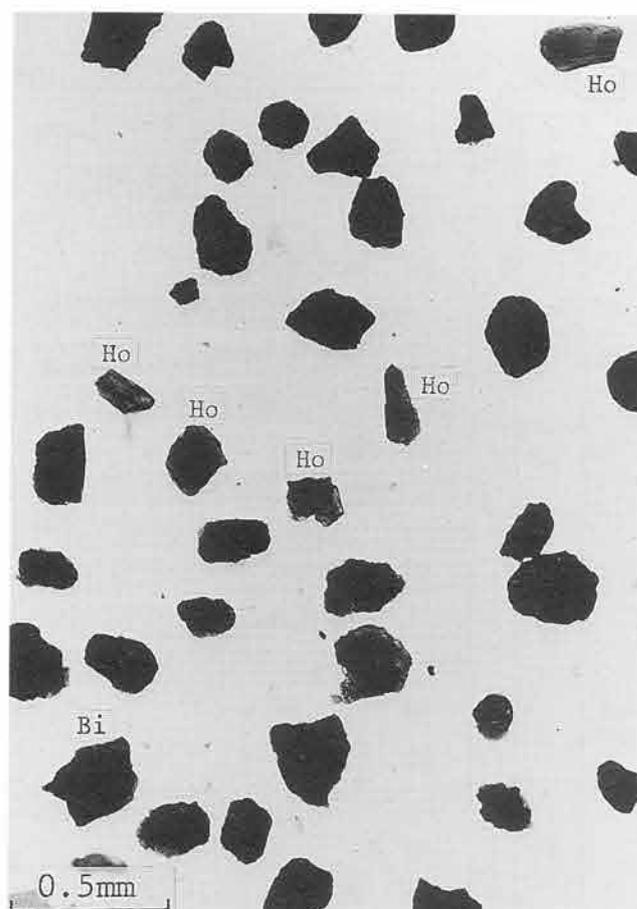


* 鉱物の凡例は図1に同じ。同定粒数100粒未満のものについては次のような分類をした。
 ▲：処理量が2.7g未満の試料。
 △：処理量が2.7g以上6.0g未満の試料。
 ◆：処理量が6.0g以上の試料。

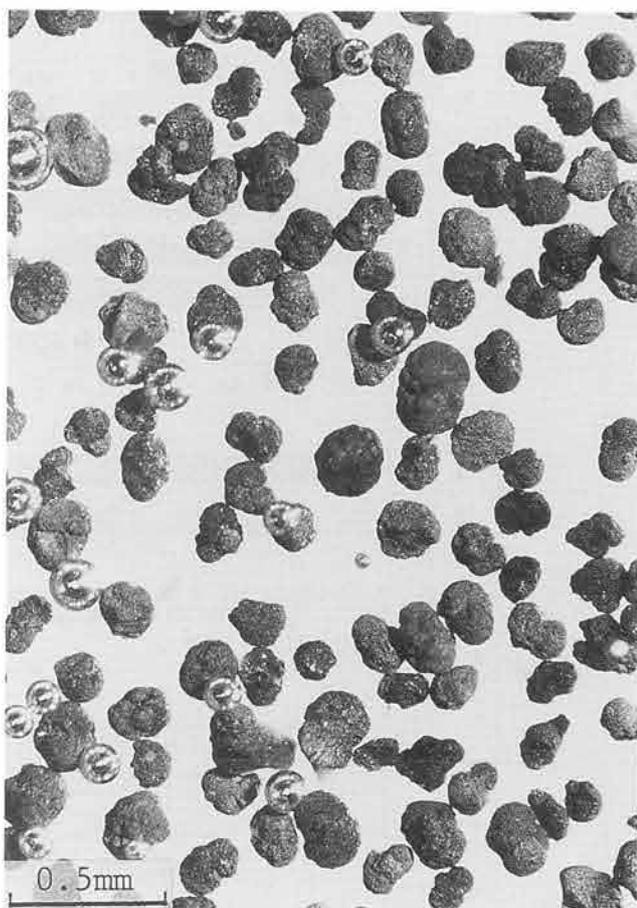
tab.19 土器胎土重鉛物組成ダイアグラム (時期別)



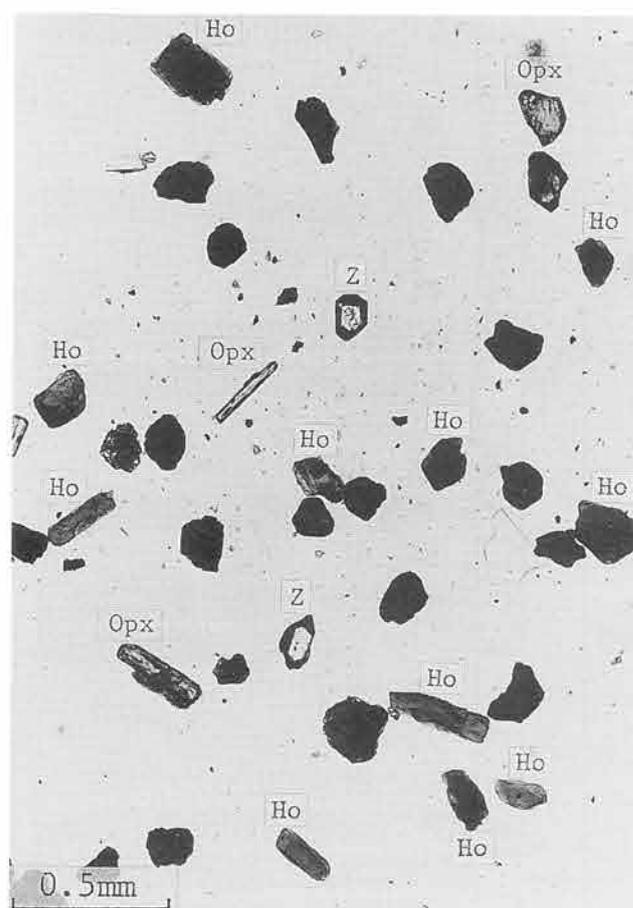
試料番号8 (鎌倉時代前半)



試料番号40 (鎌倉時代後半)



試料番号63 (室町時代後半)



試料番号52 (江戸時代)

Opx : 斜方輝石, Ho : 角閃石, Bi : 黒雲母, Z : ジルコン

pho.5 土器胎土中の重鉍物顕微鏡写真

VI. 調査のまとめと検討

今回の調査によって楠ノ木遺跡の性格の一端が明るみにでることとなった。調査によって得られた成果は単に楠ノ木遺跡のみに関したことなく、問題は「中世」という時代の持つ特質に関わってくるようなこともあると思われる。その持つ意味が全国的なものかどうかはこれからの課題であろうが、今回の調査によって得られたことから当遺跡の位置づけを行い、報告の責を果たすこととしたい。

1. 楠ノ木遺跡、その集落のあり方

A・B・C地区を通じておおよそ「中世」といわれる時期の遺構・遺物を確認したが、それは必ずしも全時期を通じて各地区毎で安定しているわけではない。全体的には平安時代末に形成が始まり、室町時代後半に途絶えるという事実がある。ある時期のものが比較的多く確認できる状態を「盛行時期」と考えるならば、各地区の遺構が示す盛行時期は3地区毎で異なっているといえる。A地区では平安時代末から室町時代前半（Ⅰ期～Ⅲ期後半）、B地区では平安時代末（Ⅰ期）・鎌倉時代後半（Ⅱ期後半）・室町時代（Ⅲ期後半～Ⅳ期）の3時期が断発的に（ただし、室町時代後半は南伊勢系土師器第4段階bないしはC型式までに止まる。）、C地区では鎌倉時代後半から室町時代前半（Ⅱ期後半～Ⅲ期後半）という状況にある。

このような盛行時期の差の意味を抽出するにはそれぞれの遺構の特性を考慮しておく必要がある。A地区のあり方は一定の「屋敷地」を示すものと考えてよいであろうが、B地区の特に東部分から南部分にかけては「墓地」を示すものである。C地区はA地区と同一視することはできないが、やはり居住地と考えて差し支えないであろう。

ここで確認しておかなければならないのは、Ⅱ章でも述べたように、当遺跡は谷に形成された独立性の高い集落跡であることである。すなわち、A・B・C地区という立地上の差はあるものの、全体としてひとまとまりの集落跡であることを再度確認しておきたい。

このことを重視してそれぞれの地区に認められる遺構群の傾向を見てみよう。

A地区では平安時代末（Ⅰ期）から室町時代前半（Ⅲ期後半）にかけての屋敷地が確認できた。B地区では鎌倉時代後半（Ⅱ期後半）から南北朝時代（Ⅲ期前半）のもの2棟と室町時代後半（Ⅳ期）の建物が確実なものとして確認できたが、棟方向がそれほど揃っていることもなく、規則性は明確でない。C地区では南北朝時代頃（Ⅱ期後半～Ⅲ期前半）の建物の単位が確認できたのみである。B地区では溝SD4やピット出土土器から平安時代末～鎌倉時代（Ⅰ期～Ⅱ期）の建物はおそらく存在するであろうし、C地区でも平安時代末～室町時代前半（Ⅰ期～Ⅲ期）の建物が存在する可能性は高い。しかし、A地区のような建物の継続性は存在しないと見做してよいであろう。

すなわち、A地区では土地占有的な建物群が確認できるが、室町時代後半には建物は認められなくなり、B・C地区では平安時代末～室町時代後半まで何らかの生活の痕跡が確認されるものの、恒常性のある占有的な建物群は構成されない、という状況が判明する。C地区においては2棟の建物が並列して構築されている状況が認められたが、継続的でないことからA地区に認められる状況と同様の性格と見做すことはできないであろう。同様なことはB地区のあり方についてもいえる。

これらのことは、楠ノ木遺跡がA地区に認められた占有的な建物群をひとつの核とした集落として存在していたことを示すものと考えられる。そしてA地区の建物群のうち占有性を持つ一群は「屋敷地」として把えることが可能かと考える。さらに地形的に大きく見れば、A地区周辺の平坦地にこのような「核」となる別集団の屋敷地が想定でき、隣接する「大グルワ」という小字の存在もあながち無視できないものとなってくる。そして、B・C地区のような丘陵斜面部には付随的な集団の居住域が想定できるのではないかと考えられる。

またB地区で確認した墓地は丘陵斜面の西に立地

している。A地区でも南端に墓かと思われる遺構が存在している。簡単に比較はできないであろうが、丘陵東斜面に相当するC地区では墓と想定できる遺構は認められなかった。このことから当遺跡の東に隣接している丘陵斜面部には当該時期の墓域が設定されている可能性もあろう。B地区に確認された墓地が当遺跡群内のどの集団に属するものの墓であるのかは現状では確認しがたい。墓壙内出土遺物は小刀や陶器・土師器類のみである。小刀は中世の人々が日常的に用いていたものであることからこれを特殊なものとするとはできないであろう。その他の地域で認められる中世墓のように青磁碗などのいわゆる高級品は認められないことから付随的な集団の墓地である可能性の方が高いのではないだろうか。

2. 屋敷地の展開 — A地区を中心に —

ここではA地区に認められた屋敷地の展開を時期毎に追ってみよう。時期の設定は前述したI～IV期を用いることとする。

各時期の状況

I期 (fig. 70上)

区画溝では溝SD2・15が时期的に相当するようである。両者の溝は同一線上にあり、途切れが西側に認められる。出入口であろうか。溝の南側に建物2・3・5が、北側に建物11が建造されている。さらに土坑SK13付近にも当該時期の建物の存在は十分に想定される。井戸

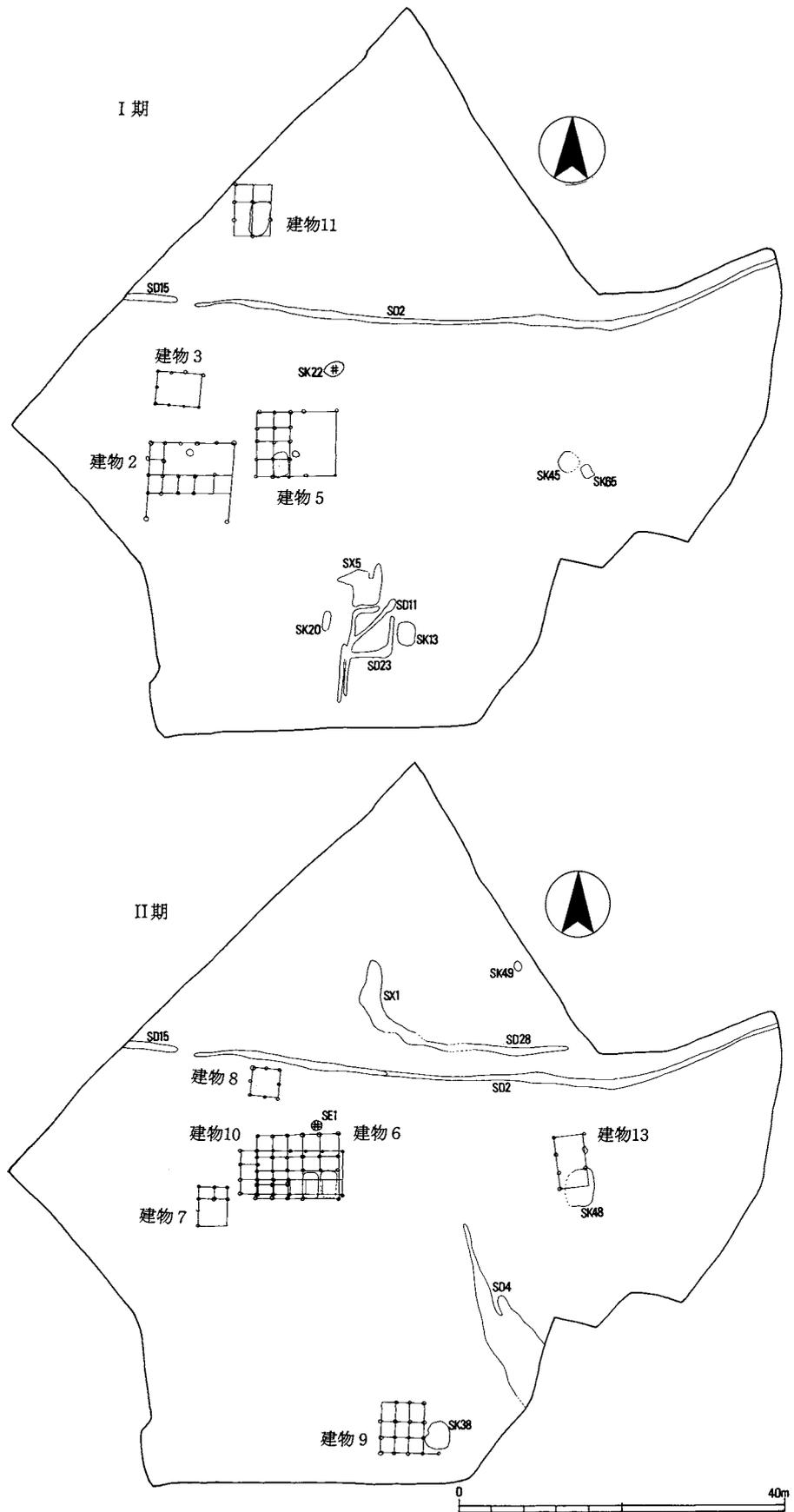


fig.70. A地区 I・II期主要遺構配置図 (scale=1/800)

はSK22を想定したい。なお、溝の北側に建物が認められるのはこの時期のみである。なお、この時期に限って方形に溝を巡らす遺構（溝SD23）が存在している。東側拡張部分には目立った遺構は認められない。

南側建物群の主要建物は建物2・5が想定され、やや小規模なものとして建物3がある。井戸が建物5寄りに存在することは、建物2・3が建物5に付随することを示すものと考えられることも可能であろう。さらに建物2と3がほぼ並行して建てられていることから両者が密接な関係を持つことも想定できる。

II期 (fig. 70下)

区画溝では溝SD2・15が継続して機能していたものと考えられる。さらに落ち込みSX1～2とそれに接続すると考えられる溝SD28もこの時期に存在していたものと考えられる。この時期には区画溝の南側にのみ建物群が認められるが、落ち込みSX1を溝（区画溝）と考えればその東にも建物が存在していたことも想定できる。ただし、小規模なものであることは検出遺構や出土遺物から想定できる。落ち込みSD4もこの時期に想定でき、遺構の方向

からあるいは落ち込みSX1と同じ遺構かも知れない。井戸ではSE1が想定される。東側拡張部分では前時期と同様、目立った遺構は存在していない。

区画溝南側建物群は建物10・6・7・8・9・13が当該時期に相当し、建物9の近辺にはII期後半の建物の存在が、ピット出土土器から推定される。また、次の時期に建物が多く建造されている建物13付近にはII期後半の土器を出土したピットが他に数カ所存在している。次の時期とした建物1も当該時期から継続しているものである可能性がある。建物10と6は重なっており、この順序で建て替えられたものと考えられる。建物7・8は小規模なもので、特に建物8はその規模から通常の建物と考えることはできない。建物9は総柱の小規模なもので、倉庫の可能性もあるが、土坑SK38の存在やピットから青磁碗が出土していることから住居と考えるのが妥当であろう。井戸の位置からは前時期と同様、建物10・6付近の優位性が窺われる。

III期 (fig. 71)

区画溝では溝SD1・3・19の存在と、SD27が認められる。建物群は区画溝南側にのみ認められ、

北側は遺構・遺物ともに皆無の状態であった。この時期には東側拡張部分にかなりの遺構が存在するようになり、中世墓のようなものも当該時期に存在する。井戸はSE1・SK3・21が認められる。

建物群は前時期と同じ場所に構築される建物4の他、建物1が存在している。また建物12は全く確証はないが当該時期の建物群中の蔵の可能性を想定してこの時期に含めた。建物4は全時期を通じて最も規模の大きいものであるが、隣接する建物1も相当の規模がある。そして、建物4に伴う井戸がSK3、建物1のそれがSK21と、両者それぞれ井戸を持っていることも重要である。このことは、建物

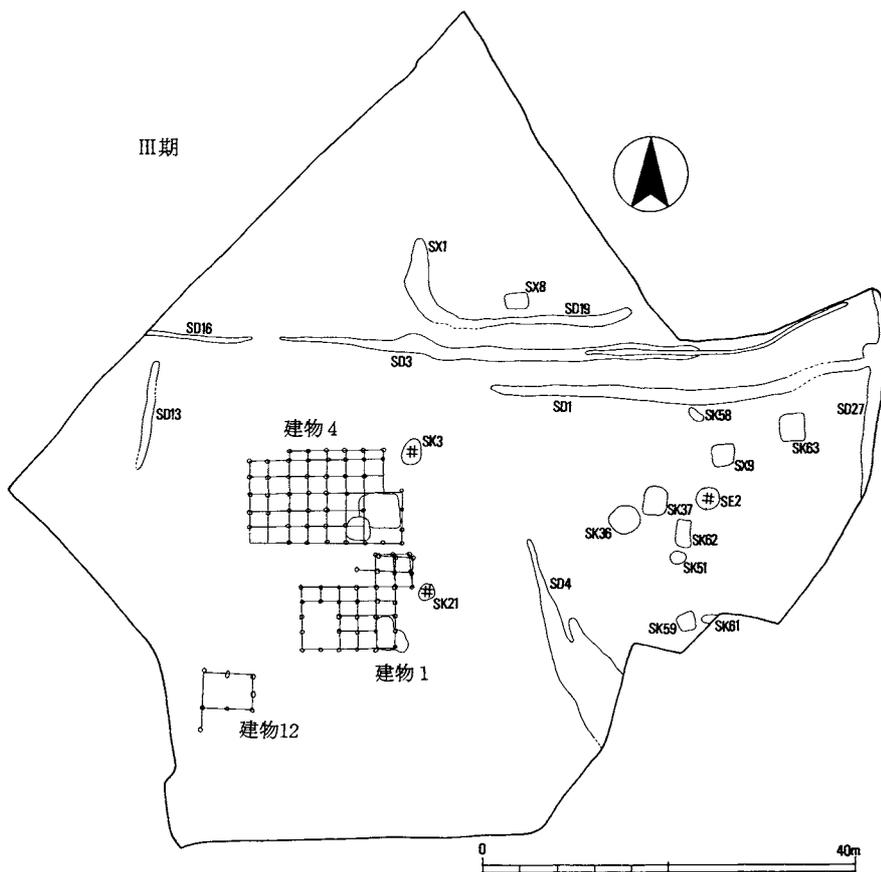


fig. 71. A地区 III期主要遺構配置図 (scale=1/800)

1を使用していたものが以前の時期に認められた主要建物周辺の建物群とは異なり、質的に大きい存在であることを示している。

東側拡張部分に存在する遺構群は鉄製品鍛造に伴って形成されたものと考えられる。工房に相当する建物は建物13の他にこの地点に継続して建てられたであろうことがピットの数とピット内出土土器から想定される。この建物群に伴う井戸はSE2であり、埋土下層から轡の羽口が出土していることから、鍛造作業に必要な水を補給するための井戸であるものとも考えられる。

Ⅳ期

この時期には全く遺構が認められない。廃絶していると考えるのが妥当であろう。

屋敷地の変遷から考えられること

I期に形成を開始した当屋敷地は、当初主要建物である建物5と2を中心として構成されている。この時期においても、後の時期に継続して同じ地点に建物が構築される建物5が、井戸を有していることからその優位性が想定される。しかし、建物2の規模は建物5と比べても劣らず、I期では2棟の主要建物が存在していたと見做せる。

このような状況はⅡ期に至って若干の変化が見られる。I期に建物5が営まれた地点にはこの時期には建物10・6が認められ、継続的に建物が構築されている状況が確認できるが建物2・3が存在していた地点には建物7が認められるに止まる。I期に建物跡が想定された溝SD23付近には建物9が構築されているが、全く同じ地点に構築されているのではないことが建物10・6が構築された地点とは異なる。また、前時期には建物が認められなかった地点に建物8が構築されている。

このことから建物10・6の建造されている地点は前時期の建物5から継続する主要建物（母家？）の用地と見做すことができよう。その他の建物は前時期と比べて規模が縮小したり全く別の地点に構築されたりしているものと考えられる。

Ⅲ期では主要建物の系列として建物4が存在する。この建物は全時期を通じて最も規模の大きいものであることは既に触れたが、特筆されることとして比較的規模の大きい建物1の存在がある。建物4と

建物1はともに井戸を持つものであり、このような近接する建物が別の井戸を持つことは以前には認められなかったことである。また、建物1はかつて建物が構築された建物2・3付近や建物9付近とは全く異なった地点に構築されていることも見逃せない。建物1のピットからは轡の羽口が出土していることやこの時期に東側拡張部分に鉄製品鍛造に関する遺構が本格的に形成されていることから、鉄製品鍛造に携わる集団がこの時期に至って居住した建物として構築された可能性も想定される。なお、この集団が建物4を構築した集団と全く別のものではないことは、かなり近接して建物が構築されていることから想される。

このようなことから、区画溝南側屋敷地内の建物の変遷を以下のようにまとめることができる。I期には主要建物が2棟存在していたが、井戸の有無によって後に継続する建物（建物5）の相対的優位性が存在していた。Ⅱ期には主要建物はI期において井戸を有していた建物に後続する1棟のみとなり、その周辺に3～4棟の建物が構築されていた。Ⅲ期においても主要建物の優位性は継続するが、それに隣接するかたちで新たな井戸を持つ建物（建物1）が構築された。この時期には建物群の東側において鉄製品鍛造が本格化し、工房に相当するであろう建物が継続的に営まれたと考えられる。

さて、これらの建物群をすべて生活の場と考えるか、倉庫などの付属施設も存在すると考えるかによって、この屋敷地の位置づけは全く異なったものとなる。出土遺物は主要建物周辺で青磁・白磁などの出土が多いが、建物9近辺でもまます確認された。このような遺物が認められないのは建物3・7・8・12で、一般的な建物と見做し得ないのは建物3・8・12である。そのためここでは建物3・8・12は蔵の可能性のあるものと想定しておきたい。

以上のことから区画溝南側の屋敷地は建物5・10・6・4を構築したものを主体とし、建物2・7、建物9、建物1、建物13などを構築したものがそれに付随する、全体として一集団を示すものと捉えておきたい。

3. 楠ノ木遺跡の歴史的意義

楠ノ木遺跡成立に関する問題点

楠ノ木遺跡は鍋（仮）A段階に成立している。実年代ではおよそ12世紀中葉頃であろうか。その他の遺跡の成立時期は中ノ垣外遺跡⁽¹⁾が11世紀後葉頃、蚊山遺跡⁽²⁾が12世紀後葉頃と見做される。この100年ほどの時期には山茶碗の広域流通や総柱で根石を持つ掘立柱建物の出現など様々な事象が出現する。これらを基準として見ると、中世集落はこの100年ほどの間に成立を見るものが多い傾向にある。楠ノ木遺跡も大方の中世集落と同様、12世紀代に成立したものと見做される。

楠ノ木遺跡の性格

地理的立地の点からは、当遺跡は3方を丘陵に囲まれた、かなり小さな土地に位置しているという事実がある。この立地は第Ⅱ章で述べたように、現山神・宮古集落の占地と共通するものである。これは付近の蚊山遺跡や中ノ垣外遺跡のように段丘上の平坦地に立地し、集落の展開が山側以外の3方に可能な立地と比べて、閉鎖性が強く、集落の展開が行いにくい立地であるといえるのである。

このような立地のなかで楠ノ木遺跡は廃絶し、山神・宮古集落は現在に至っている。この事実も楠ノ木遺跡を考えるうえで重要である。

また、山神地区から当遺跡へと通じる古道の存在は、当遺跡の性格を考えるうえで重要な位置を占める。fig. 6に示した地図から19世紀代にはこのような道が存在していたことは確実であるが、この道の存在は楠ノ木遺跡の存在を加味してこそ意義があるものではないだろうか。すなわちこの道が成立したのは中世であった可能性は極めて高いと考える。楠ノ木遺跡と山神・宮古地区をつなぐ幹線道として機能していたものと想定しておきたい。また、山神城跡⁽³⁾と楠ノ木遺跡の廃絶時期がほぼ等しいという事実は、古道の存在によってさらに両集落の関係の深さを示すものとして理解されよう。

この道（集落間道と仮称）とともに現度会町棚橋地区へと通じる「熊野脇街道」が遺跡の東に通っていることも見逃せない。熊野脇街道から見れば当遺跡の立地は田丸地区を中心とした地域の入口である。

このような立地にある楠ノ木遺跡とはまさに交通の要所にある集落といえよう。

次に遺跡そのものの性格を考えてみたい。楠ノ木遺跡の性格に関して重要な要素のひとつと考えられるのが、A地区土坑S K36で確認された鉄滓の大量出土である。これはA地区建物1の柱穴内や井戸S E 2から鞆の羽口が出土していることや鉄滓が付着した中世土器類が出土していることから当該時期に鉄製品の鍛造を行っていたであろう事実は否定できない。

このことを考えるための事例のひとつとして当遺跡が位置する付近の現在の小字の状況がある。調査区周辺の小字はfig. 8に示すような状況である。このなかで興味深いものとして大日山の斜面に相当する「鍛冶屋谷」と、調査したA地区に隣接する「大グルワ」がある。前者からは鍛冶に関したものを想定し得るし、後者からはこの付近に居住地が存在していたような想定ができる。無論、これらの小字がそのまま中世にまで直結したり、そのことのみを表したものであると即断することはできない。だが、山神地区の小字には「禰宜殿谷」という地名もあり、A地区の調査結果や現状区画の方向が中世の遺構（特に溝の方向）とほぼ揃っていることなどを考えると全く無関係と見做すこともできないのである。発掘調査によって鍛冶関係遺構が確認された近辺に「鍛冶屋谷」という小字地名が存在していることを重視したい。楠ノ木遺跡の状況を示す一端である可能性を想定しておきたい。

以上のことから、楠ノ木遺跡は交通の要所に形成された集落跡であり、その集落内には鍛冶を行う集団が屋敷を構えられるほどの立場で居住していた、と考えておきたい。

楠ノ木遺跡の廃絶に関する問題

最後に、中世を通じて存続していた楠ノ木遺跡が近世を迎えることなく消滅した事実について若干の推論をしておきたい。当遺跡を終焉させた歴史的背景とはどのようなものであったのだろうか。このことに関して直接物語るのは文献史料をおいて他にない。当該地域は、くり返しになるが、神宮の所領地である神三郡に所属する。この状況が変化を見せるのは、戦国大名として存在することとなる北畠氏の

神三郡侵攻によってであることが文献史料などの検討から裏付けられる。『氏経神事記』によると永享年間（1429～1440年）以降、北畠氏関係の人物による田丸周辺への進軍や、神領の横領の記述が散見される。小林秀氏の御教示によれば寛正年間（1460～1465年）には田丸周辺の神領の多くが北畠氏の知行制のなかに組み込まれていたであろうことが推定されるという。このようなことから北畠氏による当該地域の侵攻・支配はおおよそ15世紀中葉あたりに求めるのが妥当であると考えられよう。

楠ノ木遺跡にて確認される最終段階の遺物は、B地区井戸SK30・区土坑SK11・SK16および溝SD2・3などから出土したもので、南伊勢系土師器では鍋第4段階c型式⁽⁵⁾が最終と見做し得る。さて、この実年代であるが、現在までのところ伴出する美濃・瀬戸産の陶器類からは大窯期に相当し、16世紀以降という比定がなされる。しかし、藤澤良祐氏も述べるように、美濃・瀬戸産の陶器類⁽⁶⁾についての実年代観はかなりの問題点を含んでいると考えられる。ただ、現状では南勢地域から出土する美濃・瀬戸産陶器以外の土器で型式編年が明確なものは皆無に近い状態である。したがってまわりくどいやり方になるが、当該地域で出土するような土師器類が出土し、しかもその他の実年代の比較的明確な遺物が伴っている地域の遺跡とのクロスチェックによって時期比定を行わざるを得ない。

さて当該地域近辺の出土土器類で実年代が最も正当性を持つのは信楽産の播鉢であろう。信楽産の播鉢については山田猛氏による詳細な型式学的検討が⁽⁷⁾加えられている。その実年代に関する位置づけには滋賀県信楽町・長野古墓出土の長祿2年（1458年）銘の資料を基準として用いており、楠ノ木遺跡の存続時期後半の検討にはある程度参考になるものと考えてよいであろう。

信楽産播鉢と南伊勢系土師器類が共伴している白山町・家野遺跡出土土器⁽⁸⁾を検討しておおよその実年代を想定してみよう。家野遺跡出土の鍋は第4段階b型式を中心とし、一部第3段階b型式のものや第4段階c型式のものも認められる。信楽産播鉢は山田編年によるⅡa型式以降、Ⅲb型式までのものを含む。土坑13出土の鍋には第3段階b型式のもの

を少量含むもののその主体は第4段階b型式と見做してよいであろう。共伴すると考えられる播鉢は山田編年のⅡb型式のものが数点認められる。白山町・古市遺跡溝SD24⁽⁹⁾からは鍋第4段階b型式のものと信楽産播鉢山田編年のⅡb型式のものが共伴している。ただし破片であるため、確実なことは指摘できないという弱さがある。

この他、伊賀地域にて発掘調査された遺跡（上野市下り合遺跡⁽¹⁰⁾・神ノ木館跡⁽¹¹⁾、大山田村風呂谷館跡⁽¹²⁾、阿山町菊永氏城跡⁽¹³⁾、伊賀町福地城跡⁽¹⁴⁾など）に伴う南伊勢系土師器鍋の型式と信楽産播鉢との関係を考慮するならば、様々な要因による事象を考慮するとしても、鍋第4段階b型式の実年代の一端が15世紀中葉付近にあることが想定できるのである。

このことから、楠ノ木遺跡の終焉は15世紀中葉から後葉あたりの一時期に求められるのではないかと考えておきたい。

15世紀中葉あたりの時期的な動向には、前述したように北畠氏の神三郡侵攻という事実が存在している。これはかなり軍事色が強いもので、『氏経神事記』には寶徳2年（1450年）には北畠氏による大がかりな侵攻があり、原・山神・野篠・刈田（勝田）などの近隣諸郷が焼かれたという事件が書かれている。すなわち楠ノ木遺跡が終焉を迎えるまさにその頃に、北畠氏による軍事的侵攻が認められるのである。このことに関しては昨年度調査された山神城跡が、調査の結果鍋第4段階b型式ないしはc型式をもって終焉していると見做し得ることも重要な意味を持つであろう。

ただし、楠ノ木遺跡の終焉をこの事件によって求めるのは若干無理がある。終末こそ15世紀後葉と考えられるものの、当遺跡の規模は鍋第3段階b型式を最後のピークとして以降は縮小に向かうと考えられるのである。したがって、この事件をはじめとしたいくつかの事象によって当遺跡は終末を迎えたと考えるのが妥当ではないだろうか。いいかえれば、北畠氏による大名支配が展開するなかで、神宮の権力が相対的に低下したことを理由のひとつとして想定しておきたい。すなわちたび重なる北畠氏の神三郡侵攻が当遺跡の廃絶に何らかの関係を持つものと想定されるのである。

いずれにしても、楠ノ木遺跡は近世を迎えることなく廃絶している。前述したように、当遺跡は蚊山遺跡などとは異なり、集落を移動することが困難な立地にある。まさに「消滅」といえる状況である。この事実をどのように解釈すべきであろうか。上述したように、当遺跡は交通の要所に立地している。熊野脇街道の玄関口に相当する占地は、地形的には山神・宮古地区と同様の立地とはいえそれらよりは優位であるといえる。さらに、かつて岩出集落には宮川対岸の津村・佐八集落への渡し船があったとされ、伊勢本街道が岩出集落を通過していたことが想定される。そうであれば楠ノ木遺跡は熊野と伊勢に向かう街道の交点に立地することにもなる。また、山神集落へとつながる集落間道の存在も無視できない。

これらのことを考えると、当遺跡は独立性が高く

分村などではないことが想定されるのである。街道が交差する地点に形成された、文献には地名の記載のない集落と想定しておきたい。

以上、楠ノ木遺跡の性格について若干の考察を加えた。中世、特にその後期の南伊勢地域は、権門勢力である神宮と戦国大名である北畠氏という、性格的に相異なる勢力が同時存在する地域である。このなかで楠ノ木遺跡が示す中世集落の成立と廃絶のあり方は、当時の史的状況の一端を示すものであると考えられ、政治史的にも重要ではないかと考えるのである。

交通の要衝に立地していた当遺跡の上に、近畿自動車道玉城インターチェンジが建造された。楠ノ木遺跡がかつて置かれた歴史的状況を、図らずも平成の時代に再現することとなり、当遺跡は新たな交通の要衝として存在することとなる。

註

- (1) 岩中淳之・高見宜雄「伊勢市佐八町・中ノ垣外遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（三重県教育委員会 1984）なお、報告書では当該集落跡を鎌倉時代にて終息し、以降の時期には継続しないものと見ているが、出土土器を見る限り、南北朝・室町時代にも何らかの生活が行われていたことは疑いない。
 - (2) 小坂宜広・前川嘉宏・稲本賢治「度会郡玉城町・蚊山遺跡」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報』VI（三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990）
 - (3) 大川勝宏・稲本賢治「度会郡玉城町・山神城跡」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報』VII 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1991）
 - (4) 小林秀「伊勢国司北畠氏の神三郡支配に関する一試論」（『史叢』第38号 1987）
 - (5) 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Miehistory』vol.1 1990）
 - (6) 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』V 1986）
 - (7) 山田猛「下郡遺跡群出土の播鉢」（『Miehistory』vol.1 1990）
 - (8) 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報』1.（1990）
 - (9) 増田安生・田村陽一「一志郡白山町・古市遺跡」（『昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1985）
 - (10) 駒田利治・伊勢野久好「下り合遺跡」（『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981）
 - (11) 駒田利治「神ノ木館跡」（『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1980）
 - (12) 森前稔・伊藤久嗣「阿山郡大山田村風呂谷館跡」（『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1983）
 - (13) 岡本武和・藤井尚登・仁保晋作『菊永氏城跡発掘調査報告』（阿山町教育委員会・阿山町遺跡調査会 1987）
 - (14) 駒田利治『福地城跡発掘調査報告』（三重県教育委員会 1982）
 - (15) 『大神宮叢書 神宮年中行事大成 前篇』（臨川書店 1976）
 - (16) 金子延夫『地名と村の歴史——玉城町歴史散歩——』（1989）
- 脱稿後、糸川橋遺跡の資料に接した（門田了三『糸川橋遺跡』名張市遺跡調査会 1991）。ここでは南伊勢系鍋第4段階b型式の資料と信楽播鉢山田編年のⅢa型式の資料が共伴している。南伊勢系鍋第4段階の開始が15世紀中葉にあたる公算はさらに高くなつたといえる。

PLATE



北上空から楠ノ木遺跡を望む（左方道路インター部分）



調査前風景（北東から）



調査区全景（北東から）

PL. 2

A・B地区航空写真



A・B地区を上空西方より見る



東壁(南)土層(南から)



東壁(南)土層(北から)

PL. 4

A地区土層(2)



東壁（南）中世遺構面下の土壇状落ち込み（南西から）



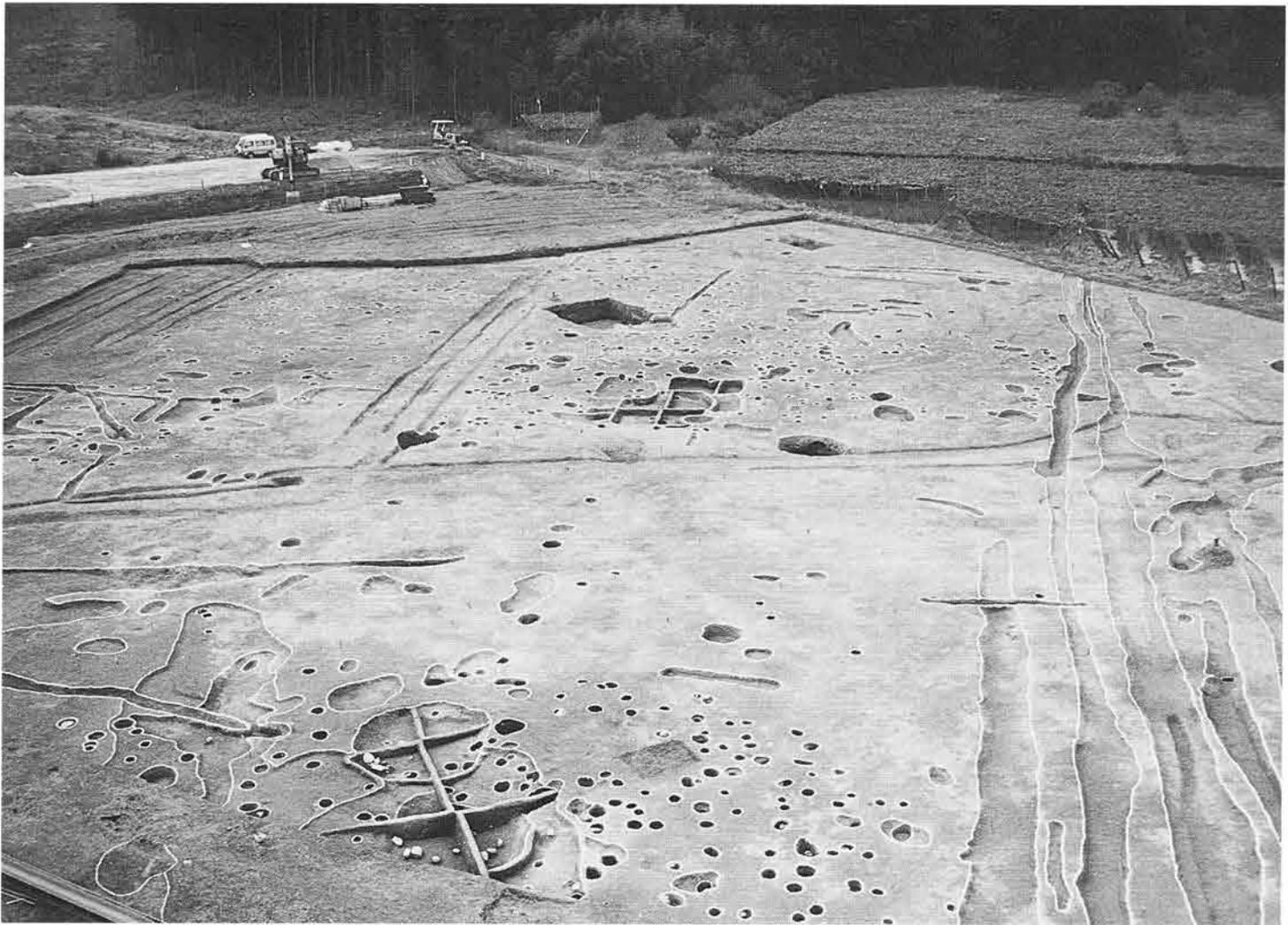
東壁（北）土層（南西から）



建物跡集中部分航空写真（西から）



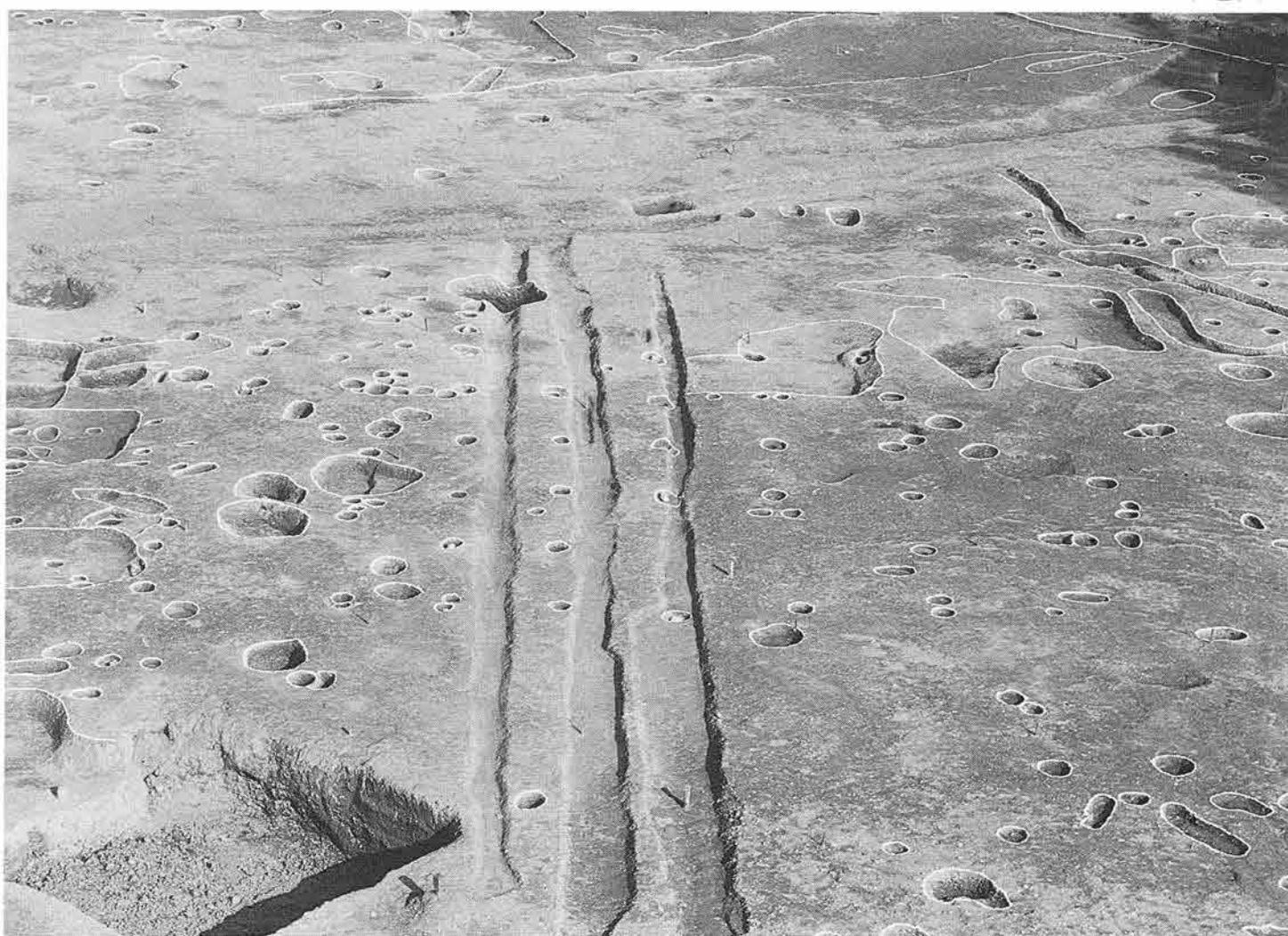
建物跡集中部分（西から）



建物跡集中部分 (東から)



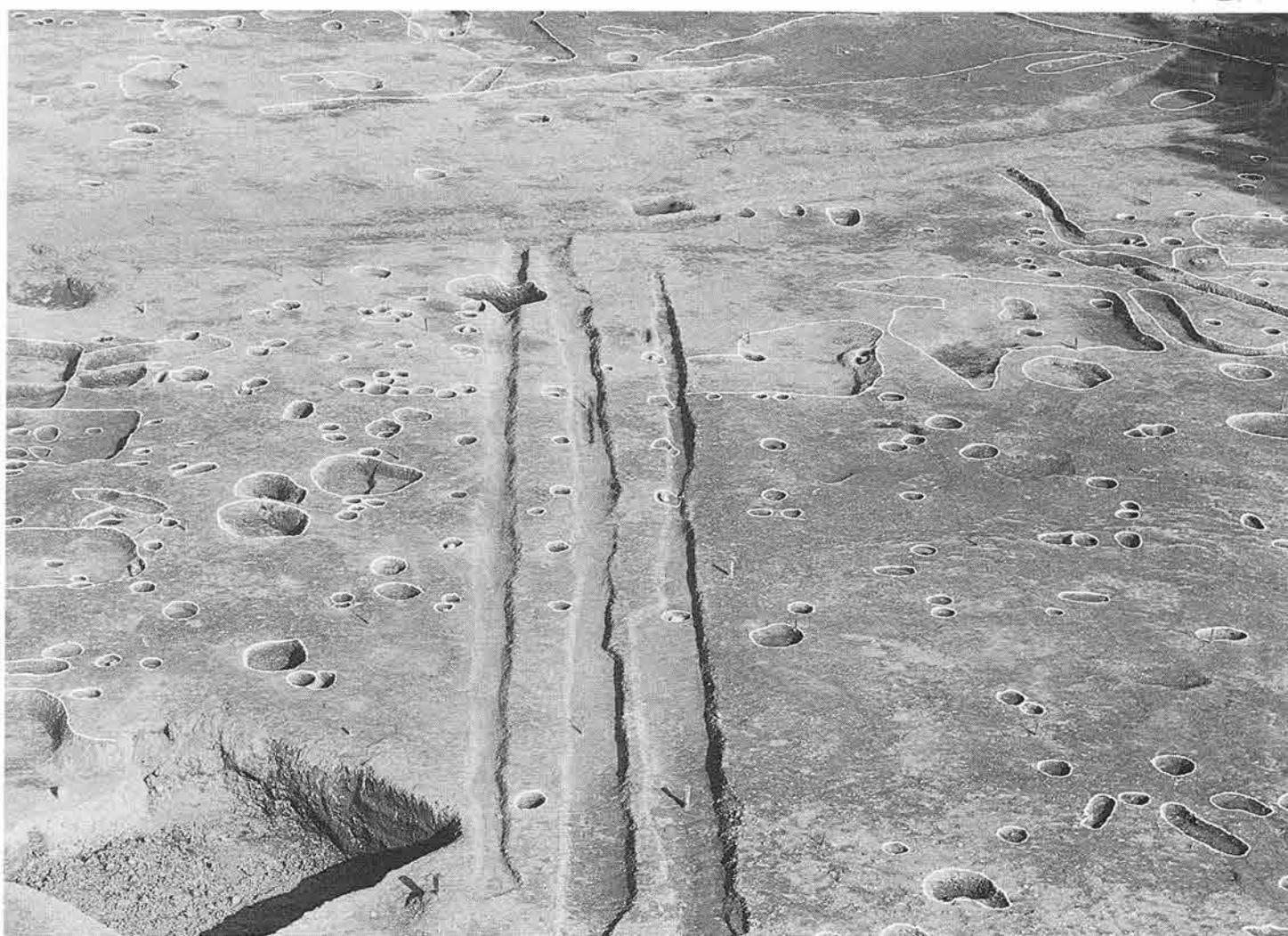
建物跡集中部分 (東から)



全景（西から）



柱列断面（南西から）



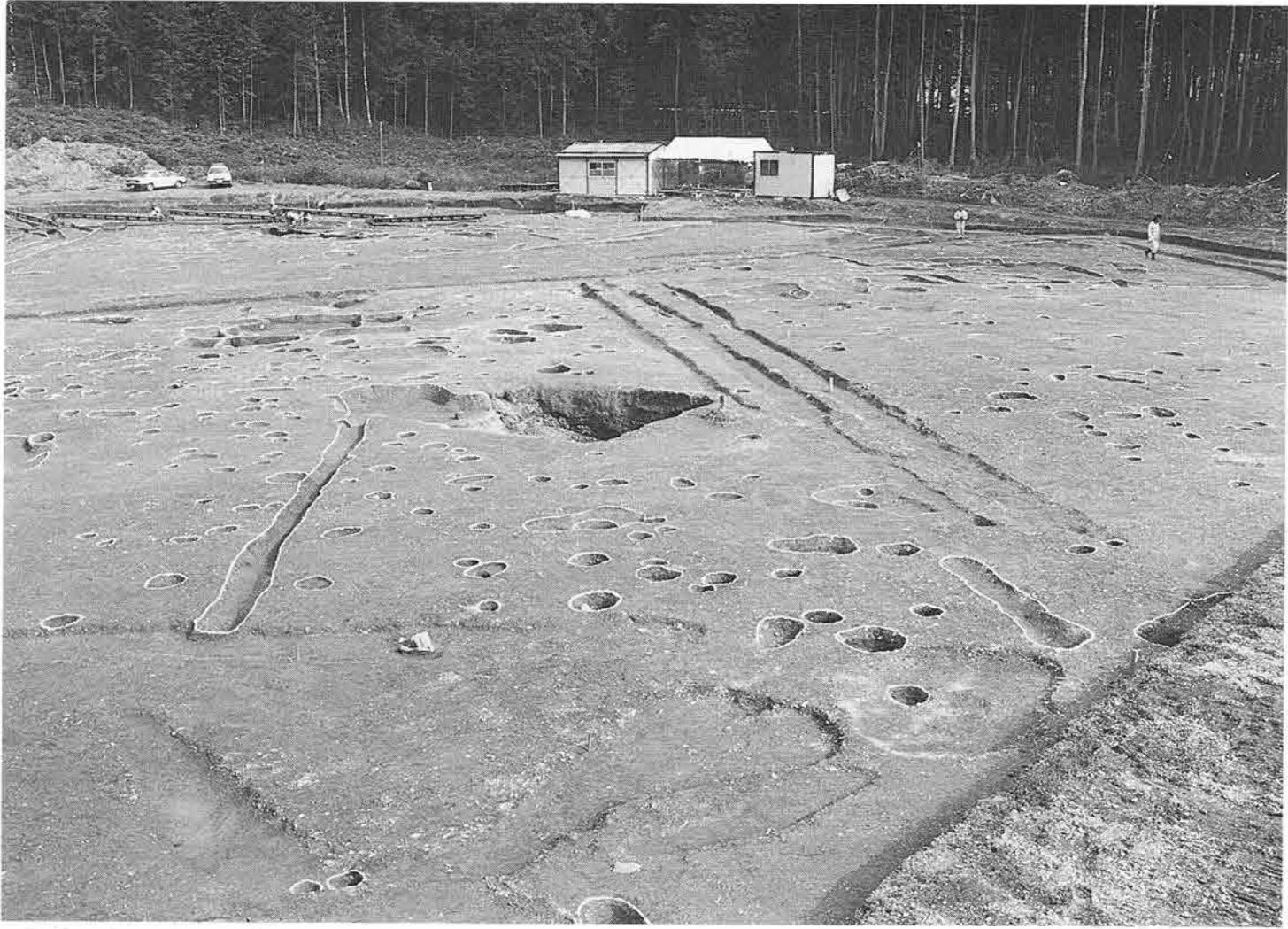
全景（西から）



柱列断面（南西から）

PL. 8

A地区掘立柱建物2・3



建物2全景（西から）



建物3全景（西から）



m13ピット1 (建物2) 土器出土状況 (西から)



土坑SK7およびJ17ピット3 (建物4) 土器出土状況 (南から)



建物9全景 (東から)



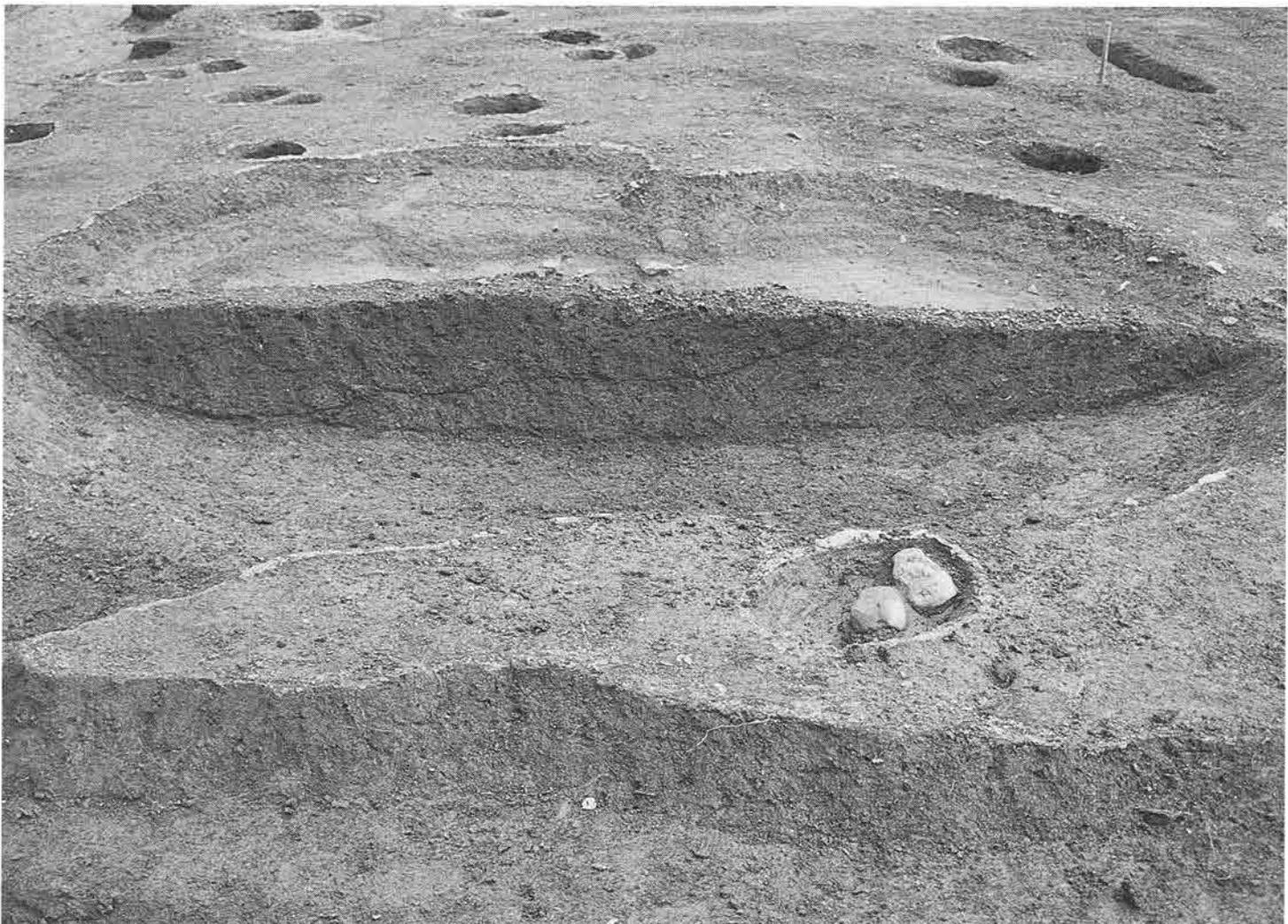
西側土器出土状況（南から）



土層断面（東から）



土坑SK20（西から）



土坑SK38土層（東から）

近景 (南から)



遠景 (東から)



近景 36・37 K S 坑土区地



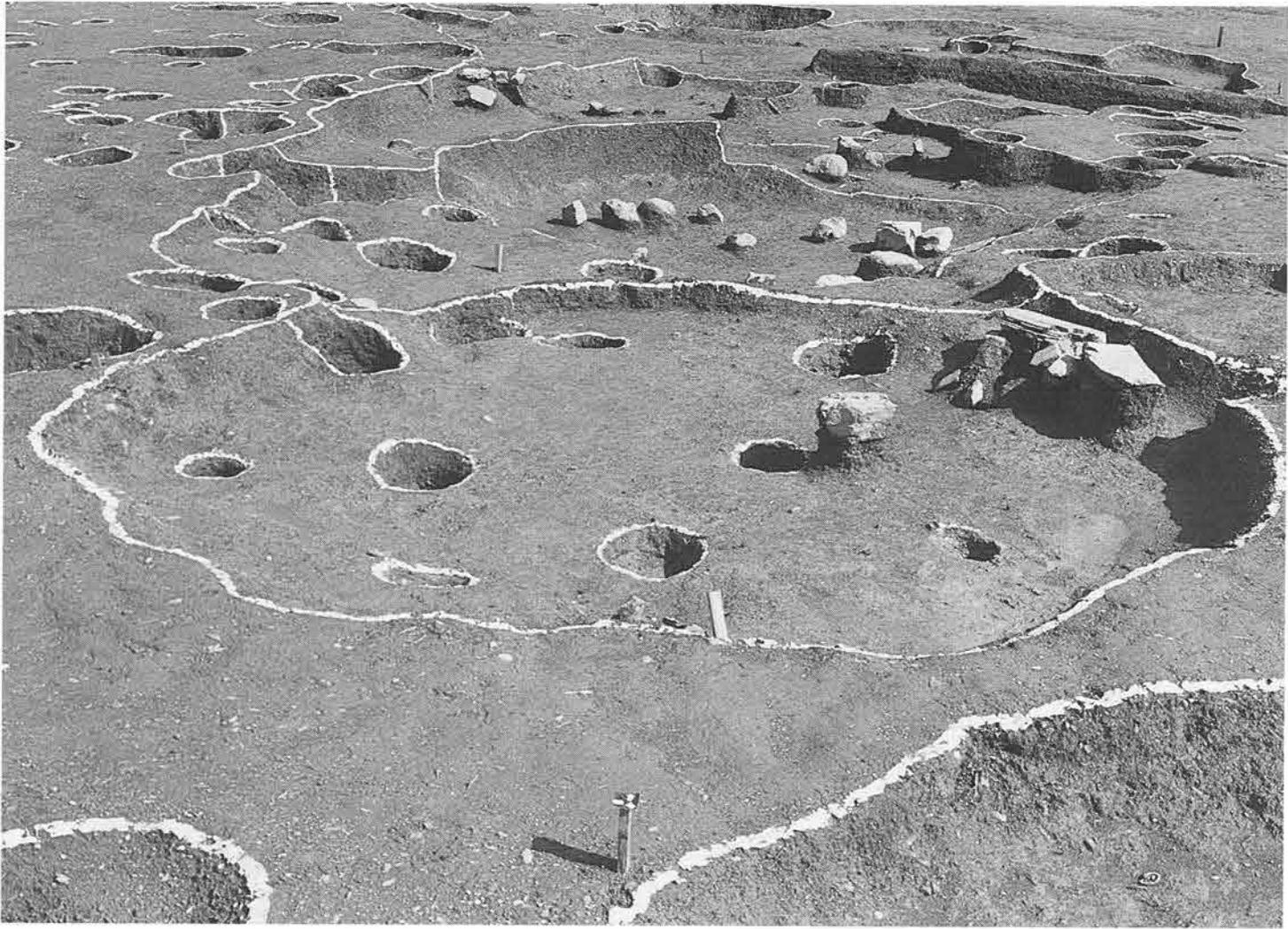
作業風景（西から）



土層断面（南から）

PL.14

A地区土坑SK36・37



土坑SK36 (西から)



土坑SK37 (西から)



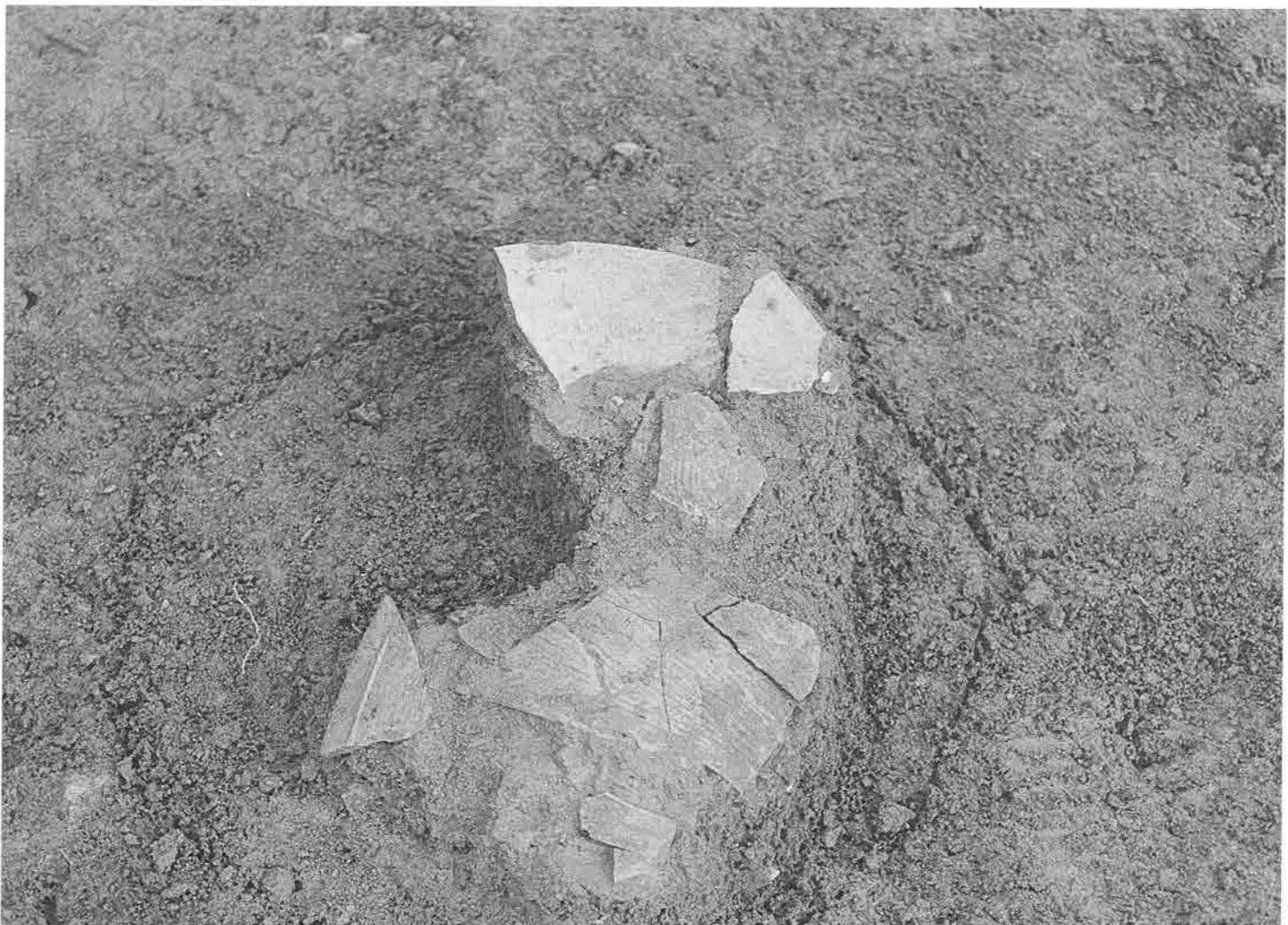
土坑S X 9土層 (南から)



土坑S K 63土層 (西から)



土坑SK61 (北から)



a 22グリッド土器出土状況 (南から)



上部土層（北東から）



断ちわり状況（南東から）

PL.18

A地区溝SD1・2・3



溝SD1・2・3と土坑・建物群（東から）



溝SD1・2・3（東から）



調査前風景（西から）



作業風景（中世墓S X 3）

P.L. 20

B地区全景



南から



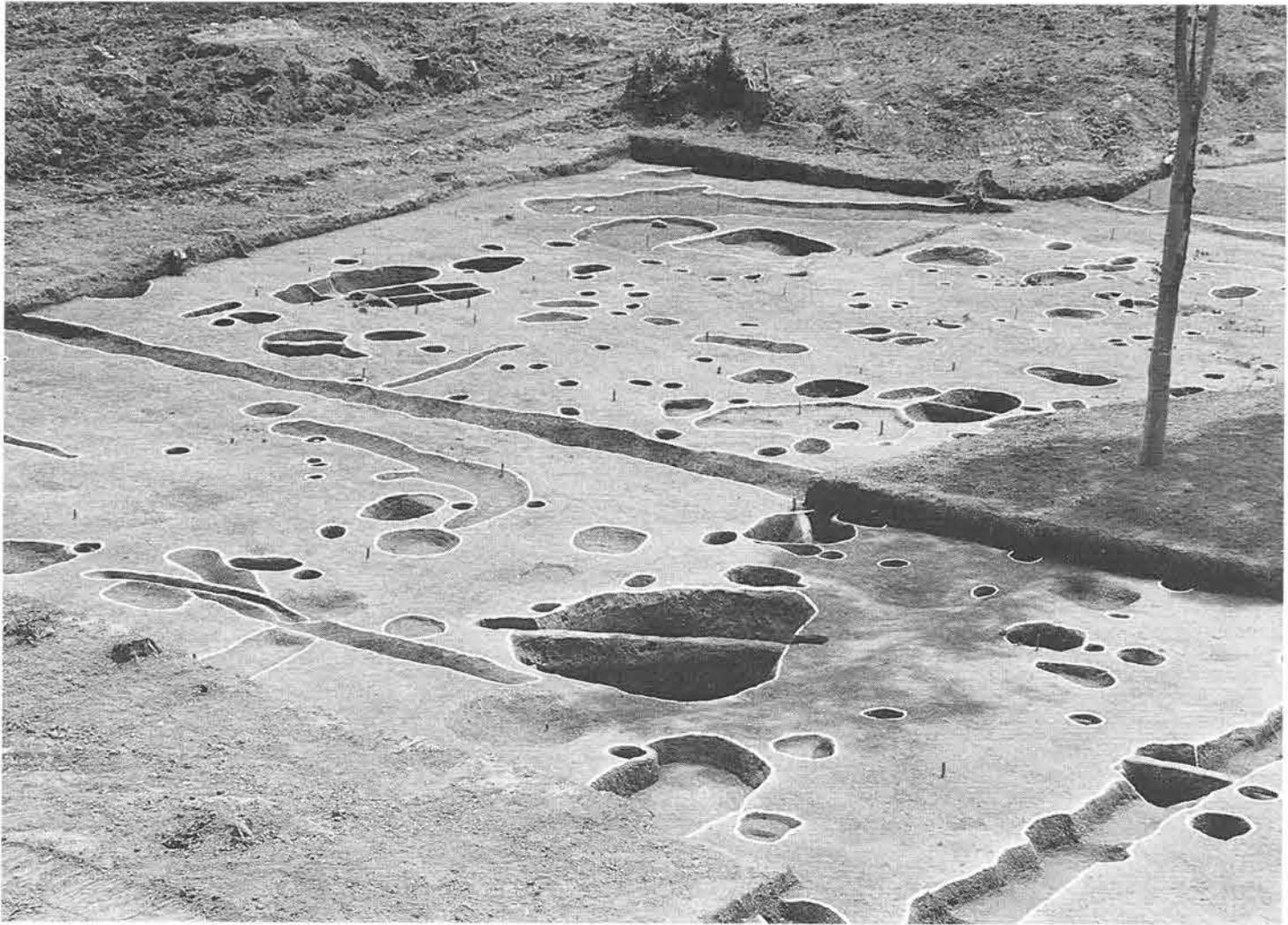
北から



北壁西側（南東から）



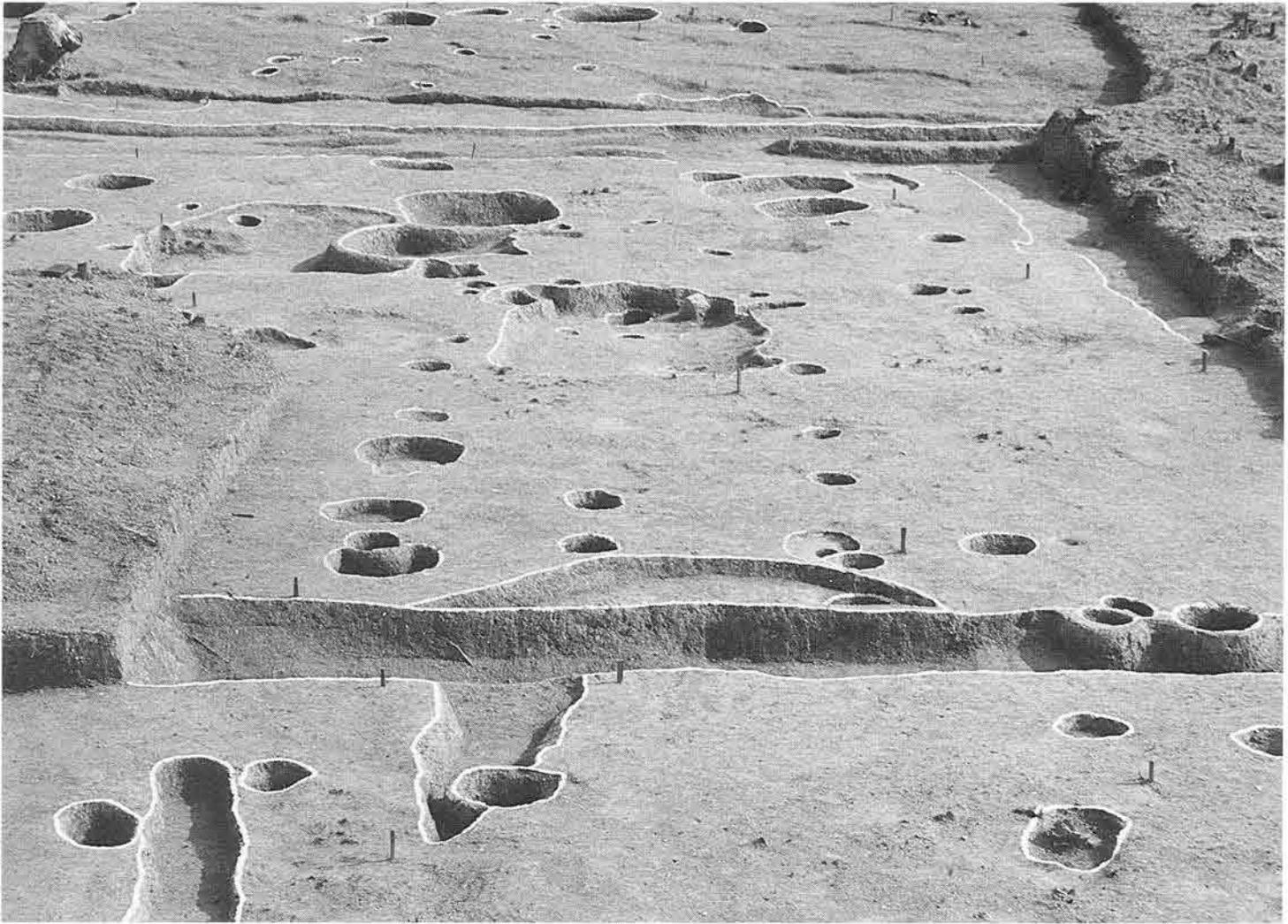
東壁（北）南側（北西から）



北側平坦部東側（北から）



北側平坦部西側（北から）



建物1 (北から)



建物2 (東から)



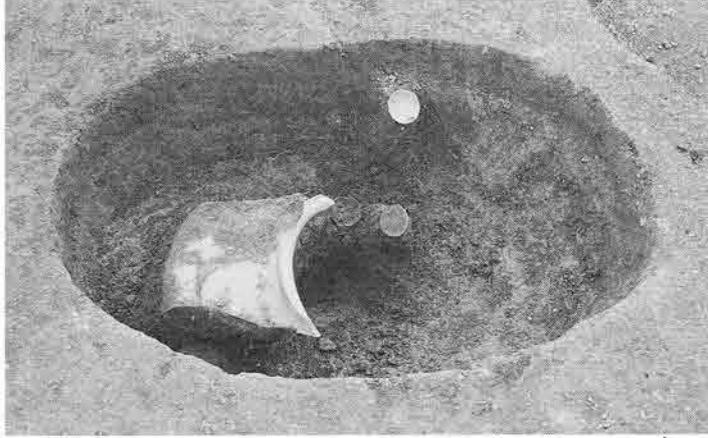
1



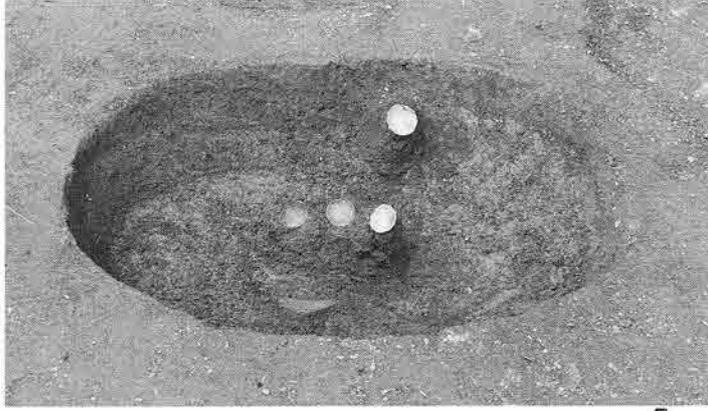
2



3

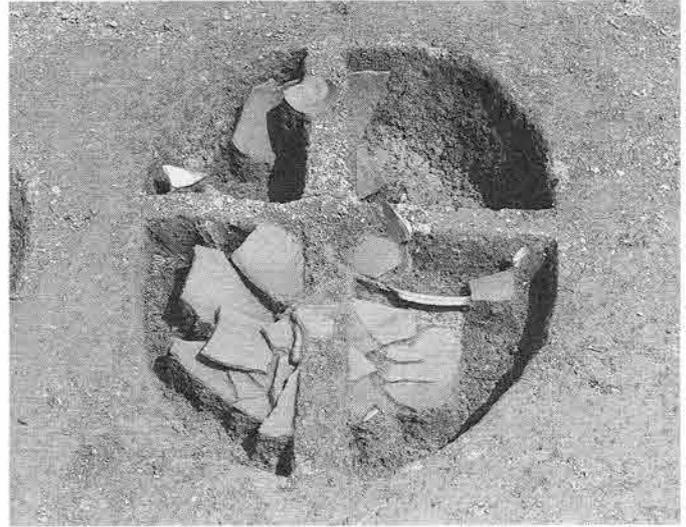


4

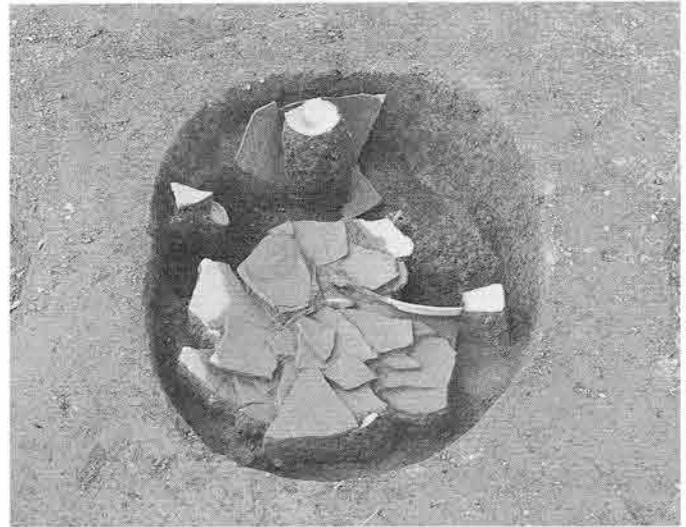


5

1～5：東からの連続写真



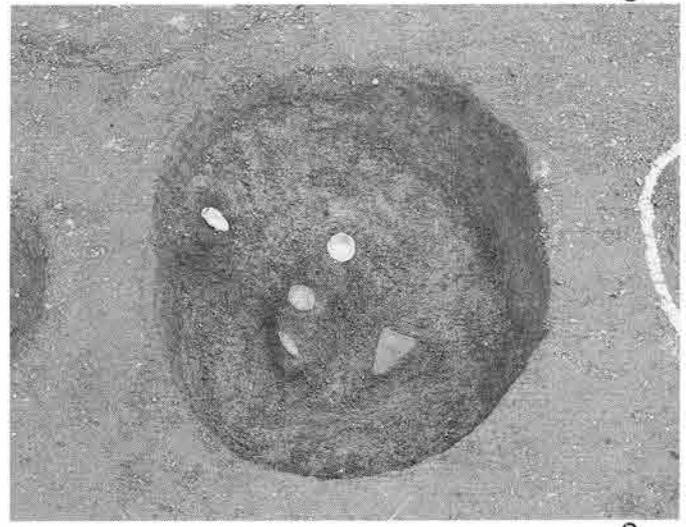
6



7

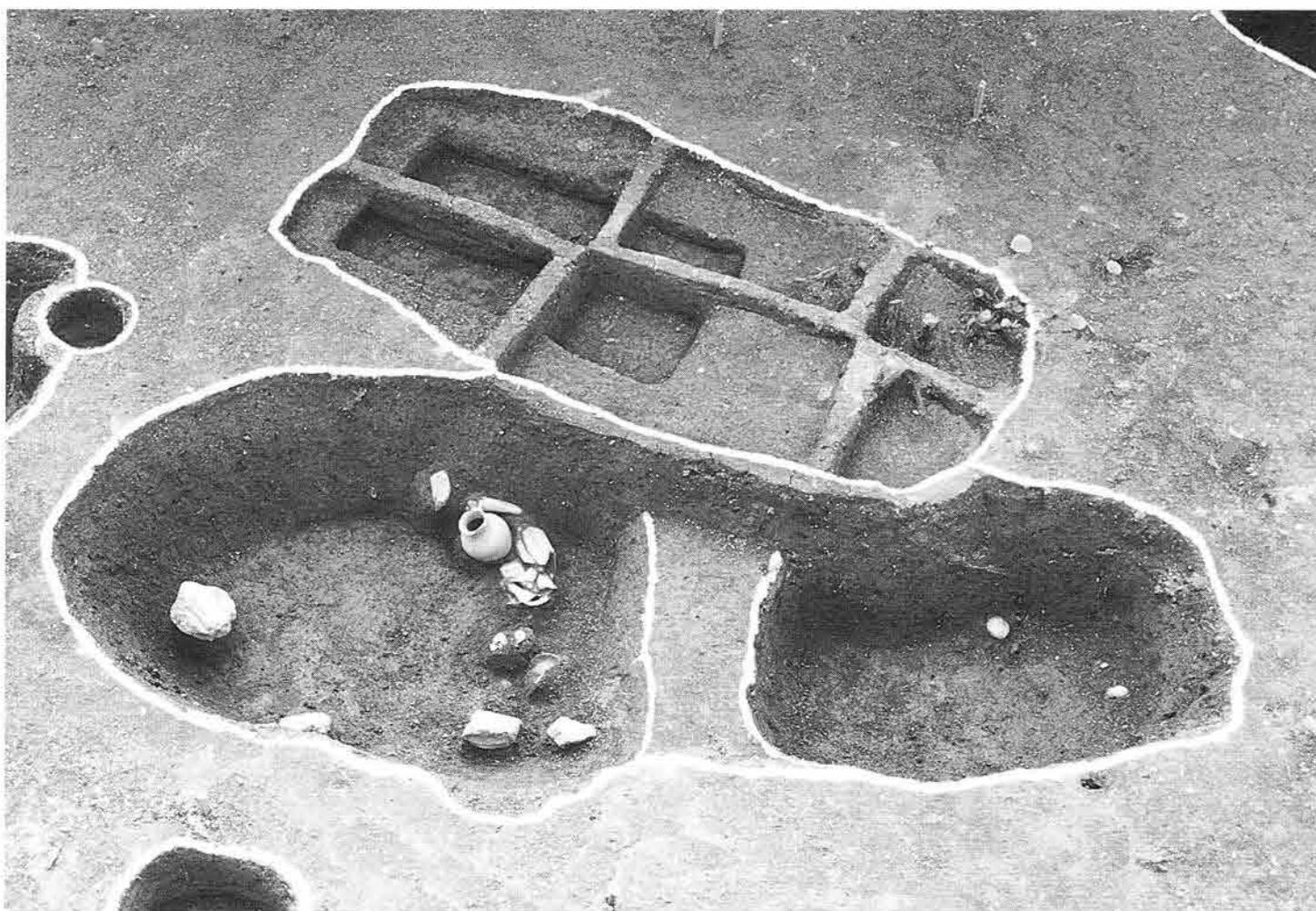


8



9

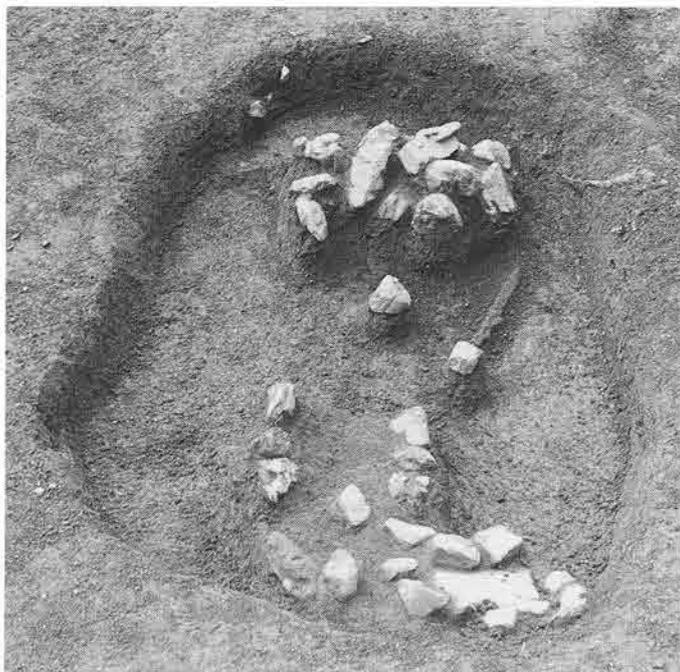
6～9：南からの連続写真



中世墓SK33・43・44 全景（東から）



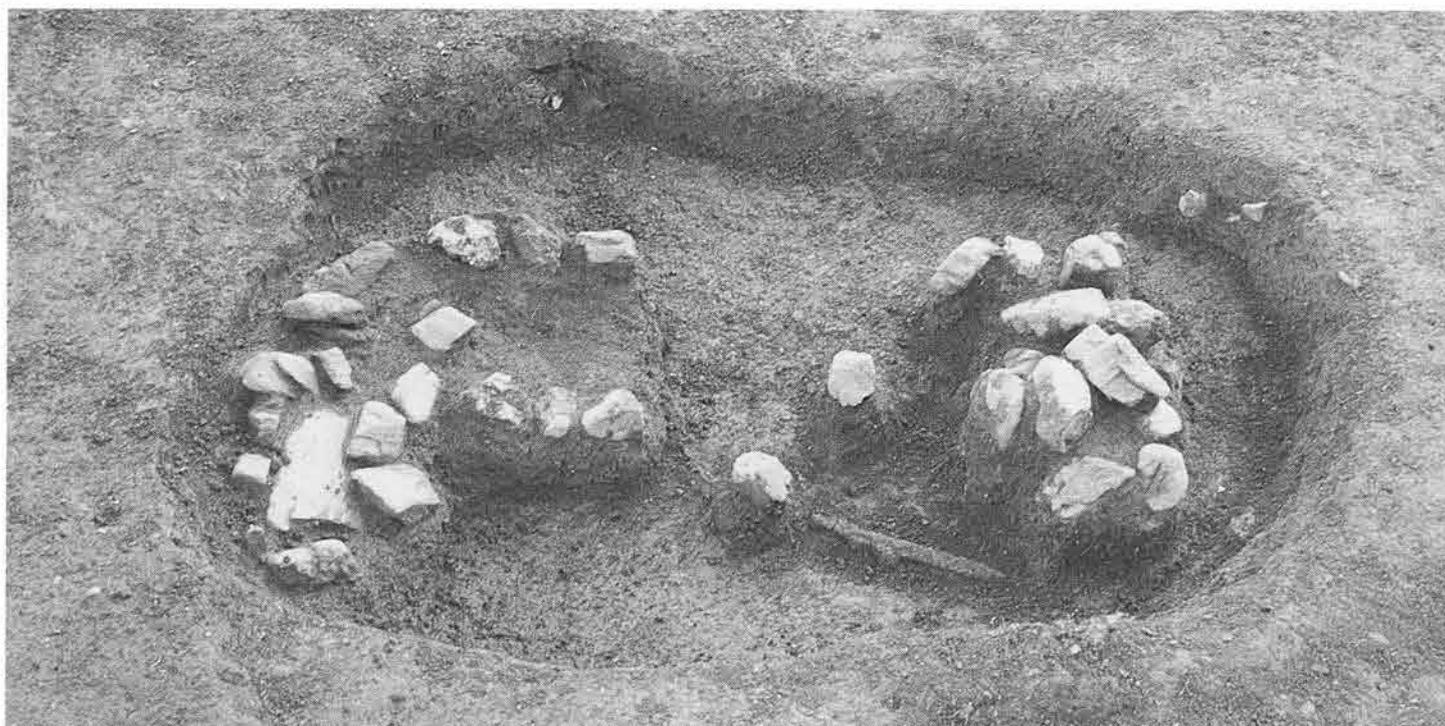
中世墓SK43 土器出土状況（東から）



礫群検出状況（南から）



小刀出土状況（南から）



礫群検出状況（東から）



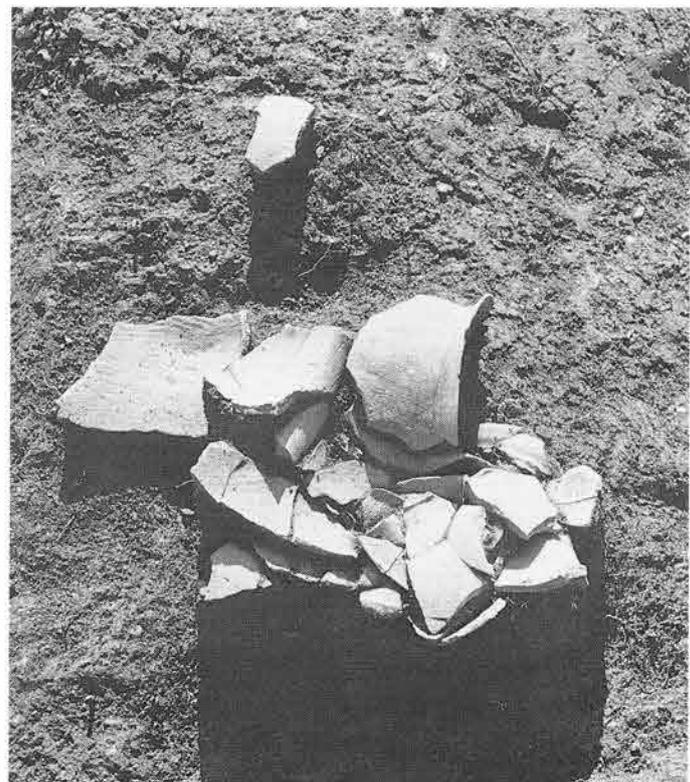
木棺痕跡検出状況（西から）



土坑SK2 (南から)



落ち込みSK1 土器・礫群出土状況 (南から)



土坑SK32 土器・礫群出土状況 (東から)



土坑SK31 土層 (南から)



井戸SK30 断ちわり状況 (東から)



遠景（西から）



近景（西から）



遠景（西から）



近景（西から）後方はB地区



西壁（南東から）



南壁（北東から）

PL. 32

C地区掘立柱建物1・2付近



南から



近景 (西から)



土坑SK11 (南から)



土坑SK8 (南から)



土坑SK4 土器・礫群出土状況（北から）



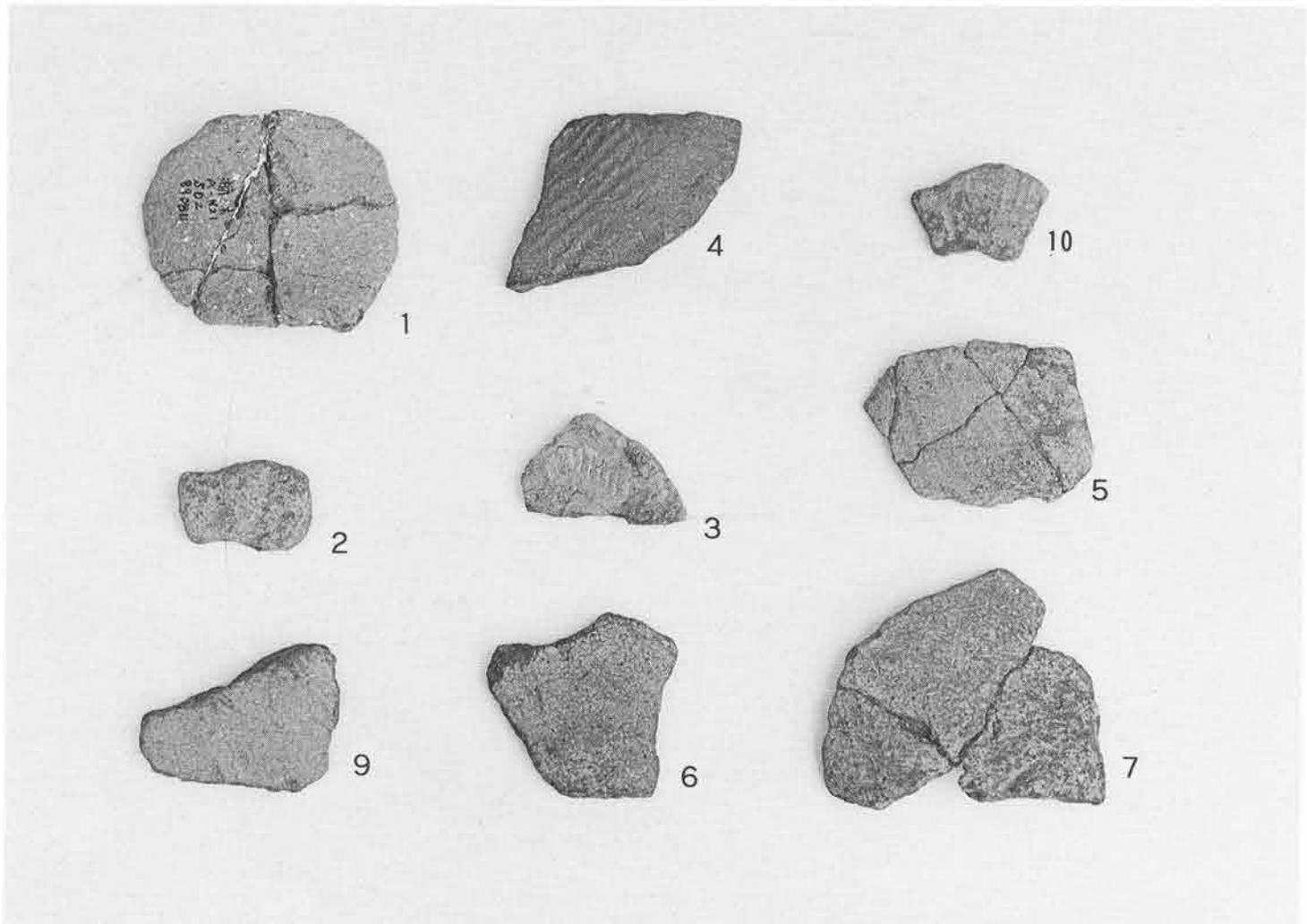
土坑SK13 土器出土状況（北西から）



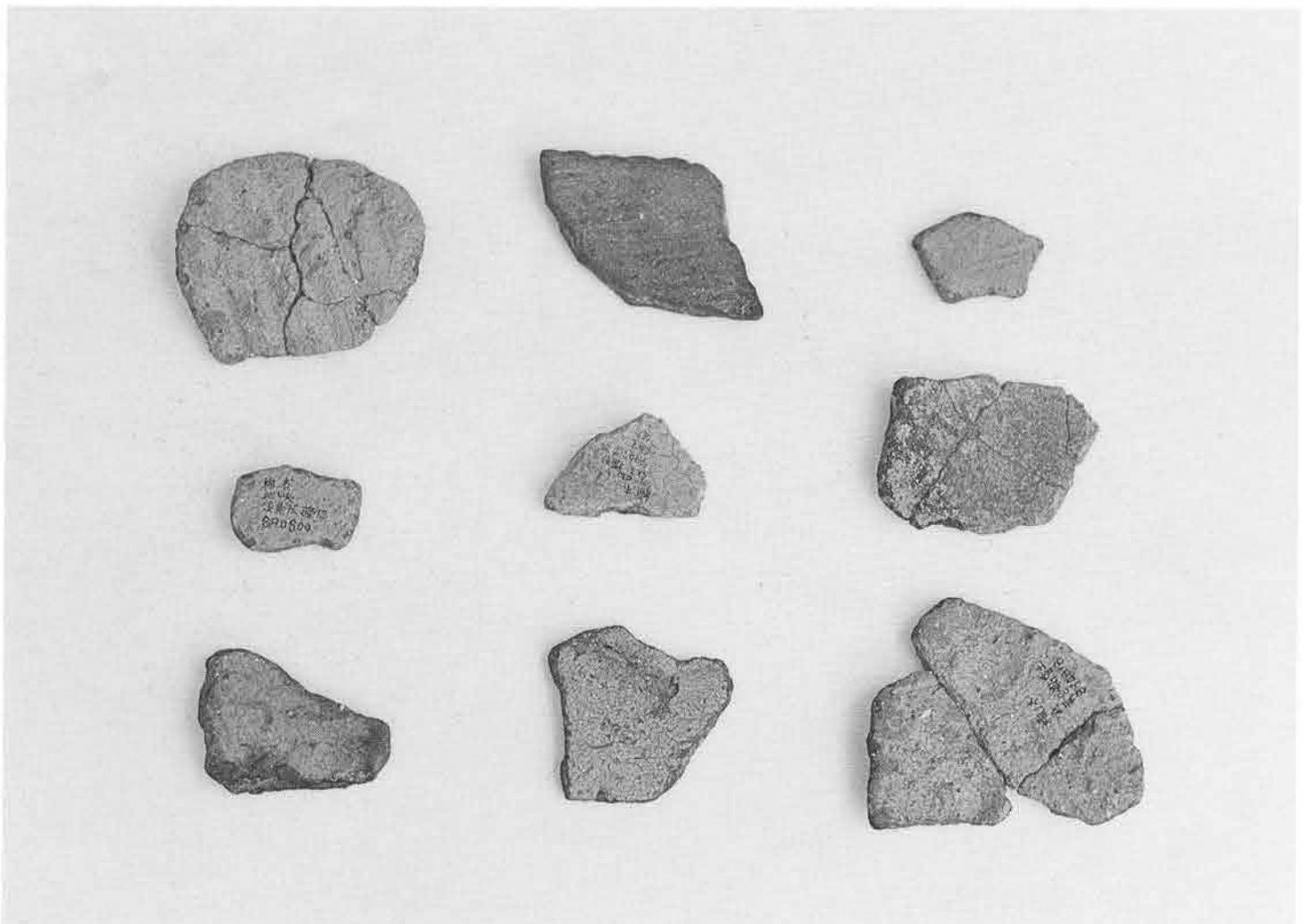
井戸SK7 土層（北から）



溝SD5（南から）



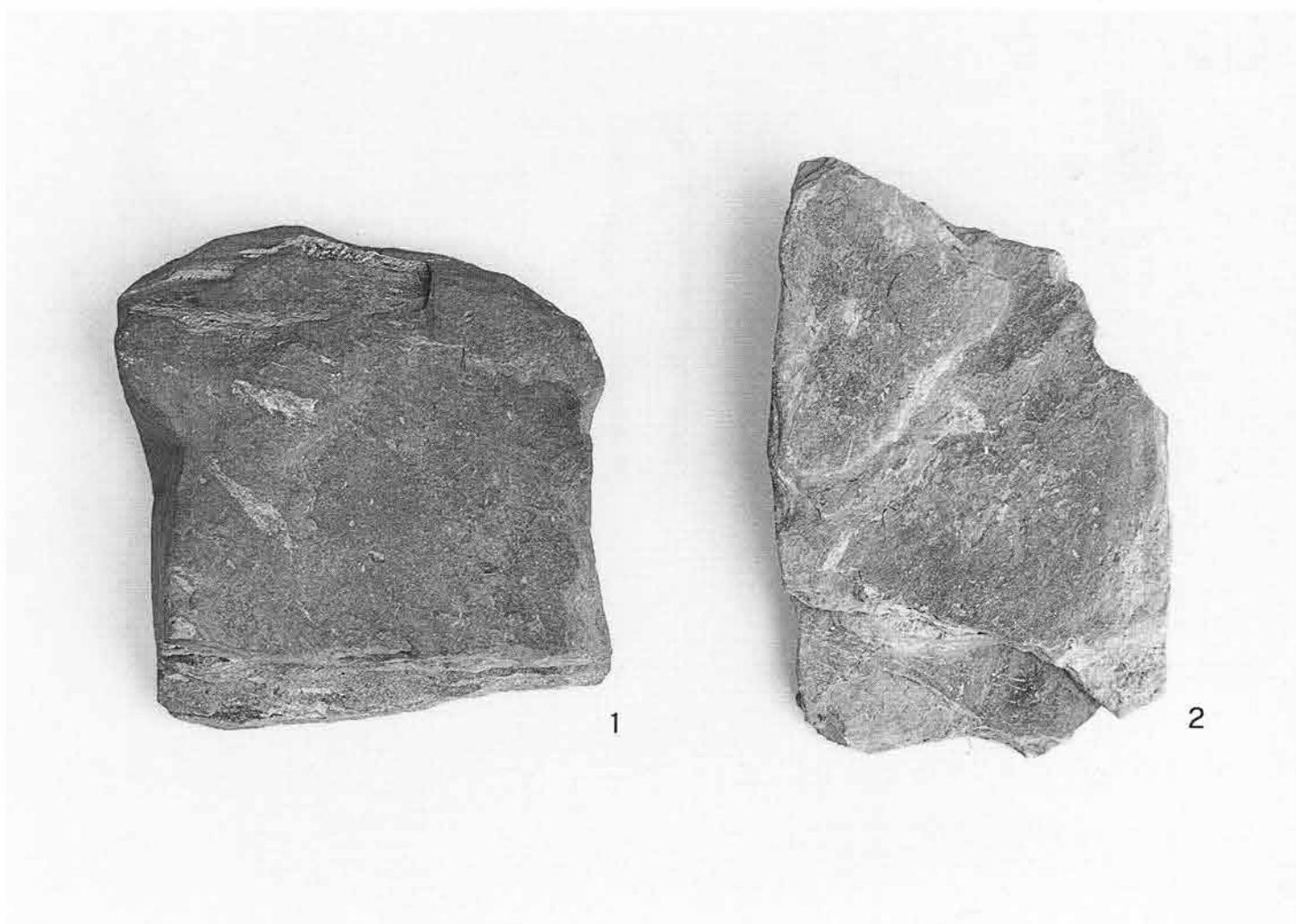
外面 (fig. 48)



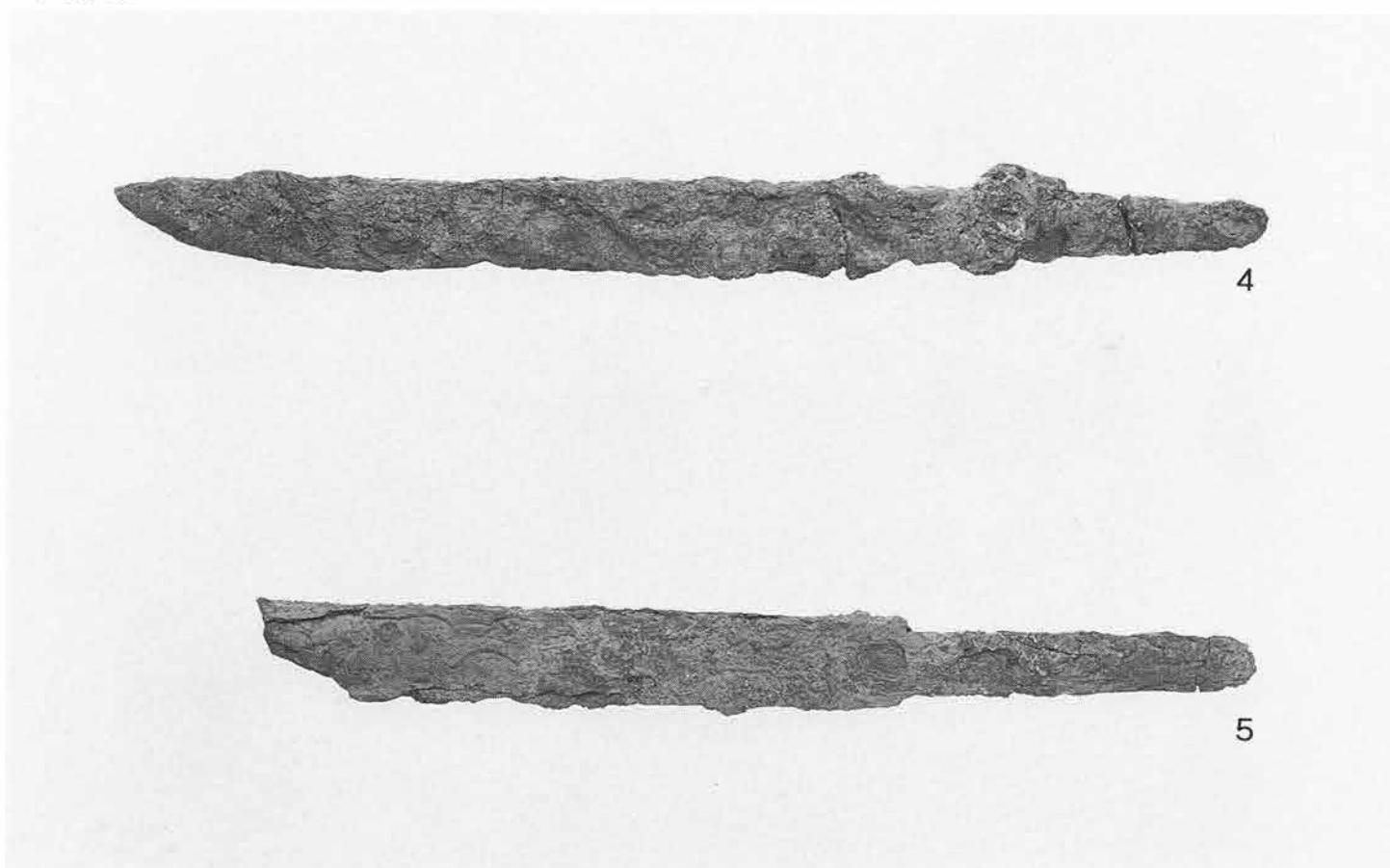
内面



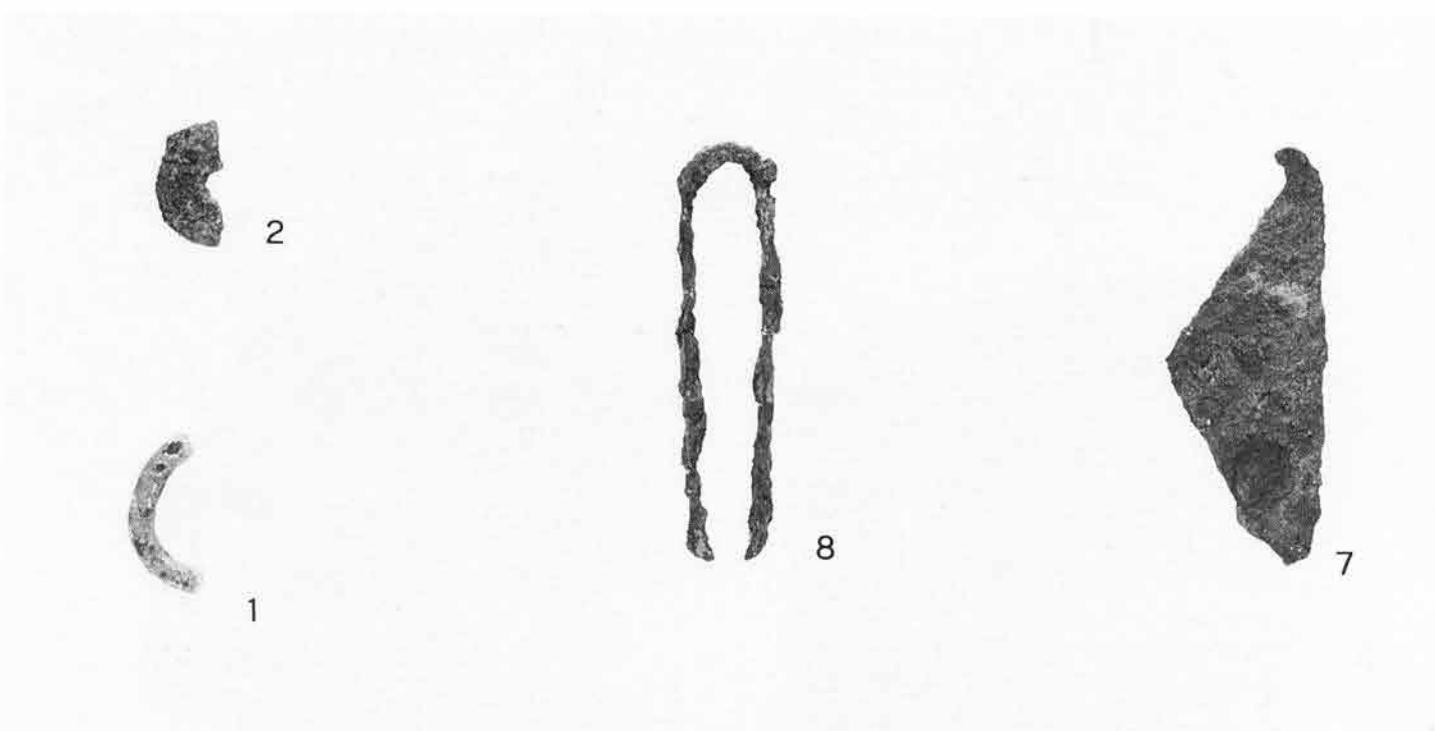
石器 (fig. 48)



出土根石 1 : C c 6 pit 4 (C地区建物2) 2 : A b 15 pit 4



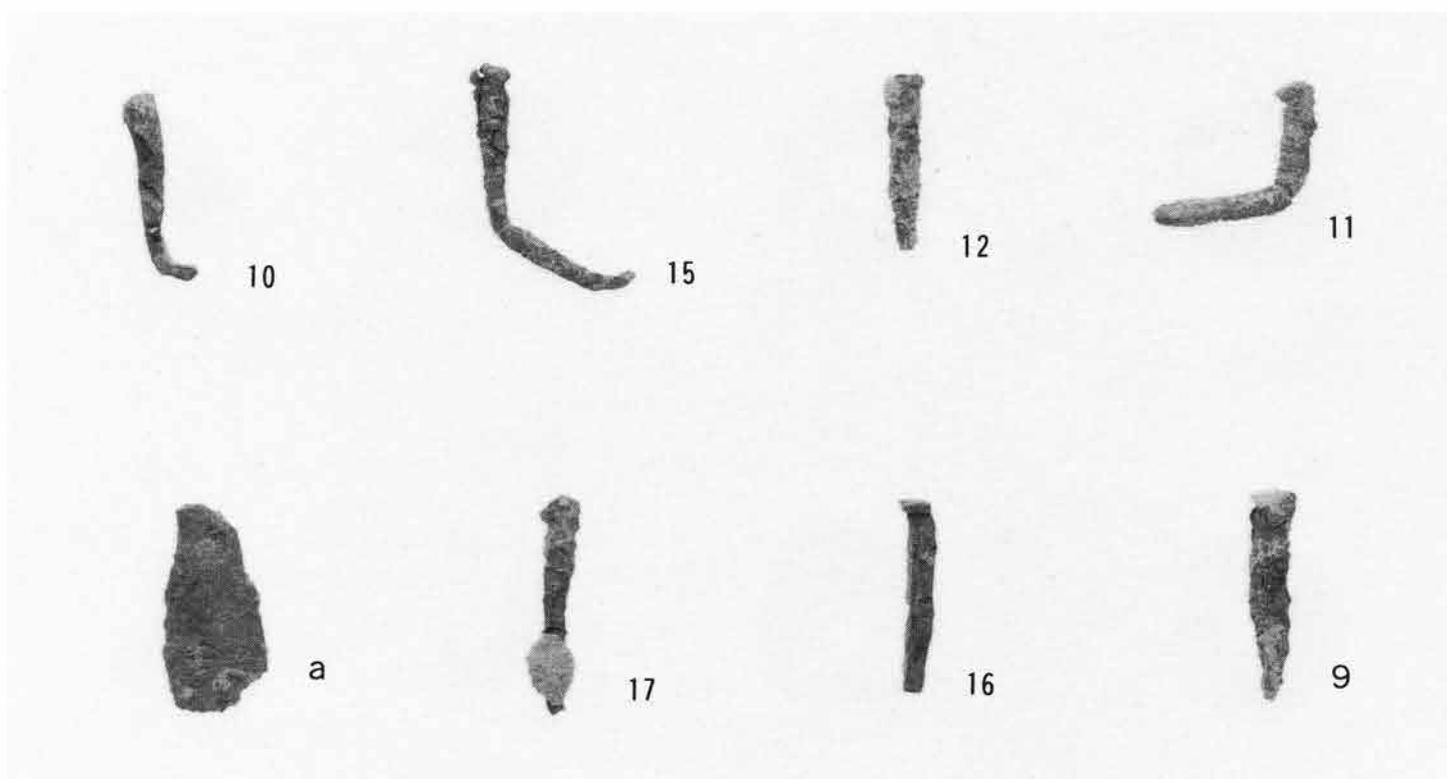
小刀 (fig. 49)



不明鉄・銅製品・毛抜き・火打ち鎌 (fig. 49)

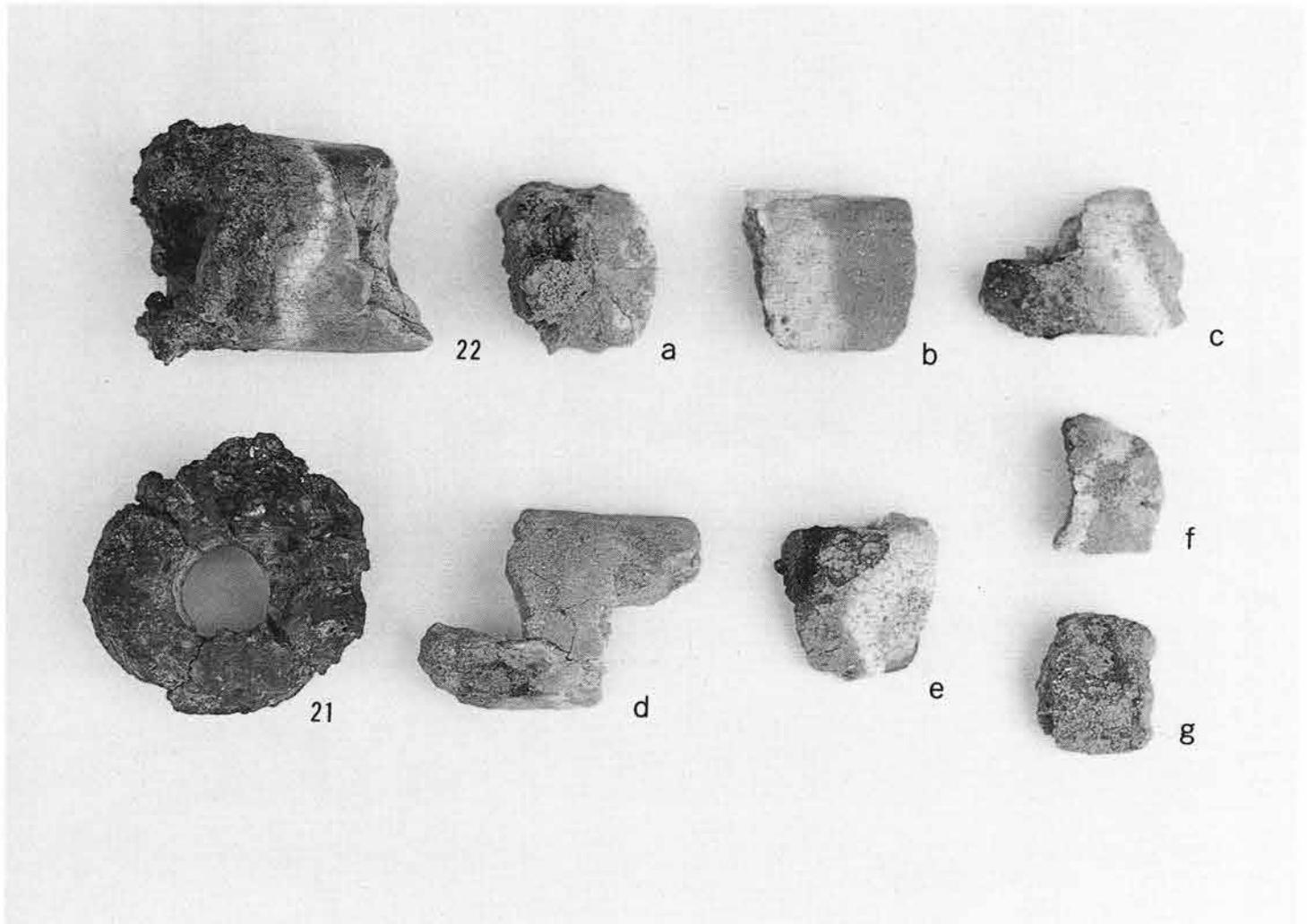


鎌 (fig. 49)

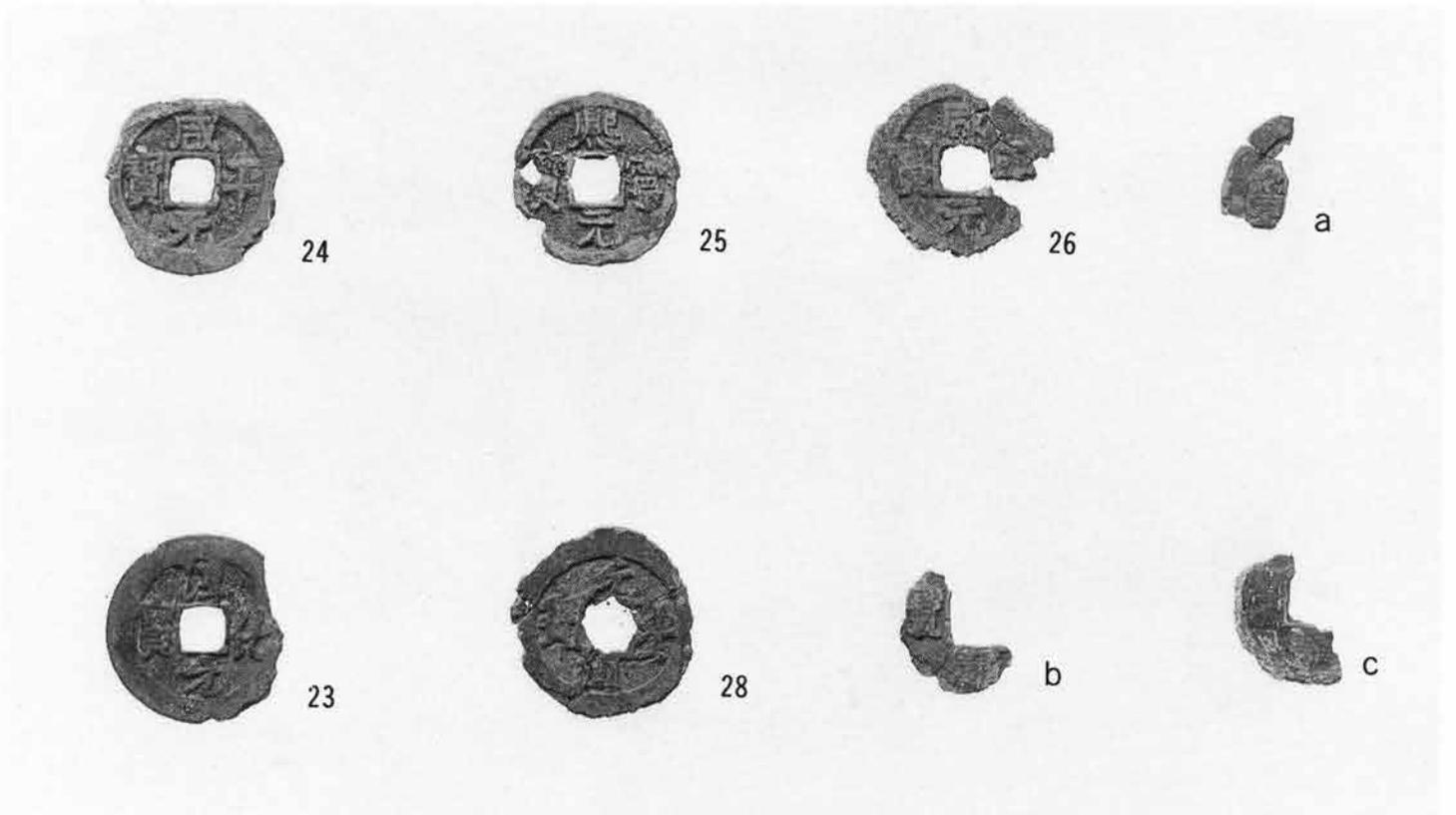


釘・不明鉄製品 (fig. 49)

a : B地区中世墓S K25



輔の羽口 (fig. 49) a : ASE 2, b : Ae22 pit 5, c : ASX 7, d ~ e : ASK36, f : ASK43, g : ASK55



貨幣 (fig. 49) a ~ c : ASK49



fig.48-20

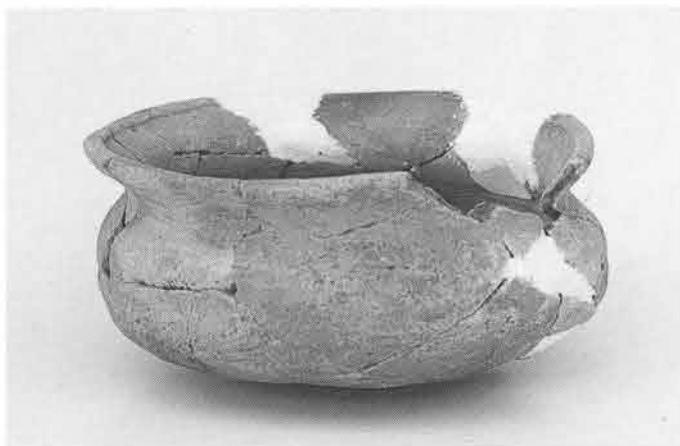


fig.60-11



fig.48-19



fig.53-21

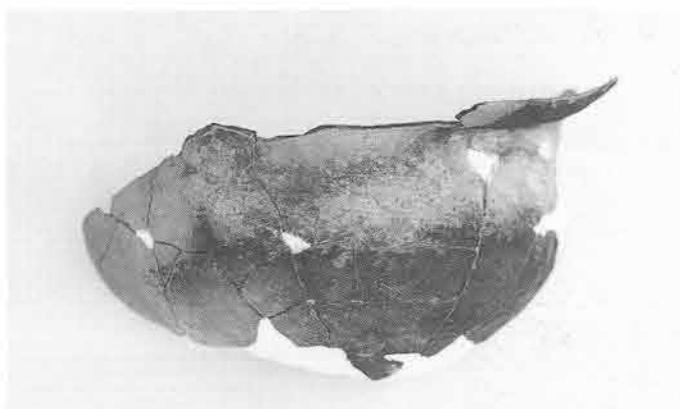


fig.65-1



fig.64-32



fig.65-7



fig.62-1



fig.56-21



fig.52-37



fig.56-22

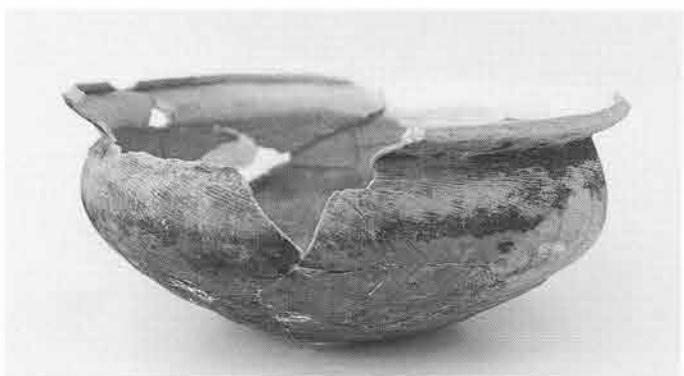


fig.63-3



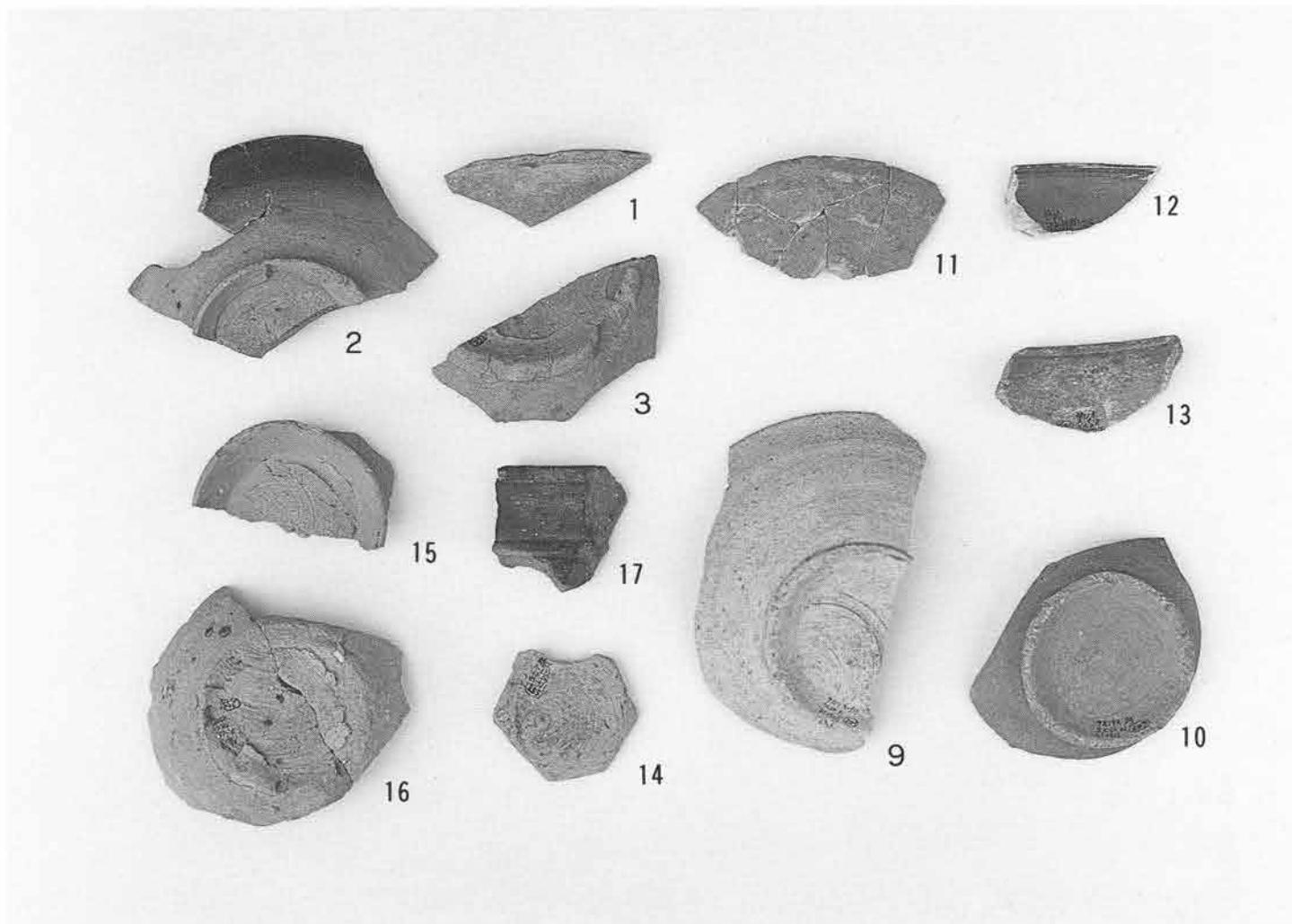
fig.53-11



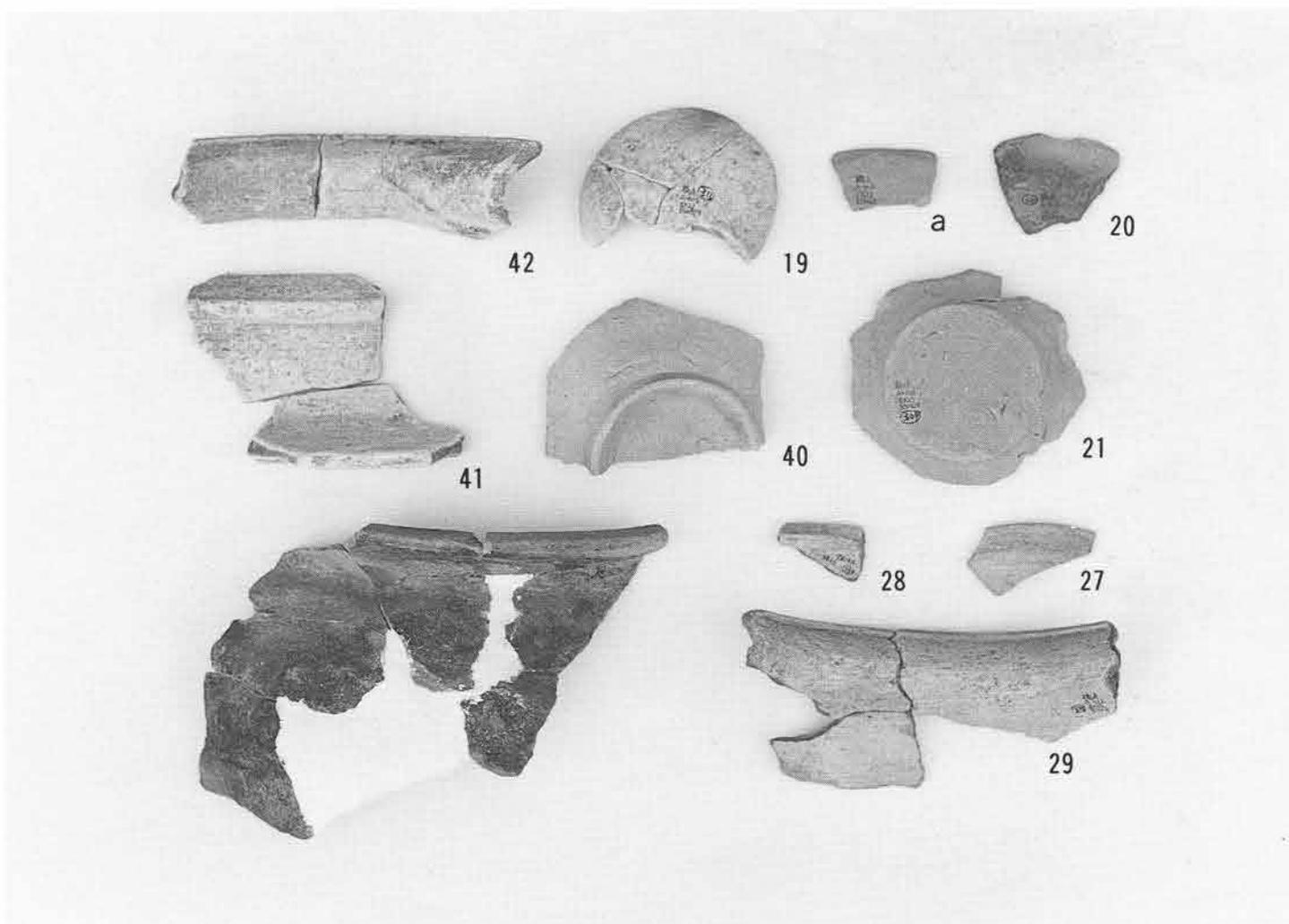
fig.52-35



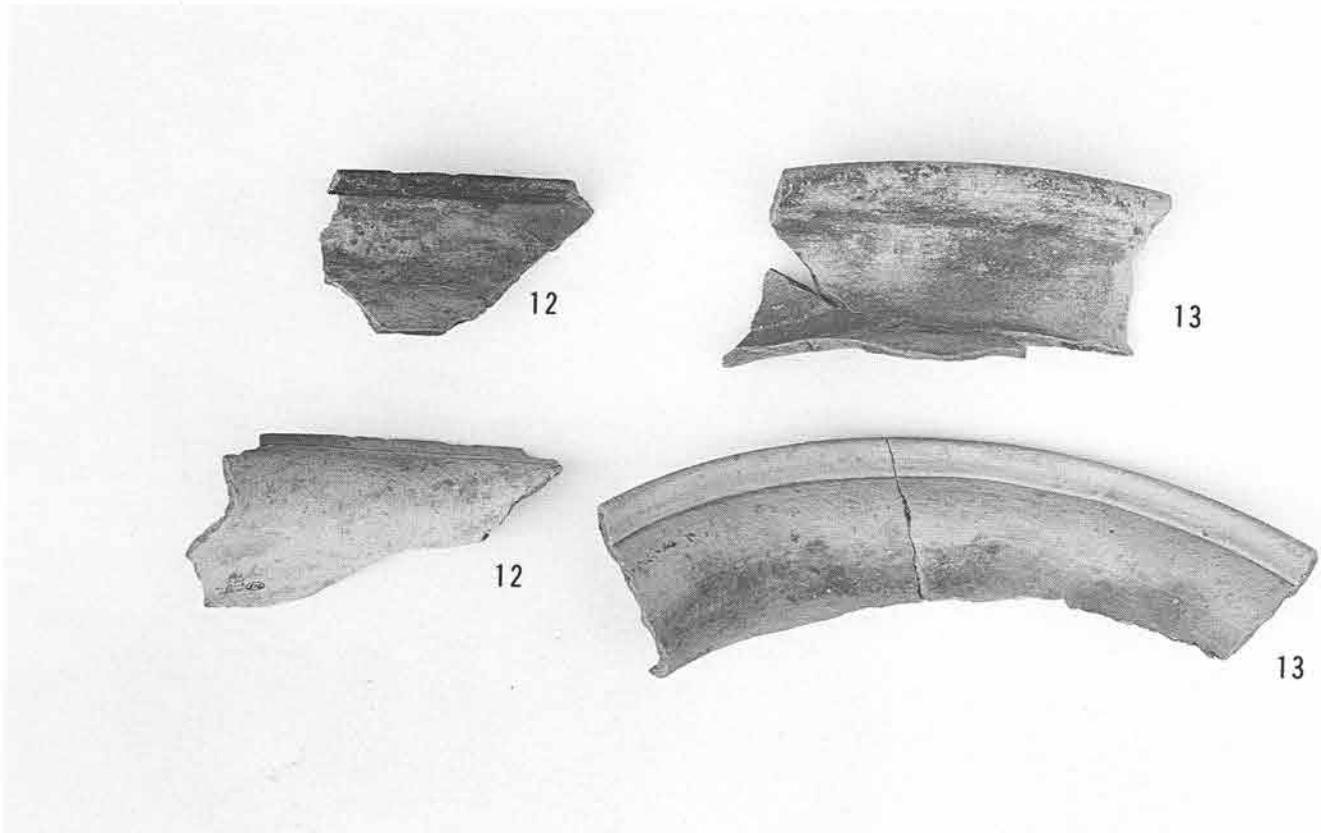
fig.58-38



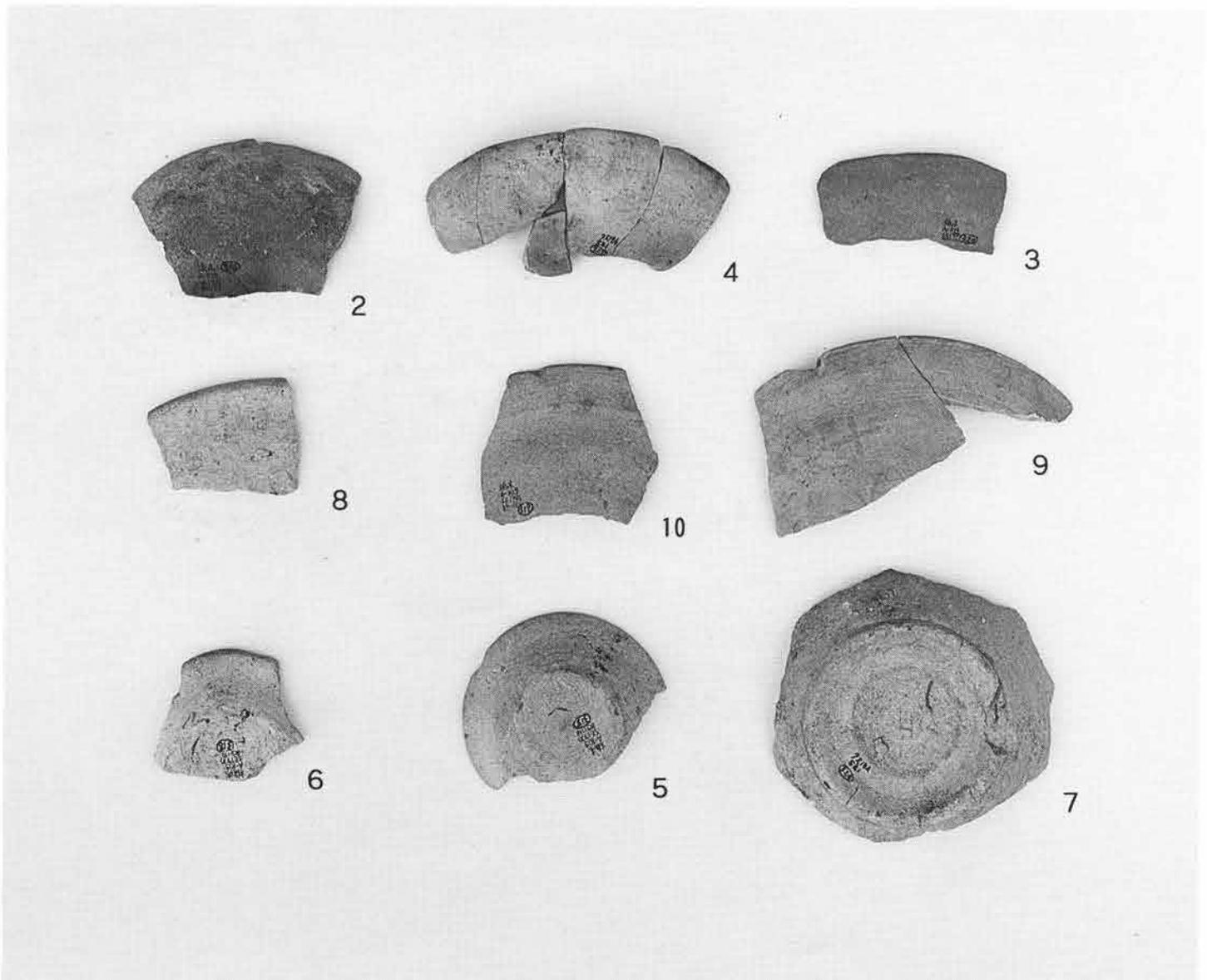
A SK40 · 20 · 45 (fig.52)



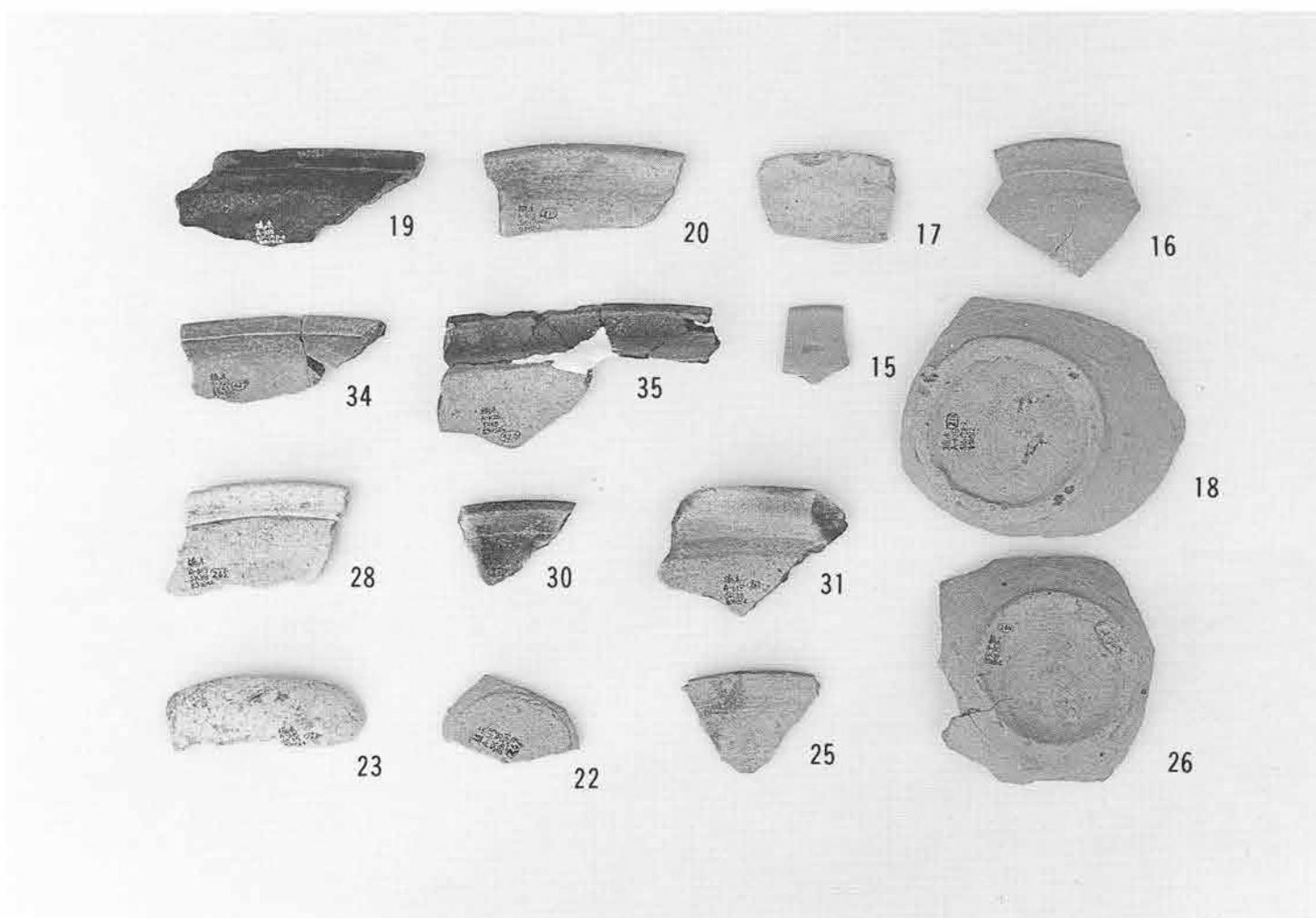
A SX 5 · SX23 · 65 · 28 (fig.52) a : SK23



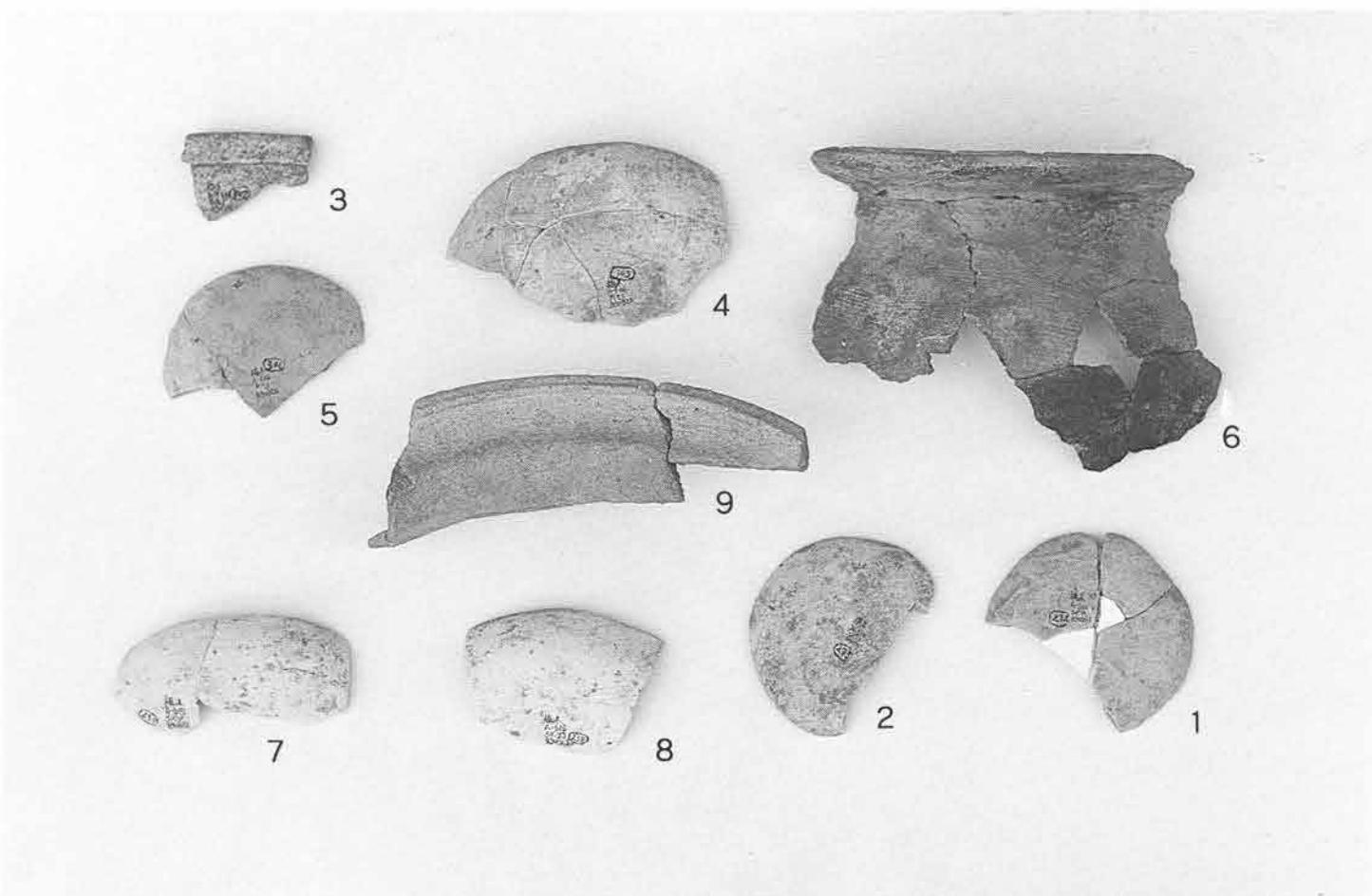
A SE 1 (fig.53)



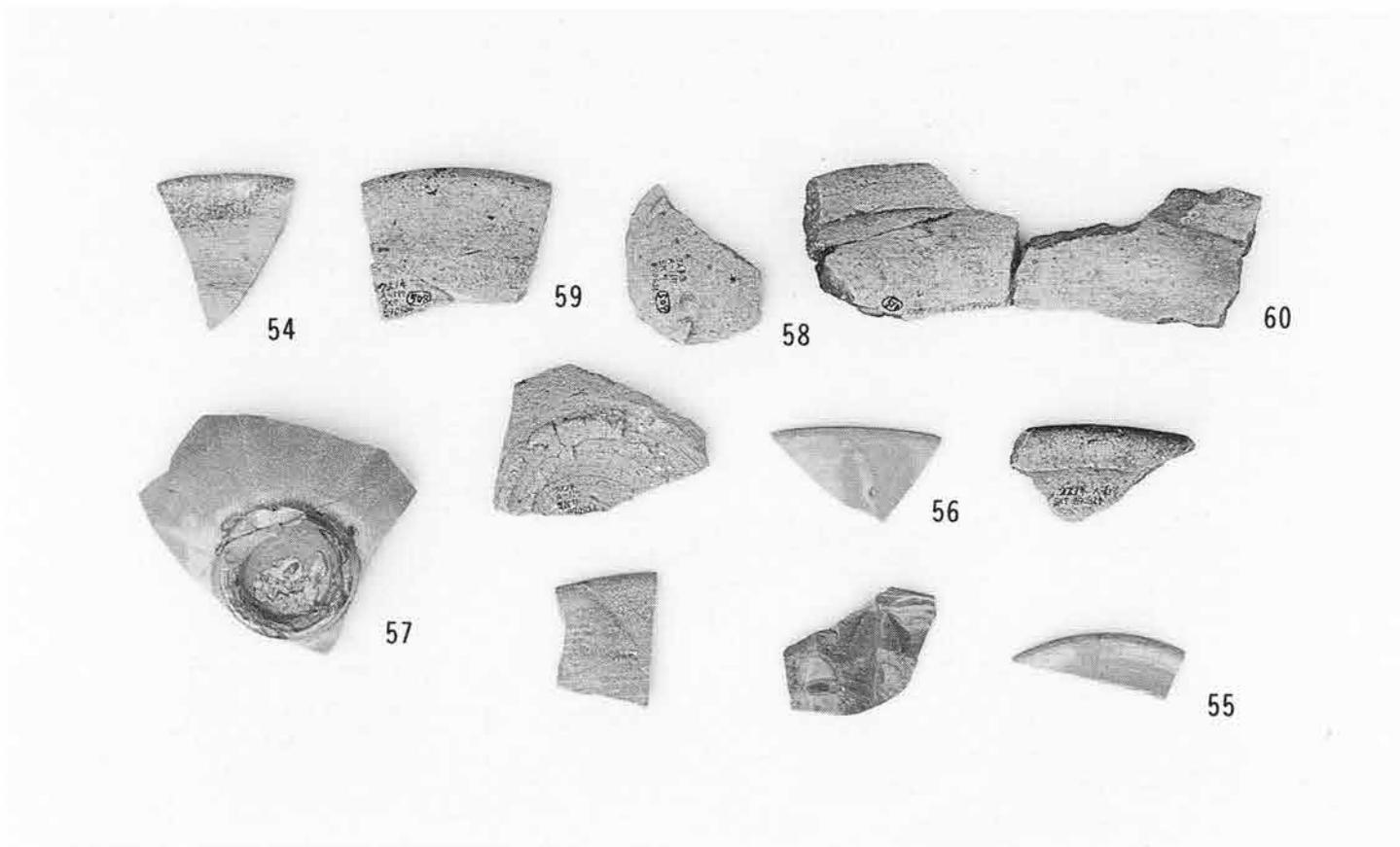
A SE 1 (fig.53)



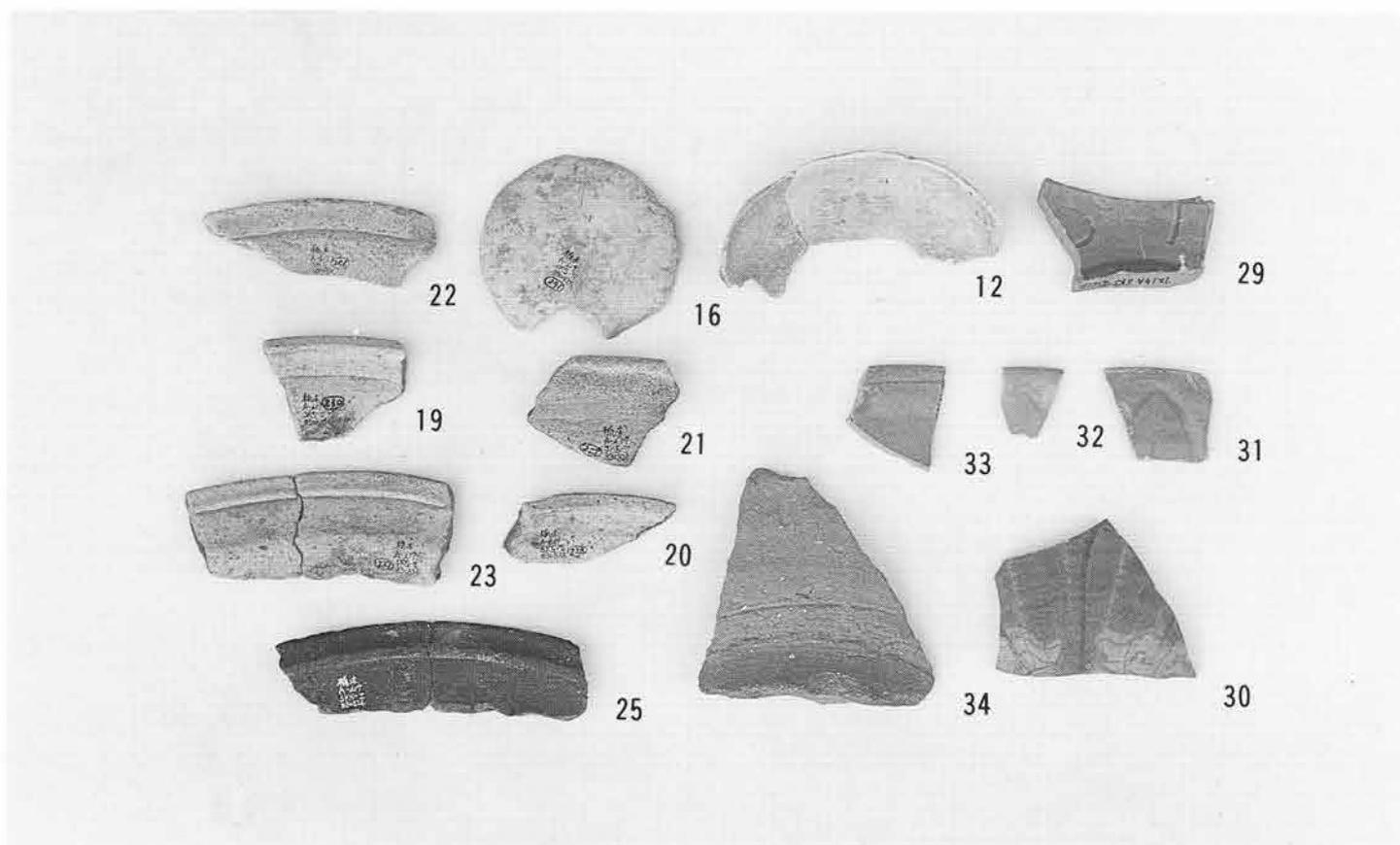
A SK17・38・49 (fig.53)



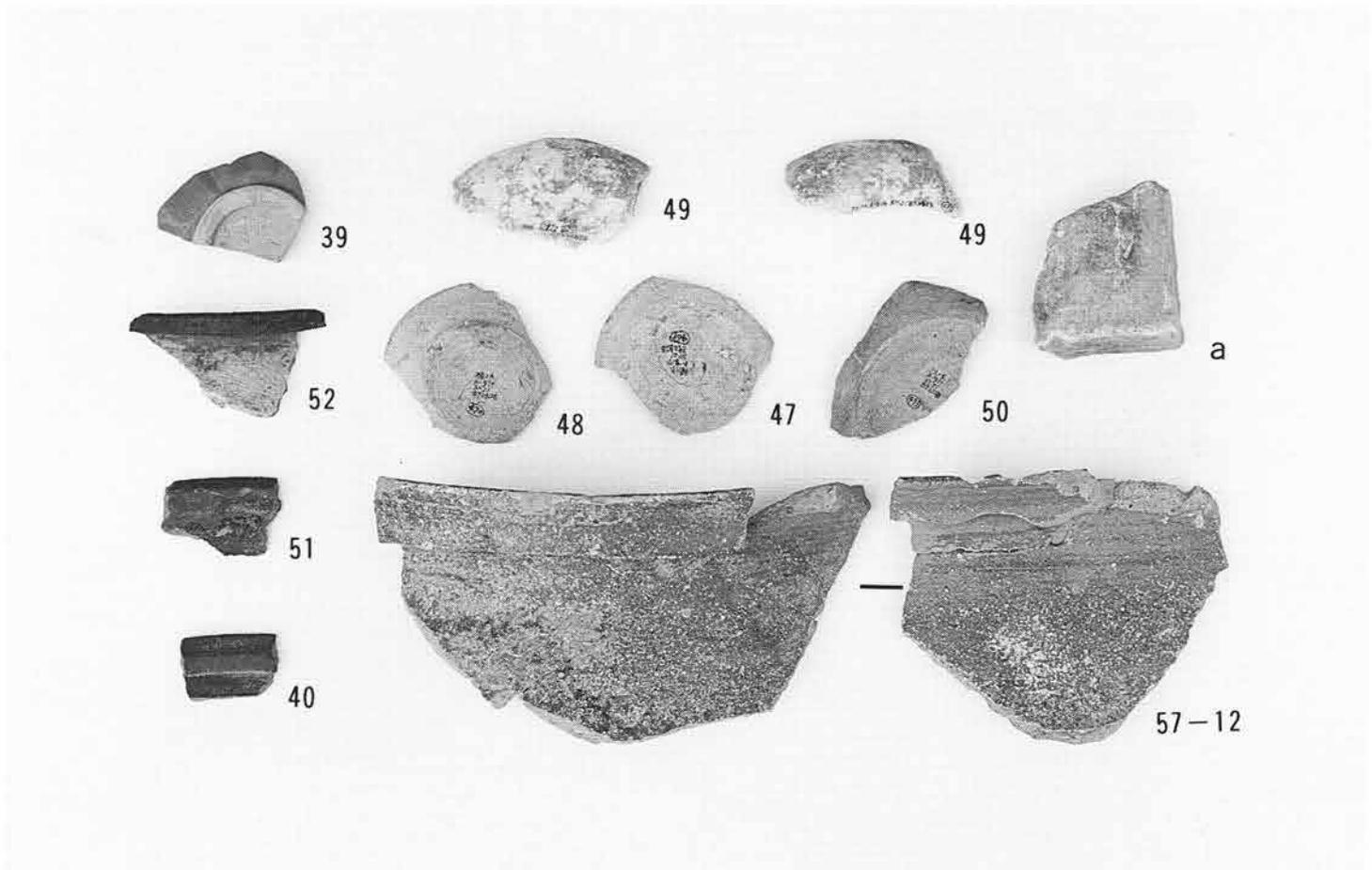
A SK33, f 24 pit 1, SK39 (fig.54)



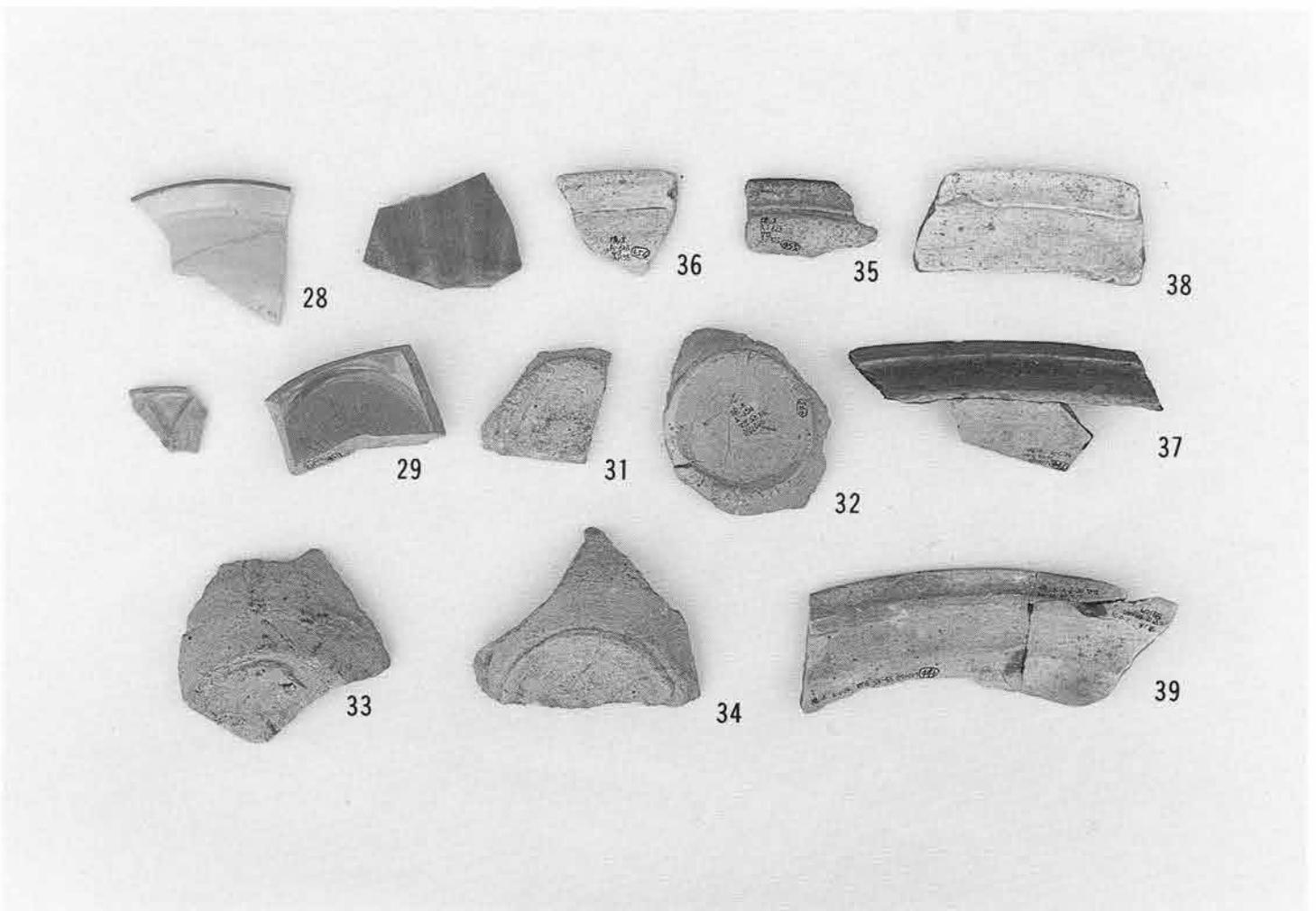
A SK 7 (fig.54)



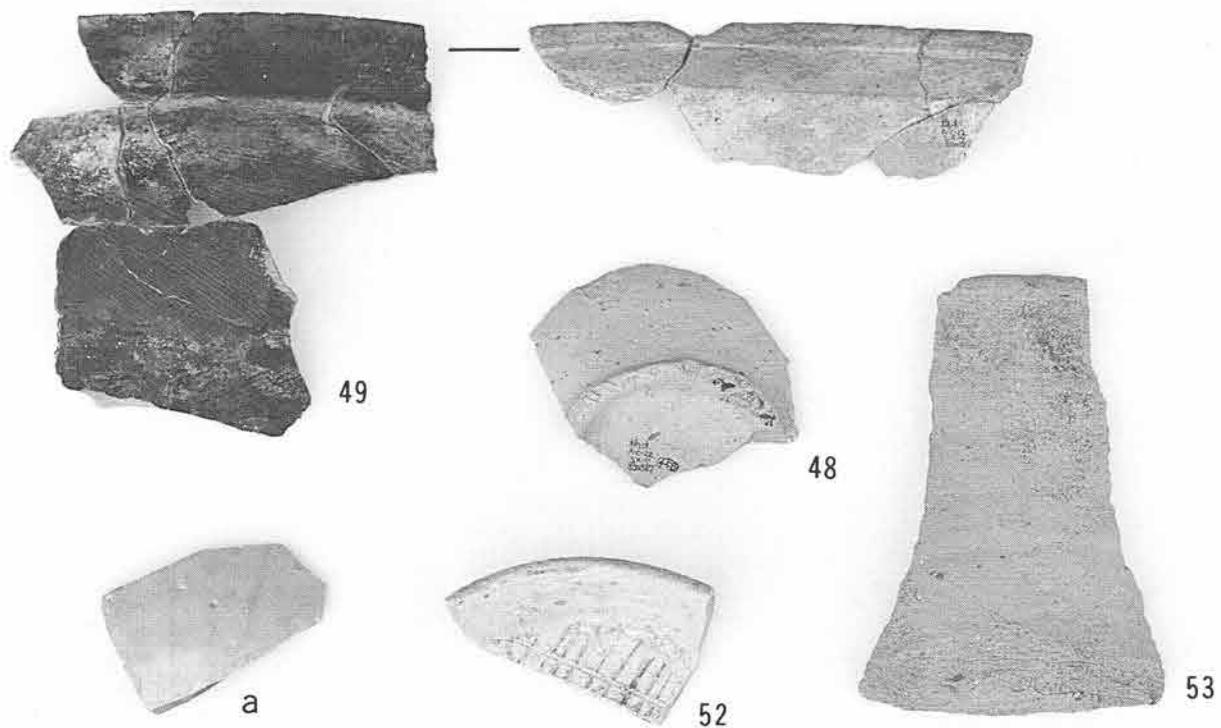
A SK 5 (fig.54)



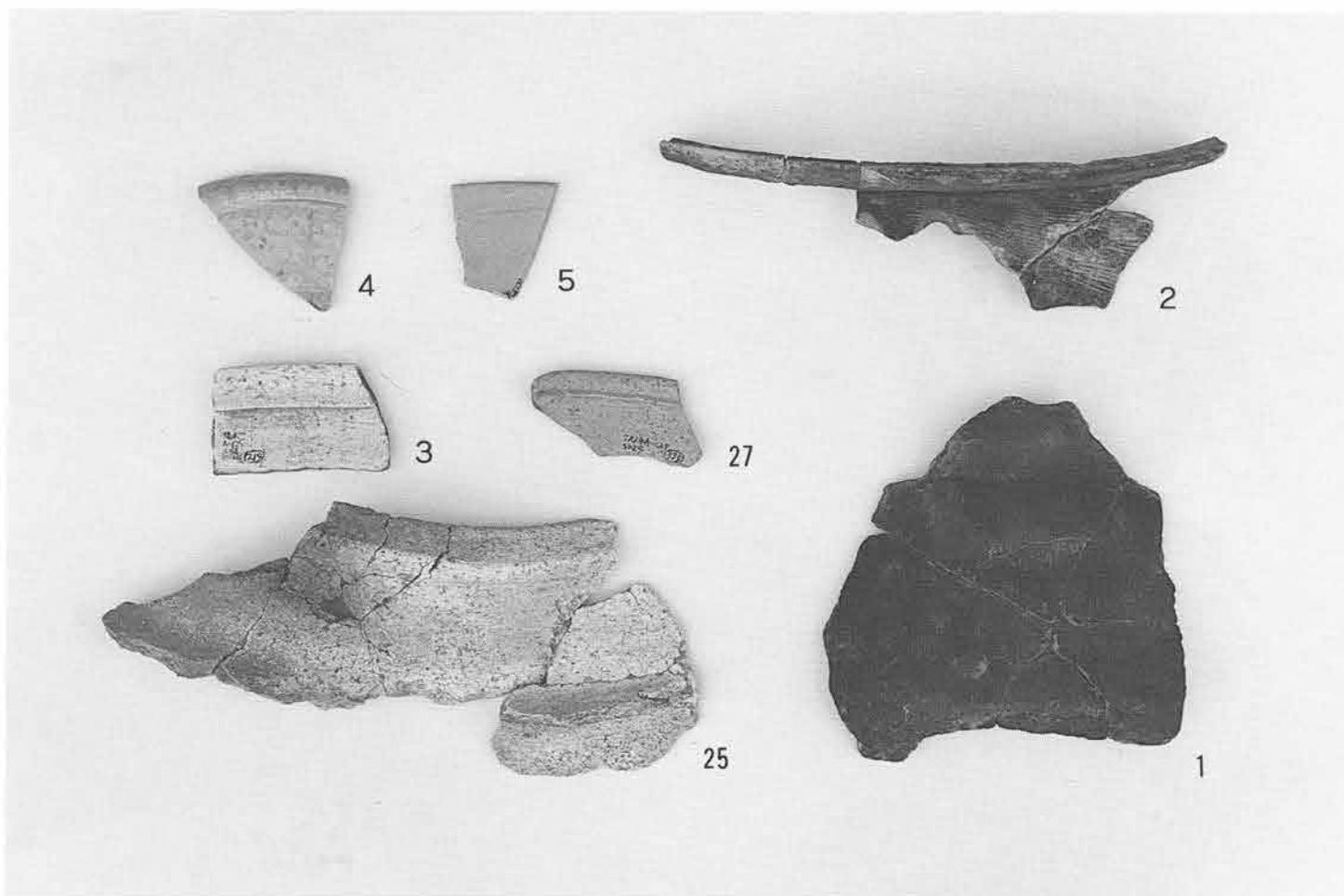
A SK21・27 (fig.54) a : SK21出土平瓦



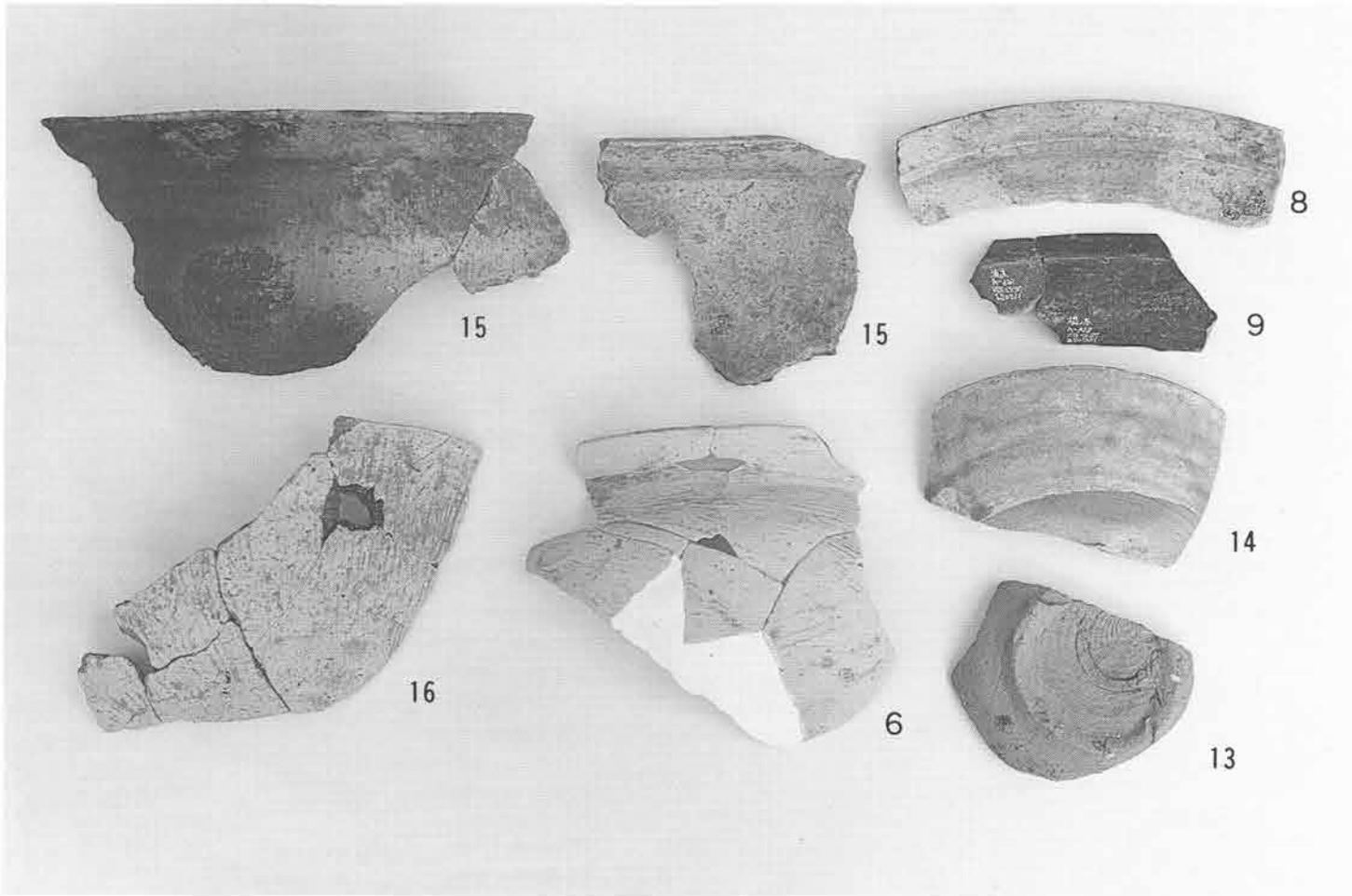
A SK55 (fig.55)



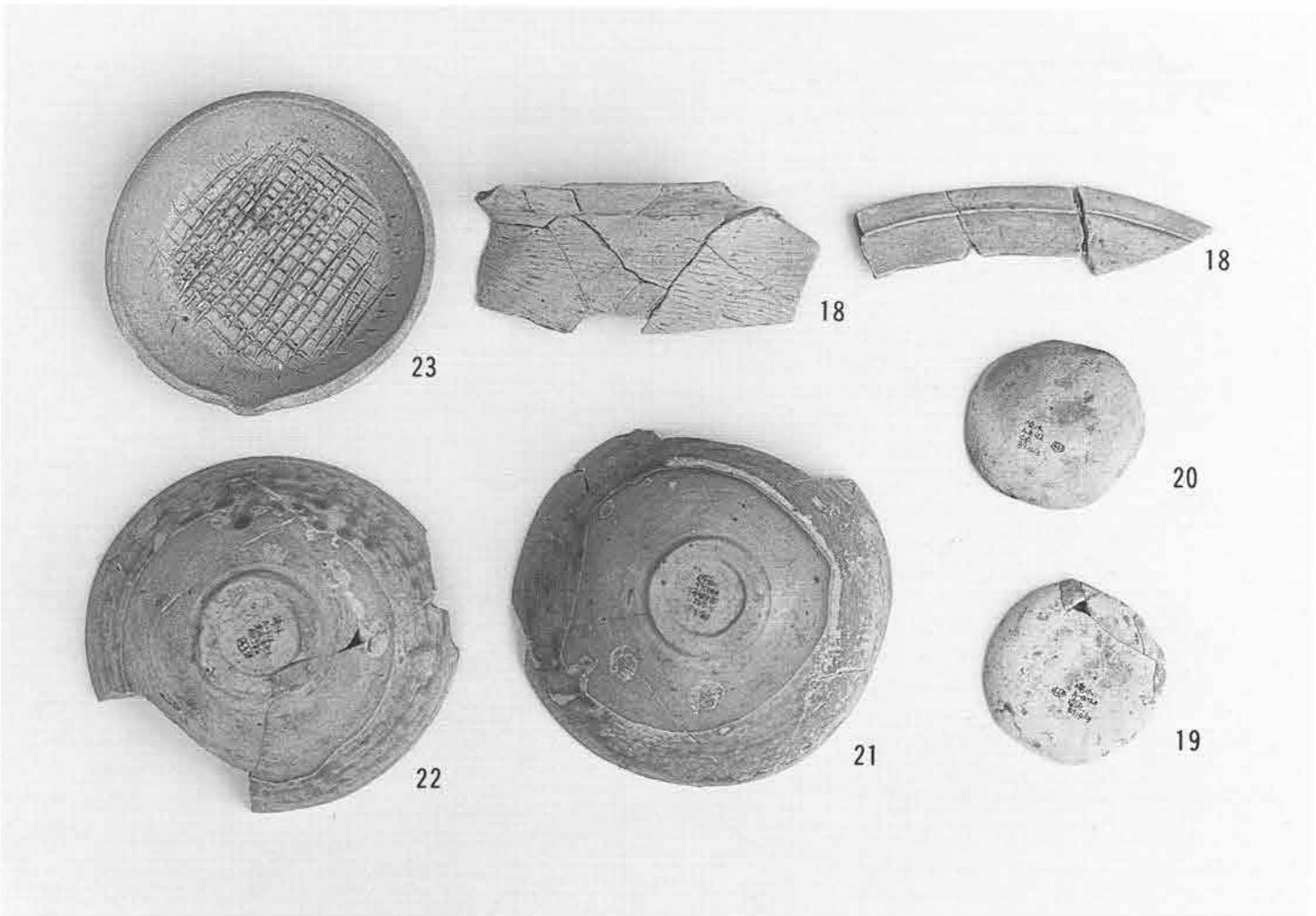
A SX 7, SK56・18 (fig.55) a : SK56出土青磁



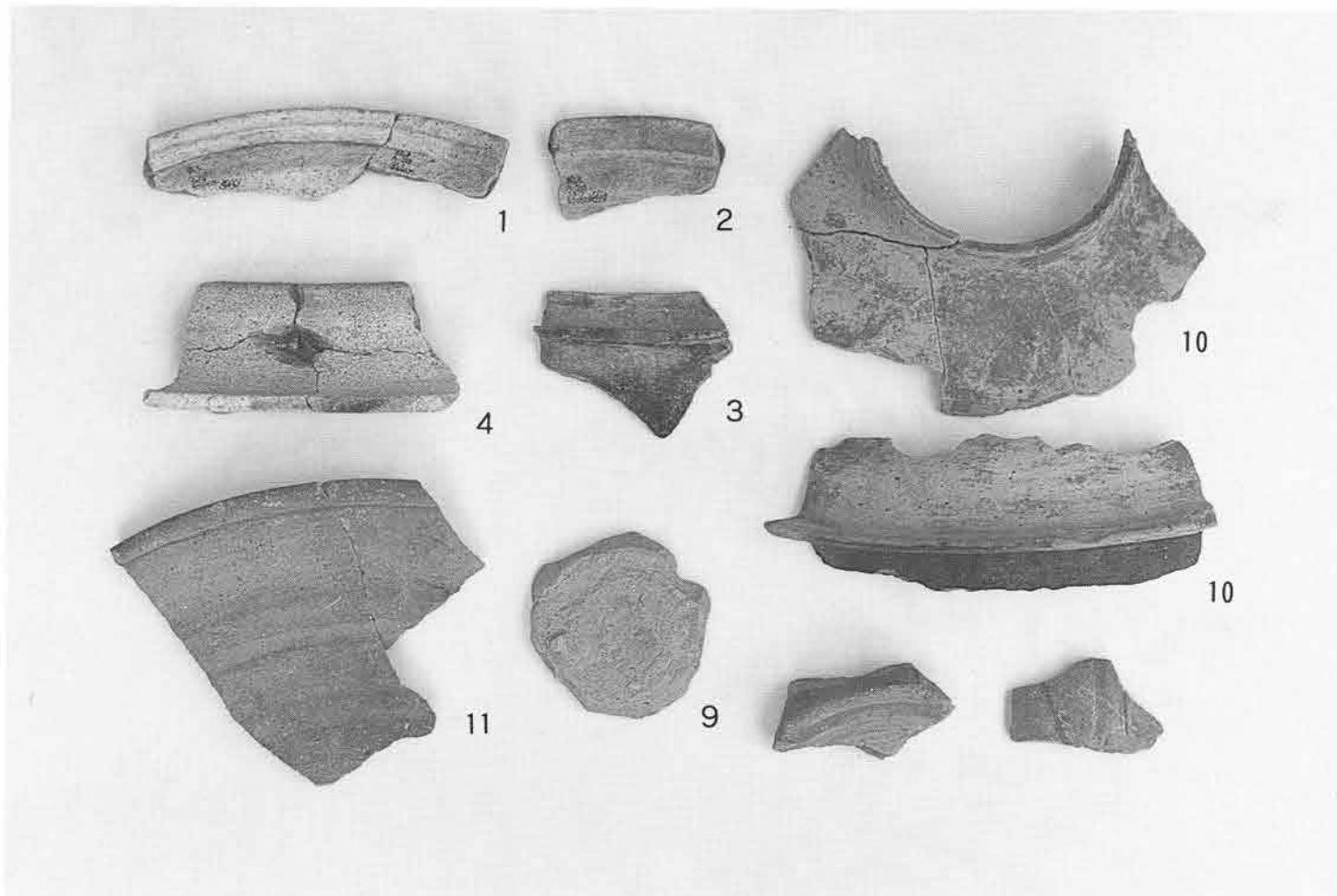
A SX 9・SD24 (fig.56)



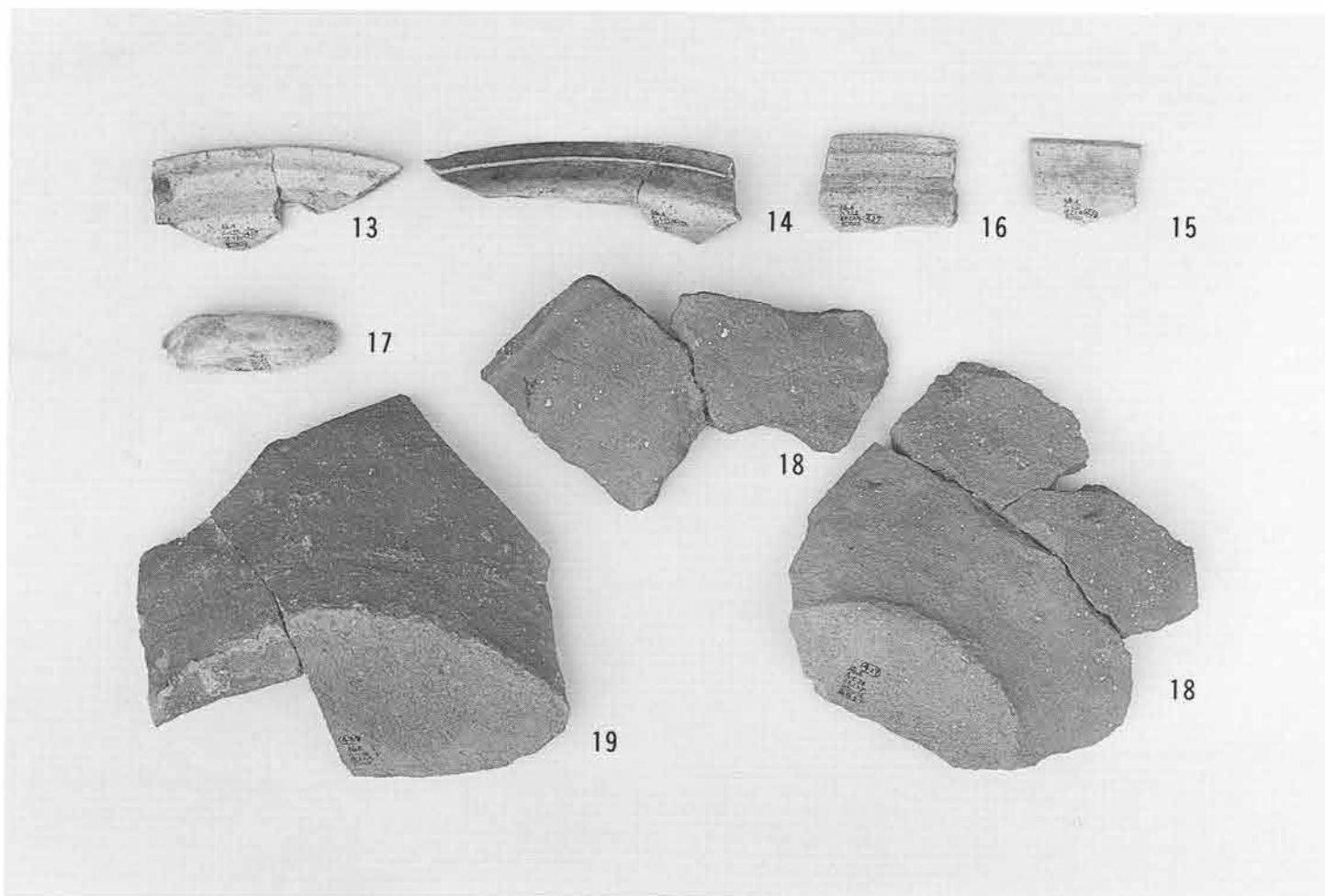
A SK37 (fig.56)



A SK61付近 (濁赤褐色土) (fig.56)



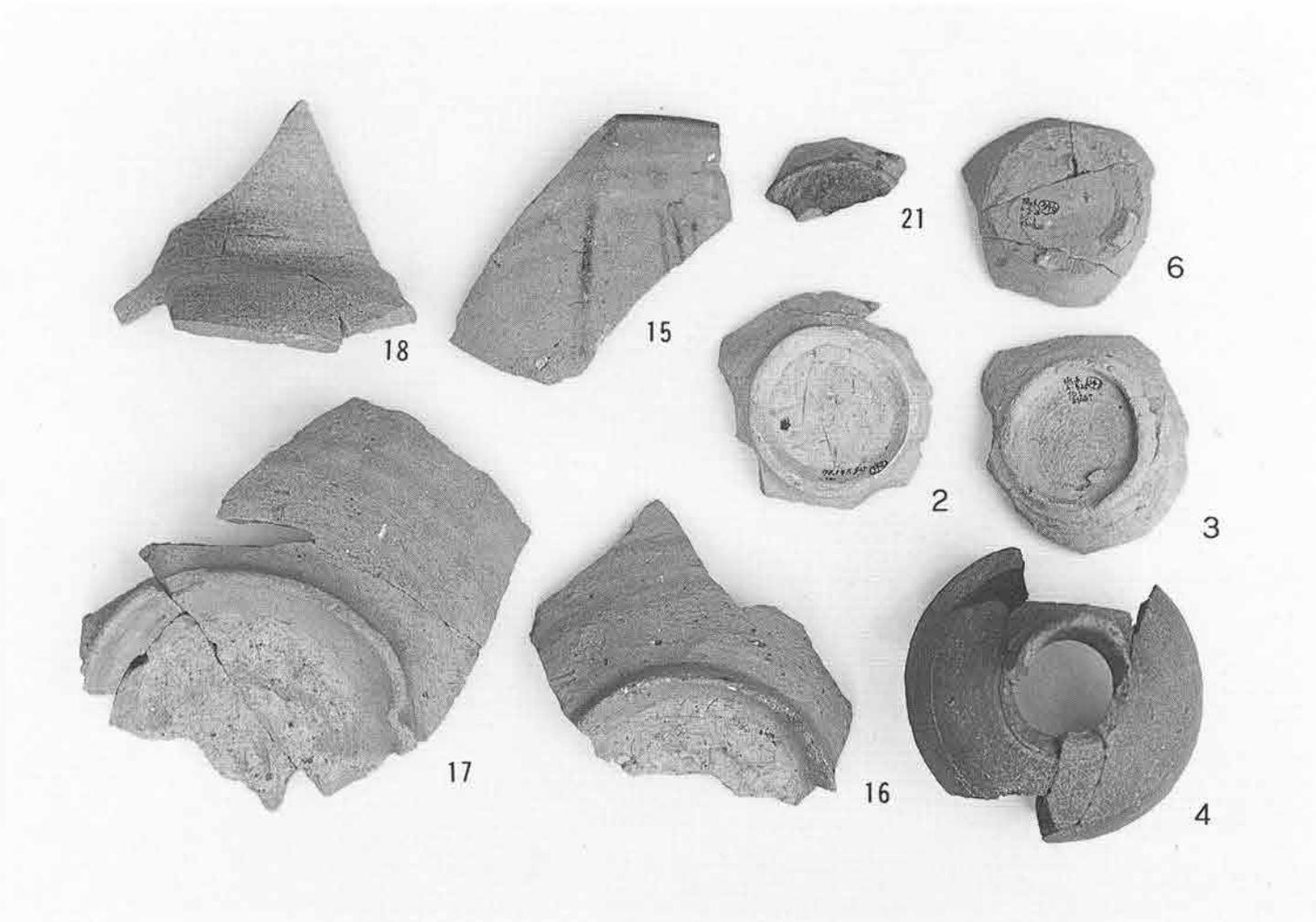
A SK 3 (fig.57)



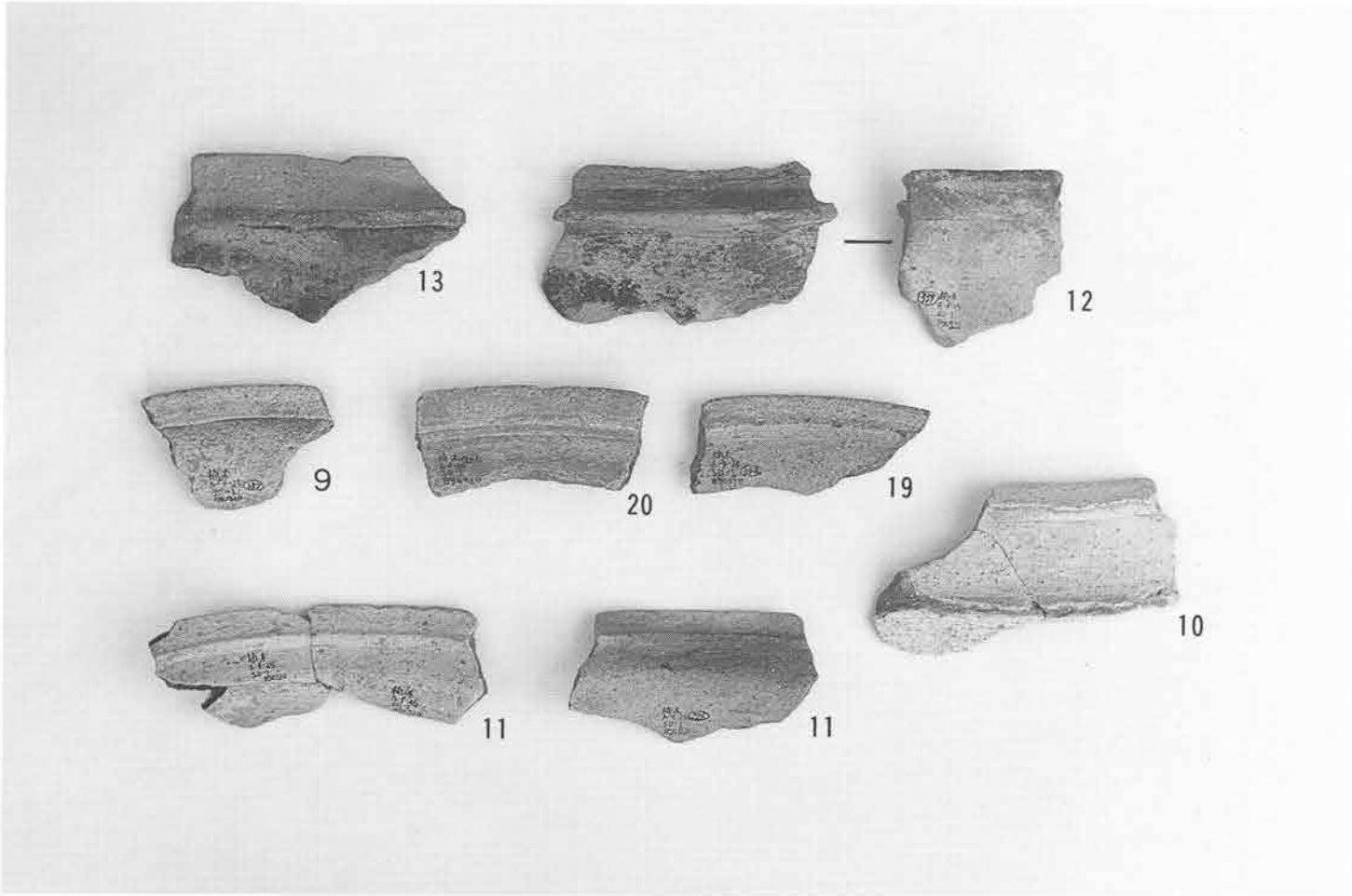
A SE 2 (fig.57)



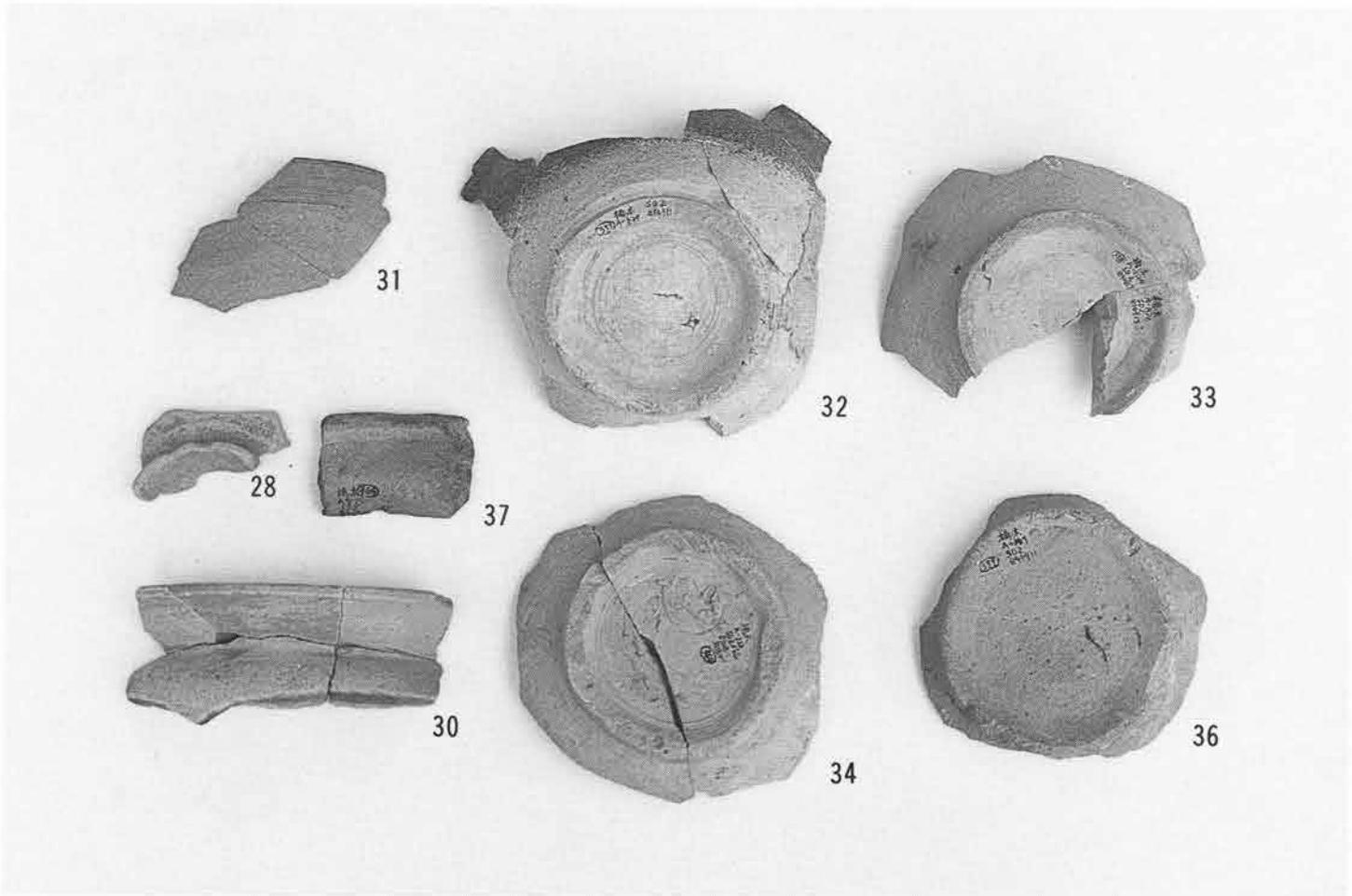
遺構間接合資料 A SD1・SK44・58・37・3・26・4, SX3 (fig.57)



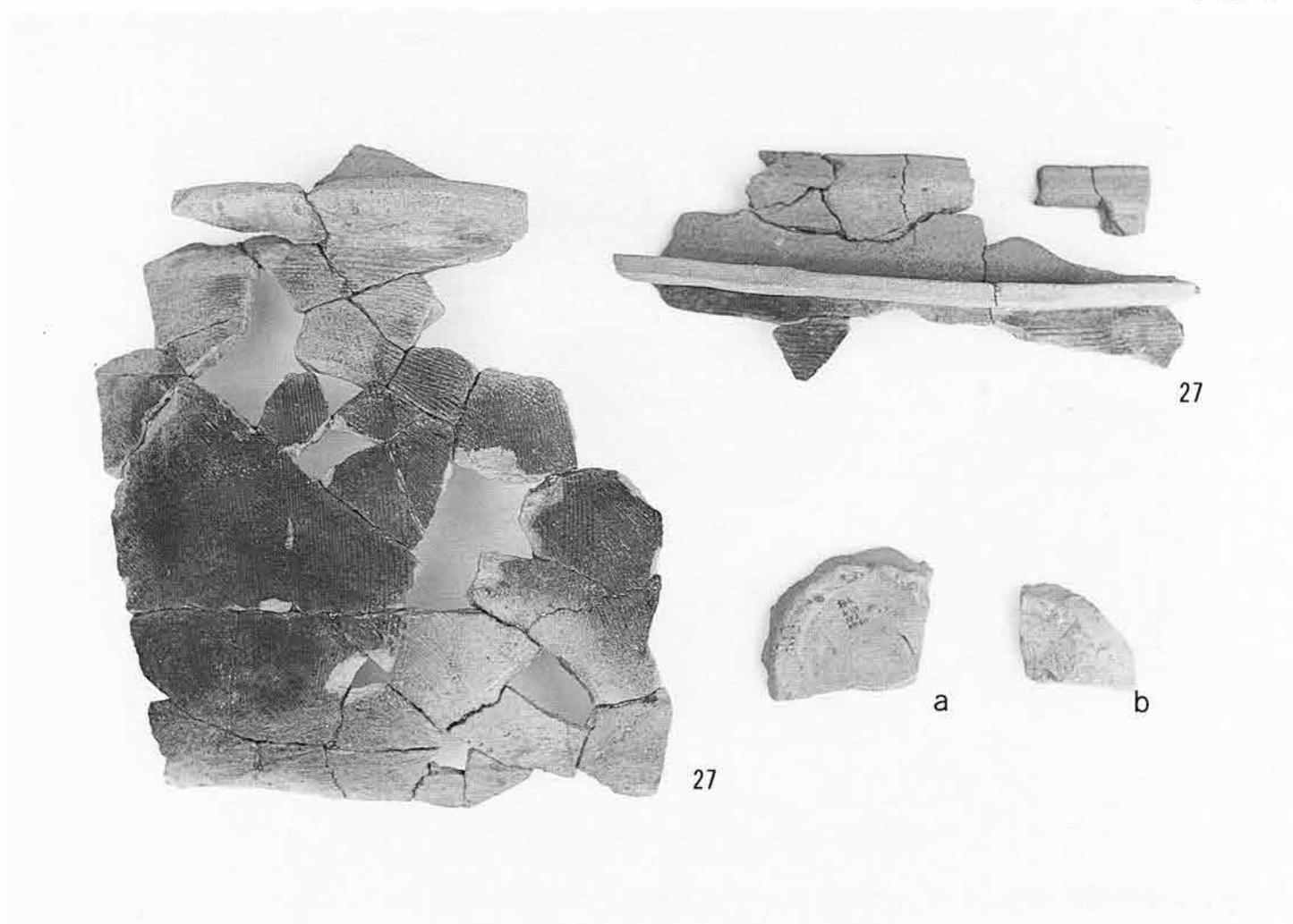
A SD1・3 (fig.58)



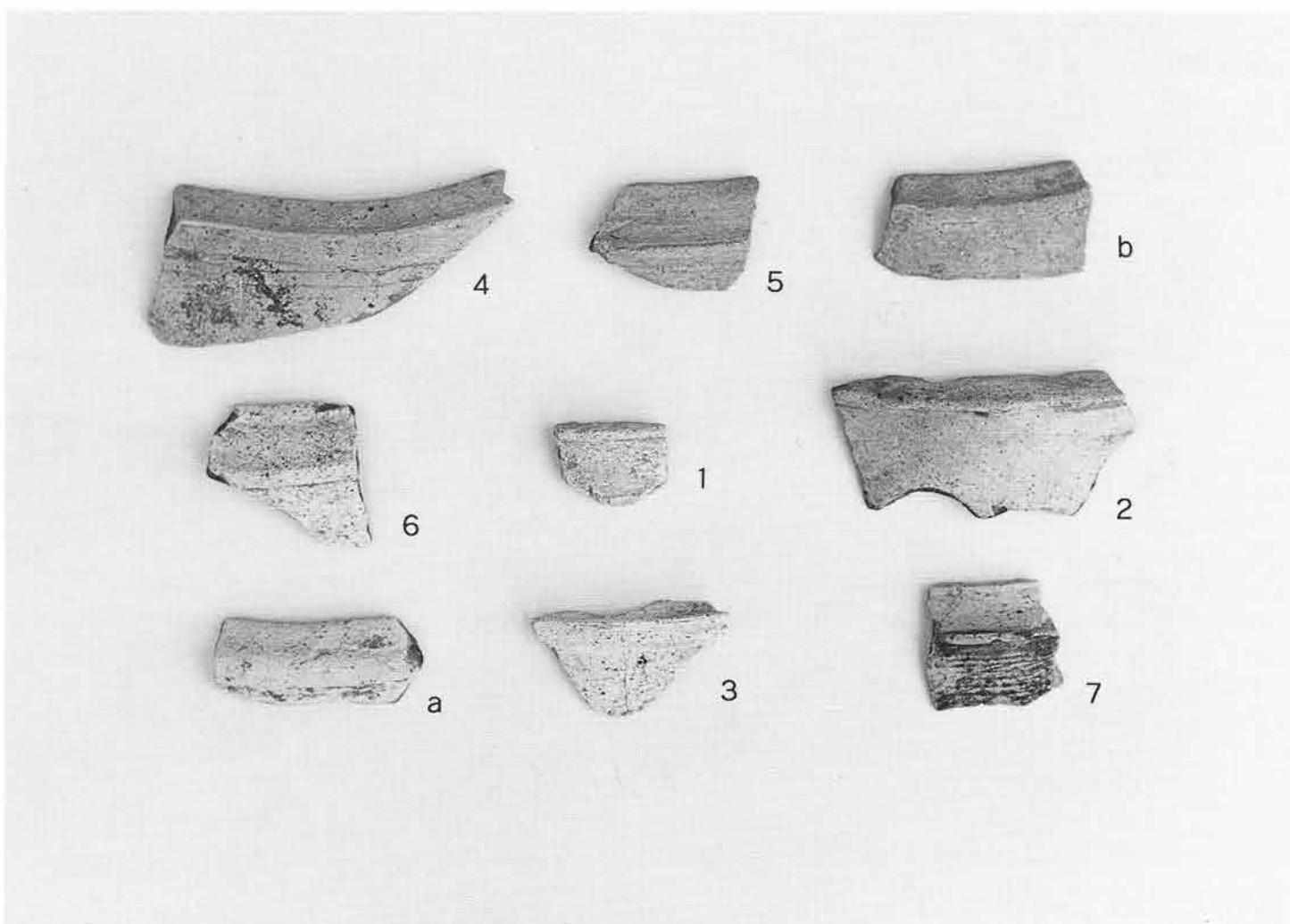
A SD 1 (fig.58)



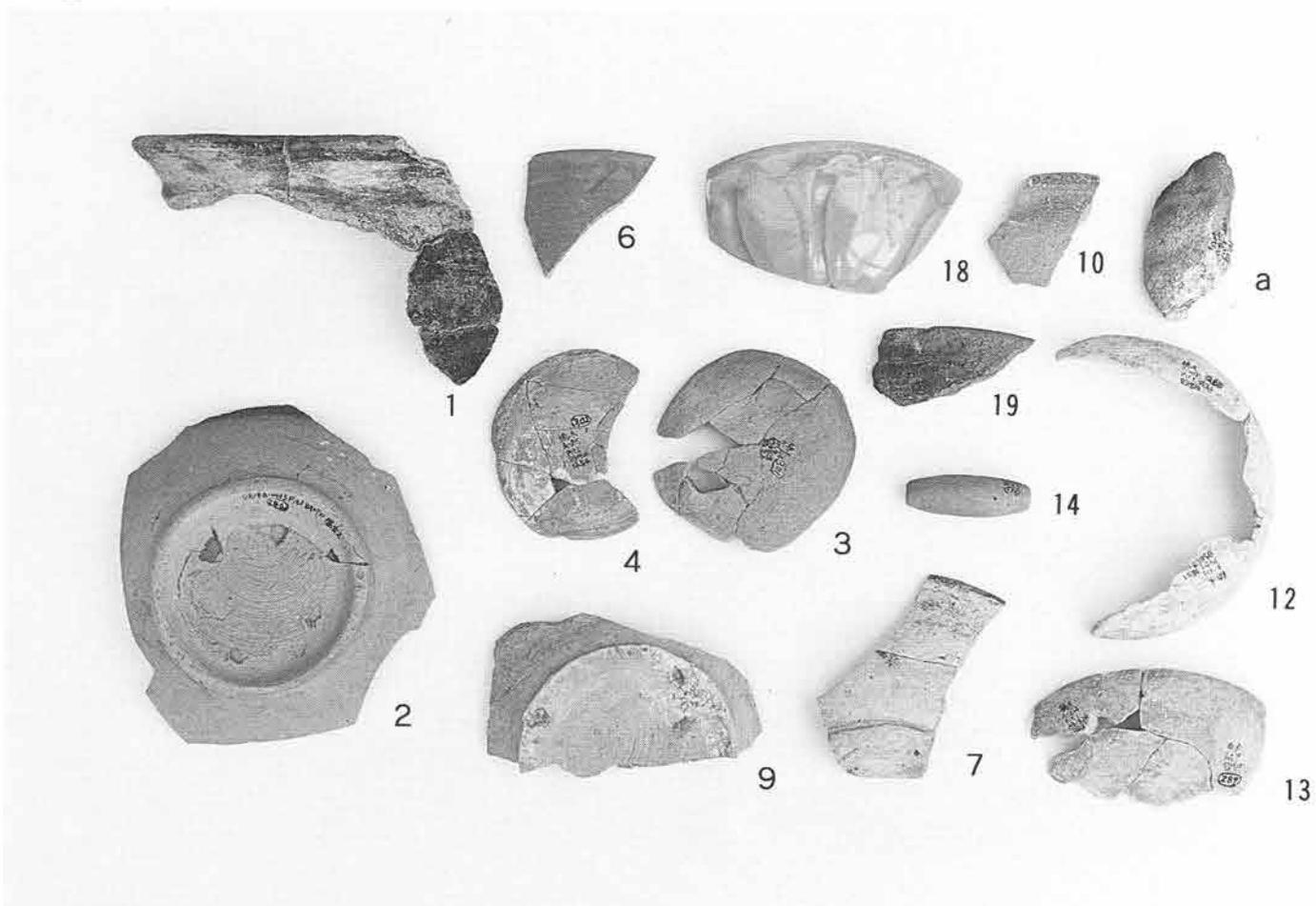
A SD 2 (fig.58)



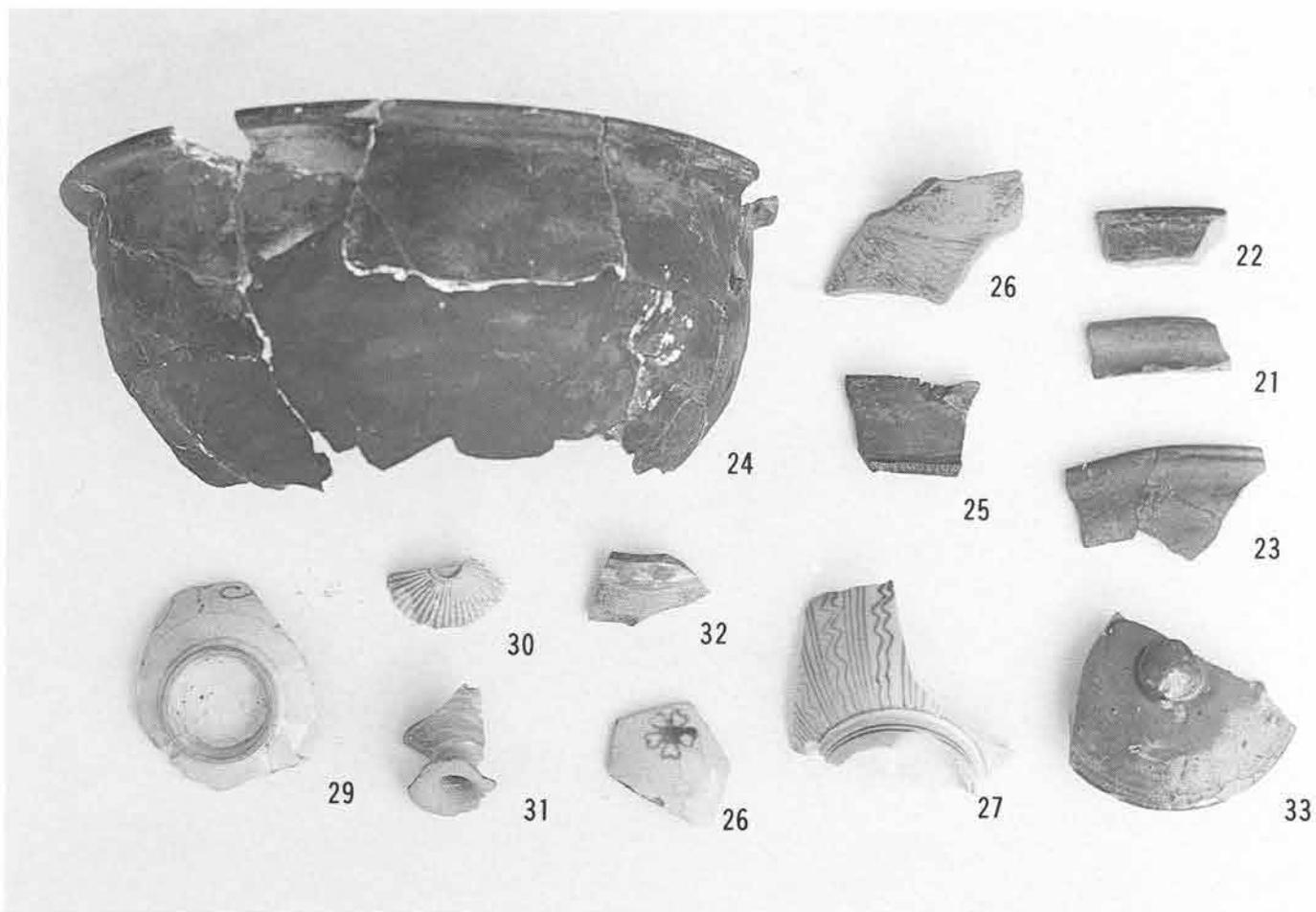
A SD 3 (fig.58) a ~ b : SD 3 出土陶器碗



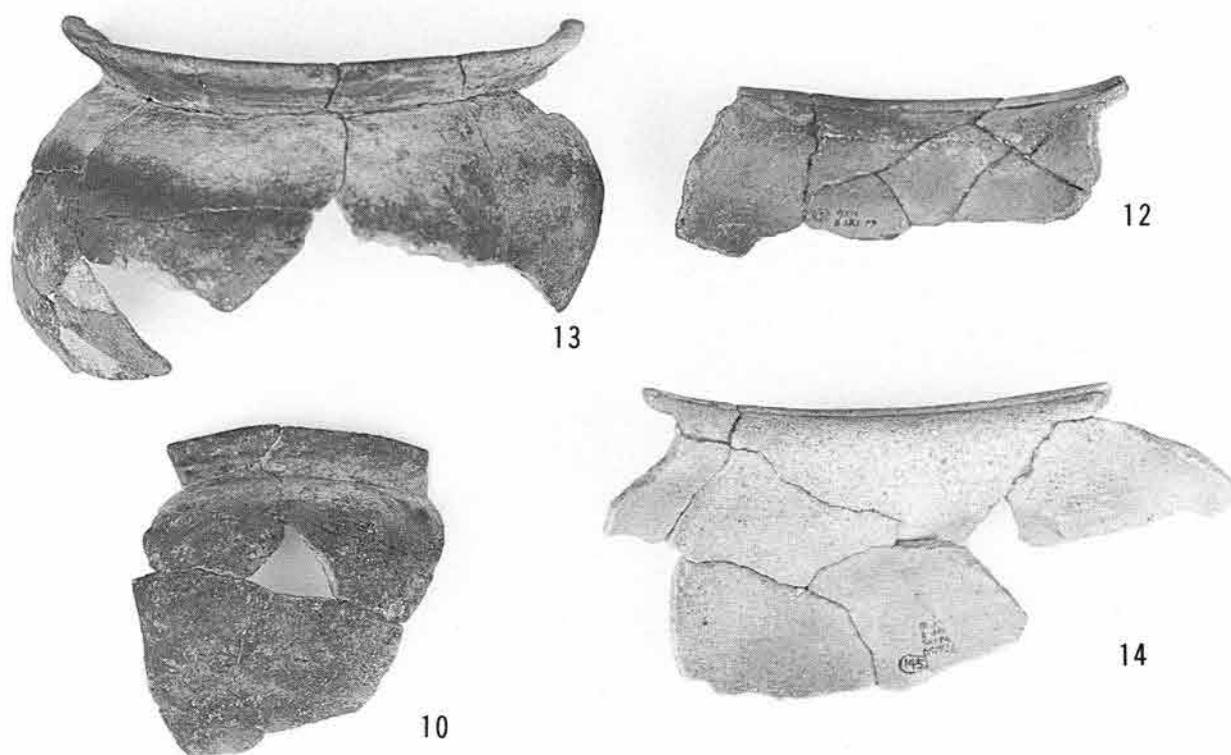
各地区出土羽釜 (fig.51) a : ASE 2, b : ASK55



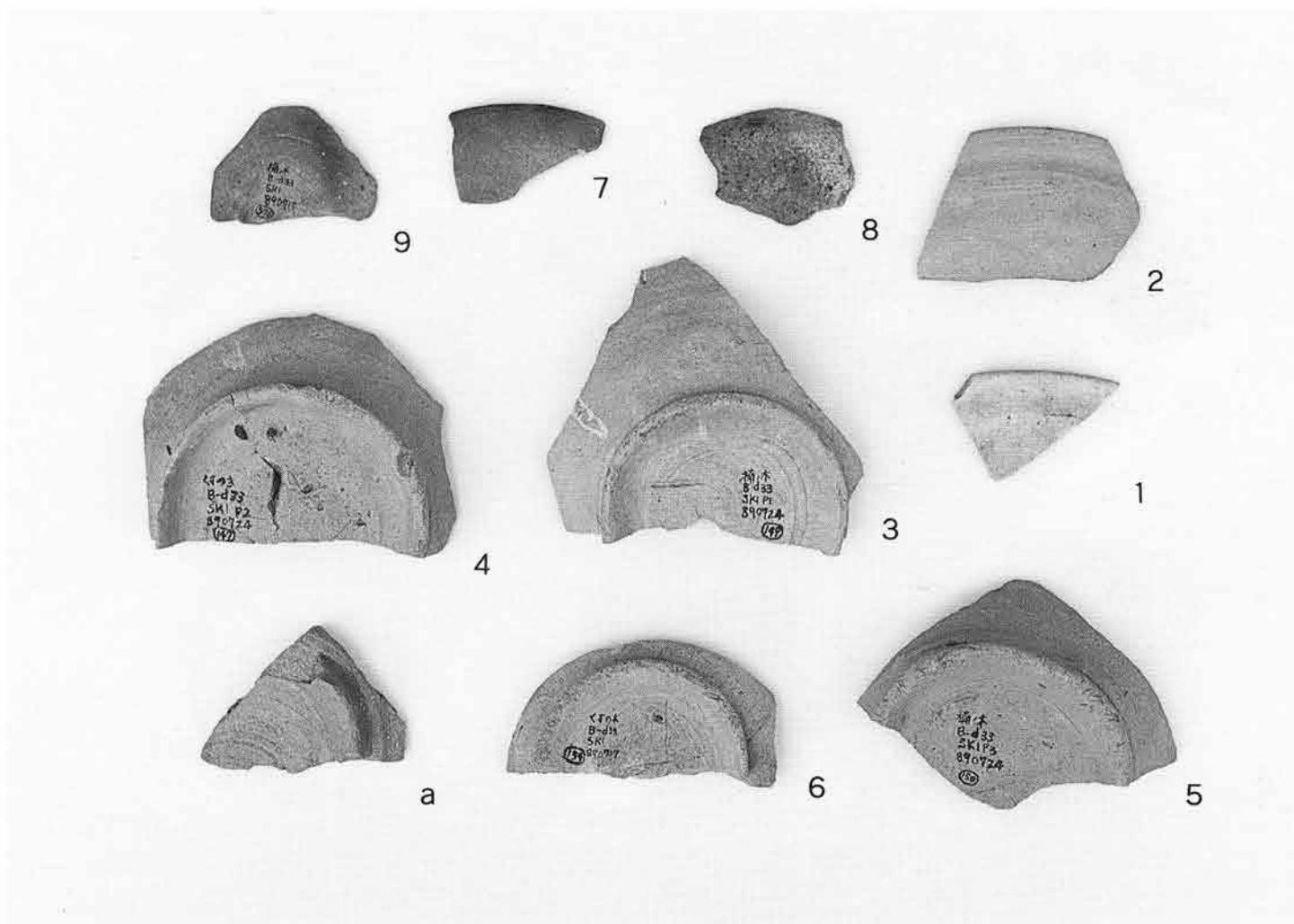
A 掘立柱建物関係 (fig.59) a : A g 15 pit 1 (建物 1) 出土甕の羽口



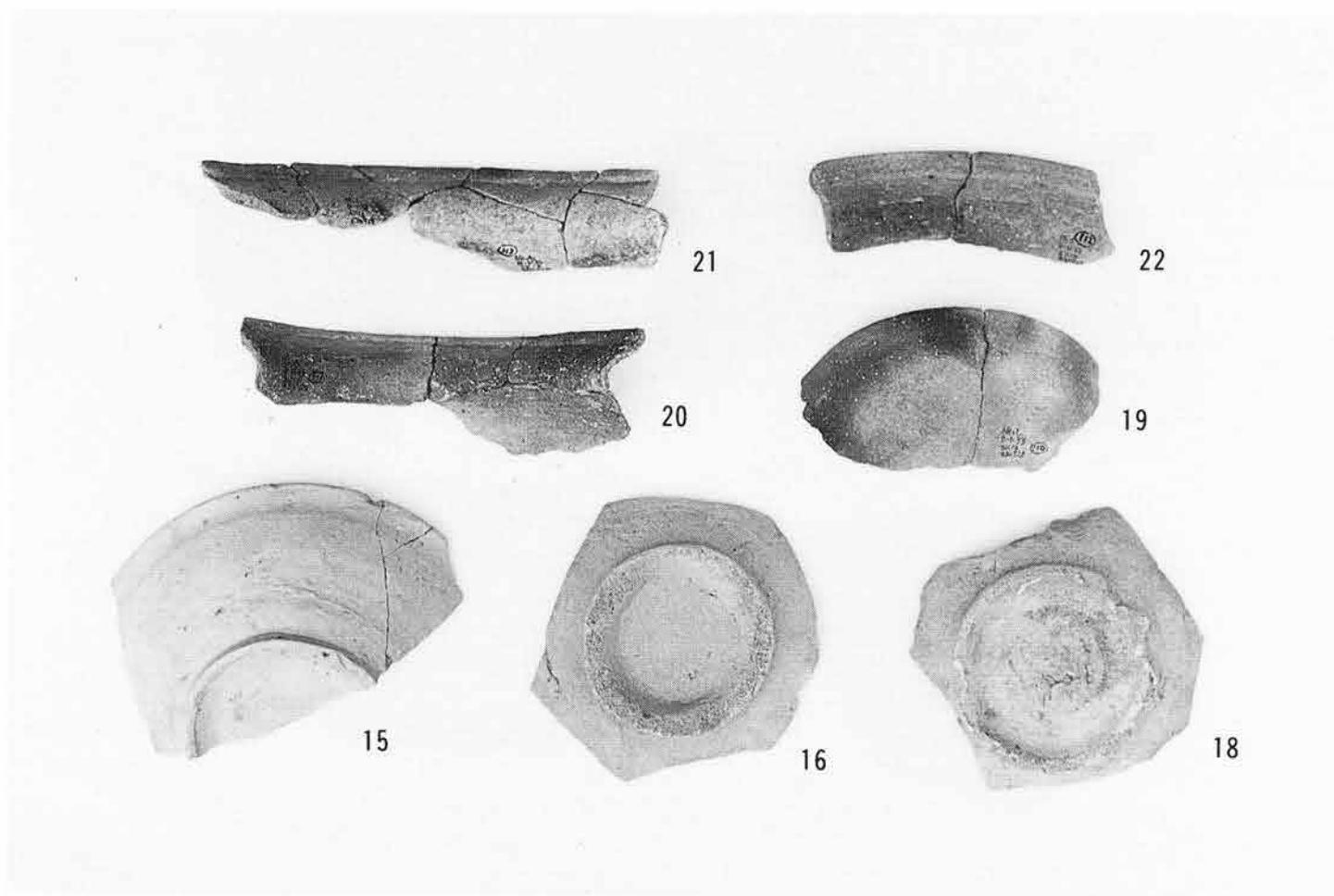
A 近世～近代 (fig.59)



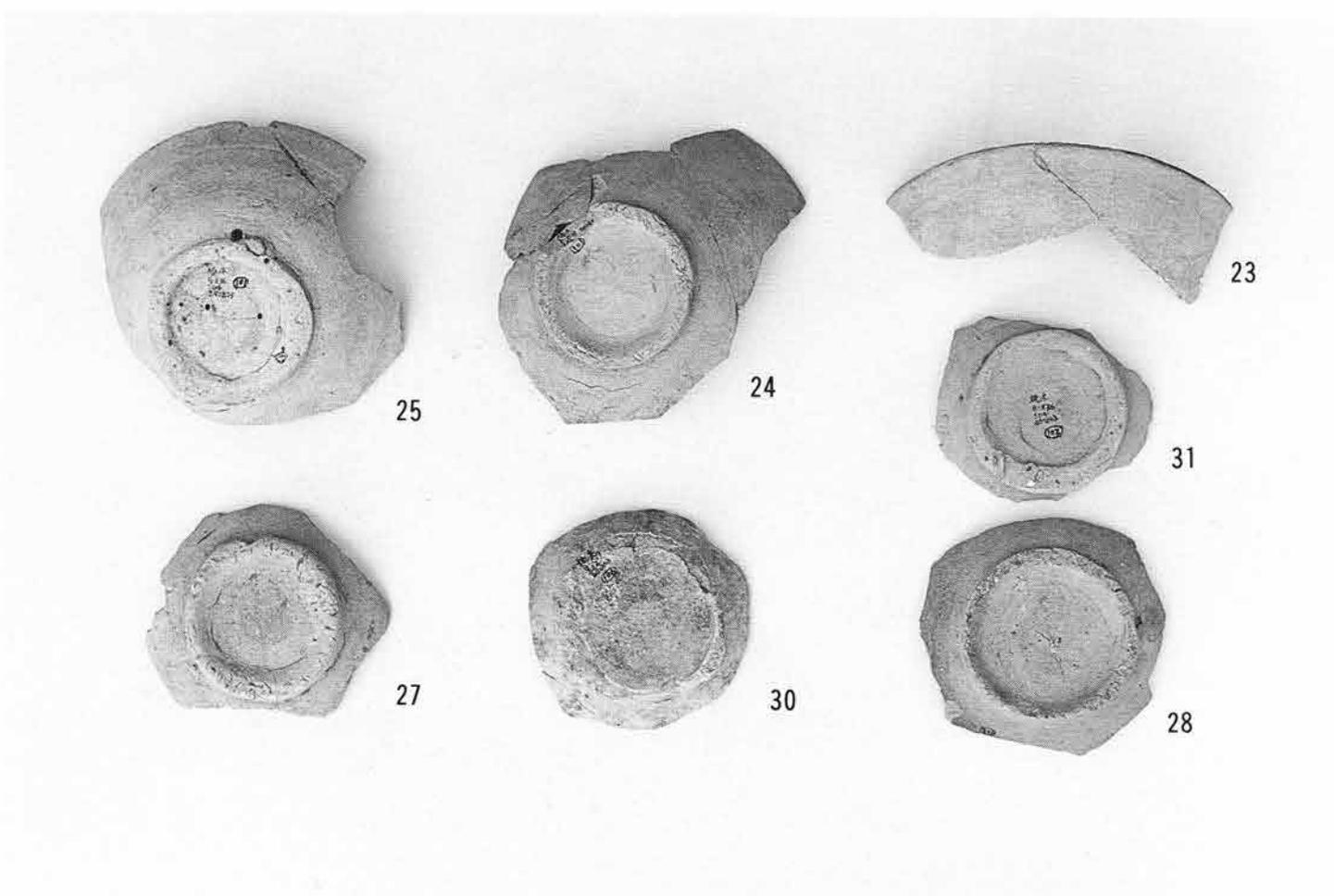
B SK 1 (fig.61)



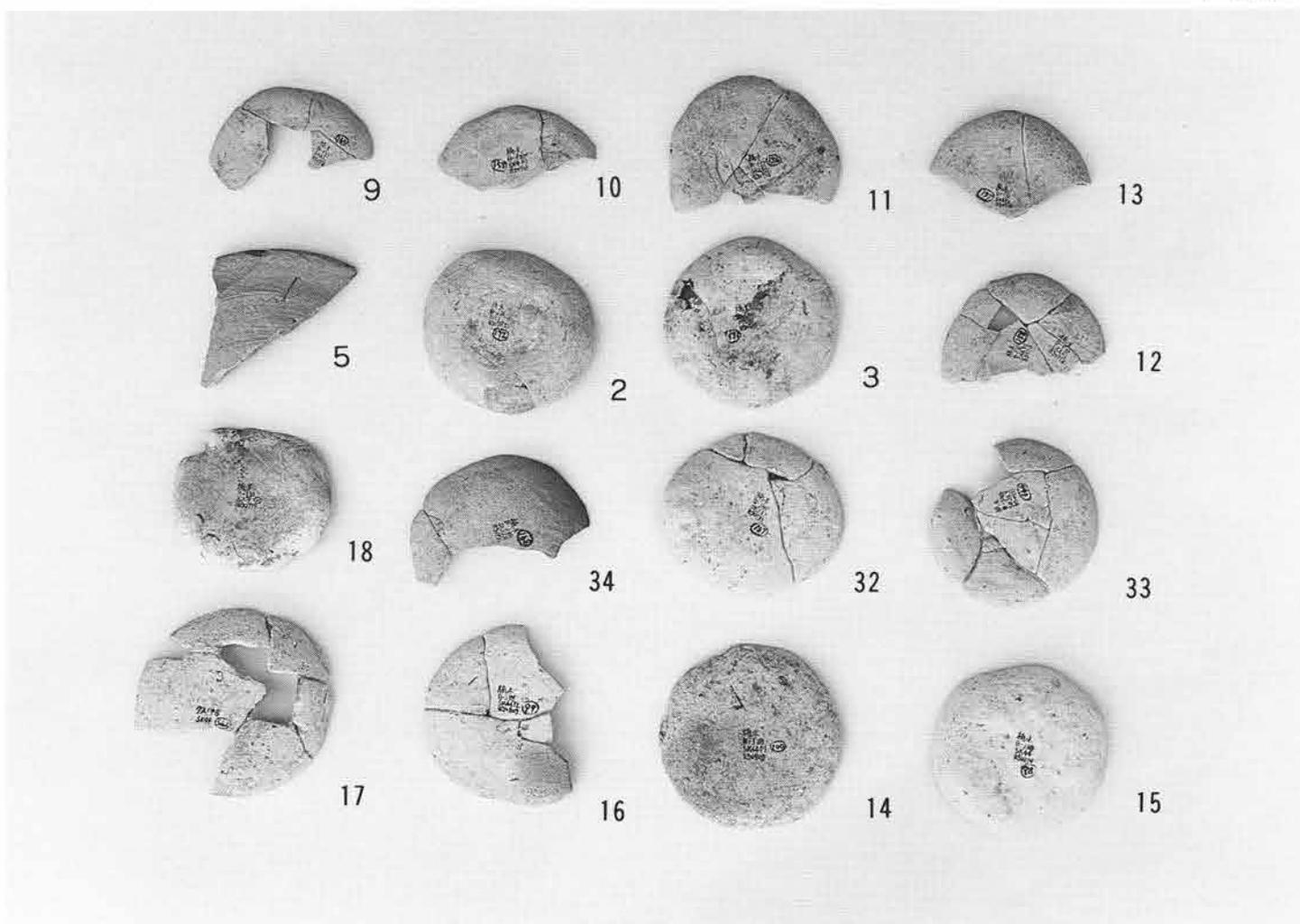
B SK 1 (fig.61) aは腕部と高台部の胎土が異なる。



B SK18 (fig.60)



B SD 4 (fig.60)



B SK 4 · 23 · 44, SX 3, i36 pit 1 (建物 4) (fig.61)



B SD 5 · SK39 (fig.60)

P.L. 58

B地区出土土器(4)



31



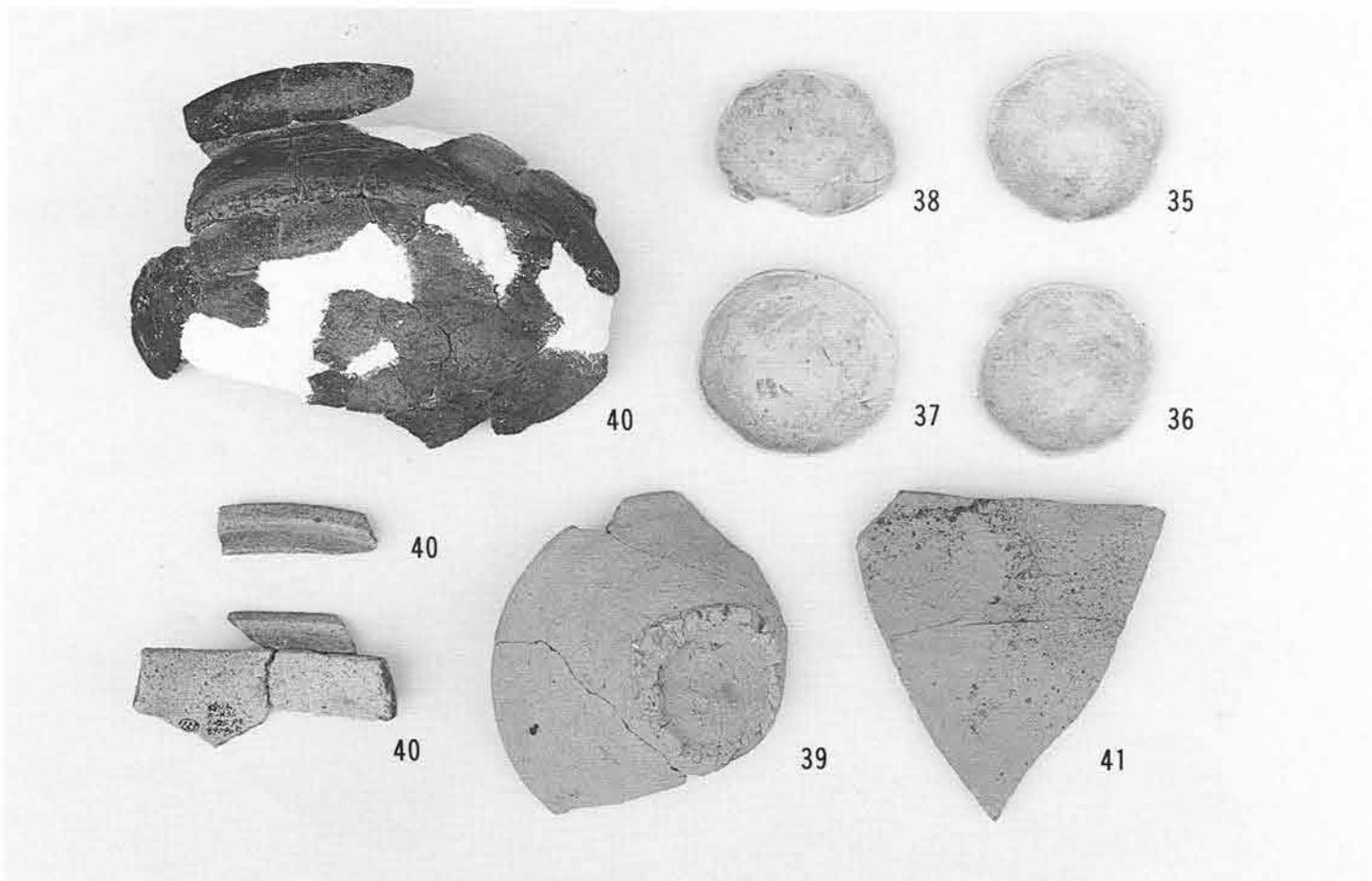
27

B SK43 (fig.61)

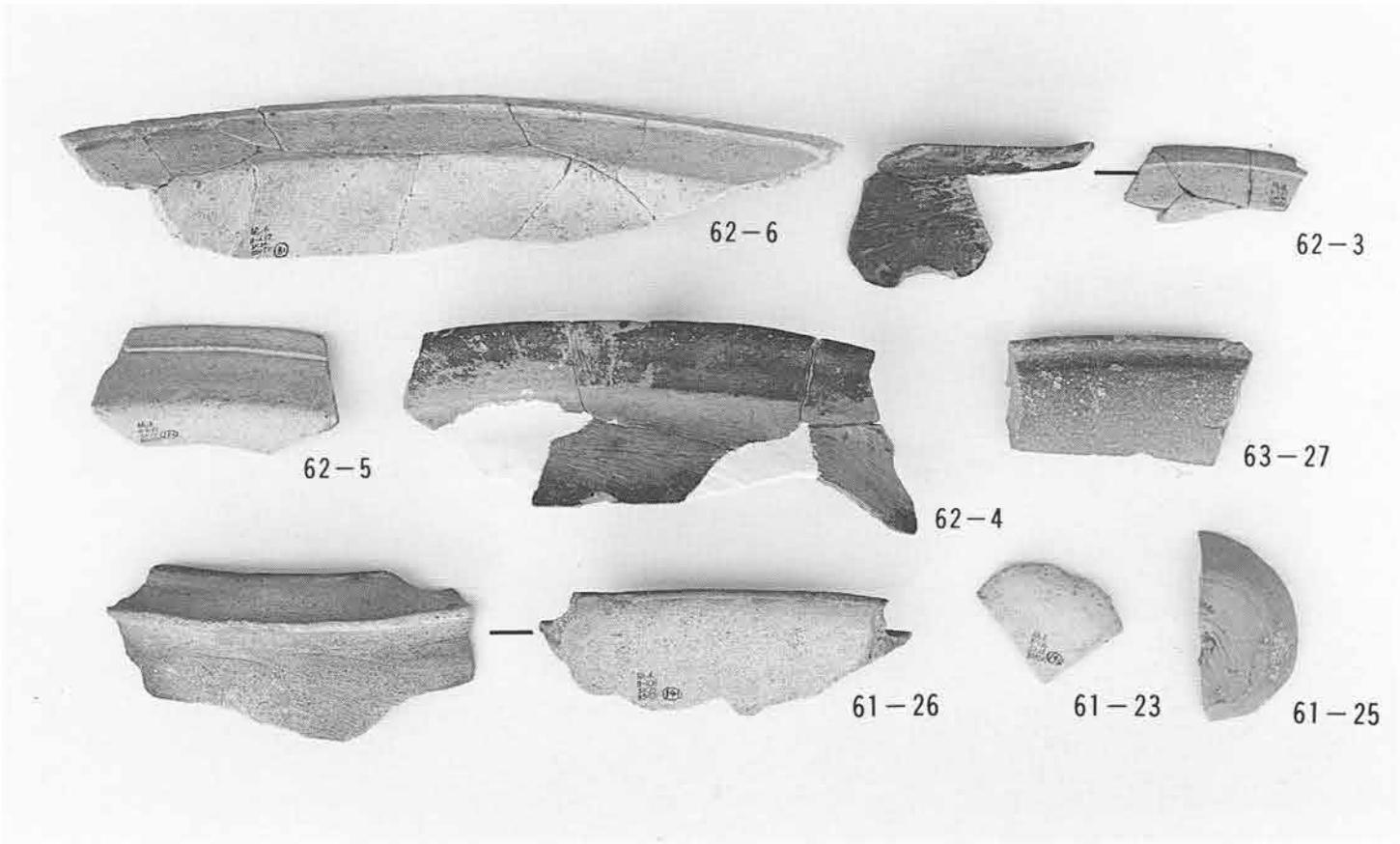


42

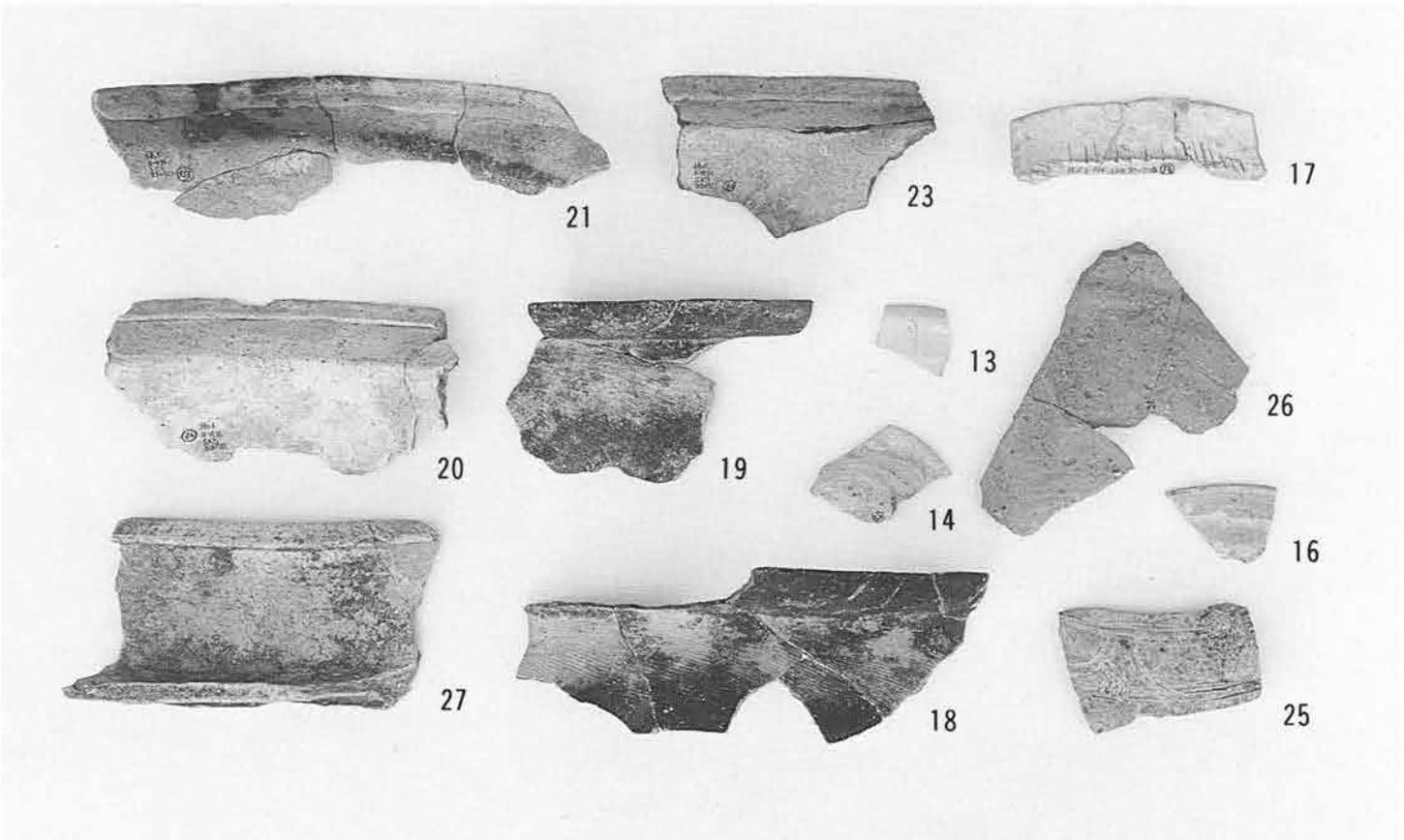
B SK25 (fig.61)



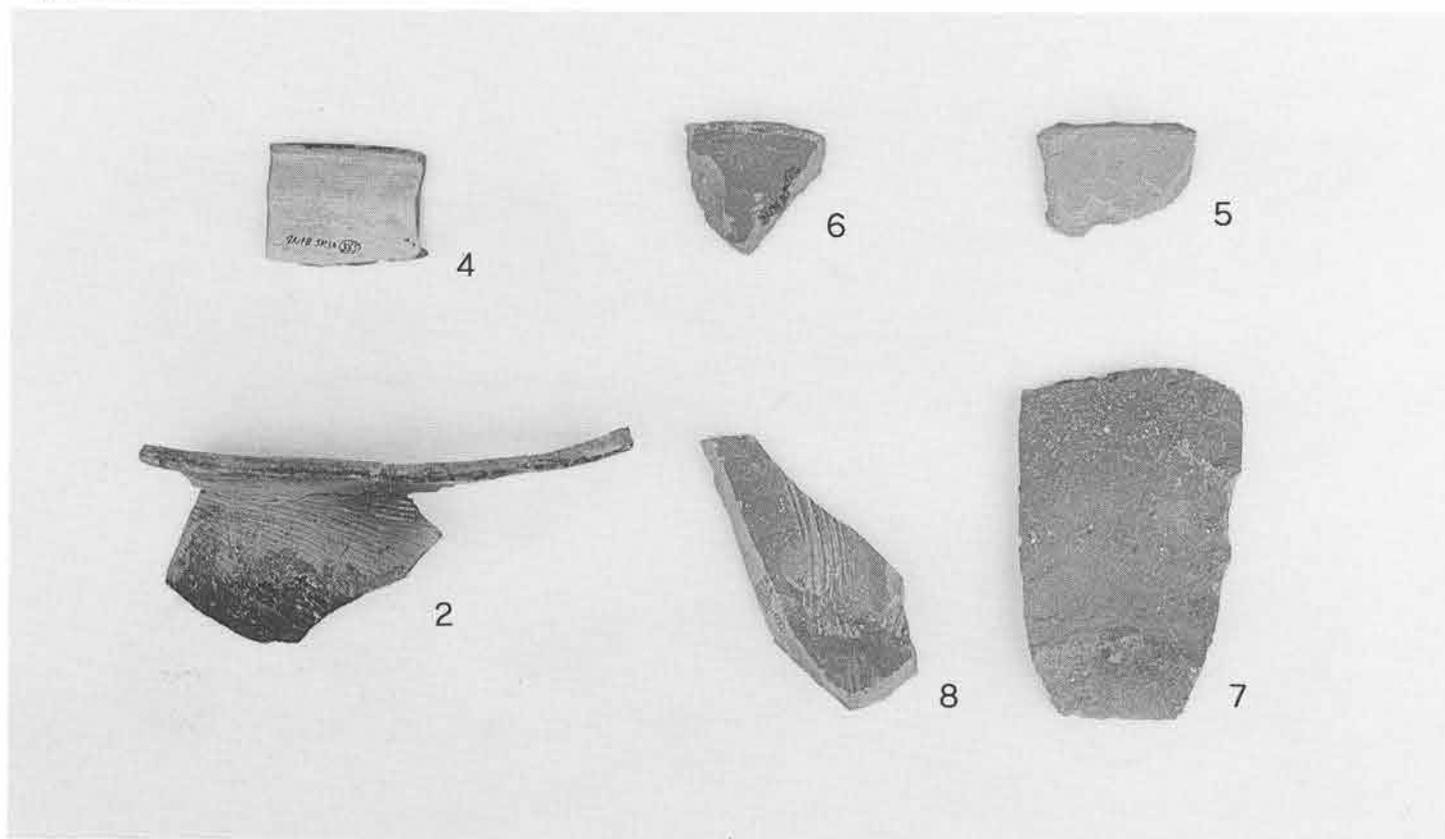
B SK25 (fig.61)



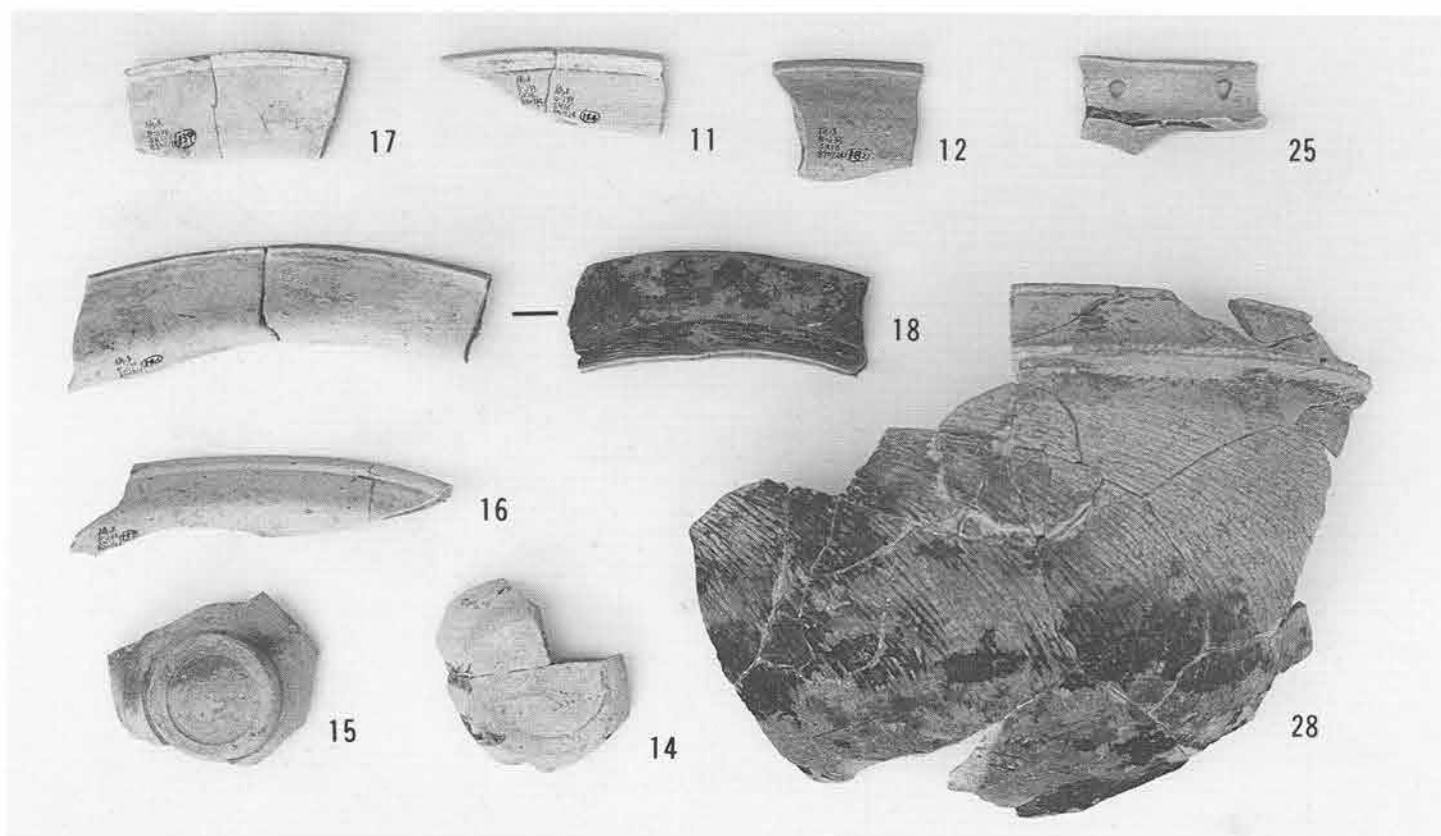
B SK17・24・9・26 (fig.61~63)



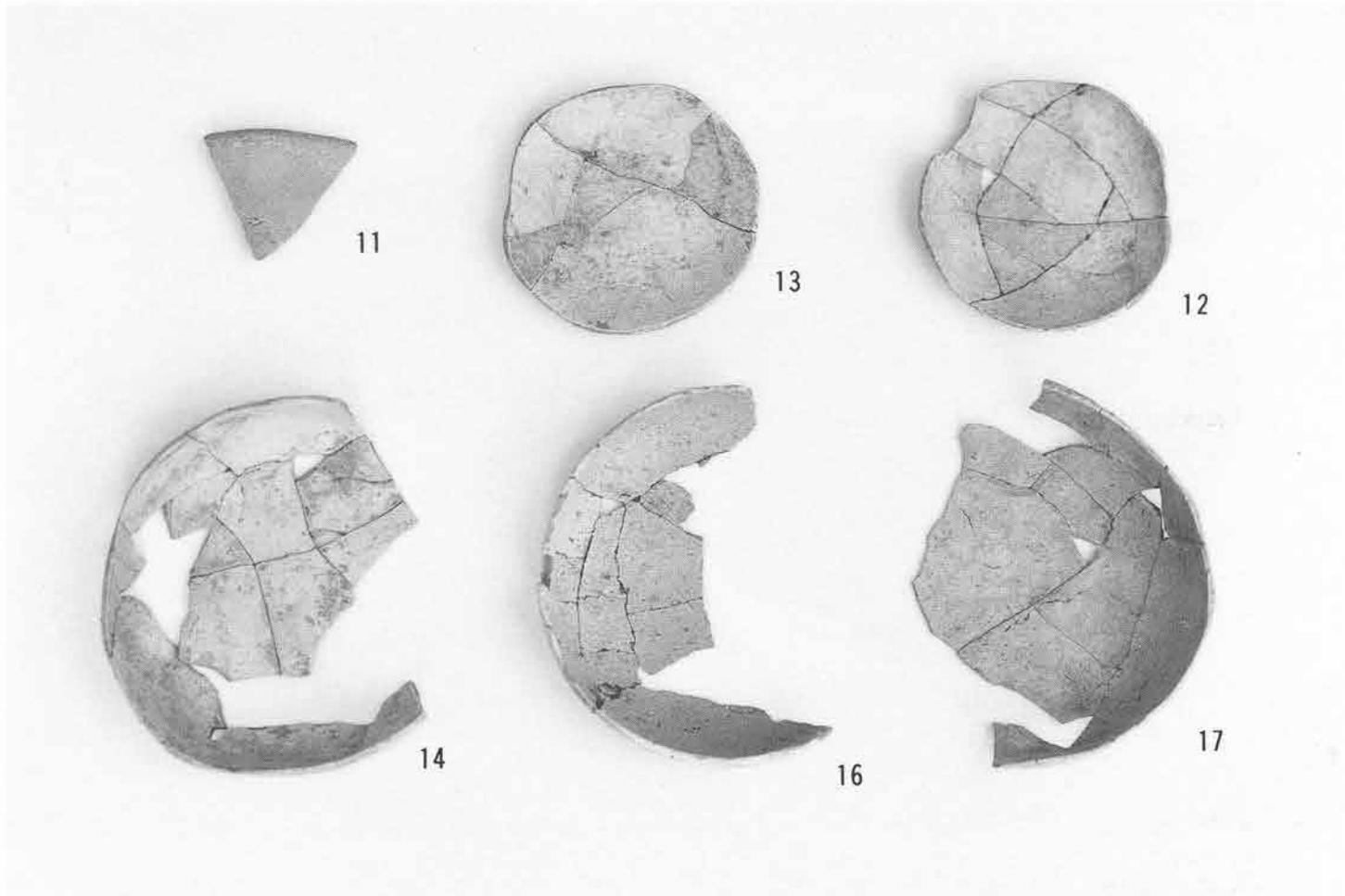
B SK 5 (fig.62)



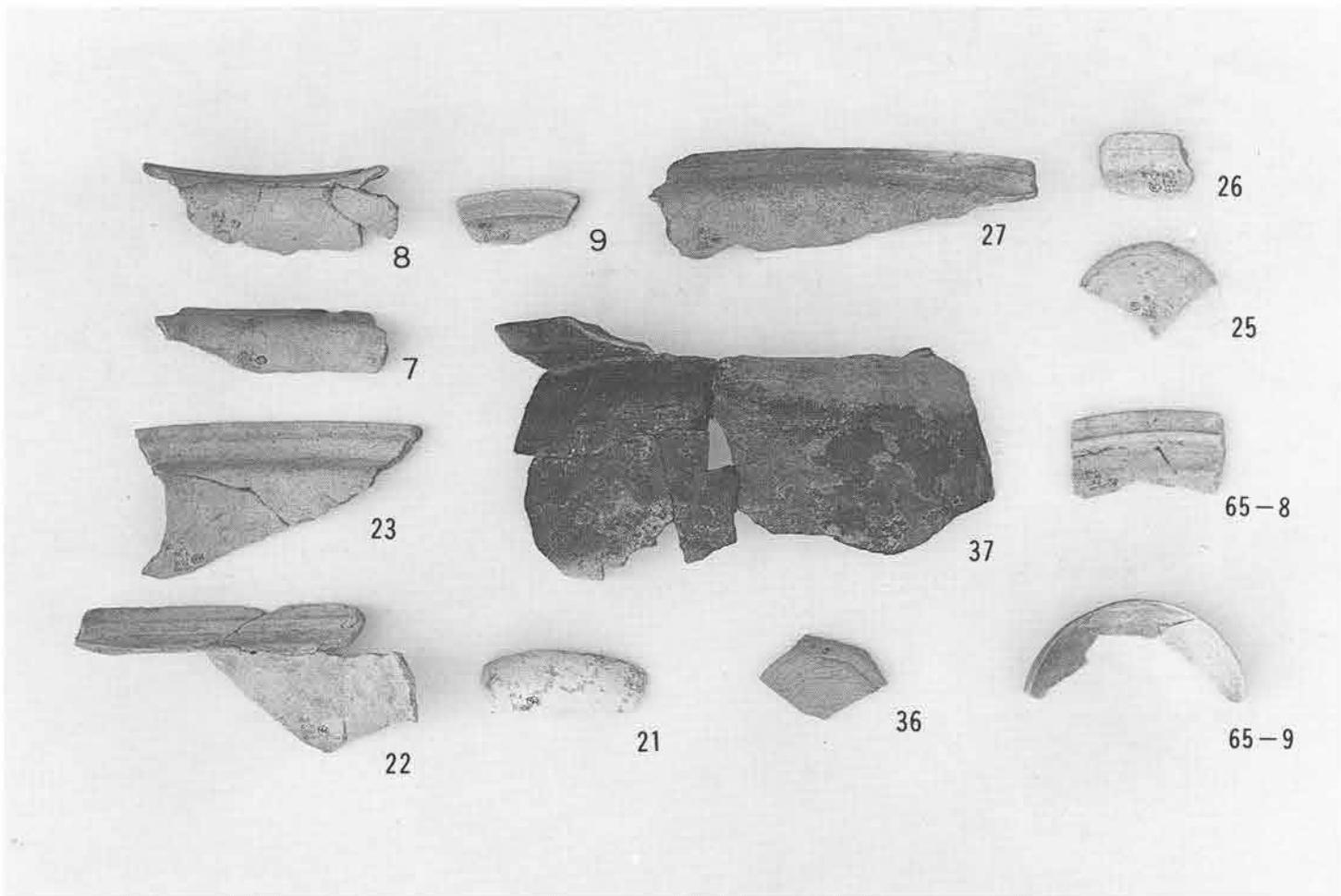
B SK30 (fig.63)



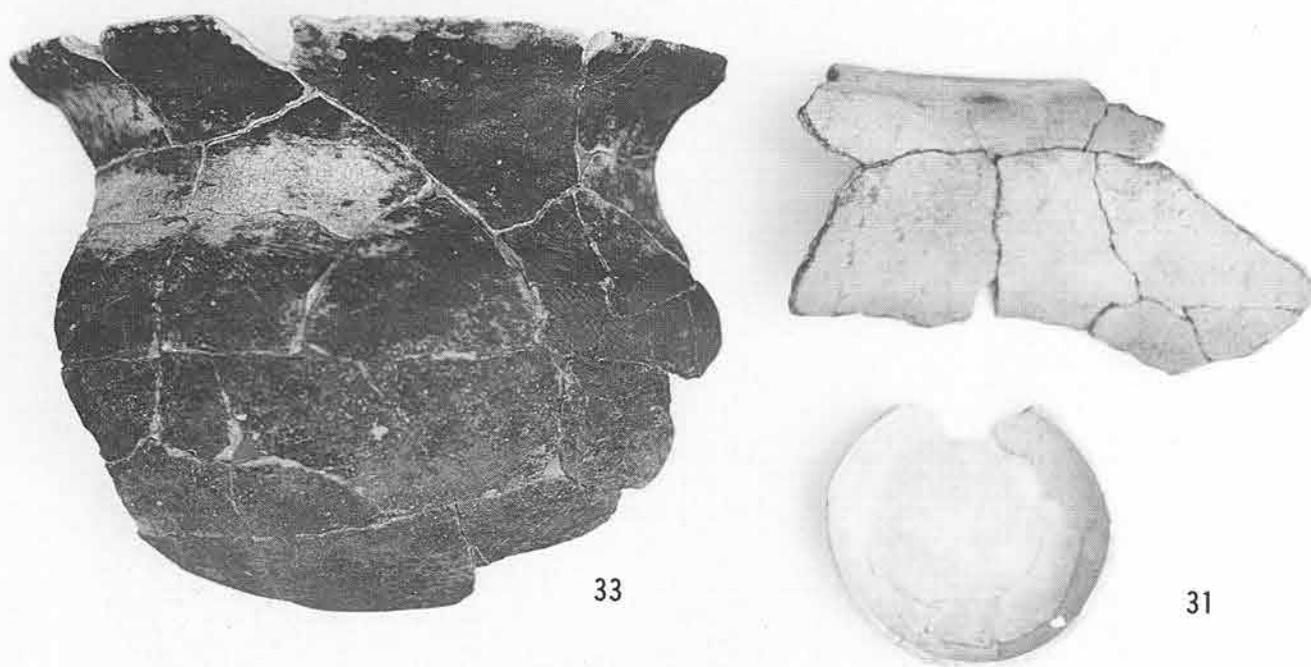
B SK11・16, SD 2・8 (fig.63)



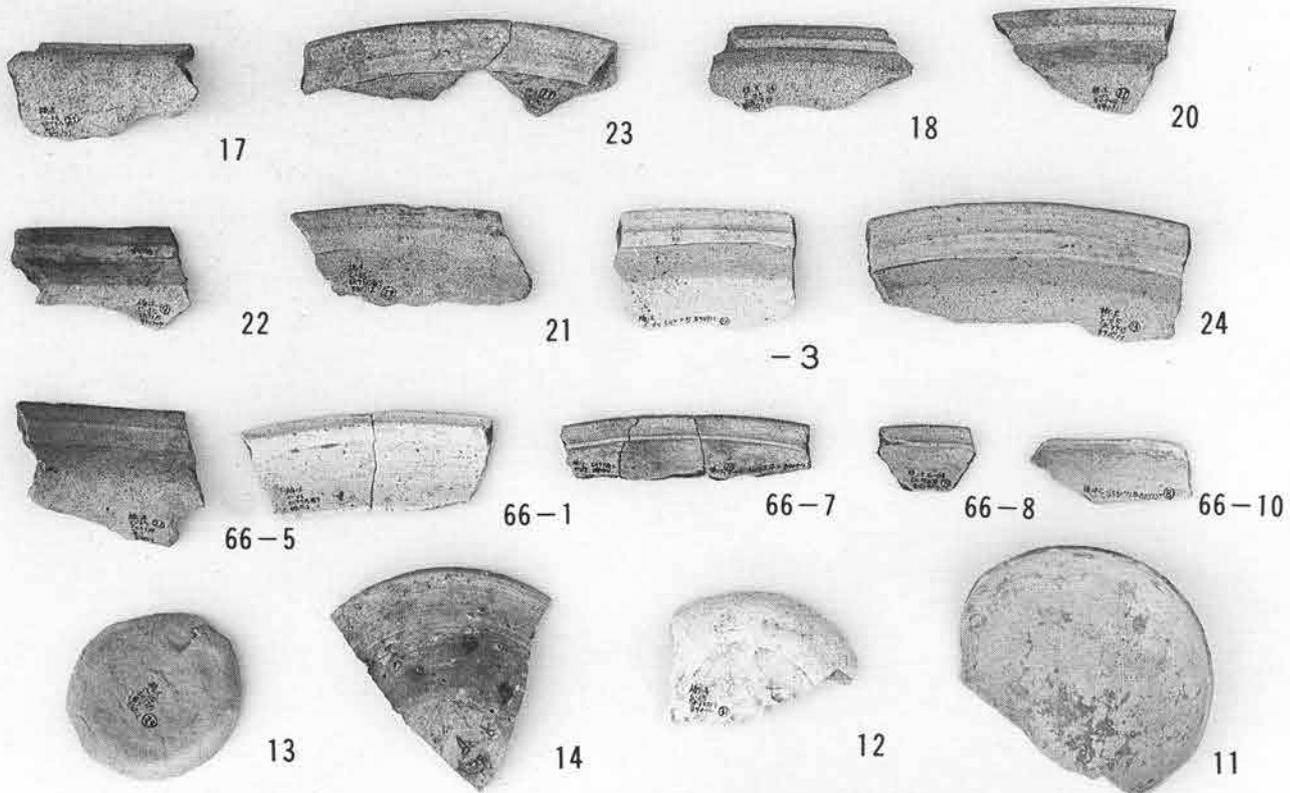
C SK11 (fig.64)



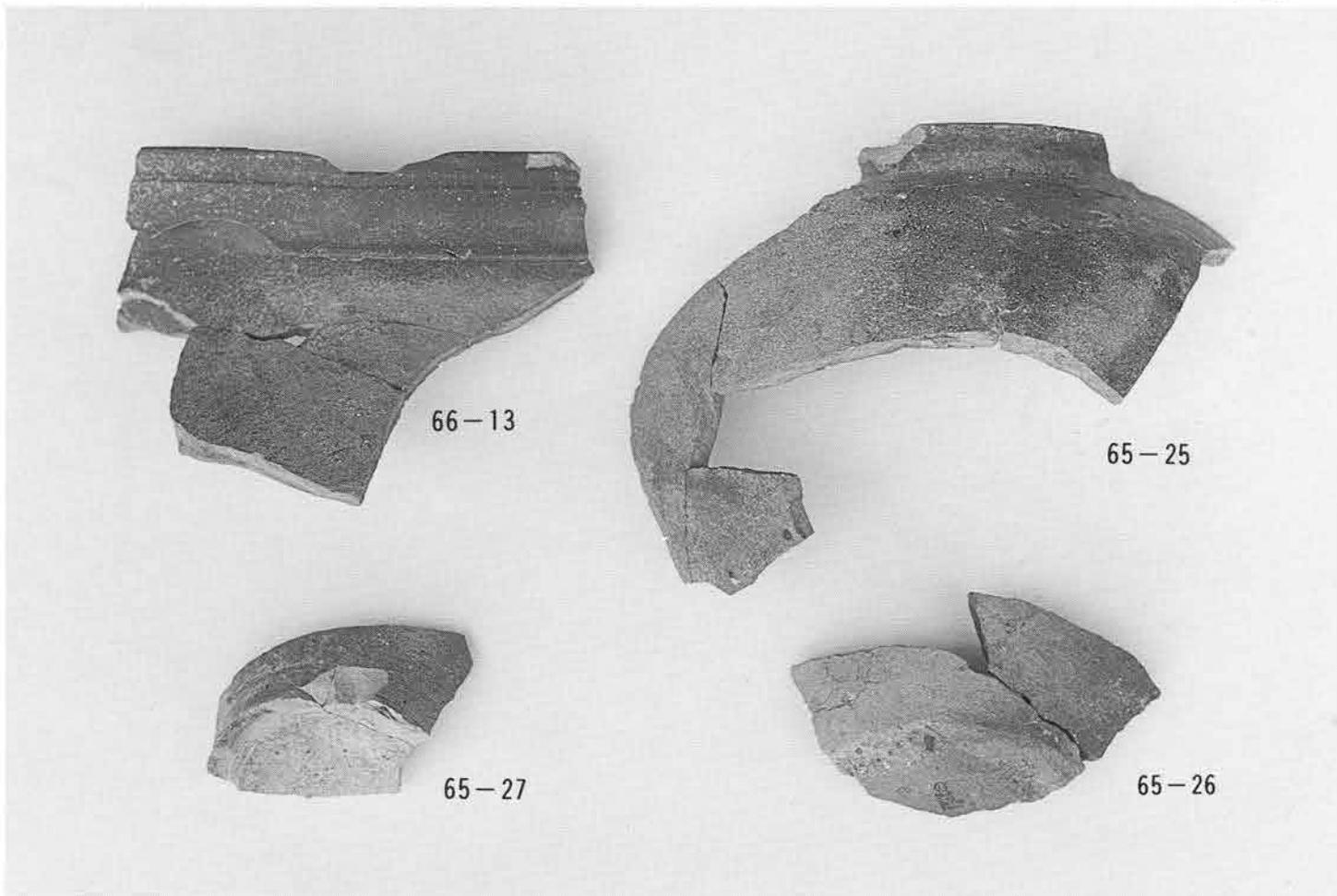
C SK 1~3・6・10 (单独番号は fig.64)



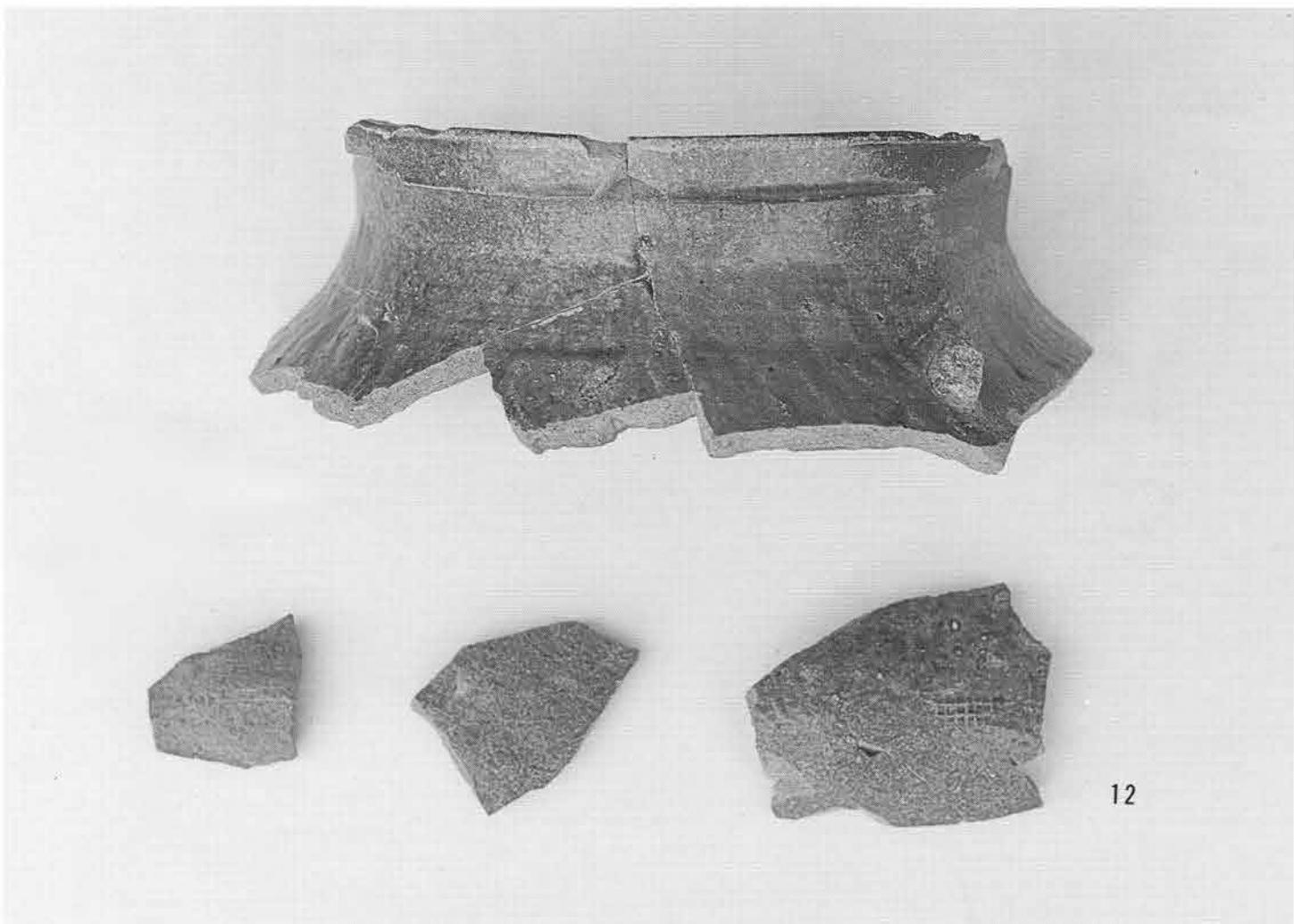
C SK12 (fig.64)



C SK 7 (单独番号は fig.65)



C SK 7 (fig.65~66)



C SK 7 (fig.66) 下は同一個体破片

平成3(1991)年10月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告101-3

近畿自動車道(勢和～伊勢)
埋蔵文化財発掘調査報告
— 第3分冊 —

楠ノ木遺跡

1991(平成3年)10月

編集 三重県教育委員会
発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 光出版印刷株式会社

楠ノ木遺跡 A 地区平面図(等高線図)



1:200